

The Philatelist Magazine

第11号 (2016 夏号)



日本 1964 5 円寄付金付き記念切手 (小型シート) 用紙折れ
管理の厳しい日本では、不完全品が市場に出回するには時間がかかることが多い

The Philatelist Magazine

当誌は、無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社が運営する「スタンペディア日本版」の会員向け機関誌です。機関誌は年 4 回 PDF で発行され、年会費 (2,000 円) を納めた会員には発行の都度登録 E メールに通知があり「マイ・スタンペディア」よりダウンロードできます。また印刷して読みたいという要望に応えコピーしホチキスで綴じた紙版をお送りするサービスも提供中です。

当誌の読み方・使い方

当誌の位置づけ

当誌は無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社が運営する「スタンペディア日本版」の会員向け機関誌です。機関誌はPDFで発行され、年会費を納めた会員には、発行の都度登録Eメールに通知があり「マイ・スタンペディア」(右図)よりダウンロードできます。

PDFの保存方法

ダウンロードしたPDFは、パソコンやスマホ等に保存できます。一旦保存するとそれ以降はいつでも好きな時にPDF版をご利用(閲覧、印刷など)頂けます。

PDF版をご自分で印刷して読む方へ

当誌の購読者は、PDF版をご自分の閲覧用に印刷することができます。

3ページの刊行趣旨と編集方針の為ページ数が多いので、全てのページを印刷するよりは興味あるページのみを印刷する方法をオススメいたします。また視力の弱い方にも十分楽しんで頂ける様に、文字サイズや図版が大きくなるよう編集しています。**視力の良い方は『2 in 1』(プリンターの機能で、1枚の用紙に2ページ分印刷する方法)等をご活用頂いても十分読むことが可能です。**

PDF版の興味ある記事だけを印刷して読む方法

目次が4ページにありますので、興味のある記事を見つけ、印刷を行ってください。本文をざっと流し読みして、印刷してじっくり読む記事を見つけるというやり方もあると思います。なお当誌では表紙を1ページ目としてページの割り付けを行っております(ページ番号は各ページのフッタに表示しています)ので、印刷に指定するページ番号も目次のページ番号と一致しております。

PDF版をパソコン、iPadで読む方法(オススメ)

PDF版は、Adobe Reader等のPDF閲覧アプリを用いてご覧頂くことを推奨しており(右の画面)、WEBブラウザでの閲覧はオススメしておりません。

左側にある、しおりマーク(→→)を押すと目次が表示され、各タイトルをクリックすることで、主画面が読みたい記事の内容に変わります。

iPad, iPad miniでも快適にご覧いただけます。



紙版をご覧の方へ

当誌はPDFで読むことを前提とした新しいスタイルの郵趣雑誌です。このやり方により幅広い記事の取り扱いが可能となり、質・量ともに十分な総合郵趣雑誌が提供できるようになりました。また次ページの様な刊行趣旨と編集方針の為、ページ数が結果として多くなっています。



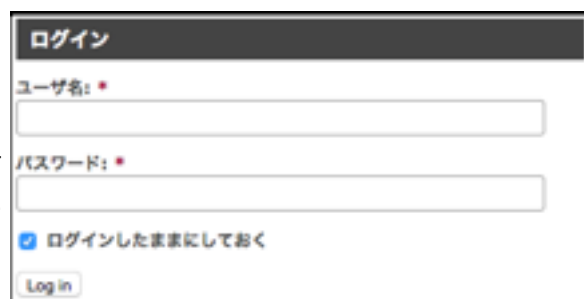
一方、PDF雑誌を発行する中で、有料で良いので内容をそのまま紙に印刷して欲しいとのご要望が寄せられる事が多くありました。ご自宅のパソコンで印刷するよりもそちらの方が便利だからという理由であり、その様なご要望にお応えする為、コピーしホチキスで綴じた紙版をお送りするサービスも提供を始めました。このような位置づけでよろしければご注文ください。

新しい郵趣のポータルサイト マイ・スタンペディアの使い方

「ザ・フィラテリストマガジン」のダウンロードはもちろんのこと「スタンペディア日本版」会員の各種特典をご利用頂くために、「マイ・スタンペディア」という新しい郵趣のポータルサイトにアクセスしてください。 <http://my.stampedia.net/ja>

情報量の少ないPDFを電子メールに添付する事は難しくありませんが、スタンペディアの目指す大容量の情報のPDF配信を可能にする為、また対価をお支払い頂いている会員にのみサービスを提供する為に構築した情報配信システムがマイ・スタンペディアです。

「IDやパスワードを用いるサイトは面倒くさい」というご意見を伺う事も多い為、課題点を検証し、最終ログインから百日以内であれば、一々IDとパスワードを入力しなくても自動ログインできる機能を作りました。(右図) 機関誌の発行間隔が約90日であることを考えますと、当該課題は解決できていると思います。



ログイン画面で「ログインしたままにしておく」のチェックを外さない事により実現

また機関誌のダウンロード以外に利用権利が提供される

各種サービスへの入口もこの「マイ・スタンペディア」となります。現時点で次の2サービスがご利用いただけます。

- ・2014年日本切手図入りリーフ
- ・エコー葉書データベース

将来的には（しかも近い将来）会員サービスを利用するだけの場所ではなく、地域ごとの郵趣イベントカレンダーを表示する等のフィラテリストの交流ができるような仕掛けも作って行きたいと思っていますのでどうぞご期待ください。



上から「機関誌ダウンロード」「郵趣データベース」「図入りアルバムリーフのダウンロード」と並ぶサービス類。2015年は会員は無料で利用できる。(順次拡大)

以前毎号掲載していた「刊行趣旨と編集方針」は、現在ホームページに掲載しております。

The Philatelist Magazine 第11号 クリッカブル目次

＊ PDF で目次をクリックすると各ページにジャンプします

当誌の読み方・使い方、マイ・スタンペディアの使い方		P.02-03
郵趣界重大ニュース		P.06-09
郵趣カレンダー		P.14-22
切手市場	高崎 真一	P.16-17
stamp club 2016 発行報告		P.18-19
第1回製造面勉強会		P.20
第4回ヨーロッパ切手展 出品のご案内		P.21
私の発見・私の報告		P.23-29
KARUIZAWA 欧文ローラー印	和田 輝洋	P.23
新発見？非電化ローカル線の鉄郵臨時便	千代 秀樹	P.24-25
2016年春から初夏にかけてのインクジェット式機械印の使用開始	鈴木 盛雄	P.26-27
和欧文機械印 第1期 時刻表示 0-8 使用局・新発見の報告	市川 勉	P.28
都内速達の使用例	池田 健三郎	P.29
謎解き郵趣		P.30-36
答え合わせ：戦後の配達郵便局名記載勸奨・初期使用例	岡藤 政人	P.31-33
答え合わせ：70円旧能面貼り・受取通知を航空扱いした、到達証明郵便	行徳 国宏	P.34-35
出題：脇付き葉書	古畑 健三郎	P.36
寄稿記事・郵趣論文		P.37-71
世界のクラシック切手第8回 バイエルン数字図案シリーズ1849-1862 へ版、タイプ及びプレーティングについて～	福田 達也	P.38-49
赤い1アンナ 農夫背後の草1本	石田 徹	P.50-52
留置郵便	近辻 喜一	P.53-55
和欧文機械印トピックス（第9回）	水谷 行秀	P.56-59
樺太における急速郵便メモ・補遺	比嘉 霜人	P.60-64
切手別納郵便制度	行徳 国宏	P.65-71
郵趣活動の記録		P.72-97
第17回トピカル切手展 受賞記録	編集部	P.73
スタンプショウ2016トピカル切手展への初出品	北野 雅利	P.74-75
古今東西郵趣文献書評 房総の鉄道郵便	田中 寛	P.76
古今東西郵趣文献書評 日中戦争・太平洋戦争期における実例による軍事郵便解析の手引き（浅野周夫編集）	森下 幹夫	P.78
古今東西郵趣文献書評 「年賀郵便の歴史」（吉田敬著）	安井 浩司	P.80-81
古今東西郵趣文献書評 <JAPEX2015>記念出版 年賀郵便・年賀状と切手の歴史 -	安井 浩司	P.82-84
ジャパNSTAMP オークションアレポート	鯛 道治	P.85-97

ニューヨーク 2016 国際切手展特集	P.98-173
コーナー目次	P.99
国際切手展 World Stamp Show New York 2016 受賞記録抜粋	P.100-101
NY 2016 とアメリカの国際切手展	和田 文明 P.102-117
NY2016 参観記	和田 文明 P.118-123
ニューヨークまでの軌跡	鎗木 顕 P.124-129
ニューヨーク展で大金賞を受賞して	長谷川 純 P.130-142
WSS NY2016 に出品して	池田 健三郎 P.144-149
WSS NY 2016 コミッショナー対談	P.150-159
WSS NY2016 コミッショナー活動に係る収支のご報告	P.160-161
現地号外とフォトアルバム	P.162-173

広告一覧

無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社 [P.22, 77, 79, 143, 174, 176]
委託販売広告 [P.10, 11, 12, 13]

付録 コレクション 13 作品を全リーフ掲載

年賀状の周辺（山田克興） ショウガ亜綱（石田徹） 旧スタンプマガジン：スタンプクラブの時代～思い出と外国切手～（北野雅利） The Flat Plat Printings of the Fourth Bureau Issue 1922-38（田村邦彦） Classic Germany（吉田敬） Australia – Kangaroo and Map design postage stamps（長島裕信） Japanese Occupation of the Philippines 1942-1945（鎗木顕） U.S Army Mail and G.H.Q Postal censorship in Japan（安藤源成） Post Office Forms, Including Envelopes created for Conducting the Registered Mail Process 1842-1929.（和田文明） Prompt Delivery in Japan from Pre-adhesive Period to 1933（池田健三郎） A History of Hong Kong（内藤陽介） The History of Artist's Portraits – The Transition of Western Art over 600 years-（江村清） A History of the Telephone-Telegraph to Digitalization-（勝井明憲）

* 号外および付録は年間紙版オプション申込による予約配送品の対象外となりますので予めご了承下さい。

訂正

第10号・郵趣カレンダー（P.10）

MELBOURNE2017 の開催日が変更されました。 旧) 4/6-9 新) 3/30-4/2

第10号・ピックアップイベント World Stamp Show NY2016（P.22）

日本からの出品作品一覧のタイトルの一部に実行委員会が誤って登録した古いタイトルがありました。出品者の依頼に基づき、その後コミッショナーが修正をかけたため、今号 P. 11 に掲載の出品作品一覧に掲載されているタイトルが正しいものとなります。

第10号・寄稿記事・郵趣論文「二つ折りはがきについて」（P.64）

誤) 正院印刷局 正) 正院印書局

第10号・寄稿記事・郵趣論文「桑名の初期消印の検討」（P.85-91）

誤) 末梢印 正) 抹消印

第10号・コレクションの創り方「新しい図入りリーフ・貼り込みリーフの提供開始」（P.119）

和欧文機械印 第3期（後期）貼り込みリーフのダウンロードデータにおいて、タイトルページの内容が、第3期全体のそれになっていましたので、ダウンロードデータ全体を修正いたしました。

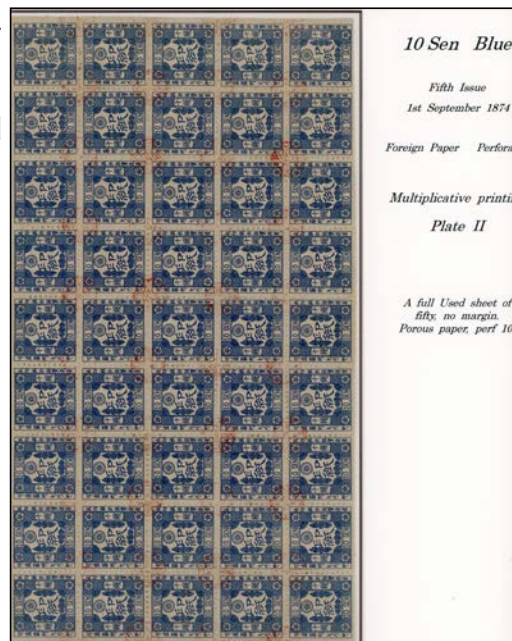
郵趣界重大ニュース

2016年3月～2016年6月

1 手彫印紙が国際切手展で大金賞を獲得

5月28日から6月4日まで米国ニューヨーク市で開催された、国際切手展 World Stamp Show New York 2016 に、出品された長谷川純さんの作品「The Documentary Hand Etched Revenue Issues of Japan」が大金賞を獲得しました。手彫印紙が大金賞を獲得したのは初めてではありませんが、ESPANA2000（古屋厚一氏）以来の16年ぶりとなります。

なお、本誌98ページ以降で、同展覧会の特集をしています。その中に長谷川さんの手記も掲載されております。あわせてご覧ください。



長谷川さんの作品より第120ページ

2 製造面勉強会の立ち上げ

4月29日に無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社（東京・港）は、エージェントスタンプの渡会一裕様（東京・練馬）の協力を得て、2016年7月から製造面勉強会を立ち上げることを発表いたしました。

同勉強会の趣旨・案内は本誌20ページに記載の通りですが、年4回開催される、講演を中心とした、真面目な勉強会になりますので、皆様のご参加をお待ちしております。

3 サミット小型シートが入手難に

5月26日に発売された、G7伊勢志摩サミットを記念する小型シートは、切手用紙にシルクを貼り合わせた日本初のシルク製切手で、500円切手2枚を収めた小型シートは台紙とともに1300円で2万枚発売されました。

販売金額が安価にも関わらず発行枚数が少ない上、他の切手のように増刷されなかった為、ヤフオクでは本日現在、5000円から6000円で取引されています。



小型シートから切り抜いた切手3枚を貼った米国宛EMS

4 Erivan Haup コレクションの一部が初めて売りに出される

ハインリッヒ・ケラー（独）、コリンフィラ（スイス）を中核とする世界のオークションハウスのホールディングカンパニーである、The Global Philatelic Network は、国際切手展 New York 2016 会期中の 6 月 3 日に珍品オークションの競売を開催し、その中で、The ERIVAN collection なるネームセールを行いました。

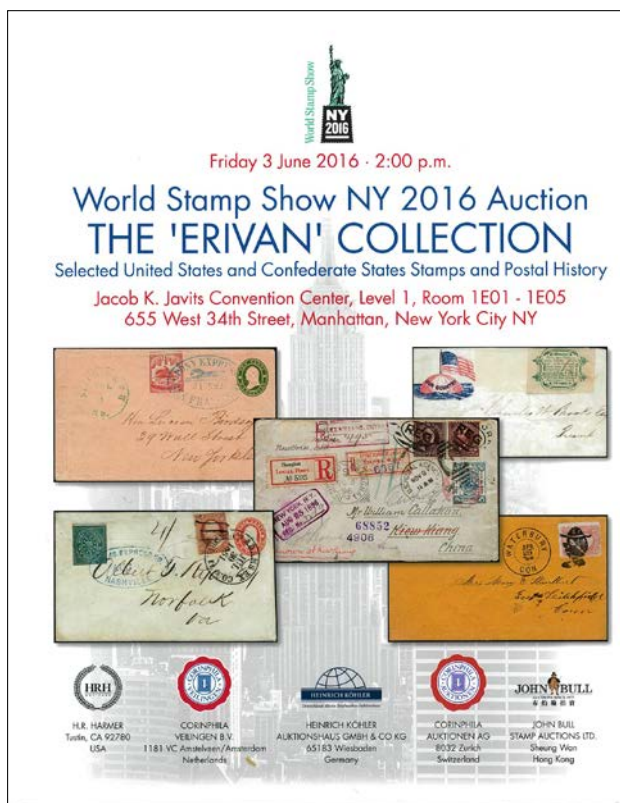
同コレクションの所有者である Erivan Haup 氏は、ドイツのテンゲルマングループ（ドイツを中心にヨーロッパの 13 カ国で 600 店弱のスーパー等を展開）を一代で創設したオーナーであり、欧米のディーラーでその名を知らない人はいない大コレクターです。当然ながらクラブ・ド・モンテカルロの会員です。

収集範囲は、ドイツ、スイス、米国に始まり世界中の珍品を所有していると考えられていますが、競争展に出品しないタイプのフィラテリストで、その全容は、幾つかの非競争展における展示や文献の出版から垣間見るしかありませんでした。また重品を含めて一度購入したものを処分しない収集家であるため、ドイツクラシック時代の外信カバーを中心に、重要マテリアルをほとんど吸収してしまうブラックホールのような存在でもあります。

「一度買ったものを処分しない」スタイルの収集家はもちろん日本にもたくさんいます。しかしながら、それら一般の人と比べて、購買力は桁外れです。そのため、欧州における影響は大変大きなものでした。

したがって、今回一部とはいえ、コレクションの処分がされたのは大きな出来事です。NY2016 にちなみ、米国マテリアルが中心のセールで、セントルイスベアーの単貼りカバーに始まり、見事なマテリアルが続きますが、裏で話を聞くと、今回の売りに出た商品はあくまで三軍クラスの重品であるとのこと。一軍はもちろんのことながら、二軍でもかなりのマテリアルがあるのは確かでしょう。

ハウプさん自身は、非常に紳士で、切手大好きな良い方なのですが、ご子孫にフィラテリストはいないため、将来的には、収集したマテリアルは世の中に出てくると思います。ちなみにハウプ氏は The Global Network の大株主ですので、それらのマテリアルは、よほどのことがない限り、ケラー、コリンフィラを中心とする同グループ内で売りに出されると筆者は推測しています。



Erivan Haup 氏のネームセールカタログ



Erivan Haup 氏（ネームセールカタログより）

5 株式会社鳴美、日本印紙カタログにて証券印紙以降のカタログ番号を全面的に改訂

株式会社鳴美（東京・新宿）は、5月10日に「日本印紙カタログ 第6版」を発行しました。前版より5年ぶりの出版となり、編者が古屋厚一氏から長谷川純氏に変わった第6版の特徴は、証券印紙以降のカタログ番号の全面的見直しです。

これは編者の長谷川氏の最新研究成果を表現するには、古い分類を元に付けられた、カタログ番号を改める方が良いと判断したためであり、切手と異なり、分類確立過程にある印紙においては、いたしかないことと出版社側も認めています。

カタログ全体の構成も版欠点の特徴などを図示し、額面により紙幅の大きく異なる「手彫証券印紙の研究」の部分を最終章に移動することで、以前よりも証券印紙の全体像をつかみやすくなりました。長谷川氏自身の国際展大金賞受賞も相まって、今後手彫証券印紙に関心を持つ人も増えると思われますが、その時に向けて最適な文献が出版されたと言えます。

6 株式会社日本郵趣出版、郵趣研究の編集方針を変更し、作品のリーフ掲載を開始

「郵趣研究」は、株式会社日本郵趣出版が発行する雑誌ですが、第129号（4月15日号）から編集が、これまで長いことチーフをつとめられた千葉晋一氏から最上邦昭氏らに交代となりました。

最上さんはフィラテリストではありませんが、郵趣雑誌の編集に長年携わられている方で、早速編集方針に新たな特色が現れ、コレクションのリーフ掲載が多数のページ数をしめるようになりました。しかし、この方針に対する賛否は、私を含めた在京の同誌執筆陣の間でも分かれています。

「記事掲載ページ数が30ページしかないにもかかわらず、リーフだけのページが4割に相当する12ページもある。工数を減らそうとする意図が見え見え」「リーフはカラー画像をPDFで提供する時代。モノクロで1ページに4リーフも掲載したら詳細は何も伝わらない。」といった否定的な意見がある一方、私をはじめ「展示コレクションの概要がわかり良い。」「リーフの作品を掲載する雑誌が少ないので良いこと。」などの肯定的な意見も出ています。

同誌に掲載された作品については、出品者に交渉の上、できる限りスタンペディアの媒体（フィラテリストマガジンやスタンペディア・エキシビション等）にて掲載したいと考えていますので、是非、雑誌紙面で全体構成を掴んでいただいた上で、詳細をカラー画像でお楽しみいただければと思います。ちなみに第129号に掲載された「年賀状の周辺」（山田克興さん）につきましては、ご出品者のご好意により、本号の付録に掲載しております。

7 日本郵便、熊本地震に伴う影響を取りまとめる

6月8日に、日本郵便は、2016年4月14日以降に熊本県、大分県を中心とする広い地域に発生している熊本地震の同事業への影響を取りまとめて発表しました。

それによると局舎建物の被災により右表の7郵便局が営業休止。車両型郵便局による郵便局サービス（ATMサービスののみ）を熊本県上益城郡益城町で実施。救援等を行う団体に宛てた災害義援金を内容とする現金書留郵便物の料金免除などがまとめられています。

郵便局名	所在自治体
健軍自衛隊前簡易郵便局	熊本市東区
八代本町郵便局	八代市
西原南簡易郵便局	阿蘇郡西原村
白旗簡易郵便局	上益城郡甲佐町
高木簡易郵便局	上益城郡御船町
井無田簡易郵便局	上益城郡山都町
護川簡易郵便局	菊池郡大津町

8 日本郵趣出版、江村清さんによるノウハウ提供でアルバムリーフのデジタルデータの販売を開始

国際切手展のテーマチック・エグジビターであると共に、JPS パソコン郵趣部会の世話人としても活躍されている、江村清さんが監修した、アルバムリーフのデジタルデータが、CD-ROMの形態で6月15日より始まりました。（発行：日本郵趣出版、WindowsのWord, Excel, PPTに対応。）

当誌第3号（2014.6.15発行）の「パソコンによるリーフ製作に困っている郵趣家に贈る 切手展向けリーフの作り方」でも書きましたが、特に初心者は他人のサンプルリーフデータを改変して、自分のリーフを作るのが上達の近道です。

スタンペディアでも複数のソフトウェア向けにダウンロードできるリーフデータの提供を検討していましたので、先を越されて悔しい反面、本データの普及で、今後各種切手展への初心者への参加やリピート率が上がるのではないかと期待しております。



* 重大ニュースから漏れた主なニューストピックス

- | | |
|--------------------|----------------------------------|
| オリジナル切手がリニューアルされる | 額面 92 円を含む新デザイン 6 種。大口先行あり。 |
| 現金書留封筒の付票廃止 | 4 月以降、5 連の付票のないものが販売開始される。 |
| ベルギー宛て国際郵便物の発送見合わせ | 3/22 テロで同国宛て郵便物を 3/23-4/22 は国内留置 |
| メータースタンプに変更あり | 2 月以降表面コーティングされたシール式が導入される |

特異な太陽加刷と高い希少性で古くから広く知られる

南方占領地の大珍品

「女王10c ロンボック太陽加刷赤加刷切手」

Netherlands Indies/Indonesia Japanese occupation Marine area. Lombok overprint sun with rays.



太平洋戦争時、南方占領地においては各地域においてさまざまな加刷切手が発行された。正刷切手が発行される以前に、マライや蘭印などにおいて、占領前に使用されていた現地切手に対し、加刷を施し、使用させたものである。この中には非常によく使用されたものもあれば、極めて局地的に発行/使用され現在では大珍品とされるものまで、加刷の種類も含め、非常多様な切手が確認されている。この南方占領地加刷切手で、特に大珍品として知られているものが、このロンボック太陽加刷である。ロンボック島は現在のインドネシア国に属し、リゾートとして名高いバリ島のすぐ東側に位置する小島である。このロンボック島において、1943年(昭和18年)2月から5月までの、わずか4ヶ月間のみ使用されたのがこのロンボック太陽加刷切手である。図の切手は女王10c切手に対し、赤色にて加刷されたものであり、為替原符に貼付され使用されたもののカットである。現地切手数種に発見されており、加刷色のこの赤のほかに黒や紫のものも発見されている。

加刷は非常に特徴的な、旭日旗イメージしたと思われる太陽模様がデザインされており、その特異性でも非常に人気の高い切手である。加刷は切手サイズより大きく、使用の都度、貼付された切手に押捺されたと思われる。このため、単辺では、加刷が全て切手に入りきらず、加刷が全て確認できるオンピースなどの評価は、単辺切手の1.5倍と非常に高い評価となっている。図の切手は、この切手が主に使用されたアンペナンにおける、海軍担当地域における大日本帝国政府消印の鮮明な消印で抹消された非常にコンディション良好なマテリアルである。

限定一点限り(抽選)

198,000円(消費税別)

カタログ評価225,000円

(日専150,000円完全印影150%増評価)



本ページで案内する商品の販売は7月15日(金)までにご注文の方の中から抽選とさせていただきます。
注文先: 102-0083 海事ビル内郵便局留置 吉田敬 もしくは order@stampedia.net 当て

高額面のみに見られる特異な三角切手～優れたデザイン性と希少性で知られる

19世紀オボック通常切手の最難関 未使用2種セットでご提供

Obock / French territory in East Africa, High Value Stamps issued in 1894



オボック (Obock) は、現ジブチ共和国の港湾都市で、1862年以降、仏領ソマリランド経営の拠点となった港町です。対岸のアデンを1839年に大英帝国が抑えたことが、1869年のスエズ運河開通を前にして、フランスの植民地経営に徐々に影響し始める中でようやく1862年に租借地を誕生させました。しかし、植民地経営は1880年代後半になるまで消極的で、切手の発行もようやく1892年に開始されたほどでした。

一旦植民地経営が開始されると、隣接するジブチの土地が獲得され、地の利から、仏領ソマリランドの首都もジブチに移転します。オボックで使用される切手も仏領ソマリランドの切手に置き換えられていきます。

こうしてデッドカントリーとなったオボックの切手は、スコットカタログによれば、通常切手64種類、不足料切手18種類と数は多くありません。初期のハンコで押したような加刷切手は偽物が存在するため鑑定書付きのものを購入されることをお勧めします。その後に発行された正刷切手 (33種類) に絞ると偽物の心配はぐっと少なくなります。一部の切手は、仏領切手のパッケージを購入すると今でも入っているほど安いものの、この33種の中に2種だけカタログ値の高い高額切手が含まれており、日本で入手する機会は滅多にありません。

限定一点限り (抽選)

98,000円 (消費税別)

スコット評価 \$1.325.00
(ヒンジ付)

1フラン以下の額面が13種類も発行される中での25フラン切手と50フラン切手です。オボック郵政は、職員が、50フランのような高額切手を誤って、50セントの低額切手として販売してしまわないよう、1フランを超える額面の切手5種類はすべて三角切手として発行しました。

今回提供する最高額切手2種はいずれも未使用ヒンジ付きで、この切手の状態としては良好です。特筆すべきは、マージンの広さで特に下部のマージンは大変大きなものとなっています。

本ページで案内する商品の販売は7月15日(金)までにご注文の方の中から抽選とさせていただきます。

注文先：102-0083 海事ビル内郵便局留置 吉田敬 もしくは order@stampedia.net 当て

急速郵便史のトップコレクター旧蔵品から選りすぐりのマテリアルで構成
基礎コレクションのレベルを超越した一大コレクションを特別提供

100年間余の急速郵便史・5フレーム80頁 垂涎の大河コレクション

Prompt Delivery in Japan from Pre-adhesive Period to 1981

**国際的にも評価の高まる、日本の急速郵便史。
そのエッセンスを一括入手できる千載一遇の好機。**

近年国際切手展における上位入賞テーマとして急速に評価が高まりつつある、別配達や速達を中心とした、日本の急速郵便史。飛脚時代の急速便から始まり、別配達や別仕立、そして、速達時代には地域拡充と全国化を経て戦後の新郵便法時代へ。郵便史、そして通信発達史としての重要性や複雑性、そして多くの希少なマテリアルの存在から、収集対象としての魅力は極めて高いと言えます。近年、その面白さから愛好者も増加し、キー・アイテムの争奪戦は熾烈を極めています。当然、難所・急所も少なくないため、一つのコレクションとしてまとめ上げることはもちろん、ベース・コレクションを作り上げることすら決して容易なことではありません。

このたび、近年国際的にも重要性が高まりつつある郵便制度史収集の発展を願う旧蔵者の意を受け、選りすぐりのマテリアルで構成し、競争展出品をも考慮して高度な構成と専門的な書き込みを施した大河コレクションを、ここに特別提供することとなりました。

基礎コレクションのレベルを大きく超越し、非常に入手困難なプレミアム・アイテムが散りばめられたこのコレクションは、このままでも既に全国レベル競争展において入賞可能な水準を確保しており、これに個々のコレクターのエッセンスを加味してさらに充実をはかることにより、将来的に極めて優れた郵便史専門コレクションへの発展が可能となります。

本来ならば、1品1品を個別にオークションにかける方が売却方法としてはベターと考えられるところ、「コレクション一括継承」にこだわる旧蔵者の意向を汲んでの一括ご提供となりました。

このレベルのコレクションの形成は、長年にわたるマテリアルの入手努力に加え、郵便史の広範な知識やノウハウの習得に10年以上の長期間を要すると考えられる困難な道程ですが、このコレクションにより専門知識も含めた重要マテリアルの一括入手が可能となることから、その「知識習得と個々のアイテムを丹念に蒐集するに要する時間を一挙に飛び越えられる」バリューは計り知れません。

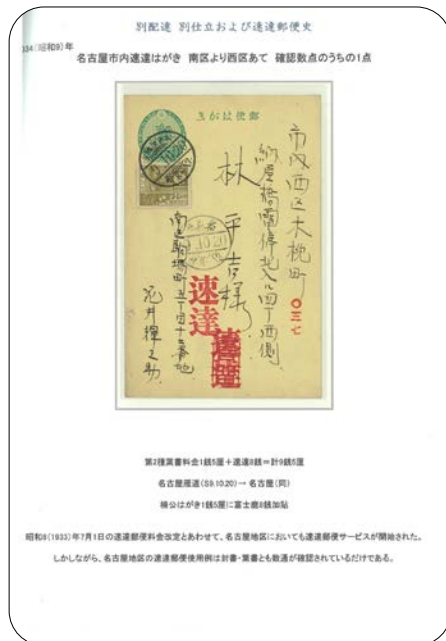
このチャンスにこの大河コレクションを入手し、高度な郵便史専門収集への第一歩を踏み出してみませんか？



一点限り
特別提供
抽選販売

100年間の急速郵便史 垂涎の大河コレクション

コレクションの一例（全リーフはウェブで閲覧可能です。）



飛脚時代-1981年まで100年間の急速郵便史 (別配達・別仕立・速達) コレクション一括

価格 **498,000円** (消費税別) 分割の場合は、56,000円×10回払い (同)

展覧会用にライトアップ(カラー印刷リフ)しアルバム2冊に収納したコレクション。

この間の速達基本使用例+αを全て網羅(航空含まず)、明治・大正・昭和初期17ルーム、昭和8-12年(地域限定速達時代)17ルーム、速達全国化後終戦まで27ルーム、戦後17ルームの計57ルーム(80頁)構成で戦前主体。

飛脚急速便1通、旧小判貼別配達1通・別仕立2通、田沢貼別配達3通、速達初期9通(市内速達6銭/2区間12銭時代)、取扱地域限定料金8銭時代15通、全国化以降49通(戦前24、戦後25)の計80通+郵政製速達全国化周知資料1点、初期の2区間便(東京→横浜、大阪→京都)、旧毛25銭貼別配達、地域限定時代の京都市内便、名古屋市内便(確認数点)、京阪神都市間便、京浜地区間便、昭和12年4月12銭短期(4か月半)料金時代書状、戦前記念貼別配達、同速達書状など貴重なアイテムを含む。

状態混合も概ね良、美観良、詳細な郵便料金表付

本ページで案内する商品の販売は7月15日(金)までにご注文の方の中から抽選とさせていただきます。

注文先：102-0083 海事ビル内郵便局留置 吉田敬 もしくは order@stampedia.net 当て

郵趣カレンダー

2016/6/15 ～ 2016/9/14 の郵趣イベント

次のイベント等はピックアップイベントコーナーで詳しく取り上げております。

切手市場 / 第一回製造面勉強会

競争切手展（判明分すべて）

開催日	切手展名称	会場	備考
2016/7/22-24	全日本切手展 2016	すみだ産業会館（錦糸町駅前）	二大国内競争展 * 出品締切済み
2016/8/10-15	THAILAND2016	The Mall Ngamwongwan Convention Center（タイ・ノンタブリ）	アジア国際切手展 * 出品締切済み
2016/10/21-26	World Stamp Championship PHILA TAIPEI 2016	Taipei World trade Center(台北)	国際切手展 * 出品締切済み
2016/11/4-6	JAPEX2016	東京都立産業貿易センター台東館	二大国内競争展 * 出品要項未発表
2016/12/2-6	CHINA2016	Nanning International Convention and Exhibition Center（広西チワン族自治区）	アジア国際切手展 * 出品締切済み
2017/3/30-4/2	MELBOURNE2017	Caulfield Racecourse（メルボルン）	アジア国際切手展 * 出品要項未発表

これ以外に、2 回のアジア展（2017 年 8 月にインドネシア、11 月にドバイ）と国際展（2018 年 12 月にマレーシア）が計画されています。

国内 4 大フロアオークション

開催日	主催者	回 etc	事前下見日	備考
6 月 19 日	タカハシ・スタンプ・オークション	597		メールの部あり
7 月 2 日	JPS オークション	504	6 月 25 日	メールの部あり（7/5 正午 入札締め）
7 月 17 日	タカハシ・スタンプ・オークション	598		メールの部あり
8 月 21 日	タカハシ・スタンプ・オークション	599		メールの部あり
8/27-28	ジャパNSTAMPオークション	93	8 月 21 日	メールの部あり（8/30 午前 9 時 入札締め）
9 月 10 日	スターオークション	36		
9 月 13 日	JPS オークション	505	9 月 3 日	メールの部のみ（9/13 正午 入札締め）

※事前下見日等は、判明している物のみを掲載しています。またジャパNSTAMPの事前下見日については東京開催のみを掲載しています。

一般切手展

開催日	切手展名称	会場
6月18日(土)～6月19日(日)	2016 イギリス切手展	切手の博物館
6月24日(金)～6月26日(日)	第14回絵画切手部会展	切手の博物館
7月6日(水)～7月10日(日)	アメリカ切手展 2016 america'16	切手の博物館
7月24日(日)	筑後地方切手のつどい	主催：(財)日本郵趣協会 九州・沖縄地方本部 場所：小郡市生涯学習センター 福岡県小郡市大板井1180-1 講演、盆回し、バザール
9月9日(金)～9月13日(火)	第22回川越ふれあい切手展 併設) 第17回彩 PEX 2016	主催：(公)日本郵趣協会 関東地方本部、日本郵趣協会川越支部 午前10時～午後5時 場所：川越アートギャラリー「呼友館」 電話 049-243-8243

※切手の博物館で開催される切手展の開催時間は特記ない限り 10:30-17:00 です。

切手のフリーマーケット、即売会

開催日	曜日	名称	回	備考
7月2日	土	切手市場	136	日本橋富沢町 綿商会館 9:00-17:00
7/2-3	土日	切手バザール	84	切手の博物館 (目白)
8月6日	土	切手市場	137	日本橋富沢町 綿商会館 9:00-17:00
8/27-28	土日	大阪駅前第三ビルバザール	50	大阪駅前第三ビル 17 階 10:00-17:00
9月3日	土	切手市場	138	日本橋富沢町 綿商会館 9:00-17:00

講演

開催日	曜日	名称	講演内容・備考
7月2日	土	第1回 製造面勉強会	「収集家から見た製造技術」 魚木五夫氏 「小判切手製造面調査研究の足跡」 長田伊玖雄氏 「グラビア印刷切手のスクリーンを図る道具」 渡会・吉田 主催：無料世界切手カタログ・スタンペディア (株) 日本橋富沢町 綿商会館 15:00-18:00
7月24日	日	筑後地方切手のつどい	「日本のコイル切手」 伊藤純英氏 * 詳細は、本ページ上部の一般切手展の欄をご参照ください。

郵趣カレンダーおよびピックアップ イベントへの掲載をご希望の方向け

The Philatelist Magazine では、郵趣を活性化させるイベントを開催・運営される方を宣伝の観点からお助けします。地方郵趣会の切手展であっても、展示物に自信があるイベントを主催されていらっしゃる方、是非ピックアップイベントに掲載してみませんか。展示作品、フレーム数、出品者名等を明記の上、tpm@stampedia.net までご連絡ください。
切手展以外のイベントの宣伝もまずは電子メールでご相談ください。

切手市場

切手市場管理人 高崎真一

T P M読者の皆様には日頃よりご来場いただきまして有難うございます。

今年に入ってから私自身は切手市場の運営と平行して国内各地の切手イベントへお邪魔してイベント運営の一からの勉強と皆様方との交流、今後僕が切手の世界でどういう活動を行っていけば良いかの研究に力を入れています。一口に郵趣や切手と申し上げましてもコレクターとして集め研究する方、競争展プレイヤーとして数々の作品を世にリリースして下さる方、作家業をメインに切手や郵便についての様々な史実を書いて下さる方、切手を売ることが生業としてコレクターの皆様に感動を与えて下さる方、そして収集に関わる全ての方に活動の場を提供して下さる方など各人様ごとに得意な分野があって郵趣界への貢献の仕方は様々だと思います。

まだまだ自分がどういう関わり方で今後も活動させていただけるのか見えないところも多いのですが、今年一杯は国内、来年は海外へも出掛けて更に見聞を深めていきたいと思っています。

7月以降の切手市場の先取り情報です。

7月はいつものメンバー様に加えて新規出店のサンワ PHILATELIC さんが出店予定です。永年収集してこられたコレクションを中心のセール予定です！毎月出店の計画ですので相当量の品物と販売計画をお持ちのようなのでご期待下さい。



最近レギュラー登録をされた大槻さんは6月はお休みですが7月以降も小林スタンプさんの催事さえ重ならないければ続けて出店下さる予定です。長年集めてきたジャパン未・済は専門コレクター向けのアイテムが多く好評です。



最近復帰されたヤマサン店主のコイン・スタンプネットさんは全国を駆け巡って作った多局印カバーやオリジナルカシエのFDC、コインや風景印といった独特の品揃えで切手市場を再び賑わして下さっています。

e-bay とヤフオクではお馴染みのモモクロさんは年数回の出店ですが5月に続いて8月も状態の良いジャパン未・済をご提供下さる予定です！8月からは postagestamp.jp さんも新規参入して賑やかな面々でお迎え出来ることでしょう。

静岡の名コンビ sumi& ダミーさんのうち外国未使用専門ショップの静岡のダミーさんが8月からソロ活動を始められます。年に数回、sumi さんが出ない月でも大量の外国未使用とアルバム売りを抱えて前日東京泊のホテルで最後の1品までギリギリの値付をされての出店だと思います。大方の荷物は当日着で送っていますので到着までの間は予告編と近況報告を交えたトークタイムをお楽しみ下さい！

7月からは綿商会館で同日に製造面研究会も開催されることとなりました。講師講演やオフィシャルセールも行なわれるようです。切手市場開催に併せて違った切り口での集客性ある発展的な要素が多いイベントが来て下さることは大変有難く将来へ向けての嬉しい幕開けだと思います。

どうぞ切手市場共々今後のご来場を心よりお待ちしております。



4年目を迎えた本年、遂に単独採算が確保できました！

stamp club 2016 発行報告

無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社 スタンプクラブ編集部

2013年に創刊したstamp clubは、2016年4月29日に2016年号を発行いたしました。この号が通巻第4号になります。

本年の発行号においては、中高生の男女1名ずつの参加による巻頭特集に代表される充実した内容を提供すると共に、公立・私立図書館への配本プロジェクトをさらに進めました。

二年間の合計でスタンプクラブを配本した館数は800にのぼり、ユース・ジュニアの郵趣のプロモーションの骨格となりつつあります。

本号の発行にあたっては、日本全国のフィラテリスト及び切手収集体の皆様から一口2,000円で127名様から242口48

万4千円のご支援を頂戴いたしました。ご支援下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。以下にご芳名を掲載させていただきます。(順不同)



3口以上のご支援をくださった皆様 (22名)：

富樫敏郎様 20口 野崎進様 10口 小林彰様 10口 森下幹夫様⑤ 正田幸弘様⑤ 岩崎朋之様⑤
中野健司様⑤ 近辻喜一様⑤ 設楽光弘様⑤ 長野行洋様⑤ 手嶋康様⑤ 榎井健右様⑤ 山田はるか様⑤
菊池達哉様⑤ 内田雄二様④ 斧田健一郎様③ 山本義和様③ 鎌倉達敏様③ 行徳国宏様③
外国切手出品者の会様③ 市川郵趣会様③

※ 名前の後の丸囲みの数字は、3口以上のご支援を頂いた場合の口数です。

2口のご支援をくださった皆様 (20名)：

新井理様 平尾勉様 島田茂様 伊藤文久様 加藤茂樹様 西海隆夫様 佐藤浩一様 藤田容弘様 菊地恵実様
豊田陽則様 久野徹様 天野安治様 牧野周一様 山田良一様 城野隆三様 手塚栄次様 李家彰様
うさぎのあしあと様 匿名希望 2名

1口のご支援をくださった皆様 (85名)：

池田健三郎様 茂木伸治様 佐藤明夫様 三宅広和様 寺本尚史様 山本勉様 米田元様 柏谷雅信様
山本亮様 加瀬嘉文様 新谷嘉浩様 北野雅利様 齊藤智様 山田廉一様 堂前福太郎様 増川光広様
荒木寛隆様 飯塚博正様 柏木崇人様 加藤純様 千代秀樹様 福田達也様 山本誠之様 長田伊玖雄様

有吉伸人様 宮崎幸二様 比留間晴久様 田村邦彦様 石川勝己様 榎原晃二様 藤原和正様 横山裕三様
 須藤真様 深見英夫様 岡藤政人様 小藤田紘様 伊藤昭彦様 望月治様 水村伸行様 山崎文雄様
 白鳥信行様 横矢仁様 奥山昭彦様 神宝浩様 斎享様 多田由一様 石代博之様 大久保幸夫様 石田徹様
 上田勝久様 大越紳一郎様 米津武志様 須谷伸宏様 赤塚東司雄様 祖父江義信様 大嶋篤二様
 中村幸隆様 池田正宏様 木戸裕介様 稲葉良一様 稗田健様 五十嵐伸哉様 穴戸俊介様 鎌田晋様
 里見孝弘様 水谷行秀様 柳川裕文様 大沼幸雄様 縄幸市様 松井晃様 原和生様 林享様 大村公作様
 永吉秀夫様 KURODANI 様 M ガレージ様 dotechan 様 Dad Philatelist 様 JPS 静岡支部様
 JPS 鹿児島支部様 JPS 沼津支部様 姫路郵趣会様 吉田敬様 匿名希望 2 名

過去一年間に郵趣界では、3 団体による 4 つの寄付（お金の支援など）が行われています。金額も規模ももっとも大きいのは、JPS さんの JAPEX 寄付金ですが、127 名と百の大台を突破した、スタンプクラブのサポーターの裾野の広さは、多くのフィラテリストの皆様より、ジュニア・ユースの育成に関してご支持を頂いた結果と捉えております。

このサポートのおかげで、本年のスタンプクラブ事業は、収支がほぼトントンになるところまで持ててくることができました。当事業については、開始当時より、株式会社で行うのではなく、単独採算が取れるようになった時点で NPO 等を設立し、無償譲渡することを考えておりました。

現在、受け皿となるべき NPO の設立に向けて協議中ですが、設立は株式会社に比べて時間がかかるため、来年発行する stamp club 2017 の発行主体が当社になるか、新 NPO になるかは現時点では未定ですが、引き続き、吉田敬が責任を持って同事業を進めてまいりますので、ご支援のご継続をどうぞお願い申し上げます。

スタンプクラブサポーター			
2014年	23 名	98,000-	
2015年	79 名	306,000-	
2016年	127 名	484,000-	
JAPEX 寄付金			
2011年	624 名	3,612,000-	
2012年	635 名	3,874,000-	
2013年	644 名	3,853,000-	
2014年	592 名	3,709,000-	
2015年	566 名	3,609,140-	
全日本切手展基金			
2014年	59 名	963,000-	
2015年	98 名	1,076,000-	
スタンプショウ基金			
2013年	281 名	1,514,000-	
2014年	247 名	1,632,000-	
2015年	309 名	1,924,160-	
2016年	357 名	2,426,000-	

三ヶ月に一度開催される、日本切手の真面目な勉強会です 第一回 製造面勉強会

無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

製造面勉強会は、伝統郵趣の両輪の一方である「製造面」研究の発展を、日本のフィラテリーに関してより一層図ることを目的とし、設立された会です。

三ヶ月に一度開催する勉強会は、啓発を行うと同時に研究成果の発表の場となることを狙い、運営して参ります。

具体的には（１）毎回三部門（「明治」「大正～戦前」「戦後」）にベテランから若手まで幅広く講師を選任し、講演を行っていただきます。（２）各回終了後に参加者にアンケートのご協力をいただき、講師の選任の参考にいたします。

勉強会は、原則として1, 4, 7, 10月の第一土曜日の夕方に開催する予定です。是非、第1回勉強会からご参加ください。

日時 2016.7.2（土）15:00-18:00

会場 綿商会館（東京都中央区日本橋富沢町、切手市場と同じビルです）

会費 2,000 円（渡会 or 吉田への事前申込が必要・当日支払）

＊ 第2回勉強会は2016.10.1（土）を予定しています。会場ビル同じ

当日のスケジュール

15:00-16:00 歓談・特別即売（エーгентスタンプ）

16:00-18:00 講演3本

「収集家から見た製造技術」 魚木五夫氏

「小判切手製造面調査研究の足跡」 長田伊玖雄氏

「グラビア印刷切手のスクリーンを図る道具」 渡会・吉田

第一回勉強会への参加申込方法

参加申込：次のいずれかの方法で参加申込をしてください。（**事前申し込みが必要です**）

（１）電子メールで yoshida@kitte.com に連絡する。

（２）エーгентスタンプに電話連絡する。[03-3995-4317]

主 催：スタンペディア（吉田敬）

協 力：エーгент・スタンプ（渡会一裕）

毎年恒例のヨーロッパ切手ファンのイベント 第4回ヨーロッパ切手展 出品のご案内

アルプス・ヨーロッパ切手の会

ヨーロッパ切手展は、2013年に始まった、ヨーロッパの切手を展示する無競争の公募切手展で、毎年一つその年にふさわしいテーマを決めています。第4回展を開催する本年は、「フランス」をテーマにすることにいたしました。レギュラー部門の出品について記載いたしますので、ご出品を希望される方はご連絡ください。(yoshida@kitte.com)

概要

切手展名：第4回ヨーロッパ切手展

主催団体：アルプス・ヨーロッパ切手の会（JPS 部会申請中）

協賛：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

後援：フランス大使館、公益財団法人 日仏会館

開催日程：2016/10/29-30（土日）

テーマ：フランス

展示

3部門あり、この内レギュラー部門のみ、出品を公募しております。

(1) レギュラー部門（フレーム単位の展示）

(2) ワンリーフ部門（1リーフのみの展示）

(3) 文献部門

レギュラー部門の出品について

フランスをテーマにしている限り、アルプス・ヨーロッパ切手の会の会員・非会員を問わず出品できます。展示作品については毎回主催者が発行する公式記録等（紙及びネット）に掲載します。出品料は無料ですが送料は各自の負担です。詳細については電子メールにてお問い合わせください。

なお、すでに30フレーム分の出品応募があり、残念ながら出品をお断りすることがございます。また同一テーマのご出品は先に応募された方を優先していることをご了承ください。

次のテーマによるご出品はまだございませんので、出品のご参考にしてください。

（例：アルザス・ロレーヌの占領切手、Ceres、スタンプレスカバー、19世紀後半～21世紀の通常切手、バルーンポスト、フランスの鉄郵印、仏領の切手及び郵便史（アフリカ、東南アジア、アメリカなど）、フランスの人物のテーマティク／トピカル（ナポレオン、キュリー夫人などなどたくさんいます）

<広告>

第一回 製造面 勉強会

午後三時より 歓談・特別即売（エージェントスタンプ）
午後四時より 講演3本

「収集家から見た製造技術」 魚木五夫氏

「小判切手製造面調査研究の足跡」 長田伊玖雄氏

「グラビア印刷切手のスクリーンを図る道具」 渡会・吉田

要事前申込

現在 40 名の方より参加のお申し込みをいただいております。これ以降のお申し込みはスタンペディア郵趣文献ショップにて受け付けます。

日時：2016.7.2（土）15:00-18:00

会費：2,000 円

定員：50 名

会場：綿商会館（東京都中央区日本橋富沢町）

主催：スタンペディア（吉田敬）

協力：エージェント・スタンプ（渡会一裕）



私の発見・私の報告

KARUIZAWA 欧文ローラー印

報告者：和田 輝洋

第10号に掲載した、軽井沢局の欧文ローラー印について、読者の和田輝洋さんより、ご所蔵の MATERIAL のコピーをお送りいただきました。

欧文ローラー印の中で、軽井沢局は珍しい部類に所属するため、現時点で確認されている印影を一覧にまとめました。



KARUIZAWA NIPPON 20.7 (和田輝洋氏 蔵)

国名表示	年月日	台	出典	所有者
JAPAN	不明	田沢切手 5 厘 オンピース	TPM 10	行徳国宏
NIPPON	1936.7.28	田沢切手 5 銭 オンピース	TPM 10	行徳国宏
NIPPON	1940.8.22	一次昭和切手 8 銭 単片	TPM 10	比嘉霜人
NIPPON	x.7.20	一次昭和切手 6 銭 単片	TPM 11	和田輝洋
NIPPON	x.8.20	一次昭和切手 5 厘 単片	ジャパンスタンプオークション JAPEx2015 セール	



新発見？非電化ローカル線の鉄郵臨時便

報告者：千代秀樹

取扱便（※1）の鉄郵が廃止されたのが昭和59年（1984年）1月末。

廃止されてからかれこれ30年以上が経過し、熱集されていらっしゃる方も多いので調べつくされた感（特に戦後の鉄郵は）があるかと思いますが今回紹介する、新見広島間における臨時便は私見では、「てつゆう」誌上等のデータにも見当たらないと思われます。
（リサーチ不足で既報でしたらスミマセン）

郵便路線の紹介です。

新見広島間（当時の国鉄芸備線（正確には新見備中神代間は伯備線）

全長約165 km程の非電化ローカル線です。

芸備線は山陽山陰の間を東西に貫く路線となっており、陰陽連絡線ともクロス（伯備線、木次線、福塩線、三江線）する路線となっております。

さて、取扱便における鉄郵の臨時便といえ、東京大垣間が有名で、臨時便にのみ存在する路線名で通常の便は存在しないこと（東京名古屋間を大垣まで延長）もあり、当然に私も所有してはいないのですが多くの鉄郵収集家が密かに？狙っているハンコではないかと思います。（官白は存在しているようですが、切手に押されたものがほしいものです）

そして、臨時便の多くは年末の繁忙時期（理由はいわずもがなですね）に設定されるケースが多くまた、臨時便は護送便（※2）または締切便（※3）になるケースが多く、当然その場合は記念押印を除いては消印されませんので希少性は高いと思います。
そして、件のハンコの日付も 46.12.24 となっております。
（C欄に 上・臨時 と表示されていますね。）

推測の域を出ませんが、通常の便数では郵便物を裁ききれず年末時（のみ）臨時便を設定したのでは？
と考えます。

本当は昭和46年当時の当該地域の道路事情や郵便物物量を調べないと断定はできないのですが、鉄道がまだ物流の中心を



楕型鉄郵印
A欄：新見広島間 B欄：46.12.24 C欄：上・臨時
*下は消印の報告に正にした図



担っていたと思われる時代ですので当たらずとも遠からずではないでしょうか？

そして当該路線は昭和 59 年 1 月末まで郵便路線として残りました。(最後は上下 2 便設定されていました。)

また、失礼ながら当路線にすら臨時便が設定されているので、まだまだ未発表の臨時便路線があるのではないだろうか？と推測されます。

このあたりに詳しい御仁に解説いただけたら幸いです。

※ 1 取扱便：郵便車に郵政職員が登場し車中区分を行い、郵便物への消印作業等行っていた便のこと。いわゆる鉄郵といえはこの印のことを言います。

※ 2 護送便：郵袋に入った郵便物を運ぶが、車中区分は行わない。ただし、郵政職員が乗務するため日付印はある。→記念押印で存在

※ 3 締切便：郵袋のみ搭載（日付印ナシ）

参考文献：てつゆう＝梶原ノート＝

2016 年春から初夏にかけてのインクジェット式機械印の使用開始

報告者：鈴木盛雄

本誌第 10 号で、大嶋篤二氏、小坂彰宏氏により、四日市西局におけるインクジェット式機械印の使用開始が詳細に報告されました。その後の調査並びに、同式の機械印が配備された大阪北局と博多北局の使用開始について報告致します。

四日市西局

使用開始日は 3 月の頭と言われていましたが、オンピースで 2 月 22 日が見つっています。もう少し前があるようですが、ほとんど情報が事前には伝わってきませんでした。



図 1 四日市西 / 28 / 16.2.22. 12-18 / YOKKAICHINISHI

大阪北局

四日市西局の前例があったので、大阪北局に記念押印を郵頼してみました。そのうちの 1 局の戻り便に 3 月 17 日のインクジェット式機械印が押されていました。



図 2 大阪北 / 28 / 16.3.17. 12-18 / OSAKAKITA (右はカバー全容)

博多北局

5 月の連休明けに、前々から噂のあった博多北局でインクジェット式機械印の使用が始まりました。ちなみに 5 月 2 日の和欧文機械印の使用例を確認しております。

郵頼について、残念ながら、今回は郵便局のガードが固く、すぐにはできませんでしたが、ようやく入手した使用例をお目にかけます。



図 3 博多北 / 28 / 16.5.26 0-8 / HAKATAKITA



図 4 和欧文機械印 博多北 16.5.2 18-24

これら3郵便局の使用開始により、インクジェット式機械印の一覧は表のように更新されました。また今回の3局以外にも数局での使用が噂されています。なぜか郵便局は秘密裏に使用開始するのですが、できれば使用開始日くらいは開示していただけると助かります。郵趣家対応は面倒臭いのでしょうかね。

表 インクジェット式機械印一覧（鈴木盛雄さん作成）

タイプⅠ	東京中央	平成 19 年 07.1.23 ~ 07.9.30
	銀座	平成 19 年 07.1.30 ~ 07.9.
	日本橋	平成 19 年 07.1.30 ~ 07.9
	渋谷	平成 19 年 07.1.30 ~ 07.9
タイプⅡ	丸の内	平成 19 年 07.10.1 ~ 閉局まで => 銀座局へ
	銀座	平成 19 年 9 月 25 日頃
	日本橋	平成 19 年 9 月 25 日頃
	渋谷	平成 19 年 9 月 19 日頃
	晴海	平成 22 年 10.3.23 晴海局開局 ~
タイプⅢ	銀座	平成 22 年 10.11.15 頃
	さいたま新都心	平成 27 年 15.3.10 頃
	四日市西	平成 28 年 16.2.12 頃
	大阪北	平成 28 年 16.3.11 頃
	博多北	平成 28 年 16.5.9 頃

タイプⅠ:縦2センチ×横5センチ(波部まで) タイプⅡ:縦1.8センチ×横3.8センチ(波部まで) タイプⅢ:縦2センチ×横3.8センチ(波部まで)

ところで最後になりますが、今回使用開始した3局の印影を確認すると、いずれも1のセリフがありません。ところが、さいたま新都心郵便局のインクジェット式機械印の1にはセリフがあります。さいたま新都心郵便局のインクジェット式機械印だけはモリコー製品なのだろうか？と気になります。



図5 さいたま新都心 / 27 / 15.6.1. 8-12 / SAITAMASHINTOSHIN

和欧文機械印 第 1 期 時刻表示 0-8 使用局・新発見の報告

報告者：市川 勉

本誌連載をご執筆されている水谷行秀さんのお声がけをきっかけとして、和欧文機械印 第 1 期 時刻表示 0-8 の使用局の新発見が一つずつ寄せられております。[編集部]

福山局の使用例の報告

市川勉さんより福山局における使用例のご報告がありました。(図) これにより今号も 1 件リストが増加し、使用局数は合計 13 局となりました。今後は更新のあるたびに確認局の一覧を更新します。(表)

「和欧文機械印 第 1 期 時刻表示 0-8」とは？

次のような消印のことです。

使用期間：1968.12.1 ～ 1979.8.31

証示部 D 欄：都道府県名をローマ字表記（都道府県名と同名の局は空欄）

証示部 E 欄：国名を英語表記（JAPAN）

波型抹消部：縦方向に 6 本

その他：標語入りと標語なしが存在する



福山 1979.2.2 0-8 (市川 勉 様 収蔵品)

第 2 期以降の和欧文機械印でさほど希少でない時刻表示 0-8 の使用例は、第 1 期においては大変珍しく、カバー、単辺上の印影を問わず、新発見の情報を求めています。

郵政局	局名	確認が使用された年月日	出典
北海道郵政局	札幌中央	1970.7.22 1970.8.25, 1977.8.x8	TPM 08
北海道郵政局	函館		
東京郵政局	東京中央	1976.1.25	TPM 08
関東郵政局	千葉		
関東郵政局	千葉中央	1978.12.22	TPM 08
関東郵政局	土浦	1979.3.10, 1979.4.x7	TPM 08
北陸郵政局	福井	1973.4.14	TPM 08
近畿郵政局	大阪中央	1969.11.18, 1971.4.6	TPM 08
近畿郵政局	姫路	1970.5.x1	TPM 10
中国郵政局	岡山中央	1972.6.14	TPM 08
中国郵政局	広島中央	1970.1.27	TPM 08
中国郵政局	福山	1979.2.2	TPM 11
九州郵政局	久留米	1977.11.9	TPM 10

都内速達の使用例

報告者：池田 健三郎

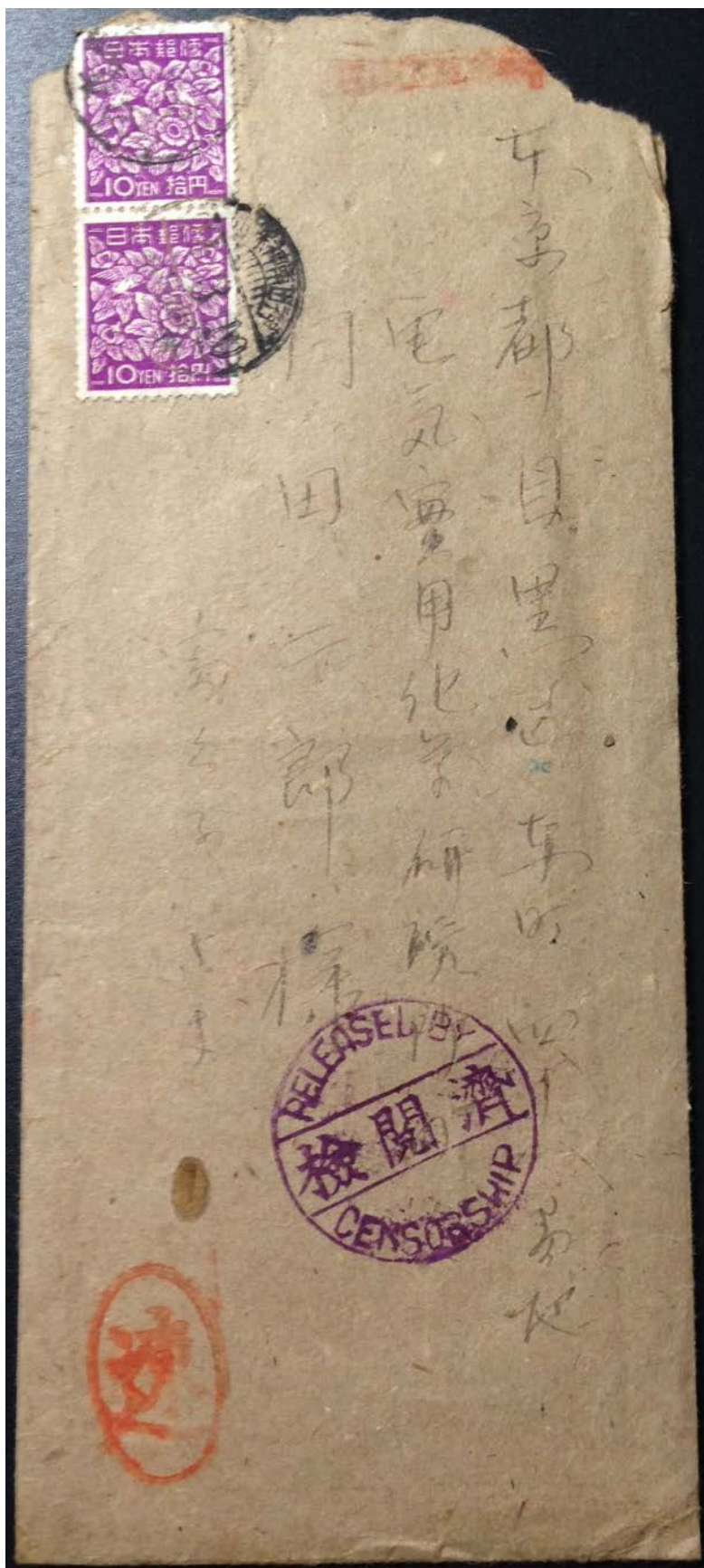
日本の急速郵便に関わる郵便史の研究されている池田さんから都内速達の使用例の新発見（21 点目）のご連絡をいただきました。なお、合わせて「検閲済」印が押捺されているのは 3 点目の発見となります。

このようなマル「速」印の使用状況に関するデータは、当誌 6 号及び 7 号で、これまで発見された全 20 点のデータが図版とともに掲載されています。[編集部]

「都内速達郵便」は、昭和 24 年 2 月 16 日から 7 月 31 日までの半年間だけ、東京都内で取扱われた速達サービスで、「速」の文字を縦方向に長く楕円形で囲った形がその特徴で、この印の押された速達郵便物がどのような性格のものであったか、これまでにまひとつ明確になっていませんでした。

これが「都内速達郵便」であることを突き止めたのは行徳国宏氏で、戦後の郵政資料を調査中、郵政総合博物館資料室所蔵の「通信文化新報」（24 年 3 月 2 日号）に記事を発見した由。

このカバーの差立て局は神田神保町局、日付は昭和 24 年 3 月 10 日で裏面に同日の目黒局到着印が押捺されています。



謎解き郵趣

答え合わせ

戦後の配達郵便局名記載勸奨・初期使用例

出題者：岡藤 政人

70 円旧能面貼り・受取通知を航空扱いした、到達証明郵便

出題者：行徳 国宏

出題

脇付き葉書

出題者：古畑 健三郎

「謎解き郵趣」は読者参加型の郵趣解説記事です。

回答への参加：出題された郵趣マテリアルについて、マイ・スタンペディアからリンクされるアンケートにてご回答ください。次号で出題者の模範解答と共に一つずつ詳しく読み解いて参ります。

出題者募集中：次号で掲載予定の郵趣マテリアルを募集中です。一筋縄ではいかない皆さんのひと味変わった郵趣マテリアルの画像を tpm@stampedia.net までお送りください。

戦後の配達郵便局名記載勸奨・初期使用例

出題者：岡藤 政人

「このカバーの郵便史的な意義について解説してください。」との質問で始まった、岡藤さんの出題。難問だったようで、回答はわずか2名のみでした。(編集部)

「料金としては S23.7.10 からの書状 5 円書留 20 円で合計 25 円のもので。30 銭の切手付き封筒に 24 円 70 銭分の切手が加貼されています。

当該料金期間は 9 か月余りで短いですが、書留書状が特に少ないものではありません。また、30 銭の切手付き封筒は単独使用は適正料金期間の短さから珍重されていますが、後期使用は特に珍しい物ではありません。

このエンタィアのポイントは戦後の配達郵便局名記載勸奨に則って、配達局名が記載されていることでしょう。配達郵便局名記載勸奨は M 31 年以来断続的に行われていましたが、戦後の郵便物配達遅延対策として S23.9.1 から行われたもので、差出人と宛先の住所に配達局名を冠記するよう郵便利用者に求めたものです。

このエンタィアに押された〇〇府県〇〇局区内という角印がそれで、制度開始 11 日目のものです。差出人の住所に〇〇県〇〇局区内という印が押された物は少ないながらもちらほら見かけますが、宛先に表示したものは珍しいと思います。」(馬淵直人さん)

「こだわりの逸品をたくさんお持ちの岡藤さんならではのカバーです……………(ハッキリ言って全くわかりません)」(重山優さん)



これら2件の回答に対する出題者の岡藤さんの回答は以下の通りです。

「今回見ていただきました「謎」の答は、ずばり馬淵さんの御指摘の通りです。馬淵さん、恐れ入りました。それから、私の持っていますものの大部分は「こだわりの駄物」ですよ、重山さん。

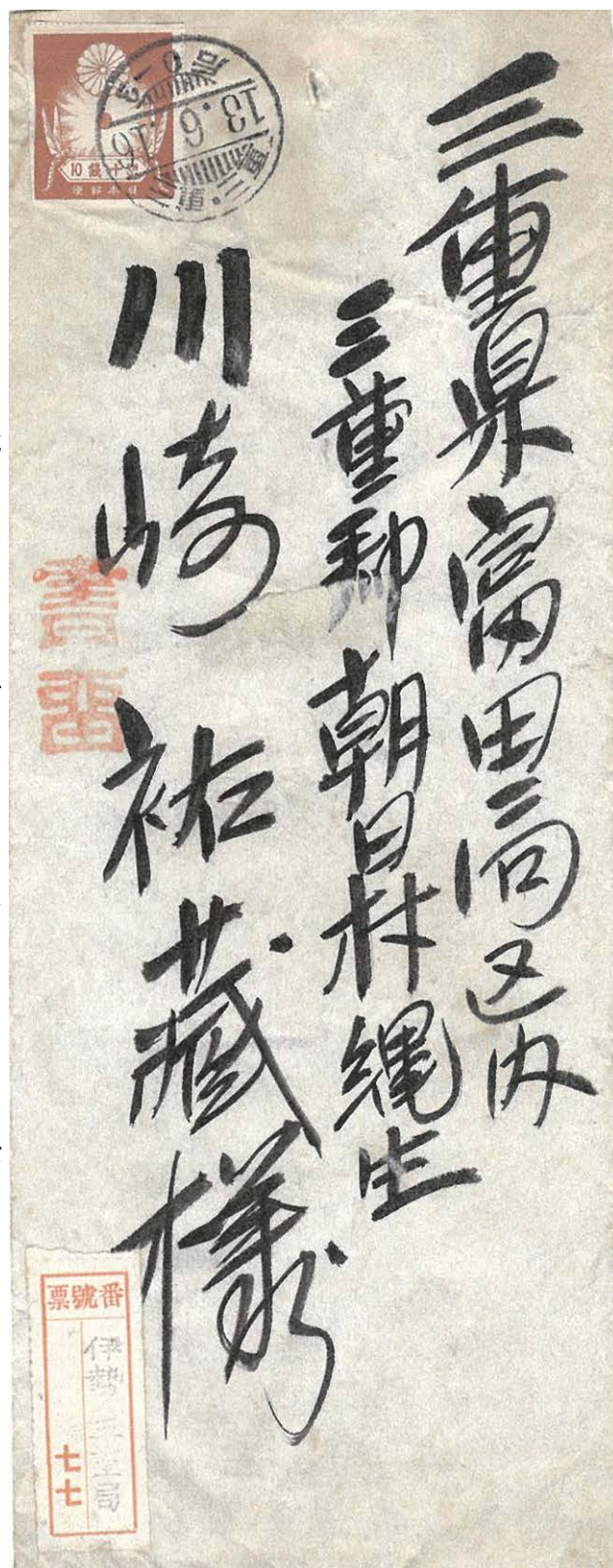
郵便局名記載勸奨運動は、馬淵さんが述べられておられますように明治時代の後期に始められました。しかし、実際に配達局名の記載されたものを見つけることは至難です。

ところが、大正時代になって関東大震災後に出現しました震災はがきに、配達局名記載箇所が示されています。再び配達局名の記載を求めてきたのです。しかし、今回もそれは浸透しませんでした。震災はがきに配達局名が記載されたものを見つけることの難しいことが、その証拠です。

そして、今回御覧に入れたものの時期、すなわち戦後の昭和23年から始められました配達局名記載運動です。某氏のブログ上に『郵便配達局名便覧』（昭和23年9月1日現在 逓信省認可 郵務局校閲）なるものが、アップされています。私は配達局名を書こうにも、自分の差し出す郵便物の宛先の配達局名がわからないのではないかと考えていましたが、この本には各市町村ごとに配達局名が示されていました。ですから、これを見れば自分の差し出そうとしている宛先の配達局名がわかるのです。ちょうど郵便番号簿と同じです。

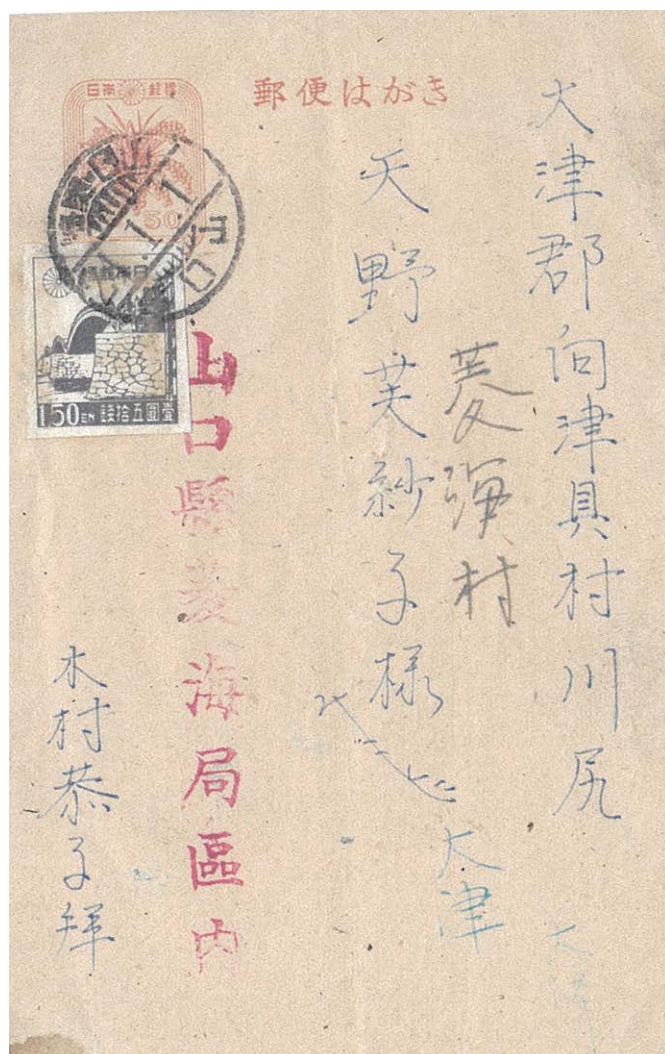
この昭和20年代の配達局名記載運動も、結局徹底はしなかったようです。昭和25年から発行され始めた暑中見舞はがきの、その最初のもののみには、はがきの表に宛先と差出人の住所を書く部分に、配達局名を書く欄が設けられていますが、そこに配達局名が書かれたものは少ないと思います。

今回のこの運動も、結局失敗に終わったと言ってよいでしょう。その証拠としまして、2回目以後の暑中見舞はがきには、配達局名を書く所が示されなくなりました。

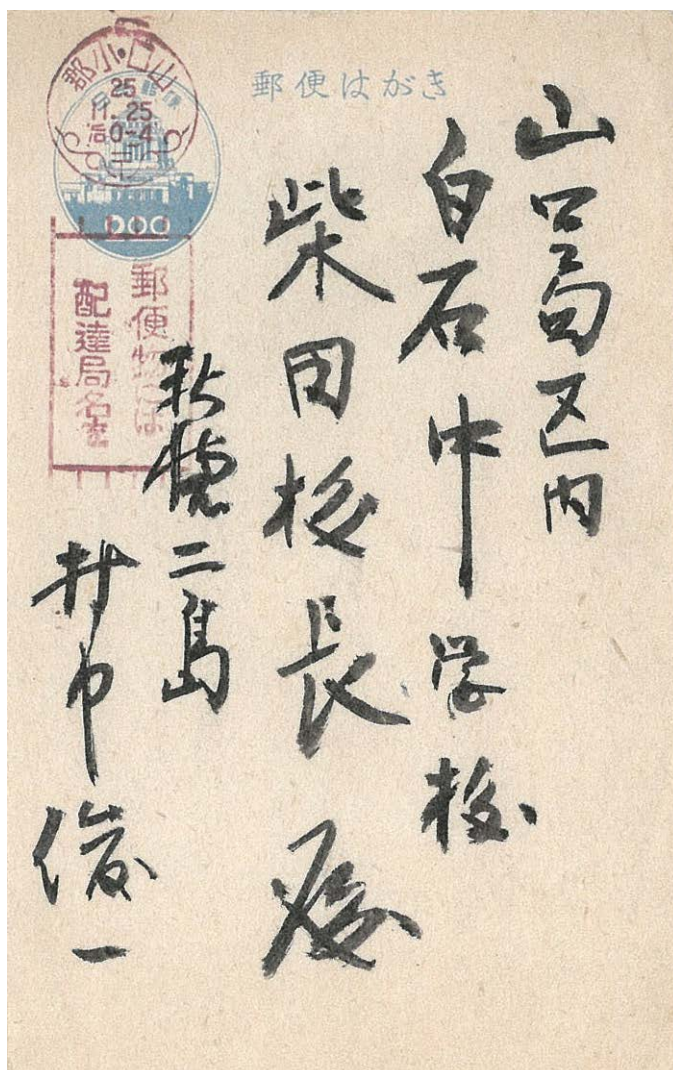


結局、この配達局名記載運動は昭和 43 年から始まった郵便番号制度に姿を変えて、ようやく定着しました。しかも、その書かれた郵便番号を機械が読み取って区分するという技術と結びついて、郵便物の取り扱いの自動化を推し進める、いわば原動力となりました。

こうして、配達局名記載運動はその端緒すなわち卵の時期から、幼虫、そしてさなぎの時期を過ぎて、ようやく大きく姿を変えて郵便番号制度という美しい蝶の成虫になったのです。



山口・菱海 24.1.1 C 欄山口県
差出人住所欄に、配達局名を明示する郵便局のハンコを押した事例

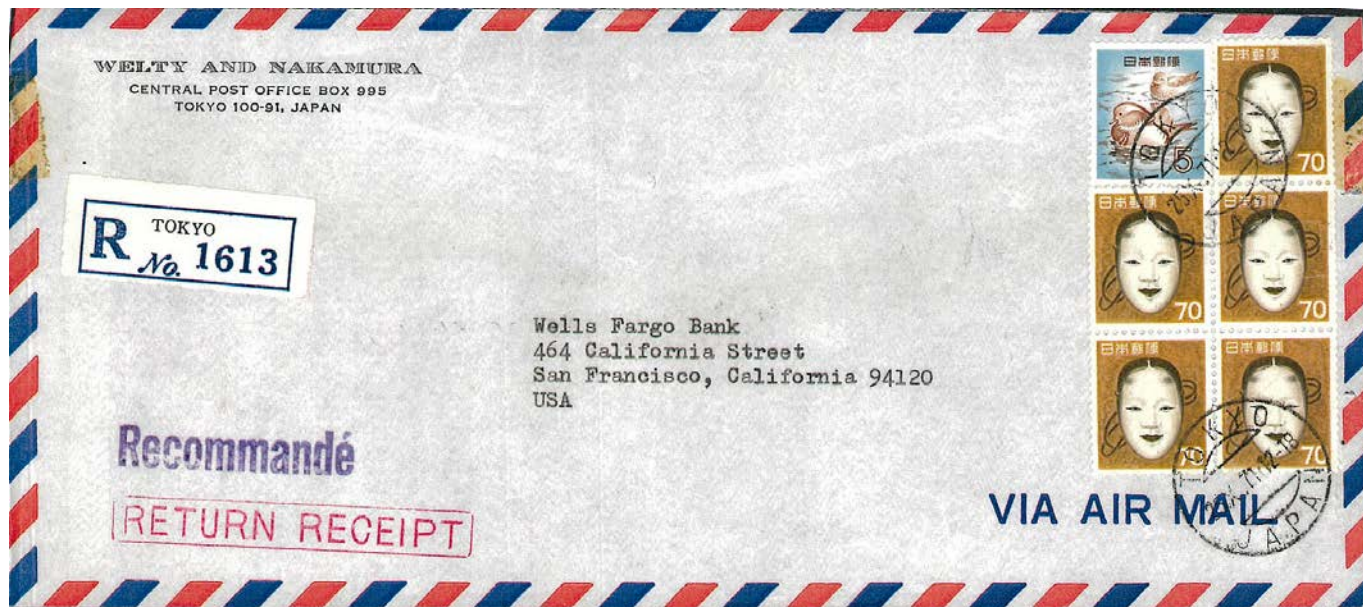


山口・小郡 25 11.25 后 0-4 標語入機械印
「郵便物には配達局名を」

70 円旧能面貼り・受取通知を航空扱いした、到達証明郵便

出題者：行徳 国宏

「この外信書状の郵便料金を計算してみてください。TOKYO 25 X 71 12-18」との質問で始まった、行徳さんの出題。こちらも難しかったようで、回答はわずか2名のみでした。(編集部)



「5 円の端数がわかりません。」(内田雄二)

「郵便物の種別としては、10～20 g の第2 地帯航空書状で特殊取扱として書留と到達証明 (航空扱い通知) が付加されたものです。

第2 地帯航空書状は S41.7.1～47.6.30 は 10 g 迄 90 円、10g を超える 10 g 毎 80 円。書留は S46.7.1～51.1.24 は 100 円。到達証明は S46.7.1～51.1.24 は 70 円で、通知を航空扱いで受ける場合には当該地帯航空葉書料金と船便葉書料金の差額が加算されることになっていました。当該地帯 (第2 地帯) 航空葉書料金と船便葉書料金は S41.7.1～51.1.24 の料金が適用され、それぞれ 45 円、30 円でした。つまり、書状 (170 円)+ 書留 (100 円)+ 到達証明 (70 円)+ 到達証明の航空扱い通知料金 (45 円－30 円) で合計 355 円です。

このエンタニアのポイントの第1 点は「到達証明」という珍しい特殊取扱が付加されていることです。到達証明は国内郵便の配達証明と同様の取扱いをされるもので差出人に配達完了したことを通知するものです。戦前の外国郵便ではちらほら見かけますが、戦後の外国郵便ではほとんど見かけない珍しいものです。

ポイントの第2 点は航空書状料金が S47.7.1 に改訂されたのに、書留、到達証明の料金が S46.7.1 に改訂されたため、S46.7.1～S47.6.30 の1 年間だけは特殊取扱の外国航空書状において新旧の料金が混じっていることです。同時期国内郵便においても、S46.7.1 に速達や書留等の料金が改訂され

たのに、郵便法の改正が必要な書状や葉書の料金は S47.2.1 に改訂され、その間の特殊取扱郵便物はいわゆる 7 か月料金期間と呼ばれて珍重されているのと同様の料金システムが外国郵便でも発生していて、このエンタニアはそれに該当する郵便物であるという点です。とても複雑で面白い料金で、エンタニアを読む楽しみを満喫させてくれるものだと思います。」(馬淵 直人)

これら 2 件の回答に対する出題者の行徳さんの回答は以下の通りです。

「回答者馬淵様の完璧な説明通りで、加筆する必要は全くありません。

馬淵様は理解された上で解答されていますが、その中で「45 マイナス 30 円」の意味と内容とが分からなければ、この謎は解けません。

出題者として郵便規則類を加えて追記してみます。

41 年 7 月 1 日改正での到達証料の規則が第 18 条にあります。到達証料は、(イ)「郵便物差出しの際請求する場合」と、(ロ)「郵便差出し後に請求の場合」が規定されています。

後者(ロ)の場合は、さらに(1)「往復とも平面路による場合」と(2)「返送のみ航空路による場合」の 2 通りがあり、掲載のエンタニアは、その(2)に該当しています。

(ロ)(2)の料金は、「70 円に『郵便物の名宛国にあてる航空扱いとする通常郵便葉書の料金に相当する金額から 30 円を控除した額』を加えた金額」と定められた。

この規則を当てはめると、第 2 地帯アメリカ宛航空通常葉書料金は 45 円、船便葉書料金は 30 円で、その 45 円から 30 円を控除した 15 円を、到達証料 70 円に加えた料金が「郵便差出し後の到達証料」となります。料金内訳は馬淵様の説明通りです。

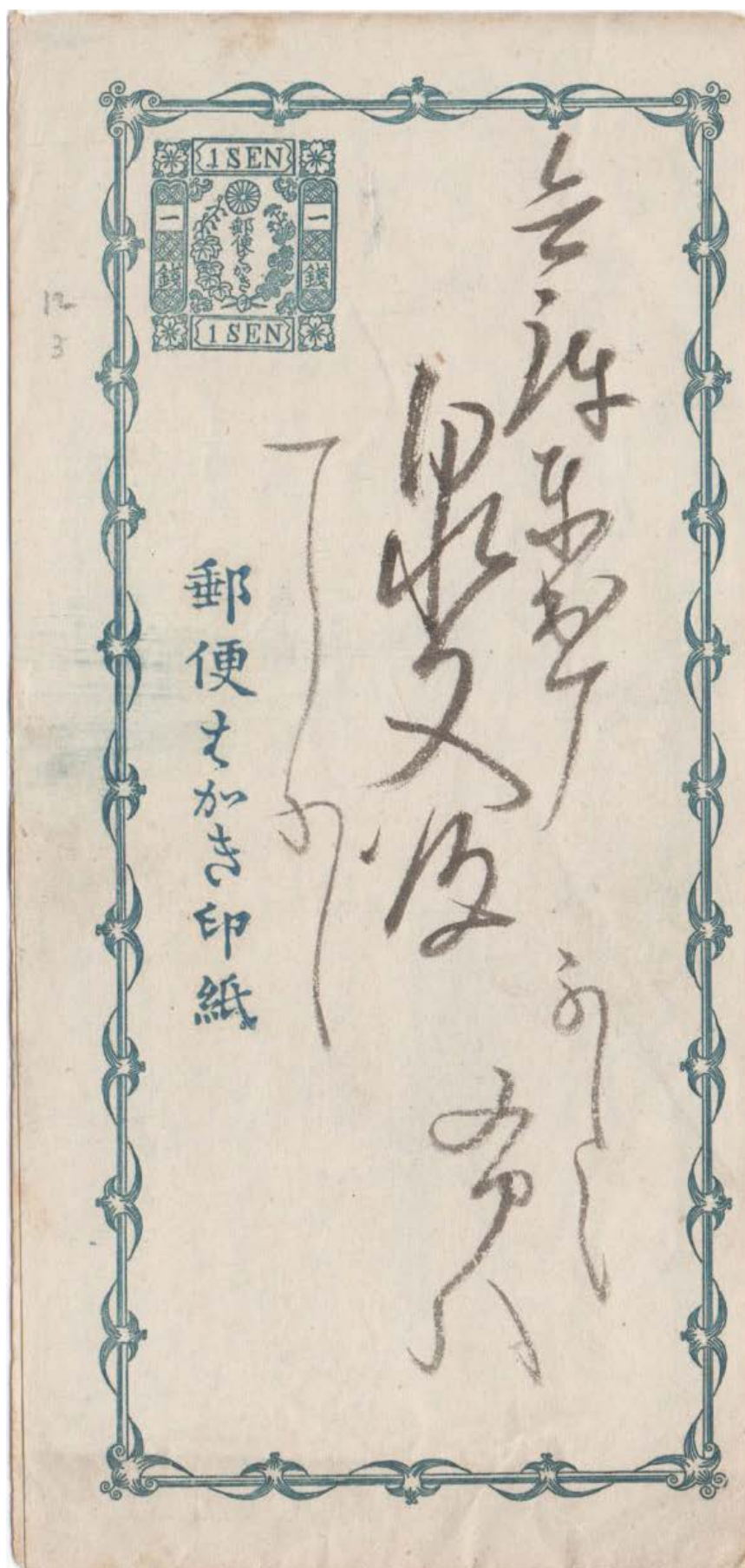
尚、1971 年 7 月 1 日の規則改正で、「到達証」は「受取通知」と改称されました。到達証の返送郵便は、Return Receipt(到達証明郵便物の差出人への返送受取証)という意味で使われています。

図の差出人(Tokyo)が宛先国の銀行宛に到達証明郵便の受領証を到達証明郵便で送付した航空書留郵便になります。

出題 脇付き葉書

出題者：古畑健三郎

フランスのネットオークションから
入手したマテリアルです。皆様のご
推察をお待ちしております。



寄稿記事・郵趣論文

世界のクラシック切手第8回 バイエルン数字図案シリーズ 1849-1862 ～版、タイプ及びプレーティングについて～	福田 達也
赤い1 アンナ 農夫背後の草1本	石田 徹
留置郵便	近辻 喜一
和欧文機械印トピックス（第9回）	水谷 行秀
樺太における急速郵便メモ・補遺	比嘉 霜人
切手別納郵便制度	行徳 国宏

世界のクラシック切手第 8 回 バイエルン数字図案シリーズ 1849-1862 ～版、タイプ及びプレーティングについて～

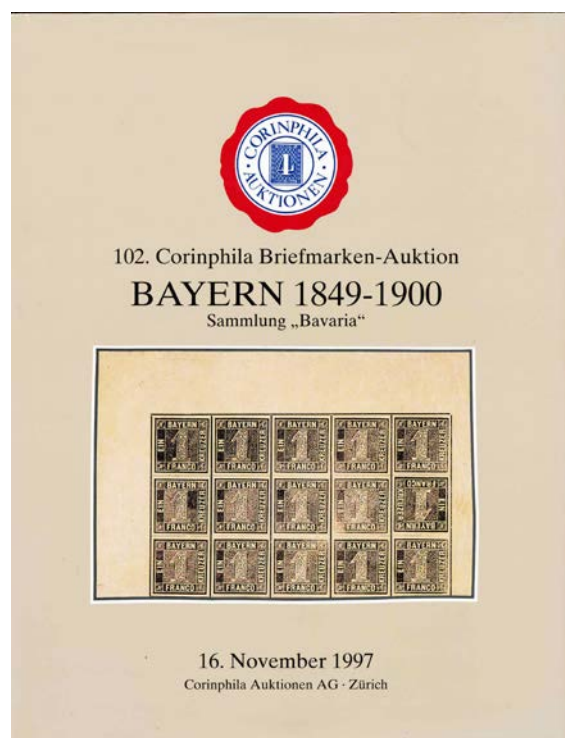
福田 達也

バイエルン王国は、1849 年にジャーマンステーツの中で最初に切手を発行した国であり、その最初のシリーズはいかにもドイツらしい機能美にあふれた数字図案で、1862 年まで発行が続けられました。

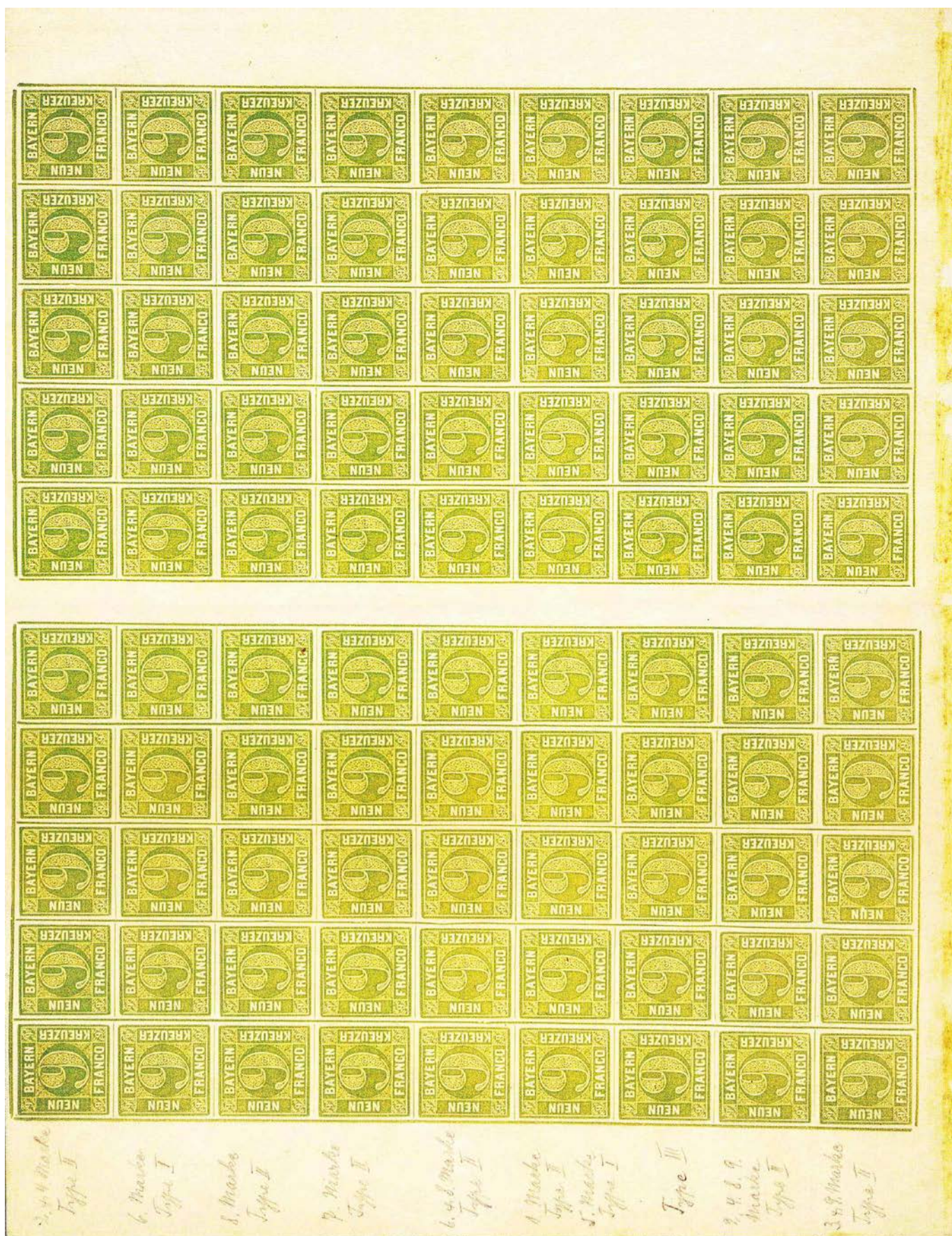
私は JAPEX2011 日独交流 150 周年記念の非競争部門にこのシリーズを出品しました。私の展示を見た「外国切手出品者の会」の友人から、「切取り線の形状に注目してプレーティングができるのでは？」というアドバイスをもらいました。私はその時、版やタイプの分類には注目していたものの、プレーティングのことは頭にありませんでした。

しばらくして、1997 年に Corinphila が開催した、Johannes Sigmar Elster コレクションのオークションカタログを入手しました。これは有名な "Schwarz Einser" (黒の 1 Kreuzer) テートベッシュ (現存 3 点) の未使用大ブロックを始め、各額面のフルシート多数を含む大コレクションであり、図版はカラー原寸大で極めて資料性に富むものです。

このシート写真 (9Kr. 緑を次ページに掲載) を眺めていますと、切手自体の均一性は高いのですが、切取り線は歪んでいたりコーナーではみ出していたりするなど、実に適当に引かれていることが分かりました。これを機にプレーティングにも取り組んでいくことにしました。



Johannes Sigmar Elster コレクションのオークションカタログ



9Kr. 緑のシート (Elster コレクションのシート写真から)

まずは、発行時期別に大きく3つのグループに分類できる、シリーズの概要についてご説明します。

(1) 1849年シリーズ



発行年	額面	用途	版	タイプ	色	構成	Michel	Sem	Scott
1849	1Kr	市内書状 / 印刷物	I	—	tiefschwarz	45×4 面	1 I b	←	1a
					schwarz		1 I a	←	1
			II	—	tiefschwarz		1 II b	←	1b
					schwarz		1 II a	←	1c
	3Kr	12 マイル迄の書状	I	—	blau		2 I a	←	—
					schwarzblau		2 I b	←	
	6Kr	重量 4 ロート迄の書状	—	1	braunorange		4 I	←	3

(2) 1850-1862年シリーズ 額面の追加、デザイン及びシート構成の変更



発行年	額面	用途	版	タイプ	色	構成	Michel	Sem	Scott	
1850 1862	3Kr	12 マイル迄の 書状	II	1	blau	45x2 面	2 II 2	2 II a	2	
			III	1			2 II 3	2 III a		2 III b
				2						
			IV	1			2 II 4	2 I Va		2 I Va
				2						
			V	1			2 II 5	2Va		2Vb
				2						
	1Kr	市内書状印刷物	I	-	rosa		3 I a	←	4	
					dunkelrosa		3 I b	←	4a	
			II		rosa		3 II	←	-	
	6Kr	重量 4 ロート迄 の書状 / 書留料	I	2	dunkel braunorange		4 II 1	←	5	
			II				4 II 2	←		
			III				4 II 3	←		
	9Kr	20 マイルを超 えるオースト リア宛書状	-	1	blaulichgrün		5aa I	←	-	
				2			5aa II	←		
				3			5aa III	←		
				1	mattblaugrün		5a I	←	6b	
				2			5a II	←		
				3			5a III	←		
				1	blaugrün		5b I	←	6a	
				2			5b II	←		
				3			5b III	←		
				1	maigrün		5c I	←	-	
				2			5c II	←		
				3			5c III	←		
				1	gelbgrün		5d I	←	6	
				2			5d II	←		
				3			5d III	←		
	12Kr	重量書状 / 仏宛書状	-	-	rot		6	←	7	
	18Kr	外国宛書状	-	-	gelblichorange		7	←	8	

(3) 1862年シリーズ

1862年から刷色を変更したシリーズが発行されました。これは当時郵便条約を締結していたプロイセンと額面ごとの刷色を揃えたことによるものです。



発行年	額面	用途	版	タイプ	色	構成	Michel	Sem	Scott
1862 ～	1Kr	市内書状 / 印刷物	－	1	gelb	45×2 面	8 I	←	9
				2			8 II	←	
	3Kr	12 マイル迄の 市外書状等	－	1	rosa		9a	9a1	10
				2				9a2	
				1	karmin		9b	9b1	10a
				2				9b2	
				－	"trockenner" druck		9c	←	－
	6Kr	重量 4 ロート迄 の書状 / 書留料	I	－	blau		10a	10 I	11
			II		stahlblau			10 II a	
	9Kr	20 マイルを超 えるオーストリ ア宛書状	II	－	braun		11	←	12
	12Kr	重量書状 フランス宛書状	－	－	grün		12	←	13
	18Kr	重量書状 外国宛書状	－	－	zinnoberrot		13a	←	14
					orangerot		13b	←	14a

参考文献について

ミッヘルなどにも版別の図版が載っていますが、正直 3 kreuzer の 2～5 版の分類などは、ミッヘル
の図版や説明をみても私には理解できませんでした。

Peter Sem (<http://www.peter-sem.de>) から版や色調について解説した分かりやすいリーフレット
が出版されていますので、これがおすすめです。価格はそれぞれ 10 ユーロです。



1849 bis 1862, Sem Nr. 21 bis 2 V, 3 Kr. blau

PLATTE 1

Äußere Einfassungslinie (11) breit und absolut gleichmäßig an allen 4 Seiten. Die Ecken (12) rechtwinklig, gelegentlich etwas nach außen gezogen. Verzerrungen in den 4 Ornamentfeldern außerhalb des Kreises sind gleichmäßig, ein dunkler Fleck späterer Auflagen im Feld links oben (13) fehlt fast immer. Genau unterhalb der Zahl 3 auf Rautengrund links unten (14) ist die dort befindliche Raute der Länge nach gesplittelt, aber doch deutlich sichtbar. Einfassungslinie des kleinen Ziffernquadrates unter Ziffer «3» gerade (15). Als Farbe herrscht in der Anfangszeit ein graublauer Ton (taubenblau) vor, später – gegen Ende der Druckzeit – tauchen auch dunkelblaue Exemplare auf. Als Stempel kommen für diese Auflage vor allem Segmentstempel (oft zusätzlich mit Tintenstrichwertung) in Frage. Später ab 1. 8. 50 Mühlradstempel (bis Nr. 402) der ersten Verteilung. Höhere Stempelnummern der 1. Verteilung kommen vor, sind jedoch selten. Ebenfalls bekannt sind offene Mühlradstempel bzw. Stempel der 2. Verteilung (letztere nur auf Brief oder Briefstück nachweisbar). Druckzeit der Platte 1 war von 1849 bis Ende 1850.



PLATTE 2

Einfassungslinien (21) ungleichmäßig breit, teils wesentlich schmaler als bei Platte 1. Die Ecken (22) stark abgerundet. Im Zierfeld links oben befindet sich unmittelbar unter dem Buchstaben B von BAYERN ein dunkler länglicher Fleck (23), der mehr oder weniger stark in den kommenden Auflagen erscheint. Die schon bei Platte 1 erwähnte Raute unter der Zahl 3 im Quadrat links unten (24) fehlt. Einfassungslinie des kleinen Ziffernquadrates unter Ziffer «3» mit Einbuchtung (25). Plattentyp I (26): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (26): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (26): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (26): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Stempel dieser Ausgabe sind die geschlossenen Mühlradstempel der ersten Verteilung, da die Druckzeit von Ende 1850 bis Ende 1854 datiert wird. Mühlradstempel der 2. Verteilung (nur auf Brief oder Briefstück nachweisbar) sowie offene Mühlradstempel sind selten.



PLATTE 3

Einfassungslinien (31) ungleichmäßig breit. Die vier Ecken (32) sind wieder etwas mehr ausgefüllt, also spitzer, jedoch gegenüber Platte 1 und 4 immer noch leicht abgerundet. Wie bei Platte 2 erscheint der bereits bekannte dunkle Fleck links oben (33). Die Raute unterhalb der Zahl 3 links unten (34) ist noch ausgefüllt; gegen Ende der Druckzeit wird wieder ein schmaler Spalt sichtbar. Einfassungslinie des kleinen Ziffernquadrates unter Ziffer «3» mit Einbuchtung (35). Plattentyp I (36): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (36): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (36): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (36): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Stempel dieser Ausgabe sind die geschlossenen Mühlradstempel der ersten, wie auch der zweiten Verteilung der geschlossenen sowie (bis etwa 620) der offenen Mühlradstempel, ferner noch Segmentstempel aus der 10tägigen Umtauschzeit (November 1856).



PLATTE 4

Einfassungslinie (41) jetzt wieder etwas breiter und exakter als bei Platte 2 und 3, aber doch nicht so gleichmäßig und einheitlich wie bei Platte 1. Die Ecken (42) sind nunmehr wieder völlig ausgefüllt, die Spitzen sind ein wenig nach außen gezogen. Der erwähnte Fleck links oben (43) ist nun wieder fast verschwunden. Die Raute unterhalb der Zahl 3 links unten (44) ist ebenfalls wieder vorhanden. Einfassung des kleinen Ziffernquadrates unter Ziffer «3» mit Einbuchtung (45). Plattentyp I (46): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (46): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (46): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Typ II (46): unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen. Die Farben kommen in den mittleren Blautönen klar und deutlich heraus. Die Druckzeit liegt zwischen Mai 1856 und 1860, in welcher Stempel der 1. und 2. Verteilung (geschlossen oder offen) bis etwa Nr. 670 in Verwendung waren.



PLATTE 5

Einfassungslinien (51) ungleichmäßiger als bei Platte 4, die Ecken (52) aber nach wie vor spitz. Auch der Fleck links oben im Ornamentfeld (53) tritt wieder – wie bei Platte 2 und 3 – stärker hervor. Die Raute unterhalb der 3 links unten (54) ist deutlich sichtbar vorhanden. Einfassungslinie des kleinen Ziffernquadrates unter Ziffer «3» mit Einbuchtung (55). Die für die Platte 5 charakteristische Farbe ist ein reiches toniges Blau. Offensichtlich wurde damals die Druckgeschwindigkeit auf den Schnellpressen erhöht und gleichzeitig eine schneller weggeschlagene verdünnte Farbe verwendet. Während der Druckzeit (1859-62) wurden weitere Postexpeditionen eröffnet, deren Stempel bis etwa zur Zahl 780 ging. Es besteht die Möglichkeit einer postalischen Verwendung der 3 Kr.-Marke in blau bis zur Stempelnnummer 820. Plattentyp I: unten geschlossene kleine 3 im linken oberen Wertkästchen (Abb. wie bei Platte 4). Typ II (56) kleine 3 unten offen.

Die 3 Kreuzer-Markte in blauer Farbe wurde nach einer etwa 13jährigen Verkaufszeit und nach über 15jähriger Gültigkeit am 31. Dezember 1864 zurückgezogen. Ihr Ende war gekommen mit der Einführung einheitlicher Farben für die Grundwerte der Brieftaxe innerhalb des deutsch-österreichischen Postvereins. Am 1. Oktober 1862 wurde sie durch eine bildgleiche Marke in roter Farbe ersetzt.

Dr. W. N.



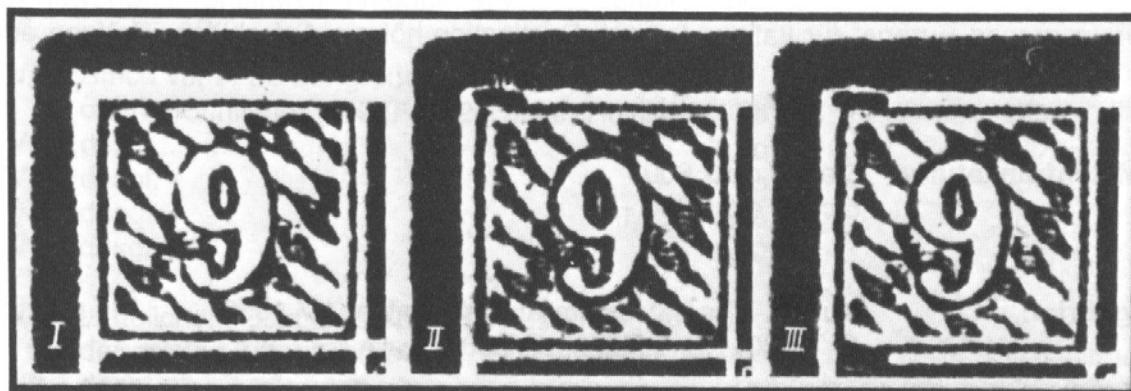
Platte 2 + 3, Abart DOPPELTE RAUTE

Diese Abart läßt sich ausschließlich im linken unteren Quadrat unterhalb der kleinen 3 nachweisen. Diese Verdoppelungs-Erscheinungen gehen zum Teil auch auf die benachbarten Einfassungslinien über. Es handelt sich hier um eine Doppelprägung, entstanden durch eine Nachprägung des abgenutzten Klischees, wobei in der linken unteren Ecke ein geringer Spielraum vorhanden war.

本論 1. 9 Kreuzer のタイプ分類とプレーティング

1850 年発行の 9Kreuzer 緑は、初期の珍しい色調の未使用に注目が集まりますが、ここではありふれた最後期の色調である Michel#5d を使ってタイプ分類やプレーティングをしてみたいと思います。

ミッヘルドイツ専門版や Sem のカタログでは、タイプ 1 から 3 に分類されています。(下図) 評価を見ますとタイプ 1 が最も希少であることが分かります。Sem の注釈には、タイプ 1 は左側のシートの 30 番と右側のシートの 6 番に位置していると記されています。



ここで前述の Elster コレクションのシート写真 (P.37) を確認すると、それぞれのタイプが下図の通り位置していることが分かりました。

幸いなことに、タイプ 1 は 2 箇所ともシートの縁に位置しています。右耳のついたものは Bogen A、左耳のついたものは Bogen B に位置していると分かります。

BogenA

Pos.1 Typ 3	Pos.2 Typ 2	Pos.3 Typ 3	Pos.4 Typ 2	Pos.5 Typ 3
Pos.6 Typ 3	Pos.7 Typ 3	Pos.8 Typ 3	Pos.9 Typ 3	Pos.10 Typ 3
Pos.11 Typ 3	Pos.12 Typ 3	Pos.13 Typ 3	Pos.14 Typ 3	Pos.15 Typ 3
Pos.16 Typ 3	Pos.17 Typ 3	Pos.18 Typ 3	Pos.19 Typ 3	Pos.20 Typ 3
Pos.21 Typ 3	Pos.22 Typ 3	Pos.23 Typ 3	Pos.24 Typ 3	Pos.25 Typ 3
Pos.26 Typ 2	Pos.27 Typ 3	Pos.28 Typ 3	Pos.29 Typ 3	Pos.30 Typ 1
Pos.31 Typ 3	Pos.32 Typ 3	Pos.33 Typ 3	Pos.34 Typ 3	Pos.35 Typ 3
Pos.36 Typ 3	Pos.37 Typ 2	Pos.38 Typ 3	Pos.39 Typ 2	Pos.40 Typ 3
Pos.41 Typ 3	Pos.42 Typ 3	Pos.43 Typ 2	Pos.44 Typ 3	Pos.45 Typ 3

BogenB

Pos.1 Typ 3	Pos.2 Typ 3	Pos.3 Typ 3	Pos.4 Typ 3	Pos.5 Typ 3
Pos.6 Typ 1	Pos.7 Typ 3	Pos.8 Typ 3	Pos.9 Typ 3	Pos.10 Typ 3
Pos.11 Typ 3	Pos.12 Typ 3	Pos.13 Typ 2	Pos.14 Typ 3	Pos.15 Typ 3
Pos.16 Typ 3	Pos.17 Typ 2	Pos.18 Typ 3	Pos.19 Typ 3	Pos.20 Typ 3
Pos.21 Typ 2	Pos.22 Typ 3	Pos.23 Typ 2	Pos.24 Typ 3	Pos.25 Typ 3
Pos.26 Typ 3	Pos.27 Typ 3	Pos.28 Typ 3	Pos.29 Typ 3	Pos.30 Typ 3
Pos.31 Typ 3	Pos.32 Typ 3	Pos.33 Typ 3	Pos.34 Typ 3	Pos.35 Typ 3
Pos.36 Typ 3	Pos.37 Typ 3	Pos.38 Typ 2	Pos.39 Typ 2	Pos.40 Typ 3
Pos.41 Typ 3	Pos.42 Typ 3	Pos.43 Typ 3	Pos.44 Typ 2	Pos.45 Typ 3

そのようなことに注目しながらオークションカタログをチェックしていると、次のようなロットが目にとまり入手しました。このロットのタイプ1は Bogen A の 30 番切手になります。

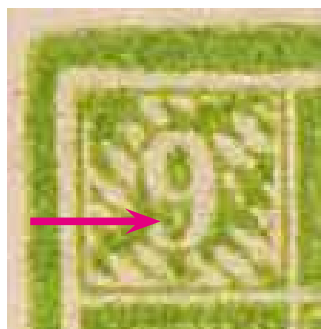


それ以来、左耳のついたタイプ1を探していた訳ですが、最近ようやく入手できたのが右の切手です。Bogen B の、pos.6 になります。

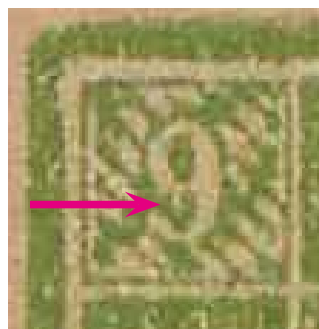


ところで、この2枚の切手は耳紙がなければ位置を特定できないのでしょうか？

シート写真だけではよく分かりませんでした。現物を観察すると左上の小さい数字部分に違いがあります。



Bogen A Pos.30 白点が中間にある



Bogen B Pos.6 白点が上に接している

ここで、耳紙のついていないタイプ1の使用済単片を持っていたことを思い出しました。(右図)

左上の小さい数字部分(右拡大図)を調べると、白点が中間にありました。ということは Bogen A Pos.30 です。この切手の色調はミッヘル 5c(maigrün) で 5d より前に印刷された色調です。印面の状態も荒れていません。



今後の課題は、タイプ2についても同様に分類することです。

例えばタイプ2の横ペアであれば Bogen B の 38 ～ 39 番切手と分かります。(38 番には版欠点もあり) タイプ2 + 3 + 2の組み合わせは3箇所ありますが、切り取り線の歪み等の形状から位置を特定することもできるかもしれません。



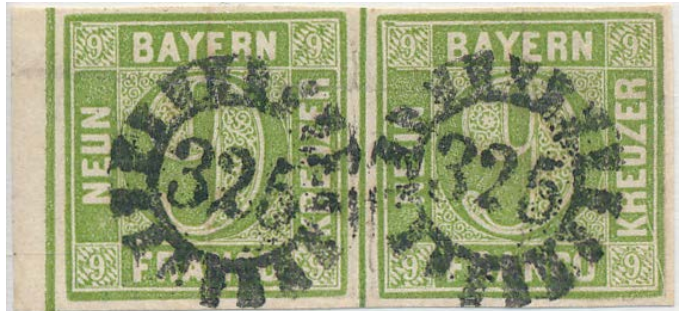
タイプ2 版欠点「9の左に白線」
Elsterのシート写真から
Bogen B 38番と特定

いま私のコレクションにあるのは次の2点ぐらいですが、オークションには横5枚ストリップ (9Kreuzer×5=45Kreuzer、アメリカ宛の書状から剥がしたものの) がよく登場しますので、入手できればさらに色々なことが分かると思っています。



タイプ2+タイプ3+タイプ3
右下コーナー A43-45番と特定

ちなみに右図は、タイプ2+タイプ3の横ペアということで入手したもの。今回原稿執筆にあたりスキャンしたところ、右側の切手に版欠点 (ミッヘル版欠点ハンドブック Mi5 PFVI) があると気づきました。



タイプ2+タイプ3 左耳付き横ペア (BogenA pos.26+27)

ハンドブックではシート上の位置の記載はありませんでしたが、左耳付のタイプ2+タイプ3の横ペアは BogenA の Pos.26+27 または BogenB の Pos.21+22 です。シート写真と照合し、切り取り線の形状などからこの版欠点が A27 であると分かりました。

本論 2. 1862 年 1Kreuzer 黄のタイプ分類

1862 年発行の 1Kreuzer 黄 (Michel 8) は、市内郵便書状や印刷物の料金で、従来の桃色から黄色に変更されました。

版は 1850 年シリーズの 1Kreuzer 桃色の第 2 版 (Michel 3 II) の流用ですが、大きな版欠点があった B-bogen の Pos.25 切手は、第 1 版のクリシエが用いられました。

2つの版の違いは、第 1 版のコーナーが丸まっている (runden Ecken) のに対し、第 2 版のそれは尖っている (spitzen Ecken) ところです。第 2 版を用いた箇所が 1Kreuzer 黄タイプ 1 (Michel 8 I) 第 1 版を用いた箇所がタイプ 2 (同 8 II) となります。



1Kr. 桃色の第 1 版



1Kr. 桃色の第 2 版 “BAYERN” が “CAYERN” となっている版欠点も (Bogen B Pos.25)



Typ 1 Pos.18	Typ 1 Pos.19	Typ 1 Pos.20	
Typ 1 Pos.23	Typ 1 Pos.24	Typ 2 Pos.25	

B-bogen の Pos.25 切手を含むブロック

ところで、Sem のハンドブックでは、1976 年までは、タイプ 2 の存在するポジションとして、B-Bogen25 番切手だけを記載していましたが、1979 年版から左側シート (Bogen A) の 1 番切手にも存在することが明記されました。

シート上の存在数は 2 か所ですので、前項でご紹介した 9Kreuzer のタイプ 1 と同じです。それにも拘わらず、こちらのタイプは未使用で 1800 ユーロと 9 Kreuzer の 10 倍以上となっています。(Pos.1 は筆者も未収で画像はオークションカタログからです。。。)



本論 3. 版別やタイプ分類のできない額面での遊び方

12Kreuzer や 18Kreuzer といった高額面では、版やタイプ分類がないため、製造面では色調ぐらいいしか整理ができません。そのような場合でも切り取り線の形状に注目して、Bogen A と B の分類やシート状の位置の特定をしたりして変化をつけることが可能です。



左は Bogen-A 右下コーナー、右は Bogen-B 右下コーナー
Bogen-A の pos.45 には版欠点があり、“BAYERN” の E と R が繋がっているので判別可。



左は Bogen-A 左上コーナー、右は Bogen-B 左上コーナー
仕切り線で判別可。



左は Bogen-A 右上コーナー、右は Bogen-B 右上コーナー
仕切り線で判別可。

以上、バイエルン数字図案シリーズのプレーティングの「可能性」についてまとめてみました。

切り取り線の形状に依存している以上、線が見えない場合や特徴のない場合は位置の特定ができず、シートの完全な復元までは難しいと思いますが、リーフ作成の時に変化をつける効果はあると考えています。

BAYERN

Quadratausgabe
III 1862

18 Kreuzer

1 Oct. 1862

zinnoberrot

Probedruck
ohne Seidenfaden



(e)



Bogen A

orangerot

Bogen B



A-5



B-5

A-39,40
44,45

Auslandbrief nach Großbritannien

zinnoberrot

B-24



(e)

Brief von Landau (oMR Stempel 267 und HBK "LANDAU 12/3" 1863) über
Belgien, Darlington(3.15) nach Barnard Castle Großbritannien (3.15)
Taxe Brief bis 1 Loth, 8Kr. Vereinsporto und 10Kr. Weiterfranco über Belgien.
(1 Juli.1859 - 31 Dez.1869)

著者のコレクションから、第3シリーズの最高額面である 18Kr. のページ。
できる限りポジションを表示し、Knowledge point をあげるようにしている。

赤い1 アンナ 農夫背後の草1本

石田 徹

南方占領地切手、ビルマ 1942 年発行の「農耕切手」(アンナ)、いわゆる「赤い1 アンナ」切手について、「日本切手専門カタログ・日本関連地域編」2012 年版は、「描かれた農夫の背後の草の数が1本と2本のものがある。」と注記している。

「草1本」の方が変種であるが、筆者はこの「草1本」のポジションと存在の割合に感心を持ち、また、「赤い1 アンナ」切手の図案は稚拙でもあり、1番切手には「ビルマ郵便切手」のビの濁点が一欠けた定常変種があることも指摘されているので(文献1)、比較的簡単に「草1本」の変種ポジションを特定できるのではないかと思い続けていた。

幸い2004年になって「赤い1 アンナ」の「原版黒色試刷シート」写真が発表されたため(文献2)、早速手元の8枚(内2枚が「草1本」)を「原版黒色試刷シート」写真と比較した。結果、印面特徴、定常変種から8枚のポジションは特定できた(図1、次ページ)。

そして、そこから手持ちの「草1本」はPos.3, 「原版黒色試刷シート」の「草1本」ポジション

Pos.12であることが判明したのだが、原版黒色試刷シート写真のPos.3, Pos.12には「草1本」は見当たらず、Pos.4, Pos.33, Pos.35, Pos.36の4カ所に「草1本」の変種が存在しており、この点だけを見れば「草1本」は偶発変種ではないかと思われた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50

「赤色無目打フルシート」の「草1本」ポジション

その後、今年2016年になって、「原版黒色試刷シート」の直後に印刷されたと思われる「赤色無目打フルシート」も発表された(文献3)この「赤色無目打フルシート」では、上記Pos.4, Pos.33, Pos.35, Pos.36の4カ所にに加えて新たにPos.3, Pos.11, Pos.12, Pos.37に「草1本」が増加し8カ所となっていることが確認された(図2)。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50

図2

「赤色無目打フルシート」Pos.3とPos.12の「草1本」は手持ちのものと一致したことから、「草1本」は僅かな期間のうちに増加したものと思われ、原因詳細は不明だが「草1本」は版の脆弱さから発生し、増加していったものではないだろうかと思われた。

(図 1)
赤い 1 アンナのポジション

- 定常変種
○ 農夫背後の草 1 本



Pos.1 ビの濁点落ち



Pos.2 内枠に点



Pos.3 郵の下に点



Pos.12 二重線と手に点



Pos.13 長円形枠右上欠け

2	3
12	13



Pos.18 長円形枠左に線



Pos.18 長円形枠右に点



Pos.18 1 アンナ左に点

47	48
----	----



Pos.47 アンナ枠乱れ



Pos.48 マの下に点



以上の点を南方占領地切手の第一人者であり国際的にご活躍の土屋理義氏にお伝えしたところ、氏所蔵の「赤い1アンナ」の別シート「目打ち入りフルシート」及び「農耕セント加刷フルシート」は「赤色無目打フルシート」と同じ「草1本」8カ所版であることを確認していただくことができ、「原版黒色試刷シート」の直後に版の脆弱さから、「赤色無目打フルシート」を印刷する際には「草1本」が増加したのではないかとコメントをいただくことができた。

これにより、「赤い1アンナ」の「草1本」ポジションが確定できたことと、「赤い1アンナ」の版は1版だけであったと思われるのである。そして上記、文献3には「原版黒色試刷シート」と「赤色無目打フルシート」の二つの図版が掲載されており、「赤い1アンナ」のポジション確定には必須の文献であるだけでなく、「赤い1アンナ」をはじめ多くの南方占領地切手について多くの興味深いエピソード（図3）を提供された文献であることも記しておく。



図3 偶然にも「赤い1アンナ」図案の手本となったスケッチは、英領ビルマの「耕牛切手」図案原稿であった。詳細は文献3に詳しい。

（文献）

*1 ビルマ農耕図案 5c 小字切手 (#96) は、35 面シートか？ / 上床亨著。-- (フィラテリスト；8 巻 1 号, 1976.1)

*2 南方占領地切手 / 土屋理義著。-- 日本郵趣協会, 2004. -- <JAPEX'04> 記念出版、資料 3

*3 南方占領地の切手と郵便 / 土屋理義著。-- 日本郵趣協会, 2016. -- (郵趣モノグラフ；25)



文献 2



文献 3

留置郵便

近辻 喜一

郵便局留置制度の本来の目的は、旅人が旅先で書状等を受取れるようにするものですが、明治9年の郵便規則から、郵便局の無い村にあてた郵便物にかけられる持込税を回避する目的で、利用者に配達局留置とすることを勧奨しています（図1）。

受取人が郵便局まで取りに来てくれるので、郵便局も、遠方の在村へわざわざ届ける手数が省けるメリットがありました。

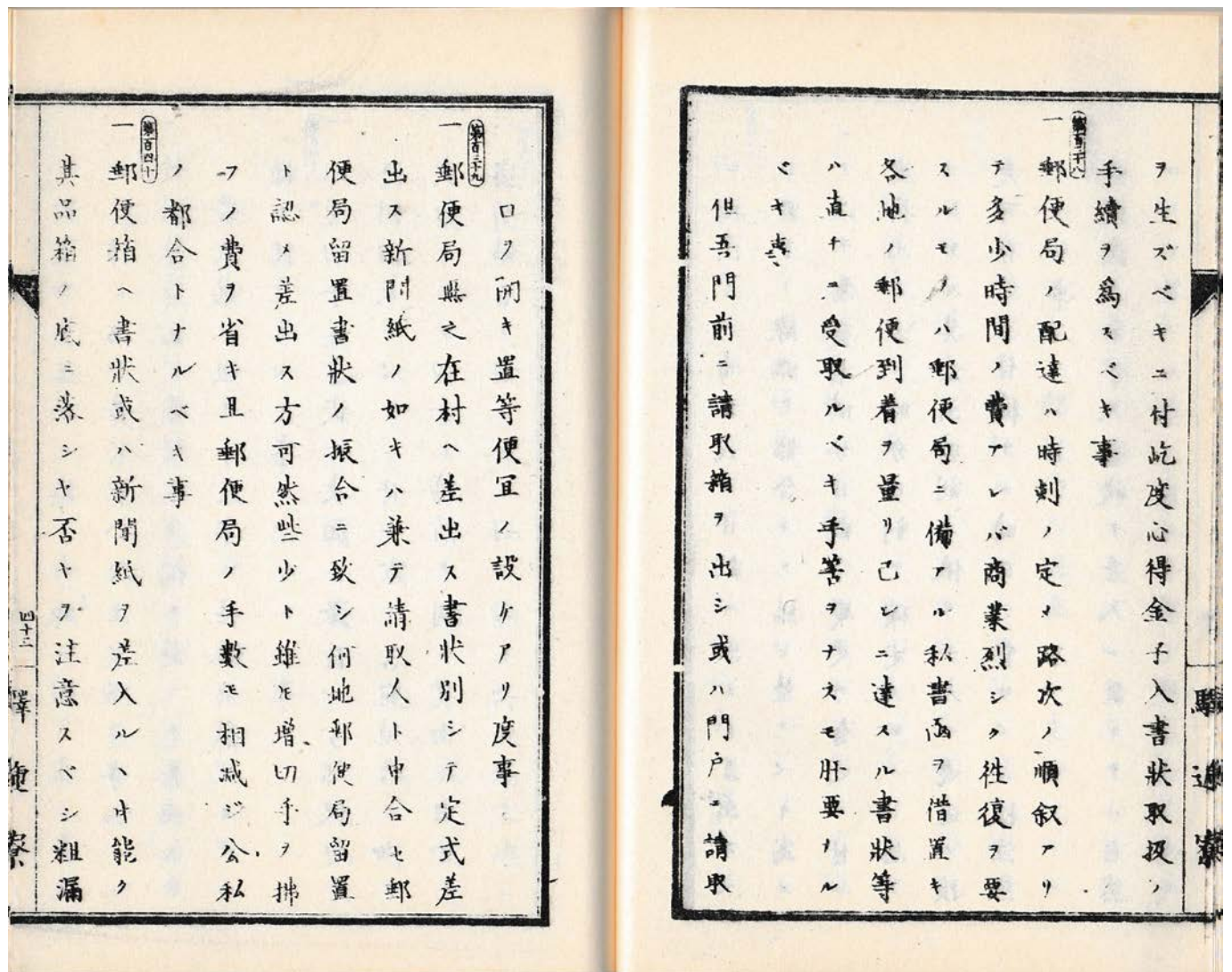


図1

図 2 は、明治 7 年 10 月、大阪から江州愛知川才中宿村／高田吉兵衛あて二つ折 1 銭はがきですが、なぜか持込税不足 2 銭を徴収された形跡がありません。

宛名にある「才」は「在」の意で、中宿村は中山道が中央を通る、愛知川村に隣り合う町場です。

参考までに、明治 18 年の郵便区画町村便覧から近江国
愛知郡の部を抜粋しました（図 3）。



图 2

	山	政 所 ^{愛知郡}	上	○山上村和南村相谷村佐目持蓋尾村
全郡。	愛知川	西川村豐光寺村竜田村小幡村中村	三ッ屋村田附村本庄村瀬海村服部村	上稻葉村下稻葉村田原村
愛知川	市	○愛知川村中宿村番掛村豊満村石橋村	川久保村栗田村上枝村下枝村津	町名
高野	政所	○政所村黄和田村箕川村蛭谷村君ヶ畑村	村外村九居瀬村	村
英川	上所	英川村大萩村	村	村
愛知川	市	○愛知川村中宿村番掛村豊満村石橋村	川久保村栗田村上枝村下枝村津	町名
長嶽	長湊水	長嶽村新間村平居村畑々田村藤堂村	村吉田村加田村下八木村元特村	村萬之源村肥田村野真田村山河原村
長嶽	長湊水	長嶽村北清水村大清水村清水村東圃堂村	村島川村大河町村海瀬村小田蒔村	村留村北菰提寺村南菰提寺村 A 里村
下岡部	石寺	下岡部村金田村金澤村西川村上岡部村	村甲崎村陸摩村柳川村	花澤村北花澤村池ノ尻村上中野村大澤村
飯合堂	梅林	飯合堂村中里村市少原村百濟寺村下中野村	村横溝村大林村下里村	村大覺寺村園村饒江村小池村
僧坊	中戸	僧坊村大覺寺村園村饒江村小池村	村平尾村湯屋村上岸木村	村殊村

十九

図 3 明治 18 年の郵便区画町村便覧から近江国愛知郡の部を抜粋

いっぽう、図4に示す、同じ中宿村の同人あて二つ折1銭はがきには、持込税の1銭切手が貼られています。こちらは、明治8年4月の尾道発で、「江州愛知川駅郵便御取扱処迄」と断り書きがあり、差出人が持込税を節約する意図を持っていたことは明白です。ところが、尾道郵便局はそのような便法を認めず、1銭加貼を要求してきたので、しぶしぶ差出人は窓口で切手を購入し、葉書料額印面の下に宛名をよけて貼ったものと思われます。

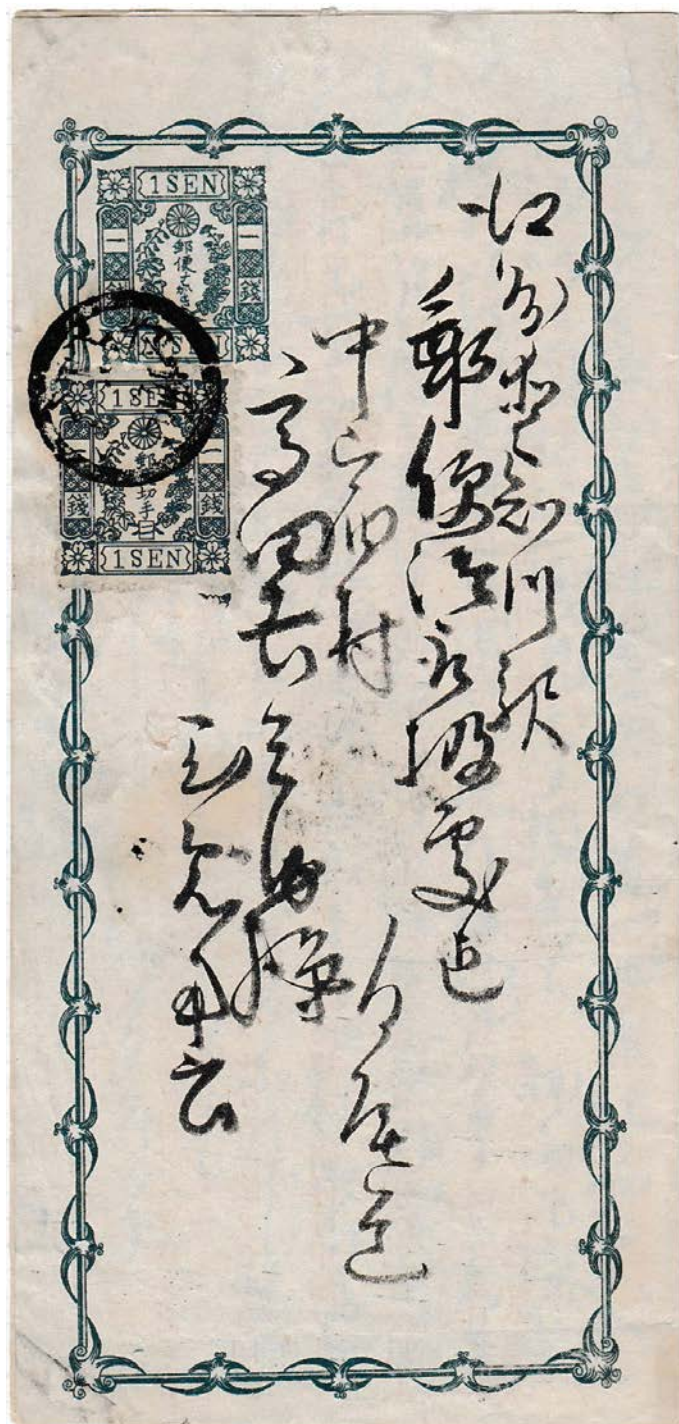


図4

ここで、図2の葉書が持込税を取られなかった理由がハッキリしてきました。全国各地から郵便物を受取る高田さんは、そのつど持込税の不足分を支払う負担に音を上げ、自分あての郵便物をすべて留置き扱いにするよう愛知川郵便局に申し入れていたのです。まさに、明治9年の郵便規則の先取りです。

和欧文機械印トピックス（第9回）

水谷 行秀

異標語同局同時使用（2）

今回は同じ局で機械によって別の標語を使用した局がある事例を紹介した。前回サブタイトルに（1）と記しておいたので、賢明な読者の皆様の中には続きがあると期待してくれていた方もいらっしゃるのではないかと思います。

今回は機械が1台しか配備されていない局での事例を示す。

自動取り揃え押印機は先端部と末端部の2カ所で押印する。当然それら2カ所は独立しており、それぞれ別のタイプのものをはめ込む事が可能な構造となっている。その2カ所を区別するためであろう、先端・末端に異なる標語をはめ込み、同時に2種の標語を使用した局がある。

渋谷局の例（図1）

以下に示す通り、同じ日付・同じ時間帯で「あて名には郵便番号を」と「郵便番号をお忘れなく」が使われている。ちなみにこういった同局同時使用を示すのには同じ日付・同じ時間帯で2種を揃えるのが最も説得力に富む。



図1

図1のはがきを見つけたカバーの箱には同じ差出の複数のはがきもあった。それらのどれもが図1の2パターンのどちらかで1台の機械の先端・末端での押印と断定出来る。

実は渋谷局には2台目の自動取り揃え押印機が1971年3月28日に配備されている。本格稼働は6月22日と記録されている。つまり、この日付は2台目の配備後2週間程しか経ってはず、2台目の機械はまだ調整中であつたと思われる。

川崎局の例 (図2)

ここでは機械の配備が1台であるので先端・末端での異標語使用は明白である。こちらもたまたまJPS横浜港北支部(当時)の大先輩が現役時代勤務されていた会社宛に届いた郵便を保存されており、例会にてご寄付されたカバーロットを入手したらその中に入っており気が付いたもの。やはり一通は

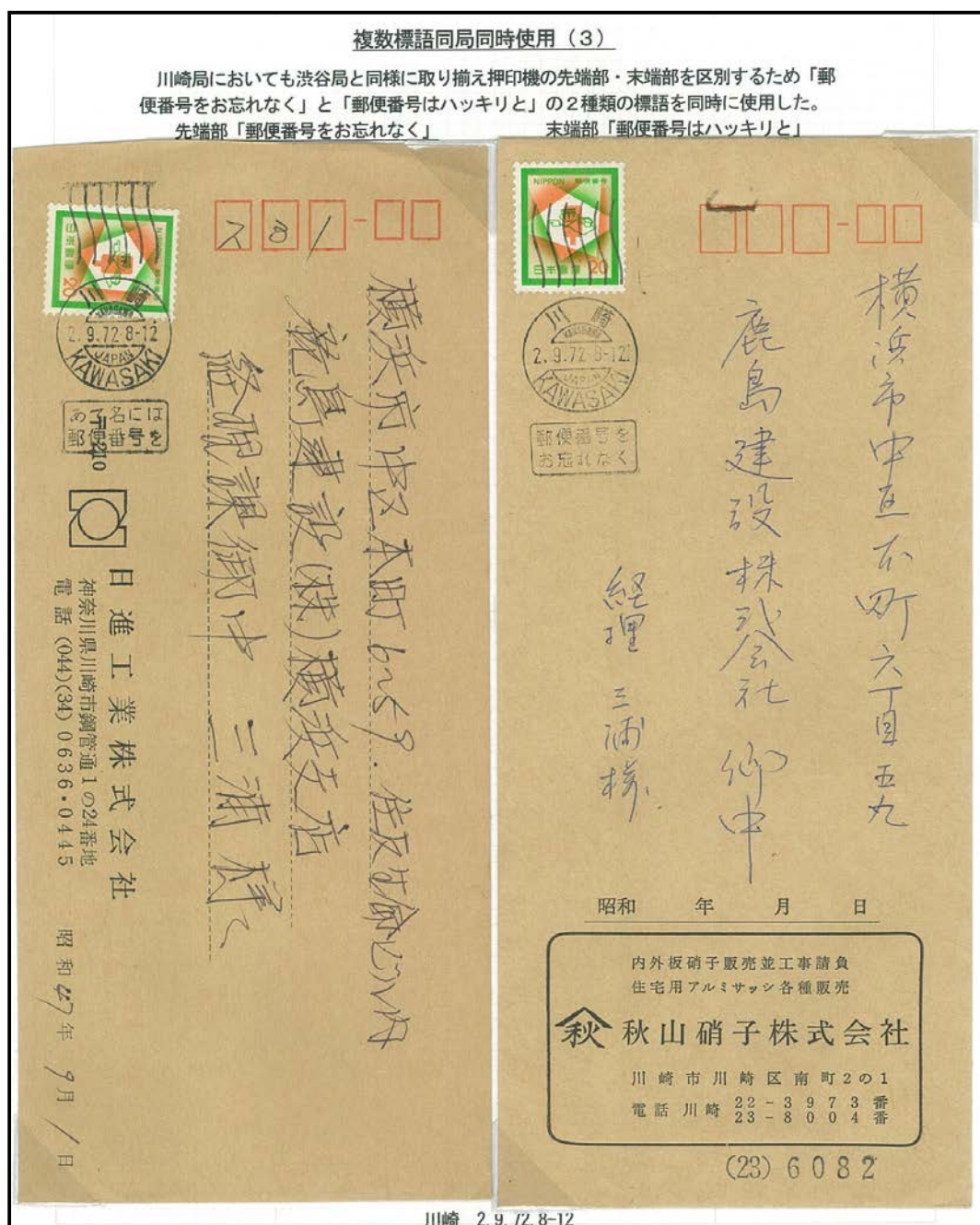


図2

「あて名には郵便番号を」でもう一通は「郵便番号をお忘れなく」となっている。

川崎局では更に時代を下っても図③に示す通り同時に2種類の標語を使っていた。しかし、標語の1つは「郵便番号をお忘れなく」であるが、もう一つが3番目の標語の「郵便番号はハッキリと」となっている。こちらも前回と同様に印の破損や誤植など何らかのトラブルがあった際にどちらの印なのかを容易に区別することが目的と推定する。

川崎局では、少なくとも7年に渡り先端・末端で意図的に異なる標語を使い続けていたと思われる。この区別出来るというメリットが確実にあったということであろう。

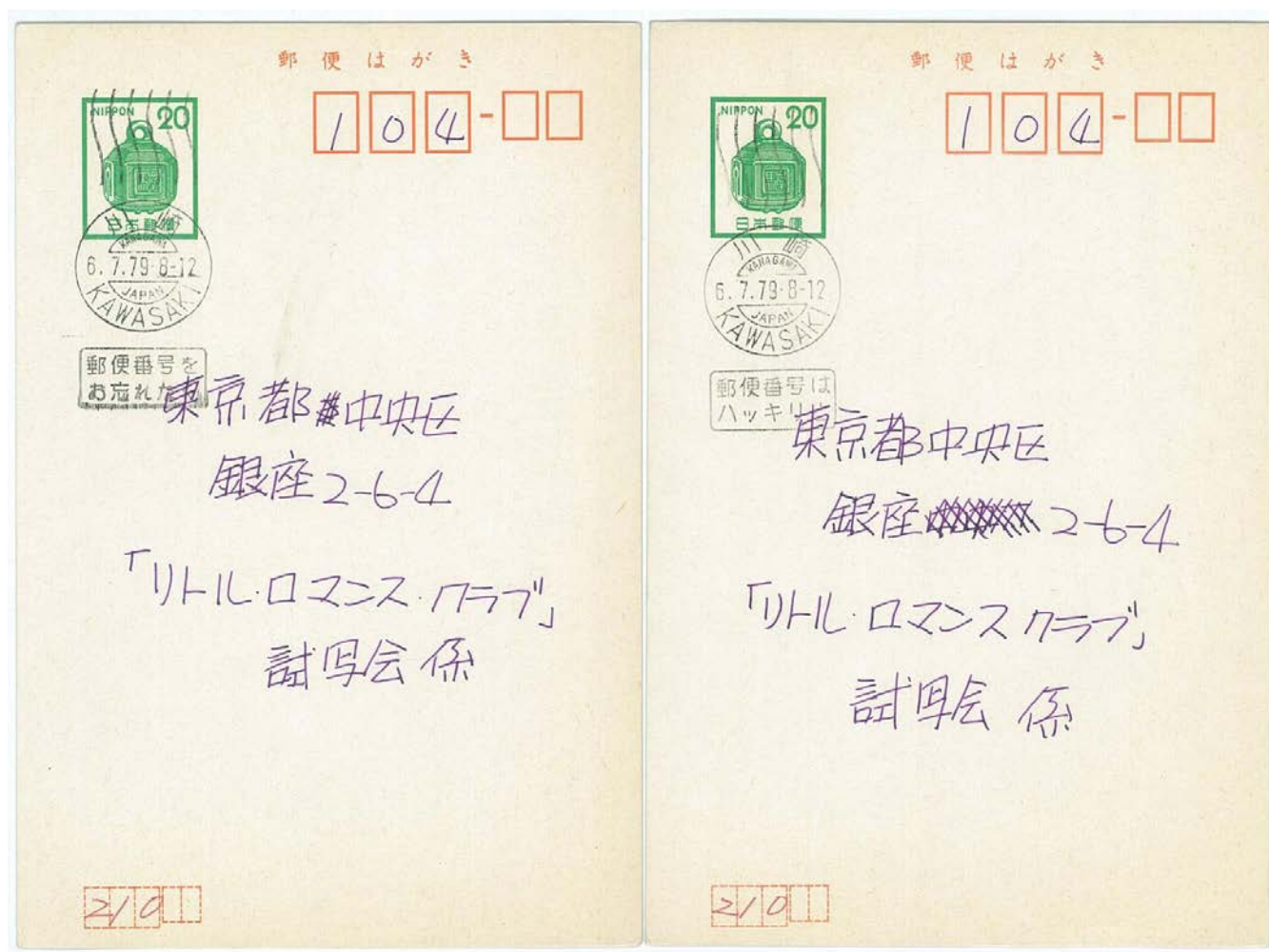


図3

千葉中央局 (図4)

前回の東京中央や日本橋、そして今回の3局も全て大局である。

郵便物が多いということは、トラブルなどもそれなりに多かったのではないだろうか。そのための異標語使用という現場レベルの工夫が手に取るようにわかる好例ではないかと考える。

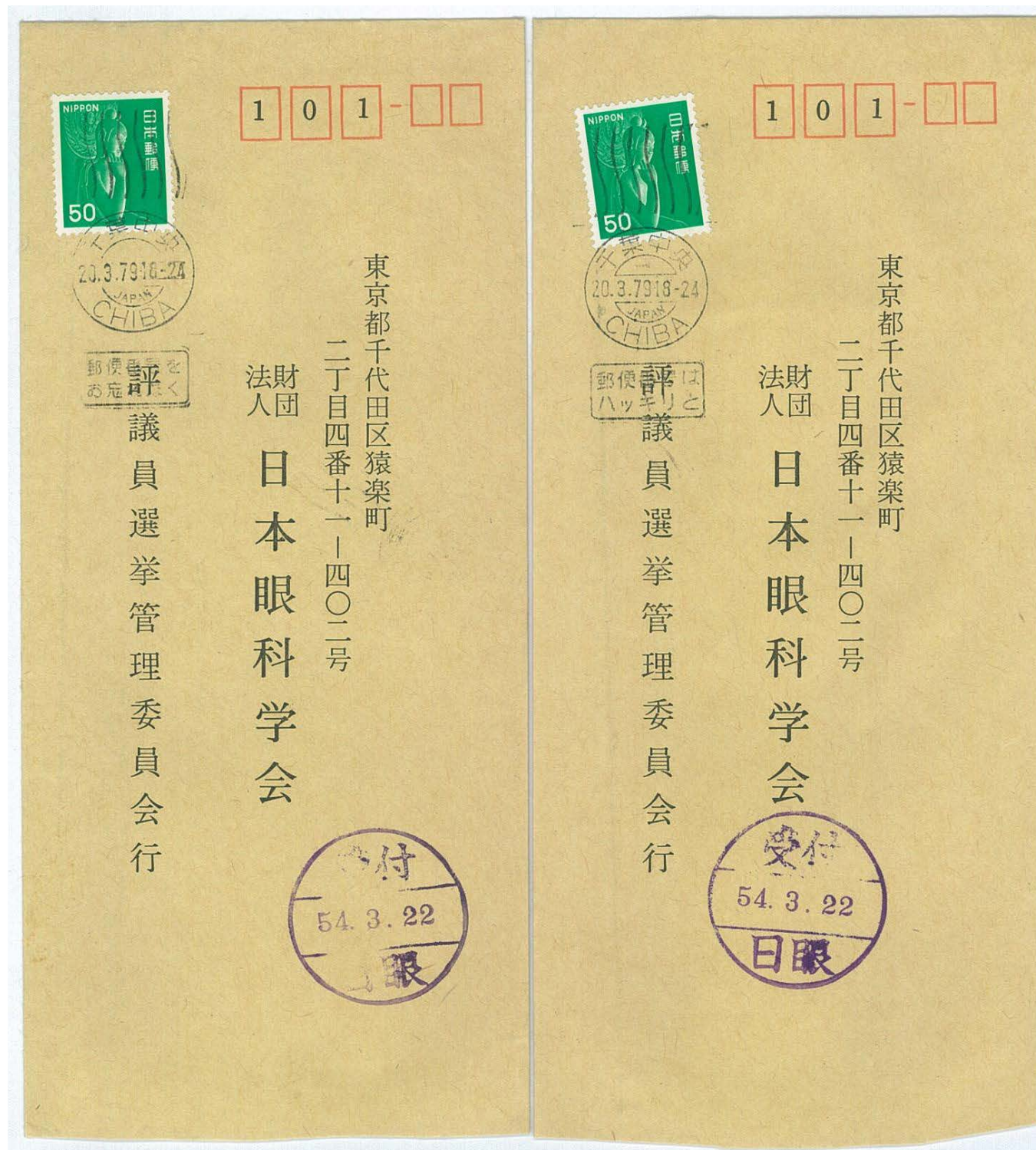


図4

樺太における急速郵便メモ・補遺

比嘉 霜人

前号に、『樺太における急速郵便メモ』という拙文を掲載頂いたところ、発行人の吉田氏を通じて、和田輝洋氏の所蔵されている、内地・樺太間の航空扱い使用例6通をご提示いただいた。それらに関する考察を行ないたい。

6通のカバーのコレスポンドンスは以下の通り。

- (1) 樺太清水組宛 (図1)
- (2) 親族間差出・書留葉書2通 (図2, 3)
- (3) 日曹礦業(株)恵須取礦業所宛2通 (図4, 5)
- (4) 在樺太商店差出 (図6)

いずれも、異なる種類の第1次昭和切手の貼り合わせによる内地・樺太間の航空扱い使用例で第1種、書留葉書、書留・配達証明重量便と郵便の種類も貼付切手もバリエーションに富む素晴らしいものである。

- (1) は内地樺太間の郵便を頻繁に利用したであろう事業者で働く従業員に対する信書。
- (3) (4) は内地樺太間の郵便を頻繁に利用したであろう事業者の商用便。
- (2) は出稼ぎ労働者又は行商人の年の瀬の送金便(¥2000*・¥3000*といずれもかなりの高額)である。

いずれの場合もその業務の迅速な通信の必要性の観点から航空取扱いがなされたのであろう。

また、(1) (3) (4) は、差出人が、その必要性故に郵便事情にも知悉していたと思われ、自ら航空扱いを指定し、(2) は豊原局で最速の通送方法を選択し、郵便局備え付けの航空印を押印したと推定されることから樺太内地間の急速郵便としては航空便の取り扱いをすることが官民の共通認識としてあったことがうかがえる。

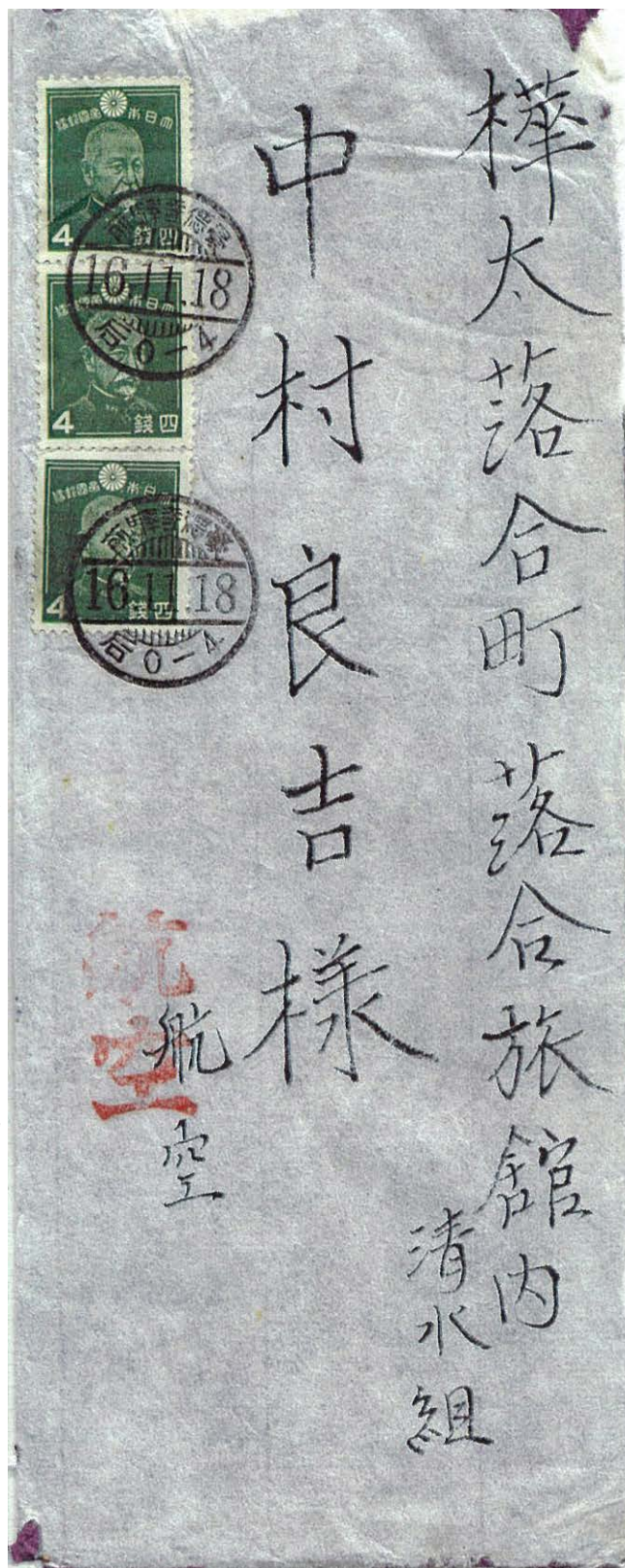


図1 4銭縦3枚連貼り(第1種書状4銭+航空料8銭)
豪徳寺驛(駅)前/昭和16年11月18日→樺太清水組宛

この点、官報第 3183 号昭和 12 年 8 月 12 日 364 頁通信省令第 55 号 1 条「内地相互間に発着する郵便物は本令の定むる所に依り之を速達と為すことを得」、同第 365 頁通信省令第 56 号航空郵便規則第 1 条「内地と朝鮮、台湾、樺太及南洋群島相互間に発着する郵便物は本例の定むる所に依り之を航空郵便と為すことを得」（旧字、カナは筆者が改めた。）が参考となる。

そして、所要日数は、判明している範囲で、図 2 が 6 日、前稿の如水会宛の葉書が 4 日（裏面の⑧が到着日付だとすると）、前稿のもう 1 通が 5 日（使用例データの眞岡 7 月 11 日は小生の校正ミスで 1 日が正しい。誤りをお詫びして訂正する。）である。

前稿の如水会宛の会員の葉書の『先月〔(注) 9 月〕 24 日如水会発の便りが 3 日夕に着いた・・・』との記述から推定される約 10 日の所要日数の半分程度であることからその有用性はあったと考える。



図 2 10 銭縦ペア貼り（第 2 種 2 銭+航空料 8 銭+書留料 10 銭= 20 銭）
豊原/昭和 16 年 12 月 3 日差出→奈良/昭和 16 年 12 月 8 日着印

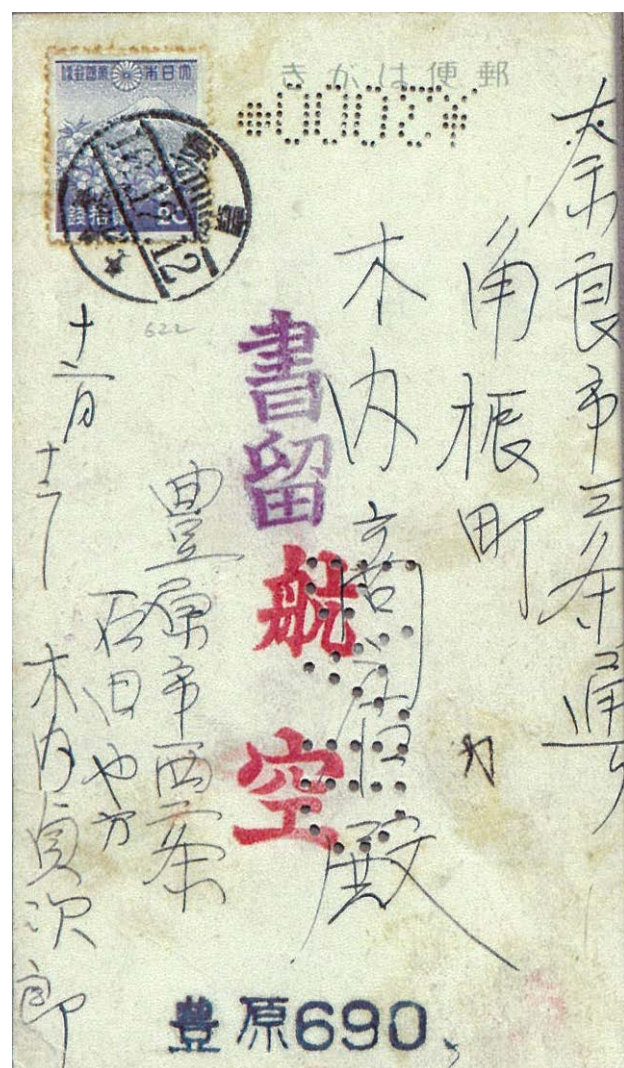


図 3 20 銭 1 枚貼り（第 2 種 2 銭+航空料 8 銭+書留料 10 銭= 20 銭）
豊原/昭和 16 年 12 月 12 日差出→奈良宛

ところで、実際の通送経路であるが、『伝説の樺太連絡急行、22年の生涯。』(<http://homepage3.nifty.com/6480/page274> 平成28年6月3日閲覧)によると、1937年(昭和12年)6月1日ダイヤ改正により

(下り)

上野 19:00 == 急行 201レ == 青森 7:45 → 大阪 10:01 == 急行 501レ == 青森 7:27 → 青森 8:20 - 1便 - 船 - 函館 12:50・・・13:20 == 1レ == 稚内 16:54・・・8:50 - 1便 - 船 - 大泊港 16:50

(上り)

大泊港 12:00 - 2便 - 船 - 稚内 16:00・・・22:10 == 急行 2レ == 函館 16:23・・・17:00 - 2便 - 船 - 青森 21:30 → 青森 22:00 == 急行 202レ == 上野 10:25 → 青森 22:20 == 急行 502レ == 大阪 19:37

が直通旅客列車として運行していたようである。

したがって、この経路を用いると大泊—札幌間の通送日数が最短で約1日であったことがわかる。

これと、大阪—東京—札幌・名古屋—東京—札幌の各航空路線を組み合わせることによる通送時間の短縮は、相当なものであると思われる。

ところで、前稿で触れた、日本フィラテリー1990年2月号23頁(通巻254号)の(大泊?)13年3月24日前0-8、航空印、小樽13年3月25日前8-12着印の使用例については、Rail・Artブログ「1940年10月の北海道の列車の時刻2題」(<http://blog.livedoor.jp/railart/archives/4418301> 平成28年6月7日閲覧)によると、

== 急行 2レ == 稚内 16:54 → 稚内 22:17 → 札幌 10:00-05 → 小樽 10:47-52 → 函館 16:45 とあることから、

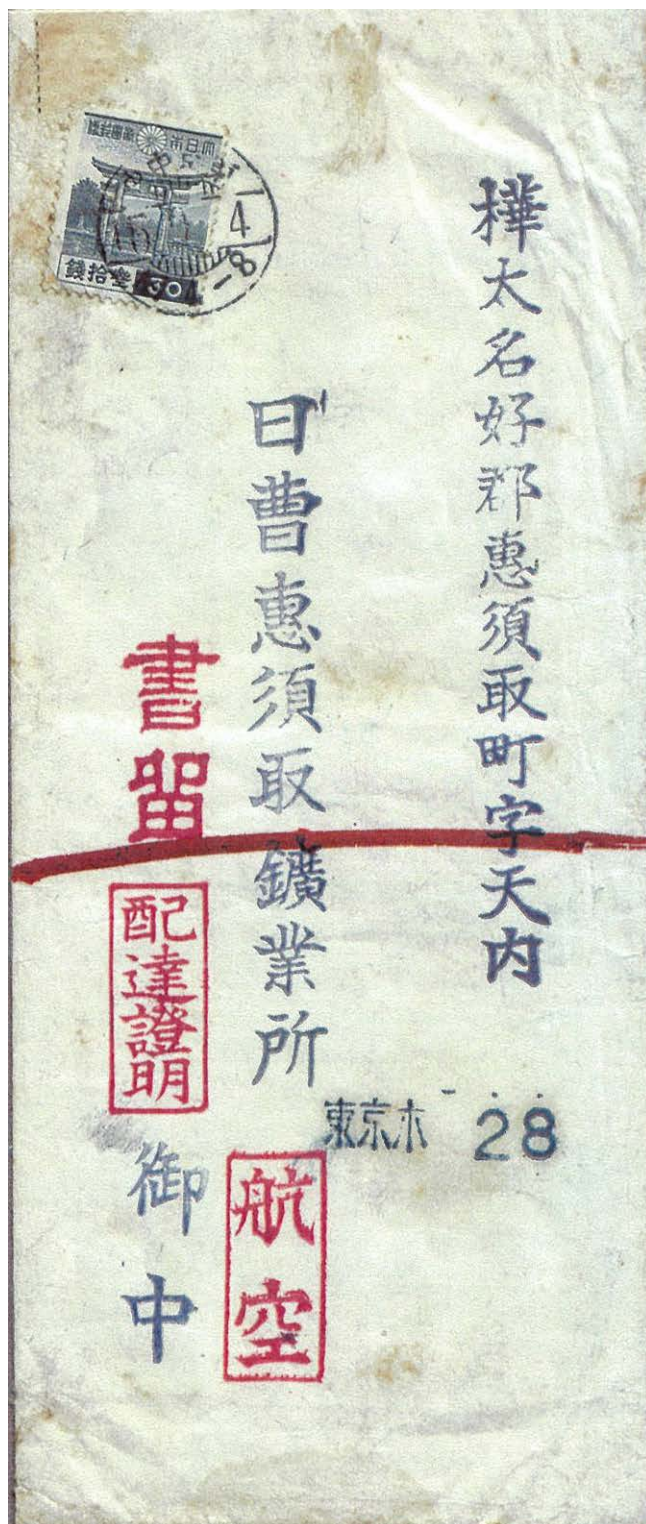


図4 30銭1枚貼付(航空料8銭+書留料10銭+配達証明料4銭=22銭であることから、第1種書状2倍重量便8銭であろう。)東京中央/昭和15年6月4日差出→樺太宛

大泊、昭和 13 年 3 月 24 日／前 0－8－大泊港 12：00－2 便－～船～稚内棧橋 20：00・・・
22：10＝＝急行 2 レ＝＝－稚内 22：17－札幌同年同月 25 日 10：00-05－小樽 10：47-52－函
館 16：45

という通送経路が考えられ、時刻表上は小樽駅に昭和 15 年 3 月 25 日午前 10 時 47 分に着いて
いることから、前 8－12 の着印は矛盾しない。そして、樺太内地間の急速郵便は、前述のよう

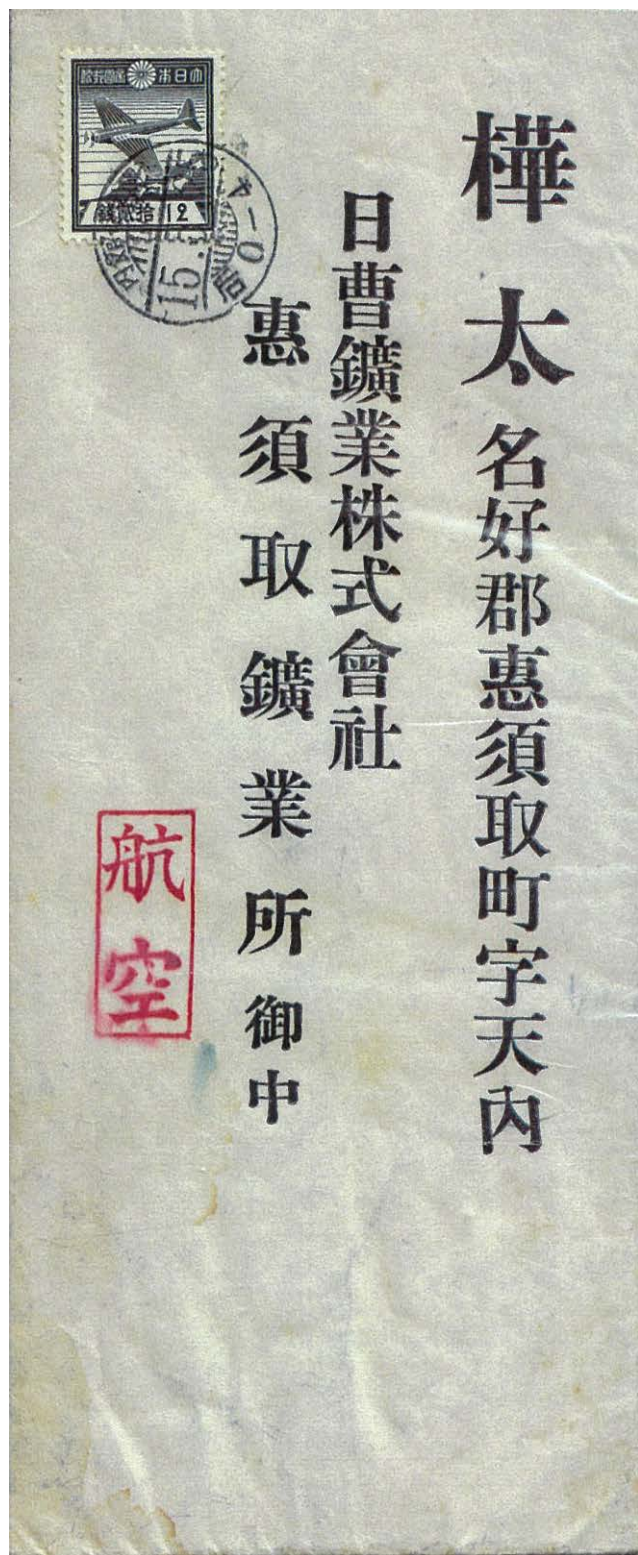


図5 12 銭 1 枚貼り (第 1 種書状 4 銭+航空料 8 銭)
昭和 15 年 5 月 25 日 → 樺太宛

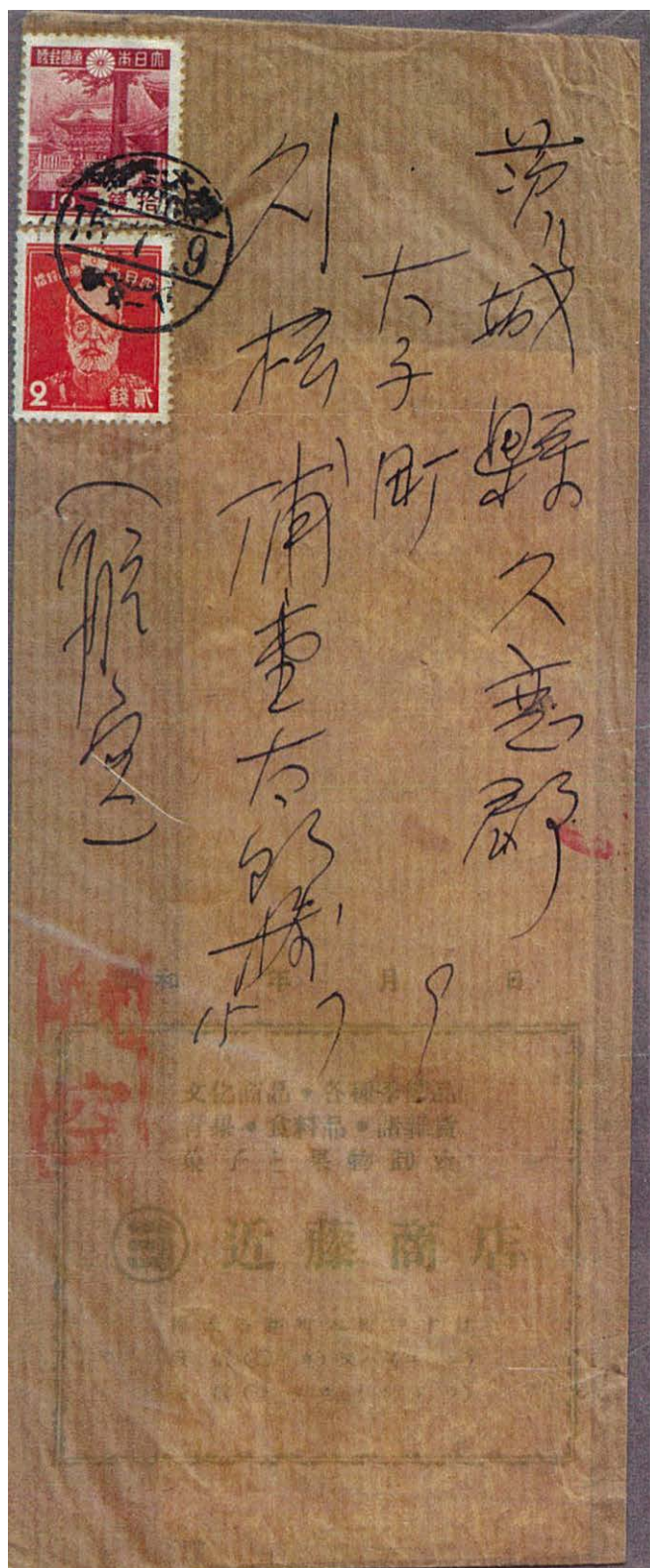


図6 2 銭・10 銭貼り (第 1 種書状 4 銭+航空料 8 銭)
樺太・塔路／昭和 15 年 7 月 9 日差出 → 茨城宛

に、速達ではなく航空扱いとしたことから、1度も空路を使用しなくとも航空印を押印したと思われる。

その傍証として、前稿で触れた、2009年8月6日付ジャパNSTAMP商会ブログ (<http://www.japan-stamp.com> 平成28年2月29日閲覧) において、オークション出品物として、紹介されている、内地発樺太宛速達便、豪徳寺驛(駅)前/昭和16年10月16日発がある。これは、図1と受取人が同一で、同一郵便局から約1か月後に図1が送られている。筆跡が異なるのだが、想像を逞しくすれば、両者は共に親族間書簡で、昭和16年10月16日から同年11月18日の間に、受取人から航空扱いにするよう指示があったのではないだろうか？

この点は、両者の裏面にある差出人が判明すれば明らかになるであろう。

以上から、内地・樺太間の急速郵便は、昭和18年4月1日に樺太が内地に編入されるまでは、樺太・北海道間は船舶で逡送されたにもかかわらず、急速郵便としては、航空扱いで引き受けられ、札幌からは可能であれば、航空機による逡送が行なわれたのであろうと考える。

この点、読者諸氏のご意見を賜れば幸いである。

最後に、このような様々な使用例、とりわけ図1のような同一人宛で異なる取扱いのなされた使用例をご提示いただき、考える機会を提供くださった、和田氏、吉田氏に感謝する次第である。

また、和田氏には、KARUIZAWA 欧文ローラー印の第1次昭和6銭切手への印影もご提示いただいた。重ねてお礼を申し上げる。The Philatelist Magazine 誌が、気軽に読者の所蔵する郵趣品の公開できる場となることを祈念して筆を擱くことにしたい。

切手別納郵便制度

行徳 国宏

まえがき

切手別納郵便そのものを題材にして発表した投稿文をほとんど見かける機会がない。まず最初に、切手別納郵便について質問してみる。

Q：切手別納郵便印を押捺し、切手が貼付されていないこの郵便物は、どんな種類の郵便物か。

A：差出人が一度に大量の郵便物を差出すとき、郵便物1通ごとに切手を貼付する手間が省けるし、郵便局も引受後に郵便物1通ごとに消印を押捺する作業が省けるため、両者にとって便利な郵便物である。

Q：切手別納郵便と料金別納郵便は同じ郵便か、異なる郵便か。

A：同じ郵便の名称である。途中から名称変更されたのである。いや別の種類の郵便である。答えが分かれる場合もあるうか。

次に、主題の切手別納郵便は何時から取扱開始され、その時どんな取扱がされたのか。その歴史に言及する前に、切手別納郵便は、収集家にとっては作品に使えるのか。これこそが最も大切な点である。

また切手別納郵便には（収集家が広く、普通に判断して）珍品あるいは希少品と言えるものが存在するのか。この点についても言及してみて、大方の判断を待ちたい。

そこで、その取扱内容の変遷を公報から引用し、現物を掲示しながら本文を進める。

1 大正8年4月20日

大正8年4月10日付け通信公報1974号に掲載の通信省令第17号より

「郵便規則中左の通改正す

本令は大正8年4月20日より之を施行す

目次第2章第8節の次に左の1節を加ふ

第8節の2 切手別納郵便

第63条の5 同一内容の通常郵便物を同時に百箇以上差出すときは切手別納郵便と為すことを得

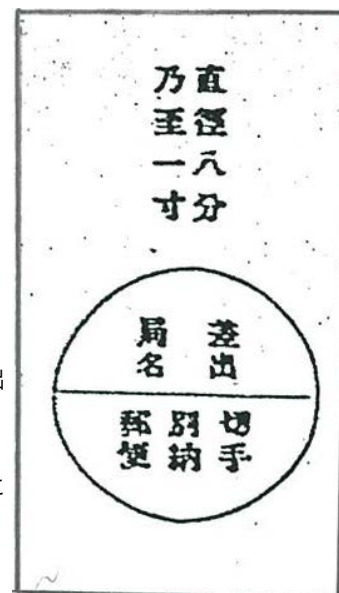
第63条の6 切手別納郵便物は通知を要せざる留置と為すの外他の特殊取扱と為すことを得す

第63条の7 切手別納郵便物は郵便切手を貼付せず郵便物に料金相当の郵便切手を添へ之を差出すへし

前項の郵便物にはその表面に差出人に於て左記雛形の印章を押捺すへし

第63条の8 切手別納郵便物は所轄通信局長又は管理事務分掌一等郵便局長の指定する郵便局に差出すへし

第63条の9 切手別納郵便物には通信日付印を押捺せず



切手別納郵便は郵便規則第2章第8節の2に加えられ、制度として確立された。

切手別納郵便は、

- ① 同一内容の通常郵便物として差出す
- ② 同時に百箇以上差出す
- ③ 料金は郵便切手で支払う
- ④ 差出人が印章を押捺する
- ⑤ 差出すべき郵便局が指定される
- ⑥ 通信日付印は押捺しない

という条件を付けられた郵便物であることがわかる。日付から郵便料金は2銭ということもわかる。

切手が貼付されていない、日付印が押捺されていない切手別納郵便物はその種別が何であれ、収集対象にするにしても、なにが面白いのかが分からない郵便物であろう。その点では「納得していただきましたでしょうか」（“ためして合点”流）。

しかし、集める値打ちもない郵便物と言われるが、本誌の俎上に載せてみようとする理由が一つあり（一つで十分）、それこそが切手別納郵便物収集の突破口になるう。

突破口は、切手別納郵便物に印刷物や営業関係の各種書類などが残されているかどうかである。切手展のブース、即売会で切手別納郵便証示のエンタイアを見つけて選別するとき、内容文書類の中に日付が印刷されているものがあるかどうか、収集はここから始まる。

そこで実例を示してみよう。

図1の切手別納郵便物には株主総会開催の案内文が同封されている。文末に日付が印刷されていて、大正10年7月7日ということが分かる（図1-2、次ページ）。しかし、作品に使えるかどうかという点になると、次のステップ（種別の収集視点）が要る。

図1は内容文書から第1種無封郵便として作品に入れることができるのである。案内文書の日付部分が分かるように

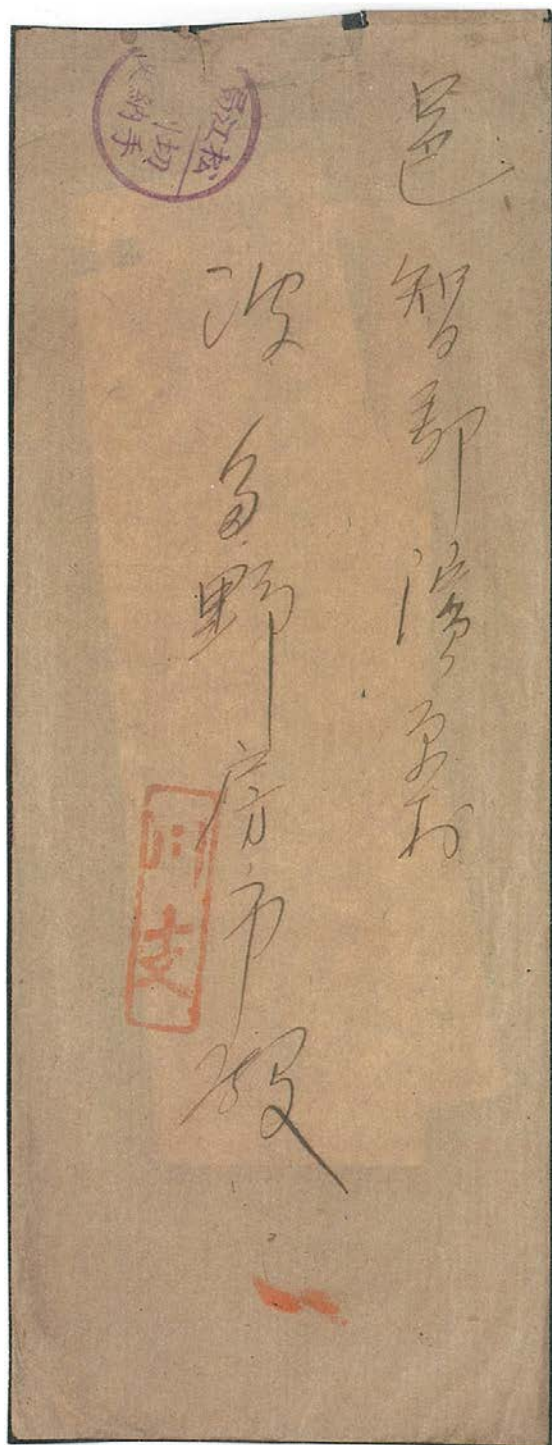


図1 松江（大正）10.7.7.

折曲げてリーフの半分に納め、残り半分に封筒の方を並べれば、作品リーフが作れる。「川支」の表示も希少さを補っている。筆者は第1種無封郵便を作品として構築中であり、内容のレベルアップを進めているので、切手別納郵便は作品に使える。

2 大正12年9月20日

大正12年9月17日付け通信省令第61号より

「第63条の5 種別及料金額同一の通常郵便物を同時に50箇以上差出すときは切手別納郵便と為すことを得

第63条の7 第1項に左の但書を加ふ

但し、1等、2等及特定3等郵便局に差出すものに在りては料金相当の現金を以て納付すへし

第63条の8 削除

付則 本令は大正12年9月20日より之を施行す」

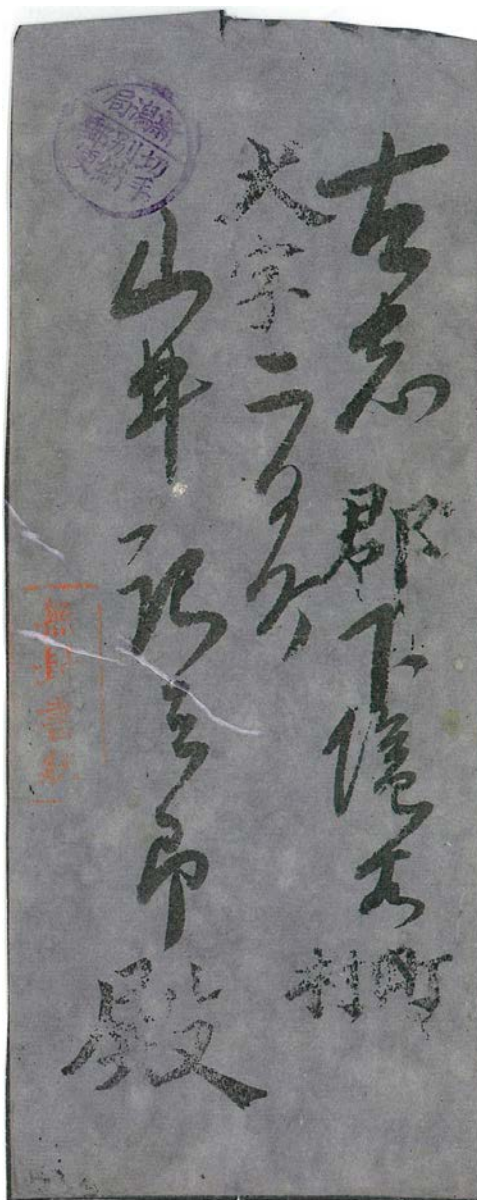


図2 新潟 9.11.1.

大正12年9月20日から切手別納郵便の取扱規則は、「同一内容の通常郵便物」から「種別及料金額同一の通常郵便物」へと明確

に規定され、差出通数は100箇以上から50箇以上に、そして支払は郵便切手から現金になった。

図2には立派な内容文書が同封されていて、日付がはっきりしている。小作調停委員の選任には地方裁判所が関与しているとは知らなかった（図2-2）。図2には「無封書状」のゴム印が押捺されている。郵便料金は2銭であった。

この項目に掲げるエンタニアはこれだけと言われるかもしれないが、じつは大正時代後半から昭和15年頃までの切手別納郵便物は、即売会の会場で結構見かける。入手したい場合は、状態のよいものが1通あれば十分である。

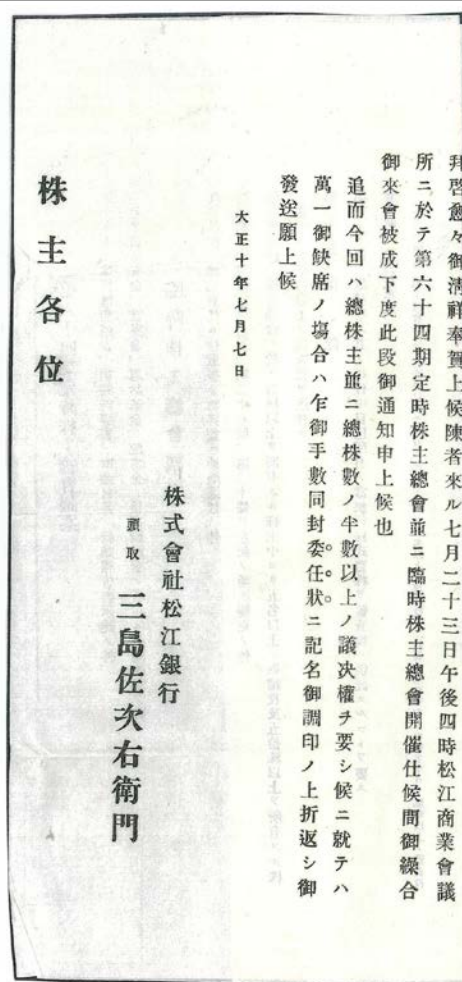


図1-2

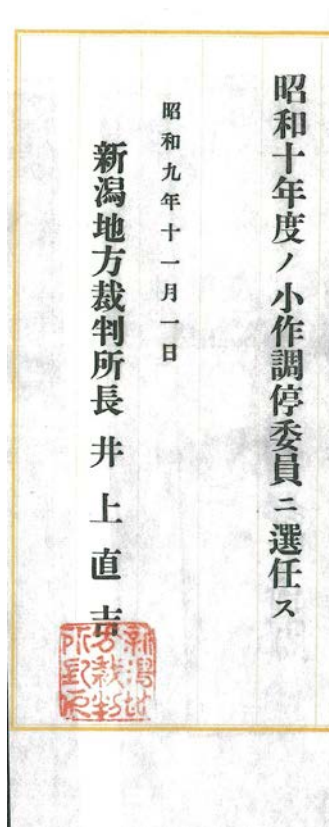


図2-2

3 昭和 13 年 5 月 1 日（切手別納郵便から料金別納郵便へ）

昭和 13 年 4 月 1 日施行の逓信省令第 25 号の郵便規則改正より

「第 3 章 郵便物の差出及び配達

第 1 節 第 3 款料金別納

第 79 条 種別及料金額同一の通常郵便物にして同一の差出人より同時に 50 箇以上差出すものは之を料金別納郵便と為すことを得

特殊取扱（年賀特別郵便物を除く）と為す郵便物は之を料金別納と為すことを得ず

第 80 条 第 1 項 料金別納郵便物は料金を添え郵便局に之を差出すべし

（中略）

付則 第 227 条 本令は昭和 13 年 5 月 1 日より之を施行す」

3-1 昭和 13 年 4 月 1 日付け「通牒」中の郵業第 400 号

「郵便規則制定に関する件」より

「今般郵便規則を新たに制定し 5 月 1 日より施行せらるることになりたる所、右は郵便利用関係を規定する規則中一般的のものを新規規則に統合し制度及内容を時運の進展に適合すべく整正したるものにして相当広範囲に亘り改廃せられたる…」

第 1 改正せられたる事項

1 新規規則編纂上統合整正せられたる事項の、

四 料金別納、約束郵便、市内郵便、郵便私書箱及留置は之を特殊取扱より除外し、前三者は差出の節中に、後二者は配達の節中に規定せられたること。

3 名称を改正したる制度及事項（1 例だけ取上げた一筆者）

旧名称	新名称	備考
切手別納郵便	料金別納	旧郵便規則第 2 章第 8 節の 2
郵便規則第 3 章第 1 節第 3 款		

昭和 13 年 5 月 1 日の郵便規則改正で、切手別納郵便は料金別納郵便に改称された。料金別納郵便から 1 例を掲載する。

「切手別納郵便」表示と「料金別納郵便」表示のエンタイアを一見したとき、後者表示のものは昭和 13 年 5 月 1 日以降のものになる。

図 3 は料金別納郵便の表示がされた第 1 種無封郵便で、同封の通信文は、封筒上に印刷されているように、「総会通知」書が同封されている（図 3-2）。図 3 は昭和 13 年 12 月 16 日付けで株主宛に差出されたことが分かる。因に、昭和 12 年 4 月 1 日に郵便料金が改正され、第 1 種無封郵便料金は 3 銭になった。

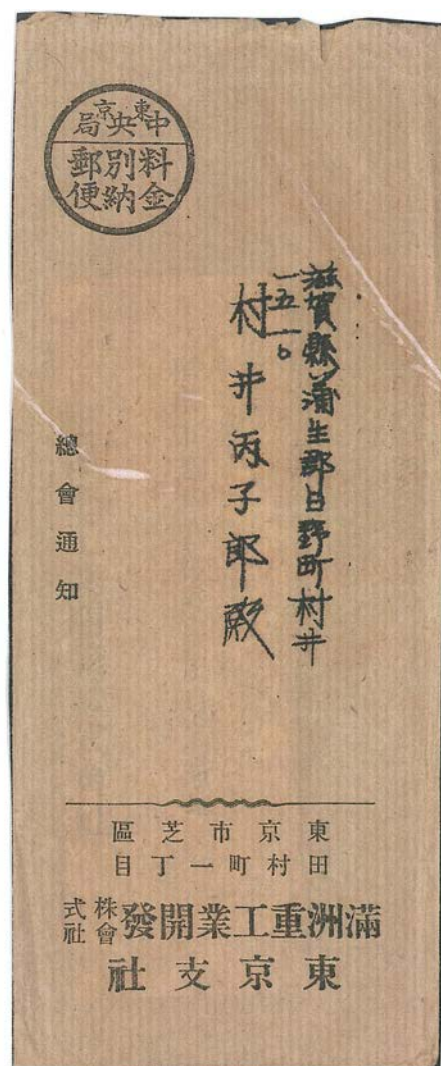


図 3 東京中央 13.12.16.

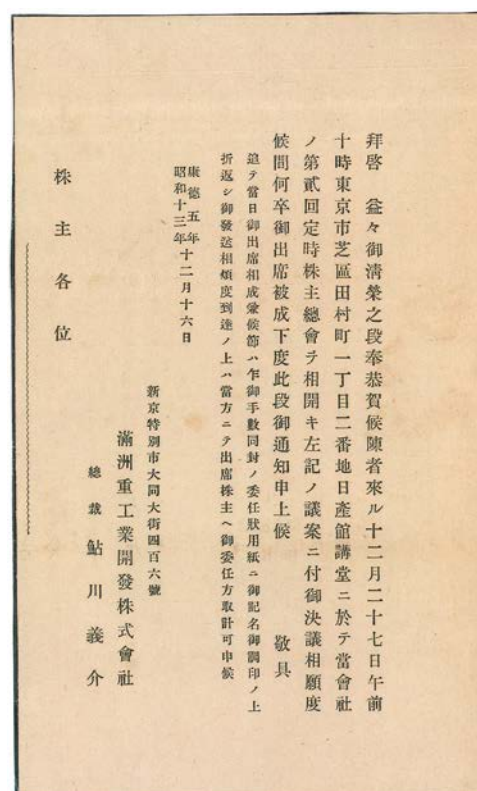


図 3-2

4 昭和 14 年 11 月 1 日

昭和 14 年 10 月 16 日付け逓信省令第 45 号の郵便規則改正より

「第 79 条 種類及料金同一の郵便物にして同一の差出人より同時に 50 箇以上差出すものは之を料金別納と為すことを得特殊取扱と為す郵便物に付ては其の取扱の種別亦同一なることを要す

第 80 条第 1 項を左の如く改む

料金別納郵便物は料金を添え郵便物の集配事務を取扱ふ郵便局（小包郵便物及年賀特別郵便物以外の特殊取扱と為す通常郵便物に付ては 1、2 等郵便局に限る）に之を差出すべし

付則 本令は昭和 14 年 11 月 1 日より之を施行する」

料金別納郵便にも特殊取扱が適用できることになったことが分かった。

但し、取扱う種別が同一であることが条件になっている。つまり、速達郵便又は書留郵便のみを「同時に 50 箇以上」差出した場合は、料金別納郵便の取扱ができるのである。通常郵便物なら「同時に 50 通以上差出す」例はあるが、特殊取扱郵便だけで「同時に 50 通以上差出す」ことはほとんどないも同然であろう。

筆者は配達証明郵便を収集して 30 数年になるが、切手別納郵便、料金別納郵便の配達証明引受のものは見たことがなかった。50 通(人)以上の人に同一種別の配達証明郵便物を同時に差出す事由があったのか想像すらできないままで今日に至っている。

しかし、そのように考えながらいろんな特殊郵便物を見ていたある日、偶然見つけた！

図 4（次ページ）は京橋局引受の料金別納配達証明郵便である。中に通信文か印刷物が同封されていなかったら、買わなかっただろうが、幸い、中に内容証明謄本が入っていた（図 4-2）。

「内容文書である原本に名宛人の全員の住所氏名が連記されずに、一人ずつ別個に書かれている」同文内容証明郵便である。料金別納扱いの特殊郵便物では、同一種別のもので同時に差出通数 50 通以上が高い障壁になっているから、これまで見つからなかったのである。

原本に記載されている文面を以下に引用してみよう。

「現下の経済界低金利の趨勢に鑑み…新種徴兵保険の保険料は…当局指示に基き代理店集金手数料規定中一部の変更余儀なくせられ左の通り改正九月一日より実施致し候」（以下略）の本文に始まり、「代理店集金手数料規定中改正の件」を発信した第一徴兵保険株式会社差出しのものである。

受信人の欄には受信人の住所氏名が手書きされている（図 4-2）。全国の代理店宛に同文内容の内容証明郵便を同時に 50 通以上差出したものと判断される。タイミングがよければ、図 4 と同じものが見つかるだろう。

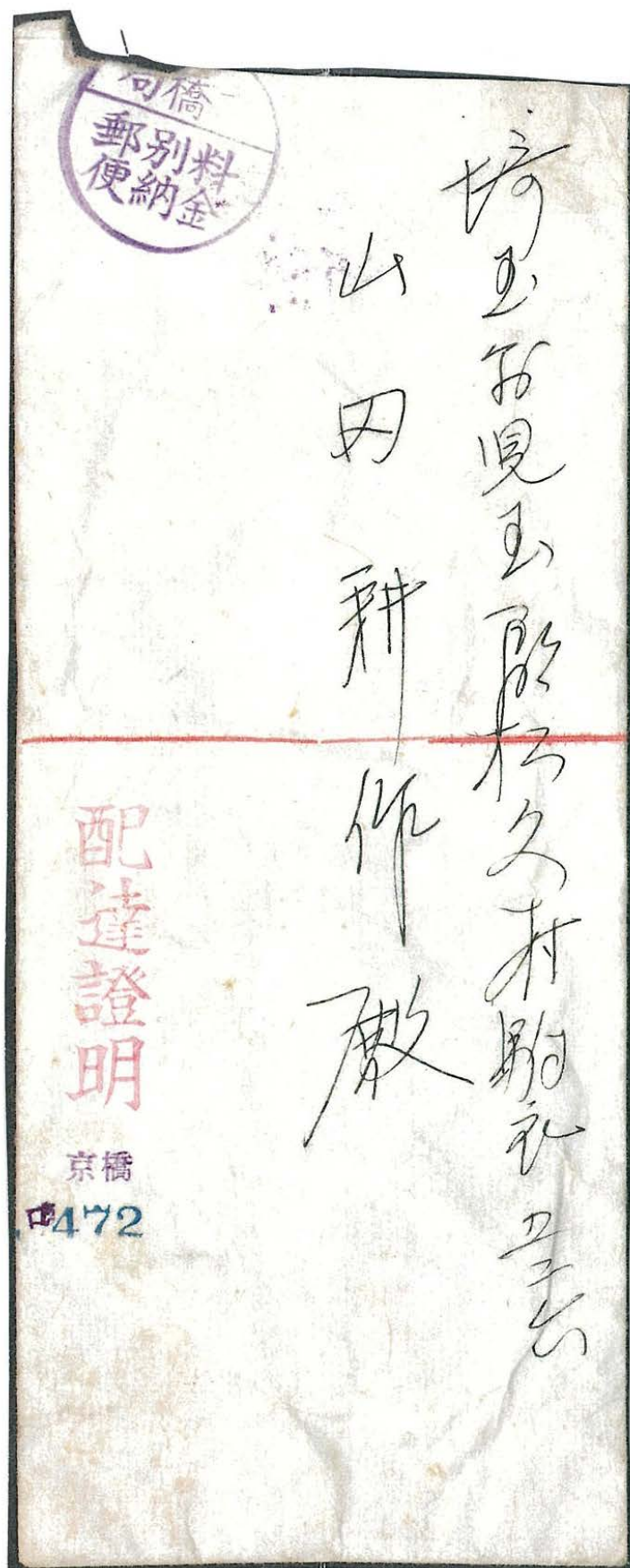


図4 京橋 16.9.11.



図4-2

5 昭和 23 年 1 月 1 日

昭和 22 年 12 月 29 日付け逓信公報号外より

逓信省令第 34 号の郵便規則改正で、

「第 3 章 郵便に関する料金の納付及び還付

第 2 節 料金別納

第 44 条 料金額が同一の郵便物で同時に 20 通以上差出すものはこれを料金別納とすることができる。

第 45 条 料金別納郵便物は、料金を添えて郵便物の集配事務を取り扱う郵便局又は通信局長の指定した郵便局にこれを差出さなければならない。料金別納郵便物には通信日付印を押なつしない。」

新生日本の新憲法の下で制定された新郵便法・規則では、同時に差出す通数が 50 通から 20 通に変更された。差出通数の壁がかなり低くなった。

戦後の特殊料金郵便物では、料金後納郵便物の取扱通数が増えてきたこともあるが、差出し通数が 20 通以上となったことが幸いしたのか、料金別納郵便物は多く見かける。しかし、引受けた日付が分かる料金別納郵便物に限定して集めてみると、見つかる割には日付が分かるものは少ない。

戦後のできるだけ早い時期の料金別納郵便物を示す。



図 5 甲府 29.11.9.

図 5 は特別送達の料金別納郵便使用 (29 年 11 月 9 日) である。中に通信文か印刷物が同封されているかどうかを確認した上で手に入れた。図 5-2 は道路交通取締法による交通違反に対する略式命令書である。差出人 (簡易裁判所) は 20 人以上の交通違反者に対して、略式命令書を同時に差出したのであろう。

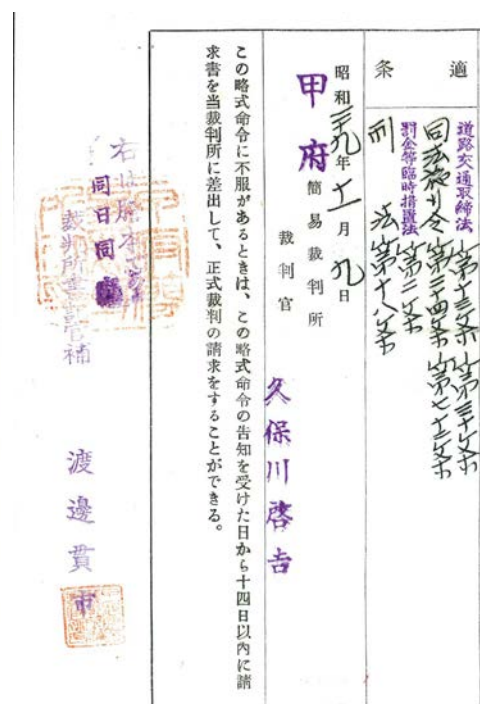


図 5-2

掲載した料金別納郵便の特殊取扱郵便物が戦前戦後を通じて極めて少ないことに対して「合点していただけたでしょうか」。

切手別納郵便、料金別納郵便が入手しやすいかどうか、希少といえるかどうかを考えてみた。そして最も重要なことは、それぞれのエンタィアが作品に使えるかどうかであろう。読者諸兄のご判断に委ねる次第である。

郵趣活動の記録

第 17 回トピカル切手展 受賞記録

編集部

スタンプショウ 2016 トピカル切手展への初出品

北野 雅利

古今東西郵趣文献書評

房総の鉄道郵便

田中 寛

日中戦争・太平洋戦争期における実例による軍事郵便解析の手引き (浅野周夫編集)

森下 幹夫

「年賀郵便の歴史」(吉田敬著)

安井 浩司

< JAPEX2015 > 記念出版 年賀郵便 - 年賀状と切手の歴史 -

安井 浩司

ジャパNSTAMP オークションニアレポート

鯛 道治

第 17 回トピカル切手展 受賞記録

2016/4/29(金)-5/1(日)に、東京、浅草の東京都立産業貿易センター台東館でトピカル切手展が開催されましたので、展示一覧を掲載します。

なお、金賞+特別賞に輝いた石田徹さんの作品「ショウガ亜綱」および、出品のご感想を次ページにご寄稿くださいました、北野雅利さんの作品「旧スタンプマガジン：スタンプクラブの時代～思い出と外国切手～」の二点を、出品者のご好意により、本号付録に全リーフ掲載しています。あわせてご覧ください。

作品タイトル	氏名	賞
鯨類の多様性と保護	立川 賢一	金賞+グランプリ
ショウガ亜綱	石田 徹	金賞+特別賞
フクロウ	中尾トミ子	金銀賞+特別賞
地図の物語	樋口 豊	金銀賞+特別賞
宇宙開発の進化	中尾 謹三	金銀賞+特別賞
城&宮殿	北林 利仁	金銀賞+特別賞
世界に知られるユダヤの人びと 55 人	加賀谷長之	金銀賞+特別賞
鉄道記念切手	多々良 眞	金銀賞+特別賞
聴覚障害	大沢 秀雄	金銀賞
ウサギの仲間	藤田 総八	銀賞
蘭科カトレア属カトレア類	今井 正一	銀賞
カール・マルクスの肖像	関 好男	銀賞
印象派の画家たち	高村 昌雄	銀賞
レジャー・カヌー	横谷 一宏	銀賞
イカとタコの不思議な世界	立川 賢一	銀賞
投げる	高木 均	銀賞
ハートを集めて	佐々木秀司	銀賞
ツンベリーと仲間たち	大畑 紀子	銀賞
北斎の「富嶽三十六景」	安江 靖訓	銀賞
韓国の蹴球(サッカー)	孫 敬子	銀銅賞
POSTHORN 新時代、その 144 年の軌跡	井上龍太郎	銀銅賞
東アジアの焼き物	高塚 純一	銀銅賞
果樹の樹	三宅 秀生	銀銅賞
東洋美術史	松井 時夫	銀銅賞
切手や葉書にみる～詩歌歳時記～折々のうた	中尾 英雄	銅賞
日本の UPU 記念、その取扱いの経過	井上龍太郎	銅賞
国宝及び重要文化財切手	佐野 道雄	銅賞
旧スタンプマガジン：スタンプクラブの時代～思い出と外国切手～	北野 雅利	銅賞
チョウチョがいっぱい	濱谷 彰彦	銅賞
幕末から江戸・東京	石川 金作	銅賞

スタンプショウ 2016 トピカル切手展への初出品

北野 雅利

当方、収集復活2年目の1965年生まれです。JAPEX2014・2015、全日展2015に出品させて頂き、今回初めてスタンプショウ2016にも出品させて頂きました。

収集を再開しJAPEXや全日展への出品を目指していた僕は、スタンプショウのトピカル部門への出品は全く考えていませんでした。しかしながらスタンプショウ2015を参観し、JAPEXや全日展とは又違った楽しさを感じて、自分もスタンプショウへの出品を考えました。

その大きな理由は、JAPEXや全日展はやはり素晴らしい本格的な作品が多いのですが、スタンプショウのトピカル部門は思いもしないアイデア作品や、個人の個性が出ている作品、他の趣味の延長的な楽しい作品が多く、切手収集の楽しさの原点を感じた為です。

もっとも、自分自身トピカル作品を短期間で作成できる程、思い入れの有るテーマは有りませでした。自分の興味の無いテーマや、知識の無いジャンルに手を出すのも行き詰まるだけになるでしょう。

色々と考えた結果、スタンプショウ2015で安価に購入したハンガリーのインフレ切手や、ネットで細々と購入したアメリカ切手等を参考に、最終的にはトピカルと同じ語源のトピックというつもりで「旧スタンプマガジン・スタンプクラブの時代～思い出と外国切手～」といったワンフレーム作品

旧スタンプマガジン・スタンプクラブの時代

アメリカ・世界コロンブス博覧会記念切手

当時の外国切手収集で、ジュニア収集家に一番人気の国はアメリカだったと思います。雑誌でも特集が組まれたり、「アメリカ切手とその集め方」といった単行本も発行され、扱っている切手店も多かったと思います。
この切手はアメリカ初の記念切手で、1893. 1. 2に16種セットで発売されました。高額面切手は高価ですが、低額面切手は発行枚数も多くジュニアでも安価で購入出来ました。最下段のカバーは、「ブローケン・ハット」の定常変種です。



3

旧スタンプマガジン・スタンプクラブの時代

ビルマ・南方占領地切手

近年ではさくら日本切手カタログには掲載されず、専門カタログのみになりましたが、その昔原色日本切手図鑑時代から、南方占領地切手はビルマが一番最初に掲載されていることもあり、その何とも微笑ましいデザインと共に一番印象が強かった切手でした。このセント額面農耕切手は、1943. 3. 17～29発行です。



4

作品に使った切手に関しては、このワンフレーム作品は1万円以内の予算と決めた為と時間の関係から、一部コンディションに難が有った事、そもそも旧スタンプマガジン・スタンプクラブを読んでいなかった方には意味不明的な作品だった事は反省すべき点だったと思います。

当日指摘された人名の間違い（南野洋子 => 南野陽子）も御本人並びにファンの方へお詫びします。



自分自身は現在、切手展に出品の為だけの収集をしています。それも他の方が余りやらないスタイルと低予算で。いつまで出品が続けられるかは分かりませんが、次は全日展2016を目指して頑張ります。



古今東西郵趣文献書評 房総の鉄道郵便

田中 寛

千葉県郵趣連合では第18回千葉切手展（2015.10）の企画展示として『房総の鉄道郵便』を取り上げた。本書は、このときの展示リーフ64葉をベースに解説を加え、さらに県下における鉄道郵便の推移を概説、その後に確認された新データも採録し、本年5月のいずみ切手研・鉄郵印グループ・日本郵楽会との合同一泊研修会に合わせて刊行されたものである。

ここで鉄道郵便日付印（略して鉄郵印）について一言。初期における全国的な幹線鉄道の建設・延伸の段階から、これを通送手段に取り込む郵便とは深い関わりをもってきた。明治22年、東海道線全通以降は、各地の鉄道開設に伴い郵便線路が設定され、延伸に伴い郵便線路も拡張、連結された郵便車両内では鉄郵印が使用された。鉄郵印は、その使用時期による特徴的なタイプの違いから丸一型鉄郵印、時刻入型鉄郵印、右書鉄郵印、戦後に登場する左書鉄郵印の4種類に大きく分類される。これにそれぞれの地域における鉄道の開設状況、また個々の郵便物の固有の表情も絡み、収集対象としての魅力を増幅してくれるのである。

では本書の解説を手がかりに、見どころとなりそうなマテリアルを年代順にいくつか紹介してみたい。まず総武鉄道の丸一型・東京佐倉間、これは明治27年に開設された千葉県下最初となる鉄郵印、2点採録されている。これに次ぐ東京成田間、佐倉成田間も稀少。房総鉄道・千葉東金間は逆方向に転進して千葉一宮間となる。ともに少ない。時刻入型では追録の北條線・千葉木更津線、大正2年のデータだから100余年を経ての新発見区間である。右書鉄郵印では大正期に入ってから北條線＝房総西線、難工事で小刻みな延伸がつづく。あまり見かけない区間が多く見ごたえがある。なかでも東京江見間は僅か2週間の使用とか、解説には震災葉書の名品とあった。このほかにも魅力的な使用例、また貴重なデータも多くあり、一読をお薦めしたい。

巻頭の時期別鉄道郵便線路推移図は、この地の鉄道郵便事情を理解する上でたいへんに参考になる。編者・宮崎幸二氏による解説、注記も丁寧かつ要所をよく捉えており、大いに理解を助けてくれるものと感じた。できれば各リーフの下に解説文を入れて欲しかったと思う。

また、もう一つ注文を言わせていただくなから、これまでのデータ集のように、各路線別・鉄郵印形式別のデータ表を作っただけなら、鉄郵印収集家には一層重宝されるのではないだろうか。『梶原ノート』を下敷きにして、県内外の収集家のデータを書き加えるだけでかなり有用性の高い資料が作れるように思ったのだが、いずれかの機会に検討していただければ幸いである。

房総の鉄道郵便

明治27年～昭和53年

千葉県郵趣連合 著

その半島的地形から、幹線鉄道と異なる発展を遂げてきた、千葉県の鉄道は、時を同じくして使用が開始された鉄道郵便に大きな影響を与え、珍品も多い、極めて魅力的な収集対象です。

2015年秋に開催された、第18回千葉切手展で披露された企画展示「房総の鉄道郵便」には、千葉県内外のフィラテリストの珠玉のマテリアルが含まれていました。

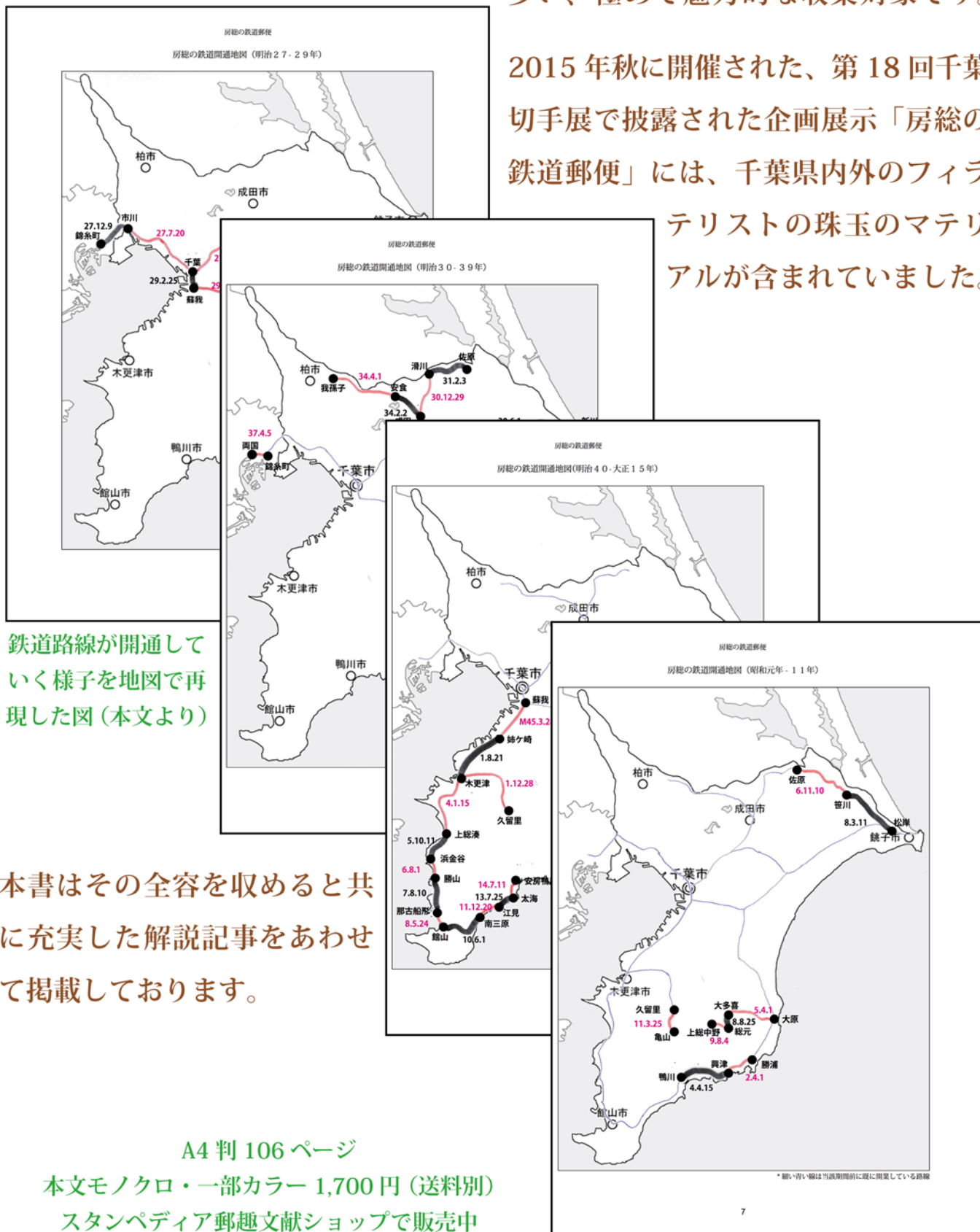
鉄道路線が開通していく様子を地図で再現した図(本文より)

本書はその全容を収めると共に充実した解説記事をあわせて掲載しております。

A4判 106ページ

本文モノクロ・一部カラー 1,700円(送料別)

スタンペディア郵趣文献ショップで販売中



* 緑・青い線は当該期間に既に開業している路線

古今東西郵趣文献書評

日中戦争・太平洋戦争期における実例による 軍事郵便解析の手引き (浅野周夫編集)

森下 幹夫

本書は、日中戦争・太平洋戦争期の軍事郵便のアドレスである陸軍兵団文字符、通称番号、海軍区別符が、どの部隊等であるかを実例の軍事郵便から解析したものである。

裏田稔氏と大内那翁逸氏の両氏(いずれも故人)が共同で調査研究された成果として、平成11年に小冊子に纏め、極々少数部を編者である浅野周夫氏をはじめ資料提供者に贈呈した「実例による軍事郵便解析の手引き」を基礎に、その後も編者宛てに送られた資料を加え、さらに編者が別に入手した一覧表等を付録として、新たな一冊として世に送り出したものである。

日中、太平洋戦争期の軍事郵便は、基本的には切手もなく日付印もなく、郵趣的にみると地味な存在であるが、軍事郵便を収集研究する上では、この時期のものも避けて通れない部分でもある。

しかしながら、差出部隊の調査となると、郵便史ではなく軍事史の領域となるため、郵趣界の文献としては、大西二郎氏(故人)が平成15年に出版した海軍関係は別として、陸軍関係のものは見当たらないのが現状である。

現在は、インターネットの普及もあり、個人でもある程度調べることは容易となったが、一つ一つ調べるとなると大変であり、この様に纏まっておれば、大いに時間の短縮となることは請合いである。また、付録も充実しており、これだけでも一見の価値がある。

私は、浅野氏から数年前より出版計画のお話を伺い、出版を待ち望んでいたところ、この度、上梓されたことは大変喜ばしいことである。出版が遅れた理由として、両氏ご遺族からの承諾のための連絡先調査に時間を要したとのことで、満を持しての発刊となった。

裏田、大内両氏の労に敬意を表するとともに、本資料を一部の方のみのものとせず、赤字覚悟の自費出版という形で、この様に広く公開に踏み切った浅野氏の広量に敬服する次第である。

この時期の軍事郵便の差出部隊が判らずお困りの方は勿論のこと、軍事郵便に興味をお持ちの方にとっては、手引きとなるお薦めの1冊である。

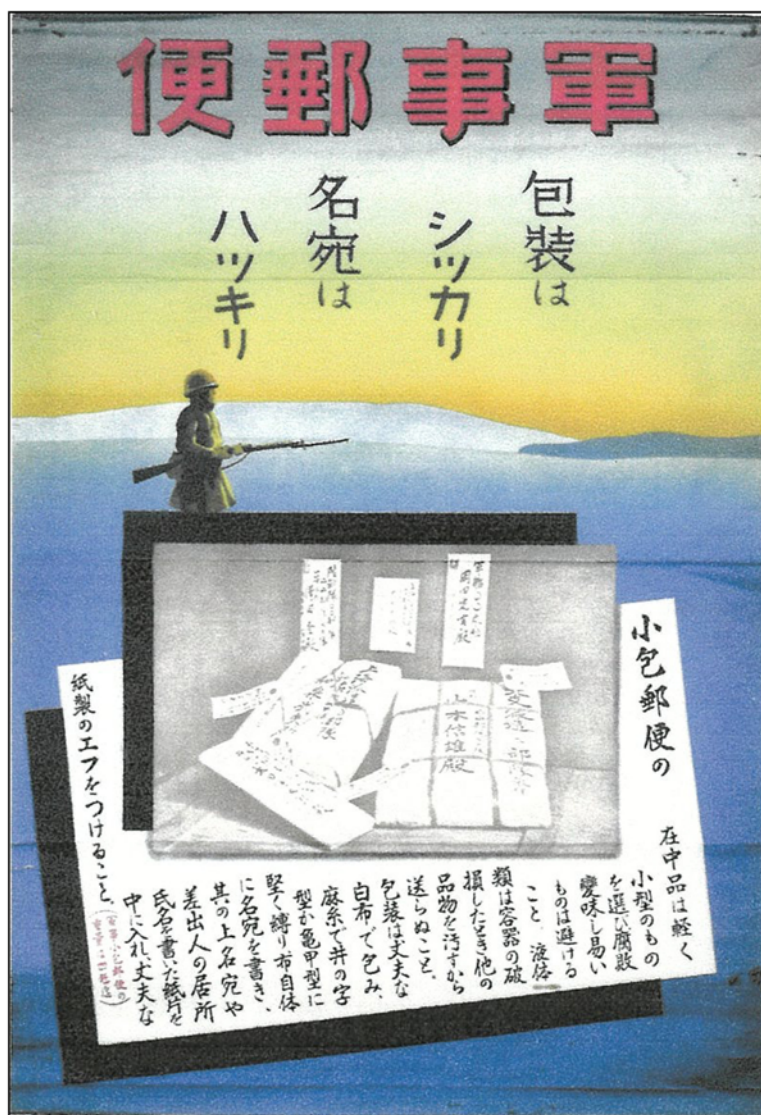
<広告>

好評発売中の自費出版 <新刊>

日中戦争・太平洋戦争期における 実例による軍事郵便解析の手引き

浅野周夫 著

(日本郵趣協会秋田支部・支部長)



軍事郵便研究家の裏田稔氏と旧帝国陸軍の編制を研究された大内那翁逸氏

によりまとめられた、陸軍の兵团文字符、海軍の区別符を

軍事郵便の実例をもとにして解析した書籍

平成11年に関係者に僅少部数が贈呈されただけの小冊子に追加情報を付加し、

著作権の承諾をご遺族に得て、自費出版で世の中に広く公開いたします

A4判 約450ページ 上製本・本文モノクロ・一部カラー 4,500円(送料別)

スタンペディア郵趣文献ショップで販売中

古今東西郵趣文献書評

第50回全国切手展＜JAPEX2015＞ 企画出品金銀賞「年賀郵便の歴史」（吉田敬著）

安井 浩司

外国切手も日本切手も更には内外の郵便史にもたいへん間口が広くて深い吉田敬氏の8フレームの大作がフルサイズのカラー印刷で発行されました。各リーフは見やすく（原則として原寸表示、次ページにサンプル）、読みやすい解説が記されていますが、さらに内藤陽介氏の序文にご本人の丁寧な作品解説もついて4298円（税込）と懐にもたいへんやさしいお買い得価格です。

既にJAPEX2015を参観された方ならば、従来の年賀状の羅列スタイルから脱却して、逓信省（現日本郵便株式会社）の郵便事業の経営的な観点から取り組んだ作品に、正に目から鱗の思いがしたと思います。

我々にはペニーブラックでお馴染みのローランドヒルが郵便事業の経営改善の観点から取り組んだ結果、英国郵便制度の根本的な改革を実現して、その後の英国の発展に大きく寄与したことは本書の読者ならば常識です。

郵便事業も永続するためには、会社経営同様、収益を上げる必要があります。情報伝達手段が手紙から電子メールなどの手段にとって代わられて郵便物が減少しつつあるなかで、世界各国の郵便事業はたいへんな困難に直面していることは外国切手を集めているコレクターには日々感じていると思います。

このような状況下で、我国では年賀郵便という金の小槌があるのは幸いなことですが、これは郵政の不断の経営的努力の賜物であることが本作品から読み取ることができます。

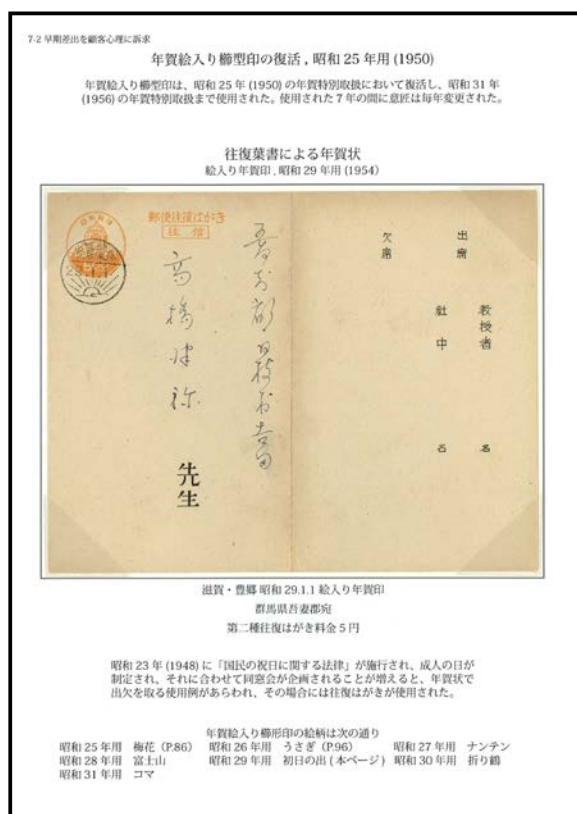
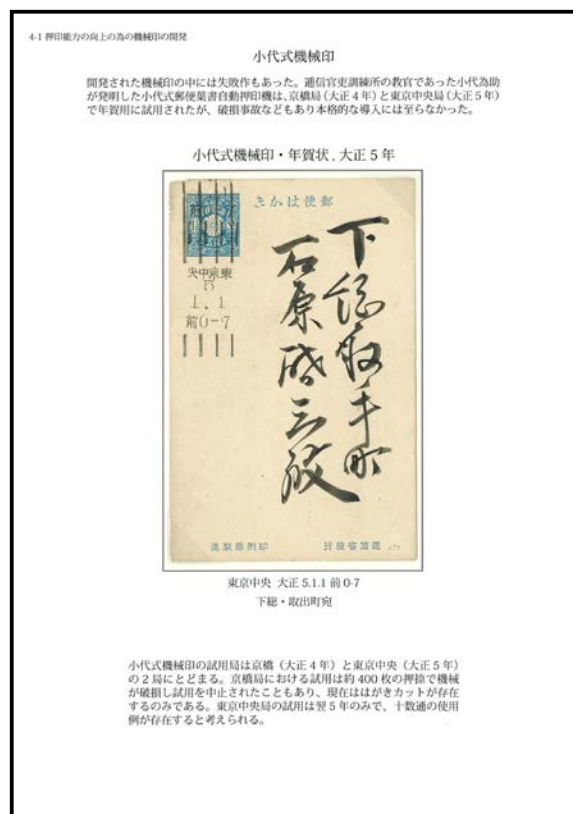
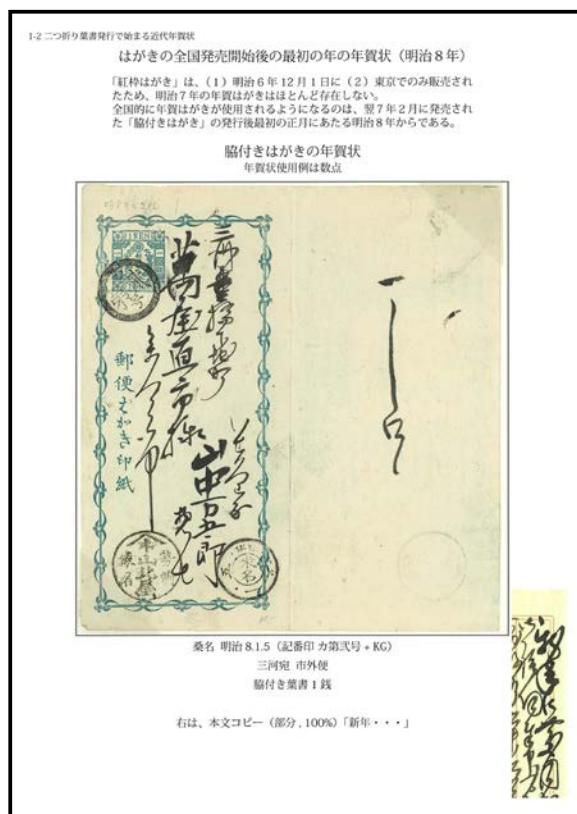
例えば昭和12年に年賀状自粛運動が起きたことに対して、昭和15年まで年賀特別扱を引っ張るのは当時の世相から勘案するにたいへんな苦勞があったことが分かります。これをどのように本作品で料理してあるかは本書を購入して、堪能してください。決して損したとは言わせません。

さて、第1フレームから第6フレームまでは競争出品向けのレアなアイテムも多数展示されており、我々年賀状コレクターの目を楽しませてくれます。



第7フレーム以降は新しい年賀状についても、単なる年度順の羅列に終わらず、毎年々の年賀郵便マーケティングの観点からのアイテムが選定されていますので、こちらにも新しいものは駄物で価値がないかのような考えの方々にもじっくりと味わっていただきたいと思います。

なお、私は10年位たったならこのような作品をまとめようと思っていたので、吉田氏に先にやられてしまい、個人的には悔しい思いがしています。



古今東西郵趣文献書評

< JAPEX2015 > 記念出版

年賀郵便 - 年賀状と切手の歴史 -

安井 浩司

本企画展は、最初の年賀切手が発行されて 80 年を機に、年賀郵便に関連した幅広い切り口からの作品を集めるために企画展として開催されました。

JAPEX 実行委員会や日本郵趣協会からの熱心な働き掛けも功を奏し、競争出品も含め、13 名 15 作品、67 フレームもの大規模な展示が実現しました。

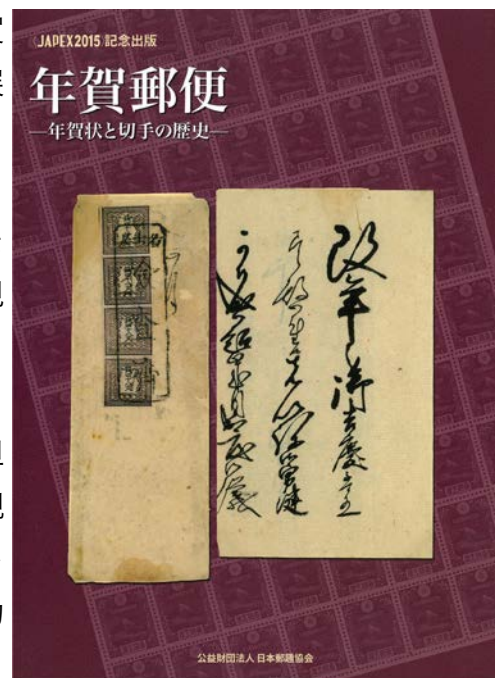
年賀郵便の人気の高さが改めて裏付けられるとともに、企画担当者の狙いとおりの年賀郵便の多彩な切り口が表現されて、参観者の方々にとっても年賀郵便のおもしろさ・奥の深さを理解していただくことができたのではないかと、企画展としては大成功であったと感じています。いずれの作品も出品者の意図がよく理解できて、たいへん興味深いのですが、本書には 6 名 7 作品が紹介されています。

本書は 3 部に分かれており、第 1 部で、年賀状と切手の歴史を解説しています。飛脚便の時代といっても、幕末動乱期以前となる嘉永 6 年以前のものは都道府県市町村の文書館・博物館或いは大学等の公的な研究機関に収められているため、専門家ではない我々が入手するのはまず困難です。

幕末期～明治初年の飛脚便についても商用便や廃仏毀釈のおかげで寺社宛のものが古物市場に出回ることがありますが、武家や公家の年賀状は個人の力では困難です。

また、郵便制度が始まった翌年の明治 5 年の年賀状はありますが、新暦への切替で大混乱した明治 6 年の年賀状は未発見でした。しかし前島密差出の年賀状が発見され、郵便史研究会で発表されたことを紹介できたのは解説者冥利につきます。

第 2 部のマテリアル精集ではカラーで年賀状の貴重なアイテムが紹介されています。企画構成を担当された日本郵趣出版社の千葉晋一氏のセンスの良さが光ります。何度も推敲に推敲を重ねたとご本人から伺いました。



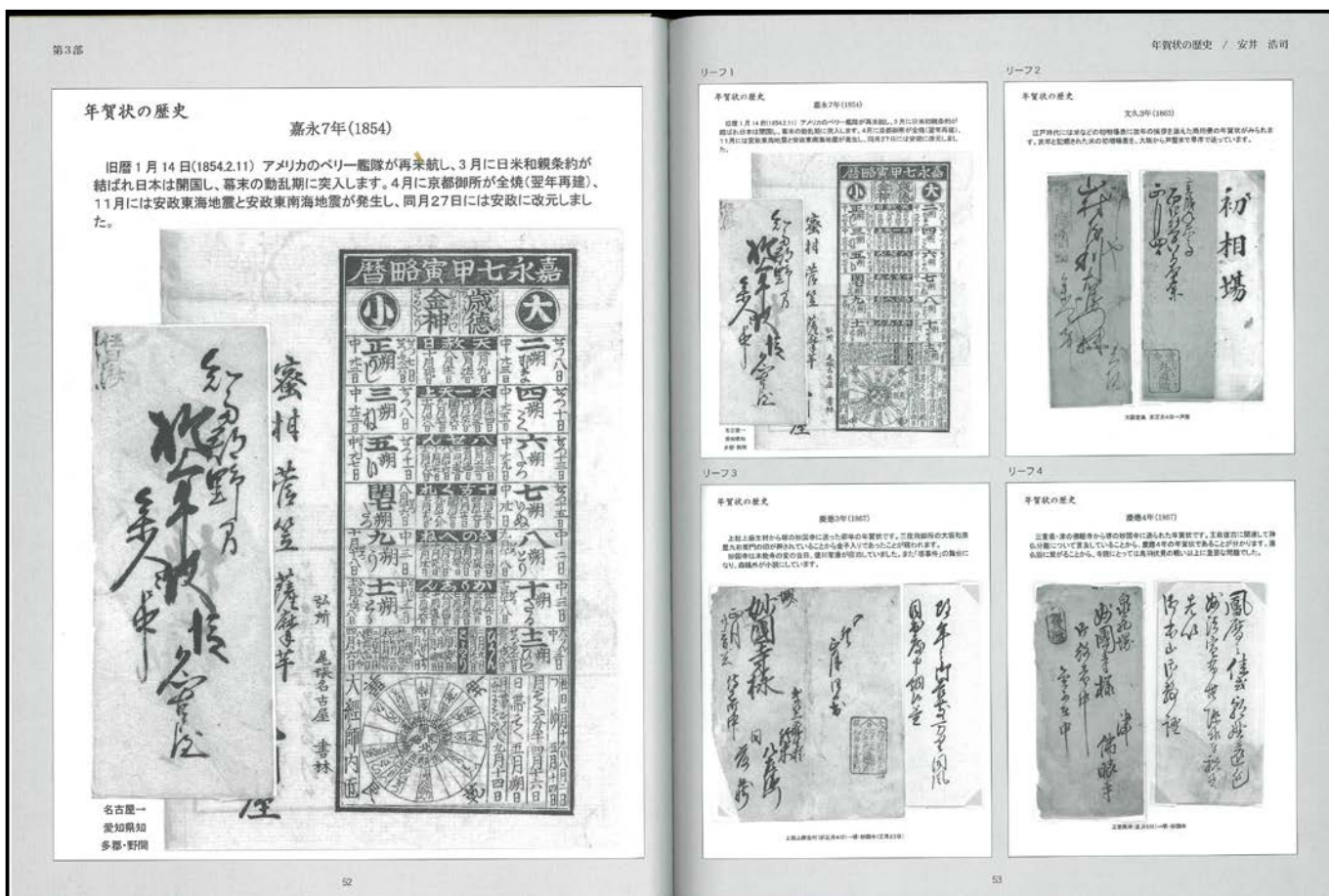
また、＜ JAPEX85 ＞ 記念出版「年賀」で紹介されたアイテムより格段に進歩したアイテムの数々は年賀状コレクターの集めるべきアイテムのメルクマールになると思います。年賀状は他の郵便物に比べて残存数が圧倒的に多いので、2 匹目 3 匹目のドジョウが見つかります。粘り強く探してください。また先輩コレクターが集めたエンタィアの中に興味深い年賀状が紛れ込んでいることもありますので、地元の郵趣会に参加することをお勧めします。

第 3 部は 6 名 7 作品のリーフ図版が掲載されています。当初は 1 ページに 6 リーフ掲載する予定でしたが、1 ページに 4 リーフ掲載することで、参観しているかのように見やすく改善されました。

作品名と出品者を以下に紹介します。

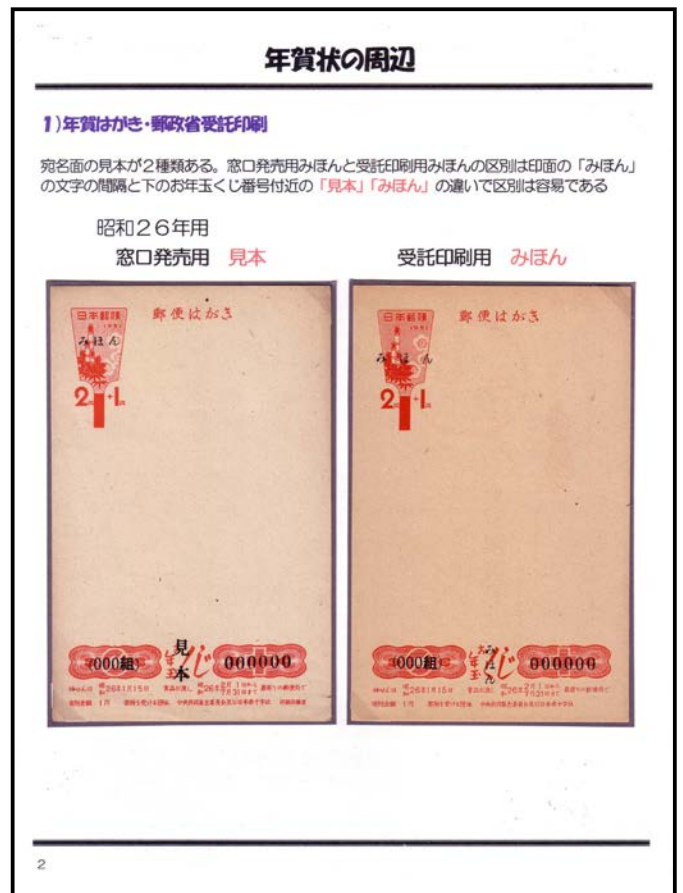
年賀状の歴史	安井 浩司
年賀郵便の歴史	吉田 敬
年賀と郵便の関係史	森下 幹夫
外地および樺太からの年賀状	藤波 誠治
昭和 11-31 年用年賀切手	栗 篤吉
戦前絵入り年賀印	栗 篤吉
小判はがきの年賀状	那須 伊允

それぞれ作品から出品者の思いが伝わってきますので、お気に入りの作品を参考にして年賀状を集めていくと、更に年賀状を集めるのが楽しくなること請け合いです。



なお、本書には掲載されていませんが、郵趣研究 129 号（2016 年 4 月発行）には本企画展で金銀賞を受賞された山田克興氏の「年賀状の周辺」の解説記事と全リーフが掲載されていますので、こちらもぜひ購読してください。（PDF を本号付録に収録）

今までにない切り口の年賀状作品です。私もこれらの年賀状は持っていますが、このような観点でまとめることはまったく思いも付きませんでした。初めてのことは、お手本とすべきものがないので、本当に苦勞されたことがこの作品から伺えます。



最後になりましたが、本企画を立案された森下幹夫実行委員長をはじめとする JAPEX 実行委員会の皆様方、事務局業務をご担当いただいた寺尾幸治氏と原口三四郎氏をはじめとする日本郵趣協会事務局の方々、我々出品者の作品をもとに本書の企画構成を担当いただいた日本郵趣出版の千葉晋一氏と千葉氏の後任として、最後の仕上げを担当いただいた最上邦昭氏など沢山の皆さまにたいへんお世話になりました。深くお礼申しあげます。本当にありがとうございました。

ジャパNSTAMPオークションニアレポート

鯛 道治

2016年5月21-22日の92回フロアセールのレポートです。déjà vu とでも言いたいようなお話が多いのです。我ながら、よく覚えていたものだと思います。真偽に関しては私の感性での評価です。客観的な裏付けは取っておりません。このレポートでは、ハンマープライスにフォーカスせずに、不思議な引出しを漁って見つけ出したお話を綴ります。

Lot1167 旧小判2銭狸 ○二三四五号 単片不統一

最低値 30,000 応札 6 スタート 78,000 落札値 78,000



○の中に漢数字が4つ・二三四五号の消印です。大多数の人が真偽を疑っていました。出所はE-Bayの外人向けのお土産品、他は皆本物の使用済を貼っていたそうです。東京の下見会での話です。

狸2銭の大傷を貼ったエンタを持って来てきた人がいて、念入りに下見をされていました。○に・・四五号、ぴったり一致したのです。併用印はKG印・常陸那賀郡／額田です。開局は6年10月14日、記番印が配給されてもいいはずですが、金子入りを扱わない局なので不配給、○二五十号の平潟と同じような類似印を調整した・・のでしょうか。

近辻さんの、新版・明治郵便局名録では、7年12月16日が開局日です。この違いに何か意味が有るのかも。

メールビッドは狸の単片とすれば、思い切った値段だったのですが、絶対の自信が有ったの入札だったのでしょうか。情報を持っている人は強いのです。

Lot1311 旧小判 50 銭薄紙 P13 未使用

最低値 50,000 応札 3 スタート 95,000 落札値 95,000

旧小判の目打、製造面のお勉強です。

出品物は全ての文献で未発表の珍品、どうしても色眼鏡で見られます。分類では【薄紙 P13】以外では有り得ません。このステータスでオークションに載せるのなら、最低値 1 万円でモノクロか、表紙に使うかのどちらかです。乞う下見や、as is ならオークショニアは切腹です。



表紙に旧小判 50 銭の目打 13 が 2 点載りました。Lot642 は後期の白紙です。ビッドは 13 人、スタートは 11 万、場で競って、メールに落ちての 175,000 です。因みにもう一枚手元に有ったので、ヒロシマ・ドラフトに 18 万で出したら、きっちり売れています。

セールでは 1 番札は 20 万++、薄紙 13 は、これより安いことは無いはずですが、でも、結果はビッド 3 人で 95,000、余りに可哀想なので、私がメールで支えていました。

このパターンは、普通は 100% 負けるし、私の支え数字の上で 2 人以上が競るはずなのです。でも今回はメールの一声でケリ、何なんでしょうか。この類が大好きな人が、場に来ていて、手を挙げなかったのです。

??? で聞いたら、記事を見てなかった、白紙 13 が 2 枚だったと思ったとの事。だから、薄紙だよ、要る? と聞いたら、欲しいの返事、3 分間で取引成立、お値段は落ち値は関係なし、私の評価、手数料は無しですが。良いお買い物だと思います。

この目打には縁が有って、45 銭の白紙で 2 枚見えています。もう 1 枚、12 銭の白紙にも有り、オッペンレンダー氏が持っています。番野さんと話をした時、ペアか耳付を見つけようが結論でした。旧小判の最後期印刷の目打 13、30 銭の白紙と、3 銭の木綿、10 銭の無地なら、見つかって不思議はないのです。

都の殿様が 1997 年？のアメリカの国際展に出品された旧小判のコレクションを見せてもらったことがありました。45 銭の未使用のページ、単片 5、ペア 1、田型 1、ど真ん中に枠付きで、無地の 13 が鎮座していました。マージンは十分、日本郵趣連合・市田さんの鑑定書付、メキシコへ行った小川孟さんから来たものです。紙は確かに無地、意見を聞かれたので、率直に言いました。

無地の 13 で使うのは無理でしょう。北の空に南十字星ですよ。12.5 がブレタ物なら可能性は有るのですが、鑑定書が有るから使うというのは世界一の小判のコレクターがやってはいけないのではないのでしょうか・・・。

もう 20 年以上前でしょうか、3 銭の木綿紙 11N が、ホリデーインの米国サンフィラのセールに出たのです。最低値は 10 万かな。場にいた小判のベテランさんに聞きました。やる？即答でやらない、紙が違うから。フロアでは手が挙がらず、メールの一声上で落としました。13 万だったと思います。

連合の鑑定を取って、手彫～田沢の未使用バラエティーのビッグコレクターにプラーベートで売りました。和紙の 1 銭は 19 版以外、黄 2 銭はコンプリ、4 銭は 15 版はどうか分からないけど、他はお持ちです。絶対に欲しがることは分かっているの値付けですが、私は優しいので、大台を少し切りました。

後になって田畑裕司君が教えてくれたのですが、その現物はウッドワードの和訳本に写真が出ているその物です。W 氏→ブラッドショウ→エドモンド・バンノおじさんの流れでしょうか。この箱書きを強調して売られたなら、ハンマープライスは桁が一つ上がったでしょう。

飛び込めばいいことが有るのですよ。

Lot1503 新藤 20 円銘付 10B 正二連 1

最低値 60,000 応札 3 スタート 250,000 落札値 250,000

Lot1497~1516 は、去年の JAPEX で、カラーマークのブロックを売った人の銘 10 のパートの第一部です。

8 月のセールで 2 次円単位、最後が JAPEX で 1 次円単位を出してジ・エンドです。今回の物でも、最後までその気が残っていたものなので、希少性も状態も一級品でした。オークションニアとすれば、この上なく楽が出来るのです。ロツティングに悩まずに、則編集に入れるのは、極めて稀なケースです。

この目打の特徴明瞭な物は、皆さん熱心に探されています。ハードルを上げて、誰が見ても分かる正の特徴の有る物は、5 点有るか無いかでしょう。

終わった後で随分聞かれました。幾ら入っていた？スタートの 25 万が微妙でしょうか。手を挙げれば一声では降ろせないし、手数料込みで 50 万はしんどいし、みたいな評価だったのでしょうか。

松の 20 円の正二 (特徴明瞭) ならもっと行くし、オシドリの 3 版 (極美) もそうでしょう。藤はオークションのバイヤーとして、1 ~ 2 番手の人は持っていてしまっているということなのです。次出ても、20 ~ 30 万と言うレベルでしょう。



Lot2381 乃木 2 銭単片 ローラー ネム口勇留 南千島 齒舞諸島

最低値 30,000 応札 5 スタート 140,000 落札値 210,000

北方領土の消印です。局名録では根室でなく、千島の花咲郡・「ゆり」なのです。但し、カタカナローラーの国名表示は何故かチシマでなく、ネム口、評価に迷うし、買わない理由が見つかる悩ましさがありました。

人物切手に逆向きの⑧印、ルックスが今一なので、表紙には使えません。乃木なので、持ってなければ、買わねばならない人がいたのですが、それ以上にメールの札が強かった。半値以下で落ちました。

お遊びの情報ですが、よく見かける局で、齒舞と言うのが有るのです。



根室齒舞で花咲郡、丸一や縦書で結構見ます。明治 32 年 11 月 1 日の開局です。千島の齒舞諸島の消印を掘り出したと自慢されたら、返事に困ります。平成 18 年までは特定集配局だったのです。ロケーションは齒舞諸島でなく、北海道の根室市の齒舞に有る、日本の局なのです。

カタカナローラーの、ネム口齒舞、もし有ればひとしきり話題になるでしょう。行政的な位置づけで、南千島と書いて良いのか悩みます。

Lot2120 モーリタニア UPU みほん 大白・旧毛 6 種をベルンの UPU 便箋に貼

SPECIMEN COLLECTION MAURITANIE のゴム印押し

最低値 100,000 応札 1 スタート 100,000 落札値 100,000



今となれば書いても良いと思うのですが、アフリカ植民地各国の UPU みほんを、本邦で最初にマーケットに出したのは私でしょう。James Bendon の名著が手元に来て、完全に素性が知れました。

SPECIMEN はカムリ・新小判あたりで、Natal か Bechuanaland、ULTRAMAR は菊でアンゴラ、GAMBIA みほんが、新小判 1 円のみほん加刷に GAMBIA 消、それ以外に日本切手に有るのが、いろんなタイプのアンゴラかゴア、今回の出品の MAURITANIE と、MADAGASCAR なのです。

基本的な共通点は、ベルンの UPU の便箋に複数枚貼って有り、出てくるときは纏まって出現します。各国の郵政当局が UPU に未使用を送って、多分、UPU のアフリカ局がゴム印を持っていて押している・・・、限定された列強のアフリカ植民地のみという出方からして、配布された国からではないと思います。

因みに、ベンドンの著書は、弊社で取り次ぎ、定価 85 ポンド+送料 15 ポンドですが、15000 円で販売します。この類は、原則として 1 点もの、状態云々は無意味です。



弊社の出品物は、少し前にフランスのオークションに出た物ですが、ごく最近、スイスのハーマーにマダガスカルのが出ました。画像のカンムリは、S.Fr4200 = 邦貨で 56 万位で落ちています。カンムリはちょっと別格ですが得体の知れない、変なゴム印加刷に戸籍を付けられて、私としては満足しています。



JAPAN - Specimen Stamps. 1916, Heir Apparent complete, The Madagascar UPU SPECIMENS, horizontal strips of 3. Affixed to piece and tied by strikes of the "POSTES ET TELEGRAPHES / COLLECTION / DE / BERNE / MADAGASCAR" handstamp in red. A unique group. Scott 152-154. J.S.C.A. C15-17. (Photo). Est. 1 000 - 1 500 CHF.

カンムリは流石に買っていませんが、別物を少し買いました。税関から問い合わせが来たのです。HS コードでは 97.04、関税はゼロです。日本製なら関税定率法 14.10 で消費税も無条件免税ですが、条件は、形状を変えずの再輸入、税関が気づくかどうかでなく、プロとしての説明がしたかったのです。

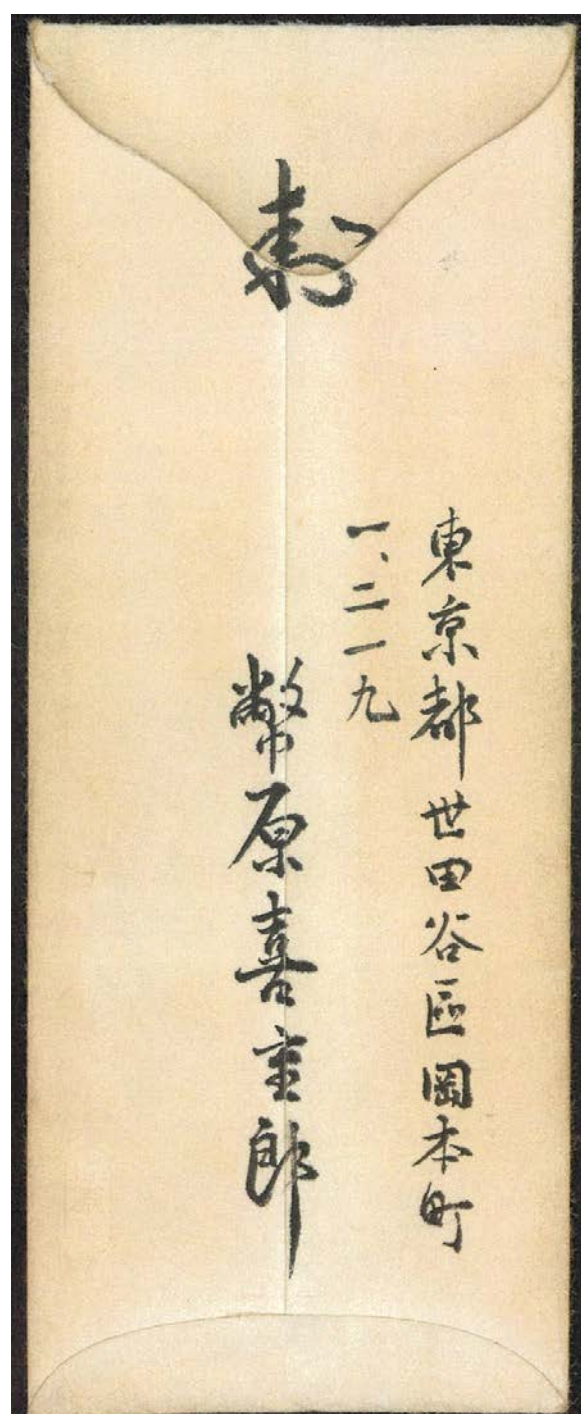
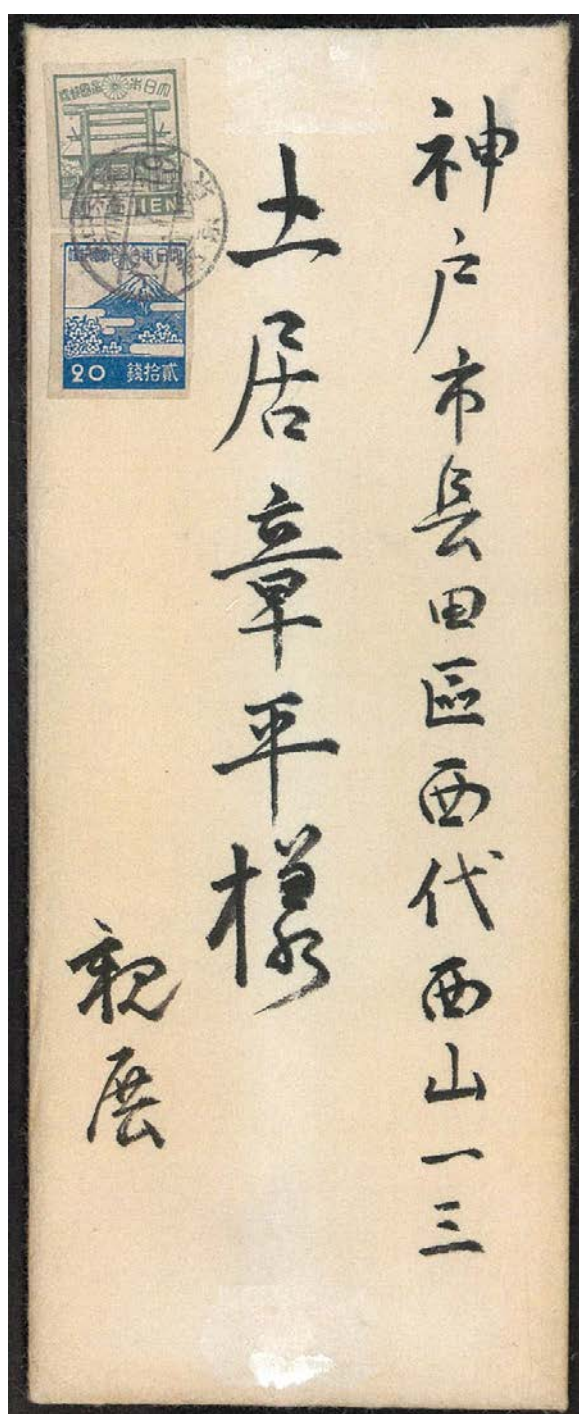
ベルンで押したゴム印に意味が有る、だから、原産国はマダガスカルかスイスですと答えました。これは免税にはなりません。

Lot2359 靖国 1 円、3 昭 20 銭貼 櫛東京中央 22.7.19 東京都 幣原喜重郎直筆中身入り

最低値 50,000 応札 7 + W.D.

オークションレポートとすれば異質でしょうが、周知することに意味があるので記録に留めて置きたいのです。預かった時点で、単独のマテリアルとして見れば問題ないと思いました。強いて言えば、差出人の幣原喜重郎の総理在任期間が昭和 20 年 10 月 9 日～21 年 5 月 22 日、靖国 1 円の出現が 21 年 3 月なので、現役総理期間なら、そして中身が憲法起草に絡むものなら、もっと燃えたのになと思ったのです。6 人のビッドで 1 番札が 16 万でした。

W.D. は、1 番札の上で、私が買って、その後に返品処理なので入札数は 1 プラスです。



メールで情報もらったのですが、同じ名前の宛先のエンタが2通、大阪のオークションに出ていた、ちょっと気になるので調べなさいでした。

出品物を XRF に掛けたら、消印から Ti が出ました。W.D. にするしかないのです。東京の下見会で偶然にも、関連のカバーのコピーを見せて貰いました。神戸の土居章平・長田区西代西山・地番が靖国貼が一三、他の2通が一四です。一見筆跡は極似です。差出人は違う人。他の2通は、記念切手貼りの手押年賀のウサギ消、灰勅無目打田型貼の速達です。

筆跡を根拠に真偽を論ずるのはフェアでは有りません。訴訟に耐えうる筆跡鑑定なら、10文字で30万円かかります。でも、この3通を並べたら、欲しいの意欲は萎えるでしょう。切手展にも展示された2通の真偽は分かりませんが、XRFでの検証が必要でしょう。いかにも出何処が悪すぎます。

今回のロットに移ります。

2013年9月のヤフーでの落札で、切手でないカテゴリーの出品で3万円で落としています。短冊や書簡を出品している京都のブローカーとのことです。メールで問い合わせましたが返事無し。ちょっとした共通の知合いがいたのでそれとなく聞きました。

自分で作る能力は無い、市で紙物のロットを買って、ばらしてヤフーに出している人との事でした。Mが靖国をゴミのロットに入れるのはどうかと思いますが、今の奴はかなり粗いことをやっています。

金を作る為でしょうが、私のせいで売り場所が無い、だから福丸の市に、ポストークアルバムを出して、1ページ目に素敵な手彫のカバーを忍ばせる。競らないと高くないので、自分が発句して鴨が付いてくるのを待つ、落札値は45万、落とした人の素性は不明、必然的に遠からずにヤフーでしょう。

出品者は善意の第三者、誰かの紐付きではありません。後で気づいてもどうすることもできません。しっかり注意して買ってください。今書けるのはここまでです。

Lot2374 消印のカットのみ dKN3 上海/清國・十八/十・十八

最低値 10,000 応札 3 スタート 10,000 落札値 18,500



上海の d KN3 を見つけたので出品物として送ります。メールで情報を貰った時に、則反応出来たのです。21 年前の茶屋町ボイスでのフロアで売って、出品者は海外の日本人、落札者は東京のディーラー、競ったのが善太と M、最低値が 5000 円、落札値が 4 万円？何故かすべての因子を鮮明に覚えていたのです。オークション誌の綴りを繰ってみたら、一発で見つかりました。

PA5 回 (通算 14 号) 1995. 5. 13 の Lot586、U 小判 1 銭貼カット 4 枚プロペラ消 + JN3 上海/日本郵便局です。今回の d KN3 は、JN3 の一つ前の消印でしょう。◎印としては抹消印では使わずに、JN3 は 4 枚プロペラ、d KN3 はクロスロードから 5 枚プロペラの併用印、そして恐らくは、印刷物帯封の専用印だったと思うのです。オフカバーの単片なら、全体像は見えませんが、穿孔の NCH の新聞帯封も、完全な物は未見ですから。



上海の◎和文消など、今までは有ることすら想像もされていなかったのです。今回のマテリアル、値段がどうこう言える物では有りません。誰も使えませんから。そして落としたのは、21 年前と同じ人、前のも売らずに持って来て自慢してくれました。2 点セットなら良い商品になるでしょう。



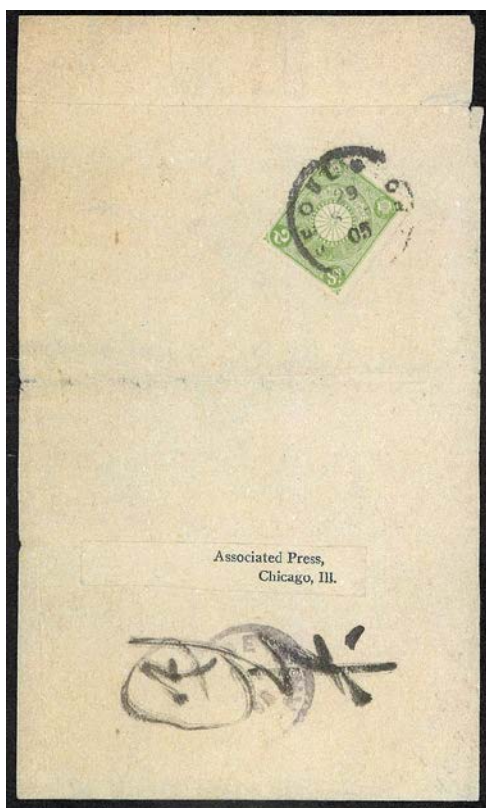
更に話は続きます。滅多に開けない引出しを探したら、お目当ての物が見つかりました。菊 2 銭の異形の年号 2 字、上部に IJPO が逆立ち、下部に局名 SEOUL です。戯れで私がどこかで記事を書いたのですが、お二人から情報を貰いました。

馬場俊六さんからは、10 点ほど持ってるよ、1 点は 1 銭のペア、他は皆菊 2 銭の単片、長竹一彦さんからは、菊 2 銭の単片の完璧な◎印、私の物も含めて、データは 06 年 2 月のニケタ、ゴム印の特徴が出ています。

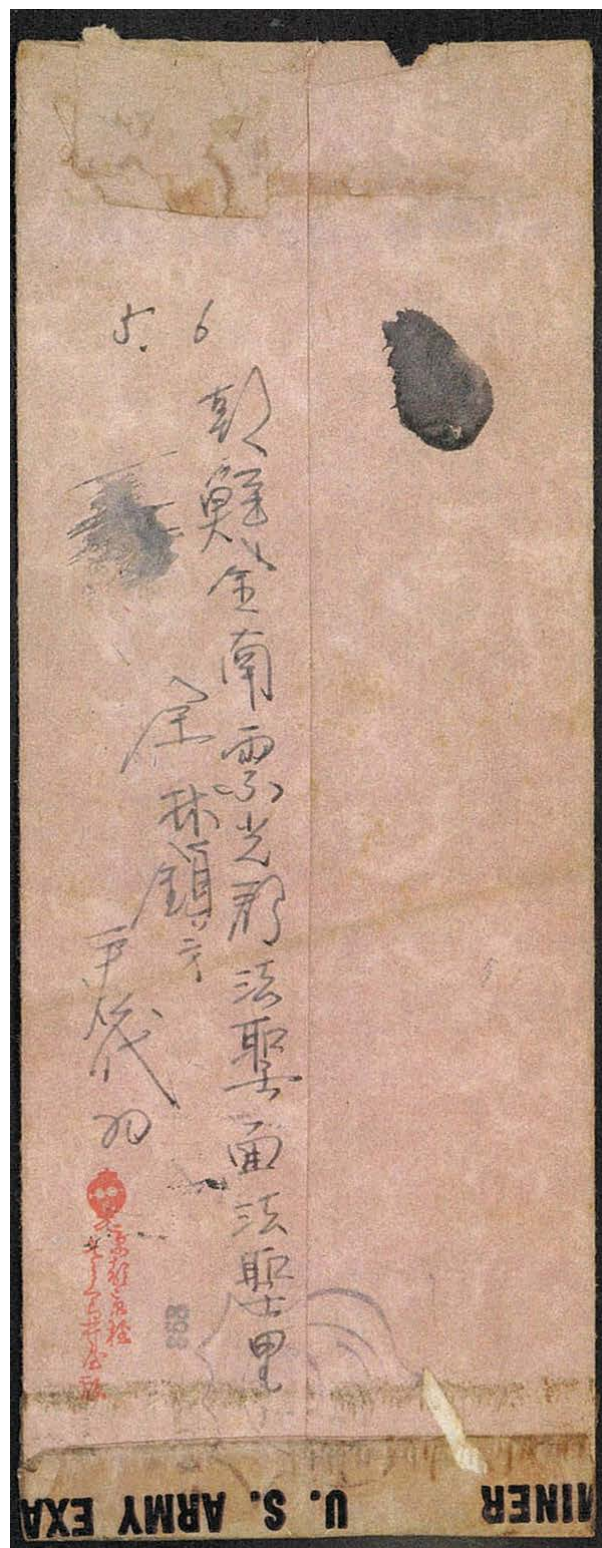
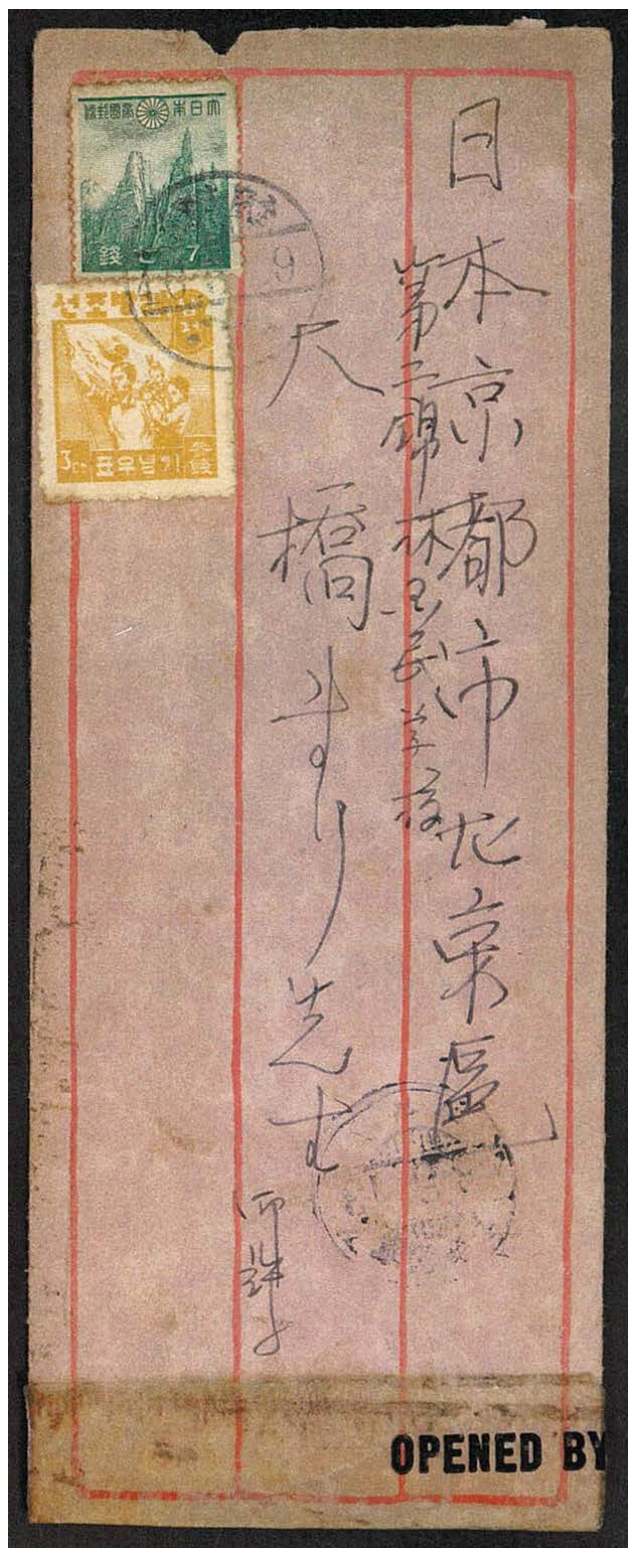
正規の年号 2 字の国名表示が IJP&TO か、IJPO かを調べる必要が有るのですが、この異形の 2 字印も、印刷物帯封専用抹消印であり、06 年 2 月前後に使われて、楕型印に切り替わったと見るのです。

たまたま、忘れていた引き出しから出て来たのが、菊 2 銭貼の SEOUL 05 年 9 月 29 日の帯封です。こちらは真っ当な姿です、でも、国名が (IJ) PO、どうでも良いけど、最新データを更新です。これだけ記事を書けば、消印のカットの d KN3 上海も将来的には 20mm CHEFOO 朱印と同じく、在中国日本郵便局の珍印として戸籍を得られると思います。

完全なエンタが見つかるまでには更に 20 年かかるかもしれませんが。



Lot2574 終戦直後日朝コンビネーション 1 昭 7 銭、解放朝鮮 3 銭貼京都宛 櫛全南法聖浦 46.5.9 三星
最低値 60,000 応札 4 スタート 100,000 落札値 250,000



解放朝鮮での日本切手が使われたのは、昭和 21 年 6 月末までです。少ないけれどたまに見ます。日本宛の封書料金は 10 銭、為替レートは 1 銭 = 1CH、米軍軍政下ではハングル加刷が 46.2.1 ~ 4.30 まで、5 月 1 日に解放記念が発行されています。理屈で考えれば、日本切手とハングル加刷が解放記念のコンビネーションが有ってもおかしくないのです。

前者は46年の2月から3か月、後者は同じく5月と6月の2か月間です。でも、完全な民間の実通便でこんな物が有るとは誰も思わないでしょう。おまけに、PC印の番号が恐らくは朝鮮検閲と思われる。まともなら100万でも不思議ではない。想像を絶する使用例だと思うのです。メールの1番札に、場での代行も含めて、15万は3～4人いたのですが、この落ち値はちょっと拍子抜け、「厳島」無目打田型位の価値が有ると思うのですが、寂しい結果になりました。

本物、偽物のお話をいくつも書きました。面白いでしょう。結論は貴方が自信をもって決めれば良いのです。飛び込めばいい思いが出来るのがフィラテリーの醍醐味なのです。

The Philatelist Magazine

ニューヨーク 2016 国際切手展特集



米国 1954 3 セント普通切手 用紙折れ

US, 1954 3cent definitive paperfold

The Philatelist Magazine

当誌は、無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社が運営する「スタンペディア日本版」の会員向け機関誌です。機関誌は年 4 回 PDF で発行され、年会費（2,000 円）を納めた会員には発行の都度登録 E メールに通知があり「マイ・スタンペディア」よりダウンロードできます。また印刷して読みたいという要望に応えコピーしホチキスで綴じた紙版をお送りするサービスも提供中です。

ニューヨーク 2016 国際切手展特集

国際切手展 World Stamp Show New York 2016 受賞記録抜粋

NY 2016 とアメリカの国際切手展 和田 文明

NY2016 参観記 和田文明

ニューヨークまでの軌跡 鎗木 顕

ニューヨーク展で大金賞を受賞して 長谷川 純

WSS NY2016 に出品して 池田健三郎

WSS NY 2016 コミッショナー対談

WSS NY2016 コミッショナー活動に係る収支のご報告

現地号外とフォトアルバム

本誌以外における、ニューヨーク国際展の記事の掲載予定について

ここ十年で最大の国際展と言われる NY2016 を記憶と記録に留めるため、WSS NY2016 日本国代表団は、当社雑誌以外のフィラテリー雑誌に、積極的に記事を提供することにしております。以下に現在決定済みの掲載記事についてご案内いたしますので、あわせてご覧ください。また他にもご寄稿を希望される雑誌の編集者の方がいらっしゃいましたら前向きに検討いたしますので、お問い合わせください。

郵趣 8月号〔(公財)日本郵趣協会〕 参観レポート (白黒 2 ページ) 担当：菊地恵実
郵趣研究 8月号〔(公財)日本郵趣協会〕 伝統郵趣作品についてのレポート (白黒 8 ページ) 担当：吉田敬
全日本郵趣〔(一社)全日本郵趣連合〕 WSS NY2016 レポート 担当：池田健三郎
たんぶるぼす〔株式会社鳴美〕 World Stamp Show NY 2016 参観記 担当：木戸裕介
北陸郵趣 8月号〔北陸郵趣連盟〕 WSS NY2016 レポート 担当：吉田敬

国際切手展

World Stamp Show New York 2016 受賞記録抜粋

2016/5/28(土)～6/4(土)に、米国ニューヨーク市の Javits コンベンションセンターで開催された国際切手展の受賞記録です。(抜粋)

6月2日夜に行われたパルマレス・パーティで発表されたグランプリ選考結果及び日本コミッショナーを通じた出品物の審査結果をご報告いたします。

グランプリ選考結果

グランプリ・ド・ヌール (Grand Prix D'Honneur)

Panama: First Issues as a State of Colombia and their forerunners (**Castro-Harrigan, Alvaro**, Costa Rica)

以下は同候補

"Kassandra Collection" – Greece Large Hermes Heads (1861- 1886) (**Andreadis, Stavros**, Greece)

New Zealand Postal Stationery 1876-1940 (**Schumann, Stephen D**, U.S.A.-W)

The Eagle Shield Stamps Sent to Foreign Destinations 1872-1875 (**Ljungh, Jan-Olof**, Sweden)

グランプリ・インターナショナル (Grand Prix International)

China: The Postal History of Mongolia 1841-1921 (**Wei, Gang**, China)

以下は同候補

The Swedish Postage Reform in the 1850's: 1855-1858. The Coat of Arms Type 1 "Skilling Banco" (**Douglas, Gustaf**, Sweden)

Maritime Mail of Spanish Colonies in America (**Prats, Jesus Sitja**, Spain)

Universal Postal Union ("UPU") and its impact on Global Postal Services (**Gough, James Peter**, U.S.A.-W)

グランプリ・ナショナル (Grand Prix National)

The United States Imperforate Issues of 1851-1856 & Their Importance in an Expanding Postal System (**Eubanks, Gordon**, U.S.A.-W)

以下は同候補

Boston Postal History to 1851 (**Schwartz, Mark**, U.S.A.-E)

Life and fate of the American Natives (**Hess, Dr. Wolf**, Germany)

U.S. Civil War Era Fiscal History Panorama (**Mahler, Michael**, U.S.A.-W)

日本からの出品作品一覧（文献部門を除く）

出品部門	作品	F	出品者	結果
チャンピオン	L.VBeethoven-his life in a historical context and his legacy	8	Yukio Onuma	
チャンピオン	Japanese Post and Foreign Postal Activities in Korea 1876-1909	8	Kazuyuki Inoue	
伝統郵趣・米国	The Flat Plat Printings of the Fourth Bureau Issue 1922-38	5	Kunihiko Tamura	LV 85
伝統郵趣・欧州	Classic Germany	8	Takashi Yoshida	LV 86
伝統郵趣・欧州	Austria & Lombardy-Venetia the 1850 Issues	8	Tamaki Saito	LV 89
伝統郵趣・その他	Japan 1871-1876 Hand Engraved Issues	5	Yuji Yamada	G 90
伝統郵趣・その他	Australia – Kangaroo and Map design postage stamps	8	Hironobu Nagashima	G 91
伝統郵趣・その他	Private Printing Period in Victoria	8	Masayasu Nagai	G 92
伝統郵趣・その他	Japan Earthquake Emergency Issue 1923-1924	8	Tatsutoshi Kamakura	G 90
伝統郵趣・その他	Japanese Occupation of the Philippines 1942-1945	5	Akira Kaburaki	V 81
伝統郵趣・その他	RYUKYUS 1945-52	8	Tsukasa Ishizawa	G 90
郵便史・米国	Post Office Forms, Including Envelopes created for Conducting the Registered Mail Process 1842-1929.	8	Fumiaki Wada	LV 87
郵便史・米国	U.SArmy Mail and G.H.Q Postal censorship in Japan	5	Gensei Ando	V 82
郵便史・その他	The Japan Couriers 1601-1873	8	Yoshiyuki Yamazaki	G 90
郵便史・その他	Prompt Delivery in Japan from Pre-adhesive Period to 1933	8	Kenzaburo Ikeda	G 92
ステーションナリー	U.P.U Post Card of Japan 1877-1940	8	Masaki Sugihara	LV 86
テーマティク・文化	The History of Cartography-Mapping the World and Regions-	8	Takao Nishiumi	G 90
テーマティク・文化	A History of Hong Kong	8	Yosuke Naito	G 90
テーマティク・文化	The History of Artist's Portraits – The Transition of Western Art over 600 years-	8	Kiyoshi Emura	V 83
テーマティク・技術	A History of the Telephone-Telegraph to Digitalization-	8	Akinori Katsui	G 93
印紙	The Hand Etched Documentary Revenue Stamps of Japan, 1873-1874	8	(Stephen) Jun Hasegawa	LG 95
ワンフレーム	Who is Liberty? What is She?	1	Masaru Kawabe	78
オープン	Tonga Tin Can Mail History 1882-1947	5	Kazuyuki Inoue	V 84

日本からの文献出品一覧

出品部門	作品	出品者	結果
単行本	120th Anniversary of Japanese Commemorative Stamp	Japan Philatelic Society Foundation	LS 76
単行本	International Exhibition History 1865-2004	Yukihiro Shoda	S 72
単行本	General Collection of Japanese Definitives	Stampedia, Inc	S 72
単行本	Handbook of the Roman Letter Machine Cancellation of Japan	Stampedia, Inc.	S 73
単行本	Postal History of the Japanese Military Mail 1894-1921	Jun-Ichi Tamaki	V 82
単行本	Hiroyuki Kanai: "Classic Japan 1871-1876"	The Philatelic Culture Museum	G+SP 91
雑誌	Stampedia Philatelic Journal	Stampedia, Inc	LV+SP 88
雑誌	Stamp Club	Stampedia, Inc	S 73
カタログ	Visual Japanese Stamp Catalog Vol1, Vol 2, Vol 3, Vol 4	Japan Philatelic Society Foundation	V 83

当社は今回、4作品を文献部門に出品いたしましたが、フラグシップマガジンである、スタンペディア・フィラテリック・ジャーナルが創刊5年目にして最高点を獲得した上に特別賞までいただくことができました。この結果は予想していなかったもので、大変喜ぶと共に感激しております。

これもご寄稿くださいました、著者の皆様のおかげです。本年秋には第6号を発行いたしますが、相変わらず内容の充実に努めると共に低価格での販売を継続したいと思います。ありがとうございました。

NY 2016 とアメリカの国際切手展

和田 文明

私にとって NY2016 は、2006 年 5 月に首都ワシントン DC で開催された前回の “Washington 2006” (図 1) に続き 2 度目の出品と参観になるアメリカで開催される国際切手展です。

アメリカで最初の切手展が開催されたのは、日本の郵便制度がスタートする一年前の 1870 年で、最初の国際切手展がアメリカで開催されたのは 100 年以上前の 1913 年であります。世界で最初に切手展が開催されたのはドイツのドレスデンで 1870 年というのが定説です (1852 年ベルギーのブリュセルで開催されたとする説もあります)。

国際切手展は 1881 年にオーストリアのウィーンで開催された切手展と 1884 年にドイツのミュヘンで開催されたものが最初であるとされています。1913 年にアメリカで最初の国際切手展が開催されるまでに、ヨーロッパではドイツやオランダの 6 回、イギリスの 4 回など 27 回もの国際展が開催されていました。

今回の国際切手展 New York2016 の開催にあたり、アメリカの切手商組合の月刊紙 “The American Stamp Dealer & Collector” に過去 10 回のアメリカで開催された国際切手展をそれぞれの切手展毎に毎号 3 ページから 4 ページにわたり多くの図番を用いて詳しく紹介する記事が掲載されました。10 回シリーズの『World Stamp Show NY2016 の 100 年のルーツ』という連載で、2015 年 1 月号 10 月号までの期間の掲載でした。(英文)

また、切手誌の “Mekeel’s Stamp Magazine” にも 2015 年 8 月号より、多くの図番を用いてアメリカで過去 10 回開催された国際切手展を詳しく紹介する連載記事が掲載されました。

これらの記事は、World Stamp Show NY2016 の公式ウェブサイトや “Mekeel’s Stamp Magazine” の HP でも PDF をダウンロードして読むことができます。



図 1 “Washington 2006” の記念シール

こうした記事や私自身がこれまで集めて来たアメリカの国際切手展に関する文献や資料に基づいてアメリカの国際切手展の100年の歴史を振り返ってみたいと思います。

図2は、1950年に刊行された190ページ立ての書籍です。この『STAMP EXHIBITIONS』(ASE=Association for Stamp Exhibitions, Inc. 刊)は、CIPEX1947の開催を記録し、これからの切手展の開催のためのハンドブックの役割を持っています。

CIPEX1947に関する規程やフレームの設計図、広報の方法などが紹介され、会場内の多くの写真が収録され、後世に当時の国際切手の様子を詳しく伝えてくれています。

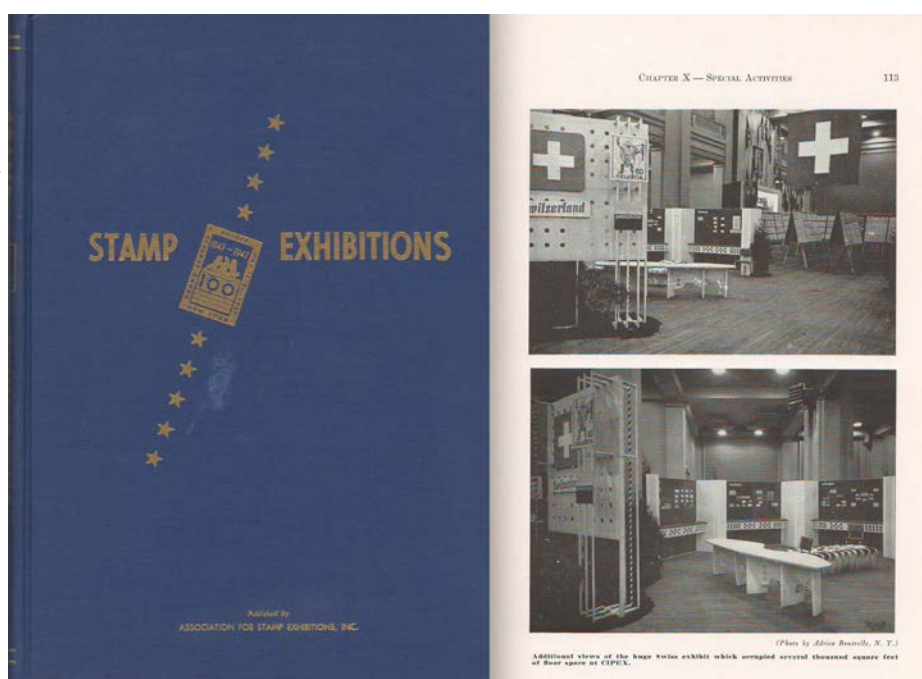


図2 『STAMP EXHIBITIONS』

アメリカの国際切手展はほぼ10年おきの開催となっています。今回の国際切手展“World Stamp Show New York 2016”は、アメリカにとって11回目の開催となります。第1回国際展であるIPEX1913を除いて、末尾が「6」乃至「7」の年に開催されています。これは、イギリスから独立

開催年	国際切手展	開催地
第1回	1913年 IPEX1913 International Philatelic Exhibition	New York, NY
第2回	1926年 IPEX1926 International Philatelic Exhibition	New York, NY
第3回	1936年 TIPEX1936 International Philatelic Exhibition	New York, NY
第4回	1947年 CIPEX1947 International Philatelic Exhibition	New York, NY
第5回	1956年 FIPEX1956 International Philatelic Exhibition	New York, NY
第6回	1966年 SIPEX1966 International Philatelic Exhibition	Washington, DC
第7回	1976年 Interphil '76 International Philatelic Exhibition	Philadelphia, PA
第8回	1986年 AMERIPEX '86 International Stamp Show	Chicago, IL
文献展	1992年 PHILEX'92 International Philatelic Literature Exhibition	New York, NY
第9回	1997年 Pacific '97 International Philatelic Exhibition	San Francisco, CA
第10回	2006年 Washington2006 World Philatelic Exhibition	Washington, DC
第11回	2016年 World Stamp Show NY2016	New York, NY
第12回	2026年 BOSTON 2026 World Stamp Show	Boston, MA

した年が“1776 年”であり、アメリカで最初の切手が発行された年が“1847 年”であり、こうした年にちなんだ周年行事（イベント）の一環として国際切手展が開催されているからです。

1976 年に開催された第 7 回展の“Interphil'76”は、独立 200 周年イベント（図 3）の一環として、独立宣言が起草された古都フィラデルフィアで開催されています。



図 3 アメリカ独立 200 年 (American Revolution Bicentennial, 1776 - 1976)

次回の 2026 年 5 月に独立戦争が始まった独立の聖地であるボストンで開催される第 12 回“BOSTON 2026 World Stamp Show”(図 4)も独立 250 周年イベント“USA 250”(図 5)の一環として開催が予定されています。



図 4 “BOSTON 2026 World Stamp Show”



図 5 USA250

戦後間もない 1947 年に開催された第 4 回展の“CIPEX1947”は切手発行 100 周年を記念して、第 9 回展の“Pacific '97”は切手発行 150 周年を記念して開催されています。

広大な国土を有するアメリカにおける国際切手展の開催地は、第 1 回 (1913 年) から第 5 回 (1956 年) までは、金融と商業の中心地である『ニューヨーク』で開催されてきましたが、第 6 回 (1966 年) 以降は、首都ワシントン DC や古都フィラデルフィア、中西部の大都市シカゴ、西海岸のサンフランシスコで開催されています。今回の 2016 年展は、実に 60 年振りにニューヨークで開催される国際切手展となります。

IPEX 1913

第 1 回目の国際切手展“IPEX”(International Philatelic Exhibition)は、1913 年 10 月 27 日から 11 月 1 日までの 6 日間、ニューヨークのマンハッタンのエンジニアリング協会ビルで開催されました。アメリカで国際切手展を開催するために有力な複数の郵趣団体が 1912 年 2 月に ASE (Association for Stamp Exhibitions, Inc.) という法人を設立しています。第 1 回展のみが記念切手や小型シートの発行が行われていませんが、ハミルトン銀行の支援により初代大統領の肖像を用いた記念シール（ポスタースタンプ）が発行されています。また、IPEX のオフィシャルカタログも刊行されています。

300 以上にも及ぶコレクションの展示は、フレームによるディスプレイ展示などで行われ、審査の結果、「グランドゴールド」や「ゴールド」、「シルバーギフト」、「シルバー」、「ブロンズ」、「賞詞」の 6 ランクの表彰と 5 種類のメダルが贈呈されています。「グランドゴールド」メダルは、IPEX の代表である G. H. Worthington 氏のアメリカ切手のコレクションの他、Sydney Loder 氏のイギリス関連の切手やカバーのコレクション、H. J. Duveen 氏のモーリシャス切手のコレクションに与えられました。グランドゴールドメダルを獲得した Sydney Loder 氏のコレクションは 4 万ドルの価値があると当時報じられていました。

IPEX 1926

第 1 回展から 13 年を経たアメリカ独立 150 年にあたる 1926 年に、第 2 回国際切手展 “IPEX”(International Philatelic Exhibition) 1926 が開催されました。1926 年はアメリカ独立 150 年を記念する年で、以降アメリカの国際切手展は、アメリカ切手発行 150 年の 1947 年と同 150 年の 1997 年を除いて『6』の年に開催されています。

当初、アメリカの独立の聖地であるフィラデルフィアでの開催が目論見られたものの、交通の便や集客力などからニューヨークでの開催となりました。フィラデルフィアでの国際切手展の開催は 50 年後の独立 200 年イベントとして、1976 年 5 月に Interphil '76 として実現しています。又 10 年後の 2026 年にはアメリカ独立 250 年のイベントの一つとしてボストンでの開催が予定されています。

会期は 10 月 16 日から 23 日までの 8 日間で、会場はニューヨークマンハッタンにあった当時最大級のコンベンションセンターのグランドセントラルパレスでした。参観者はおよそ 2 万人といわれています。およそ 300 ページものオフィシャルカタログが 5,000 部刊行されました。

1926 年の第 2 回国際切手展 “IPEX” では、独立 100 年の額面 2 セントの記念切手を 25 枚で構成した切手展開催記念の小型シート(図 6)が発行されたほか、記念印の導入や記念シール(ポスタースタンプ)も発行されています。また、“IPEX”の標語入り機械郵便印も使われていました。

展示作品は文献を含む 650 も作品(168 フレーム、アルバムおよそ 880 冊)が 20 のカテゴリーに分けて展示されています。展示カテゴリー数は、第 1 回の 13 より 7 つ増えています。



図 6 IPEX 1926 の小型シート (プレート番号は #18771)

展示スタイルはリーフを展示用フレームにリーフマウントする方式がメインで、アルバム出品も併用して行われていました。この国際切手展でグランプリを獲得した A. Lichtenstein 氏のウルグワイコレクションは、4 フレーム (1 フレーム、5×6 = 30 面リーフ) のリーフ展示と 3 冊のアルバム出品が行われています。当時のフレームは、5 面 × 6 面の 30 面リーフを展示できる巨大フレームでした。

アメリカ郵政 (U.S. Post Office Department) の展示コーナーでは、切手印刷機が持ち込まれ、記念小型シートの印刷実演も行われていました。この印刷実演された小型シートのプレート番号は #18772 ですが、この版の小型シートは、一般に販売されていません。なお、小型シートの耳紙の部分に INTERNATIONAL PHILATEIC EXBITION/ OCT.16th TO23rd 1926/ NEWYORK N.Y. USA の銘が印刷されています。

TIPEX 1936

第 3 回国際切手展 TIPEX1936 が、前回の 1926 年展と同じニューヨークのコンベンションセンターのグランドセントラルパレスで 1936 年 5 月 9 日から 17 日の 9 日間開催されました。3 フロアで 125,000 平方フィートの会場に 900 作品 3,000 フレームが展示され、来場者は 10 年前の IPEX 1926 のおよそ 5 倍で、10 万人を超えたといわれています。

1929 年に発生した大恐慌後経済が停滞している中での開催でしたが、1930 年代のアメリカでは切手収集は一大ブームで、当時の 32 代アメリカ大統領フランクリン・ルーズベルト (任期: 1933 年 ~ 1945 年) は熱心な切手収集家として有名で、彼の右腕の郵政長官 J. A. Farley (任期: 1933 年 ~ 1940 年) (写真 1) が国際切手展 TIPEX 1936 の開催や航空郵便週間 (National Air Mail Week) などのイベント開催に尽力しています。

なお、TIPEX 1936 の開会式では、郵政長官 J. A. Farley が式辞を述べています。フランクリン・ルーズベルト大統領の前の大統領であるフーバー大統領も切手収集家で、TIPEX 1936 を参観したと伝えられています。

TIPEX 1936 のグランプリには、R. W. Lapham の “Postmaster Provisionals” (郵便局長臨時切手) コレクションが受賞しています。同コレクションは 10 フレームの展示と多数のアルバムが出品されていたそうです。

会場では、250 ページにも及ぶ公式カタログが 50 セントで販売され、5 月 15 日にはニューヨークの Astor ホ

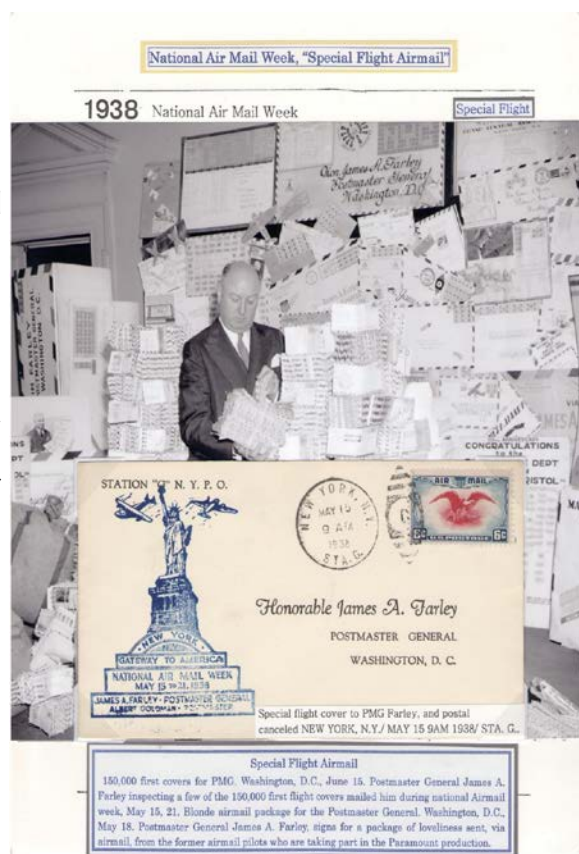


写真 1 1938 年 5 月 15 日から 21 日にかけて開催された航空郵便 20 周年記念の航空郵便週間の記念カバーに埋められた郵政長官 J. A. Farley 氏と同氏宛の記念航空カバー

テルで盛大なパルマレスパーティが開かれています。また、200ドルの料金を支払った切手商ブースが101店も並んでいました。

第3回国際切手展 TIPEX 1936 の開催を記念して、1935年から1936年にかけて発行された4枚の記念切手を組み合わせた無目打ちの小型シート(図7)が発行されています。

この小型シートの上部には、“UNDER AUTHORITY OF JAMES A. FARLEY, POSTMASTER GENERAL”(郵政長官 J. A. Farley の権限のもと)という銘が記されています。また、小型シートの下部には開催場所 (NEWYORK, N.Y.) と会期 (MAY 9-17, 1936) に加え、小型シートのプレート番号 (#21557) も記されています。

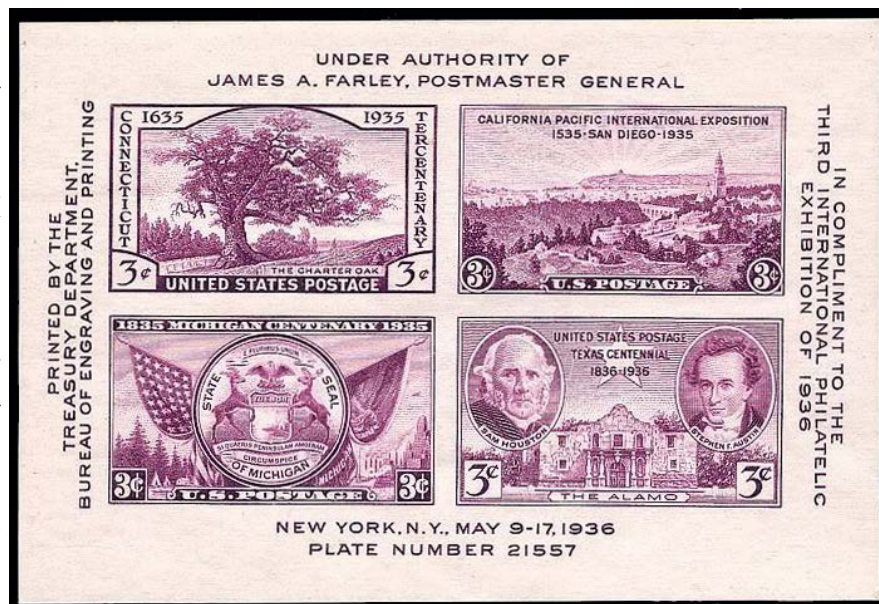


図7 TIPEX 1936の記念小型シート

CIPEX 1947

第2次大戦の終結から僅か2年あまり1947年5月19日から5月25日までの7日間、前回、前々回と同じニューヨークのコンベンションセンターのグランドセントラルパレスで、アメリカ切手発行100周年イベントして第4回国際切手展 CIPEX 1947 が開催されました。参観者は前回と同様10万人を超えたといわれています。

CIPEX 1947 の開催を記念して、アメリカのファーストイシュであるフランクリンの5セント切手とワシントンの10セント切手が組み合わされた無目打ちの記念の小型シート(図8)が発行されています。

イギリス(1840年)やスイス、ブラジルなどでは、第2次大戦中(1939年から1945年)に切手発行100年を迎えたために、切手発行100周年の記念国際切手展を開催することができませんでした。

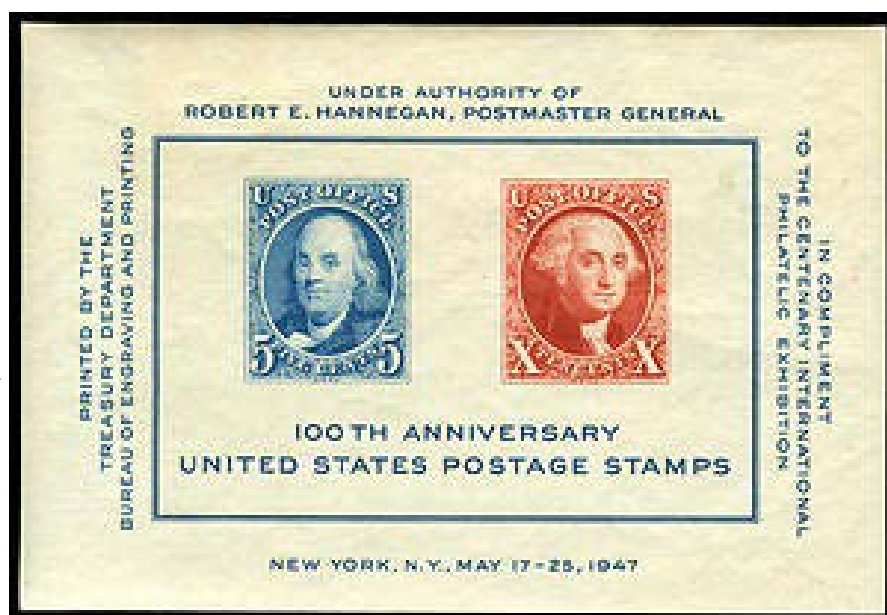


図8 CIPEX 1947の記念小型シート

50 セントで発行された 184 ページのオフィシャルカタログによると、588 人のコレクターが 805 作品 2,100 フレームを出品しています。また、切手商ブースも 120 程出店しています。審査は 14 カ国から 26 名もの審査員で構成された審査チームで行われ、グランプリは Saul Newberry 氏のアメリカ初期のコレクションである “United States 1847~1869” が受賞しました。

パルマレスパーティは、1913 年、1926 年、1936 年の国際切手展と同様に Astor ホテルで開催されました。なお、この Astor ホテルは、今回の New York 2016 のオフィシャルホテルに指定され、2016 年 6 月 2 日夜にパルマレスパーティが開催されたマリオットホテルマキューズの真向かいにたっていました。

第 4 回国際切手展 CIPEX 1947 の記録本であり、国際展、ナショナル展、ローカル展などの切手展の開催のためのハンドブックである『STAMP EXBITIONS』(全 190 ページ, 図 2) が、1950 年に Association for Stamp Exhibitions, Inc. によって刊行されています。

この文献には、本の刊行の 3 年前に開催された第 4 回国際切手展 CIPEX 1947 の内容が多くのモノクロ写真を使って紹介されています。なお、CIPEX 1947 で用いられた展示フレームは、現在と同様 1 フレーム、4×4 の 16 面シートで構成されています。

『STAMP EXBITIONS』によると、CIPEX 1947 の出品区分(カテゴリー)は、①アメリカとその属領地、②大英帝国、③ヨーロッパとその植民地、④ラテンアメリカ、⑤アジアとアフリカの独立国、⑥ゼネラルセクションの 6 つのセクションからなり、それぞれのセクション毎に A リサーチコレクション、B スペシャルコレクション、C ゼネラルコレクション、D スペシャルフィールド(ステッショナリー、郵便史、航空郵便、消印・プリキャンセル、プルーフ・見本、印紙など)、E 文献に分かれていました。

FIPEX 1956

第 5 回国際切手展 FIPEX 1956 は、今から 60 年前の 1956 年 4 月 28 日から 5 月 6 日までの 9 日間、新たにオープンしたコンベンションセンターであるニューヨークコロシウムで開催されました。

従来の会場であったグランドセントラルパレスの老朽化に伴い新たに建築された巨大なコンベンションセンターで、4 月 28 日から FIPEX 1956 の他、ニューヨークモーターショーや写真展三つのコンベンションが同時に開催されました。

図 9 は FIPEX 1956 の記念切手で、会場のニューヨークコロシウムをデザインしています。この他に自由



図 9 FIPEX 1956 の記念切手

の女神の3セント切手と8セント切手を組み合わせた無目打ちの小型シート(図10)も発行されています。小型シートは第2回国際展以降毎回発行されて来ましたが、国際切手展の記念切手の発行はこのFIPEX 1956が最初です。この他に、2セントの記念官製はがき(図11)や6セントの記念航空郵便使用の封皮(図11-1)も発行されています。

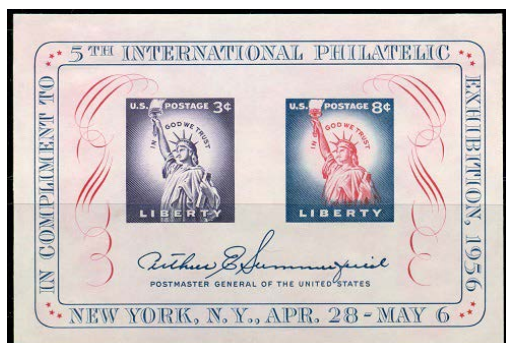


図10 FIPEX 1956の記念小型シート

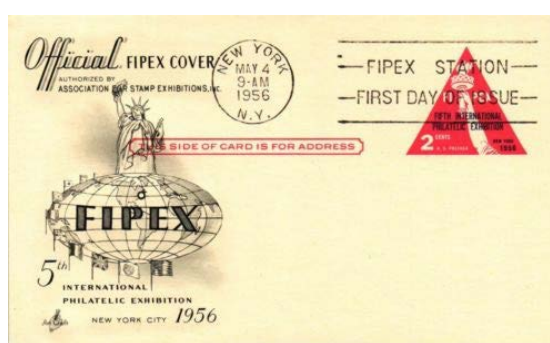


図11 FIPEX 1956の記念はがき



図11-1 FIPEX 1956の航空郵便使用の記念封皮

競争部門への出品は482作品に及び、41人の出品者は複数のコレクションをエントリーし、26人は2個のメダルを獲得、5人は3個のメダルを獲得しています。また、出品コレクションは従来最大5フレーム+アルバム3冊までに制限されていましたが、このルールが変更され、FIPEX 1956では11もの作品が20フレームを超えて展示されています。

現在は最大8フレームで、アルバム出品は行われていません。国際審査チームは、16カ国50人で構成されています。FIPEX 1956のグランプリは、ウルグワイのRobert Hoffman氏の初期のウルグワイで、10フレームで構成されていました。

SIPEX 1966

第6回国際切手SIPEX 1966は、初めてニューヨークから離れて、アメリカの首都ワシントンDCのShorehamホテルで、今から半世紀前の1966年5月21日から30日の10日間開催されました。

アメリカ郵政は1971年にUSPS(United States Postal Service)に組織変更されたため、SIPEX 1966が旧アメリカ郵政(Post Office Department)の最後の国際切手展となりました。当初、次の国際展も従来通りニューヨークでの開催を予定していましたが、ニューヨーク市の物価高騰などの諸般の事情により開催が断念され、その代わりにワシントンのスミソニアン博物館群における郵便史博物館の開館に合わせてワシントンでの国際切手展の開催が急遽決まりました。

SIPEX 1966には、競争部門には16リーフで構成される2,200フレームが出品されました。FIPEX 1956に比べてフレーム数は大きく減少しましたが、ニューヨークのような巨大なコンベンションセンターの開催ではなく、ホテルでの開催となったため、展示フロアはホテル内の四つの会場に分散されていました。その中のメイン展示会場は、Shorehamホテルの地下駐車場が充てられました。

SIPEX 1966 を記念して 5 セントの記念切手 (図 12) と同切手が無目打ちで組み込まれた小型シート (図 13) が発行されています。



図 12 SIPEX 1966 記念切手



図 13 SIPEX 1966 の記念小型シート

17 カ国 30 人の国際審査員によって審査が行われ、スウェーデンの Joel Olsson 氏がグランプリを受賞しています。30 人の国際審査員の一人には、日本の市田博士も含まれています。ナショナルクラスの最上位には、Charles Kilbourne 夫妻が南部連合 (Confederate States of America) の切手とカバーによる郵便史が表彰されました。5 月 28 日の土曜日の夜には、700 人を集めて、チケット 12.50 ドルのパルマレスパーティが開催されています。

図 14 は、SIPEX 1966 の 200 ページ立てのオフィシャルカタログで、売価は 75 セントです。

私は、実際に出品し参観した第 9 回国際切手展の Washington 2006 の他に、出品も参観もしていないアメリカの過去の国際切手展のオフィシャルカタログを集めています。SIPEX 1966 以降の 6 回の国際切手展のカタログを揃えています。

それぞれの国際切手展のオフィシャルカタログには、大統領のメッセージが寄せられていますが、SIPEX 1966 のオフィシャルカタログには当時のジョンソン大統領がメッセージを寄せています。

SIPEX 1966 における切手商のブースはホテルの Ballroom(宴会場)を用い、80 ブースが設けられました。ちなみに当時の 10 日間のブース出展料は 550 ドルです。今回の New York 2016 における切手商のブース出展料は、4,500 ドル (約 50 万円) から 5,000 ドル (約 55 万円) といわれています。

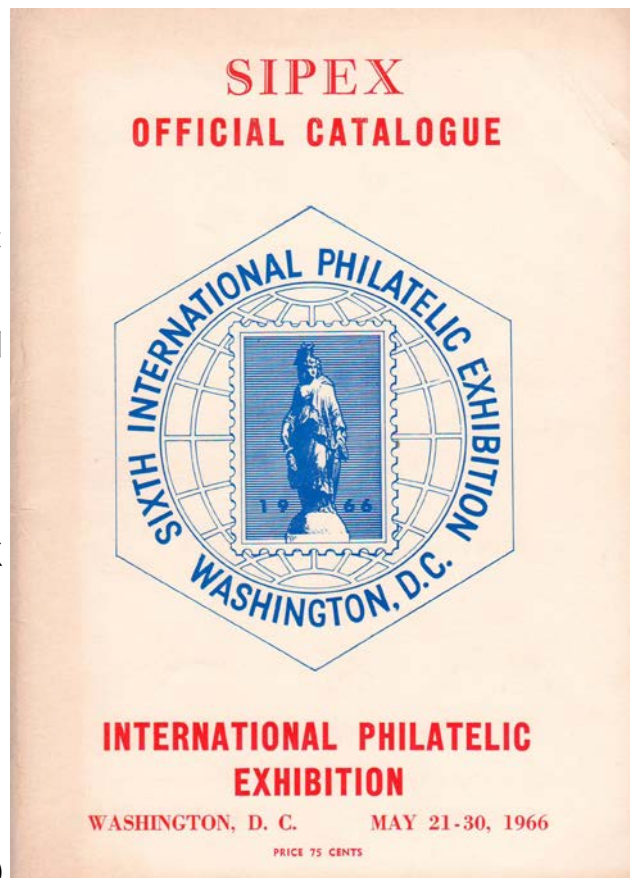


図 14 SIPEX 1966 オフィシャルカタログ

Interphil '76

アメリカ独立 200 年記念して第 7 回国際切手展 Interphil '76 が、アメリカの古都であるペンシルバニア州のフィラデルフィアのコンベンションセンターの Civic Center で 1976 年 5 月 29 日から 6 月 6 日までの 9 日間開催されています。

Interphil '76 は、1971 年にスタートした USPS(アメリカ郵政サービス)のもとで開催された最初の国際切手展です。毎日午前 11 時から午後 8 時まで開場されていて、入場料として大人 2 ドル、子供 1 ドルを徴収しています。

独立 200 年関連の沢山の切手やステショナリーが USPS より発行されていますが、Interphil '76 の記念切手(図 15)の他、独立戦争を描いた絵画を図案にした 4 種類の小型シートが切手展開催初日の 5 月 29 日に発行されています。



図 15 Interphil '76 の記念切手

Interphil '76 では“インターナショナルフィラテリックパスポート”をアメリカで初めて導入しています。Interphil '76 パスポートでは、およそ 100 もの海外郵政ブースでそれぞれの国切手をパスポートのページ毎に貼り、それぞれの国の消印で押印するサービスが行われました。

競争部門には 16 リーフで構成される 3,300 フレームものコレクションが出品されていました。1970 年代はアメリカでも切手ブームで、多くの出品希望者がいたため、エントリー資格として過去の切手展でのゴールドメダル受賞者に限られていたといわれています。

19 カ国 33 人で構成された国際審査チームによって審査が行われ、グランプリはホノルルアドバイザーグループのハワイ宣教師切手が受賞しています。審査チームには日本から SIPEX 1966 に続いて市田博士が参加しています。なお、Interphil '76 のパルマレスパーティは、6 月 5 日の土曜日夕方から 30 ドルの会費を徴収し、およそ 1,000 人を集め、ベルビューストラットフォードホテルの大宴会場で開催されました。

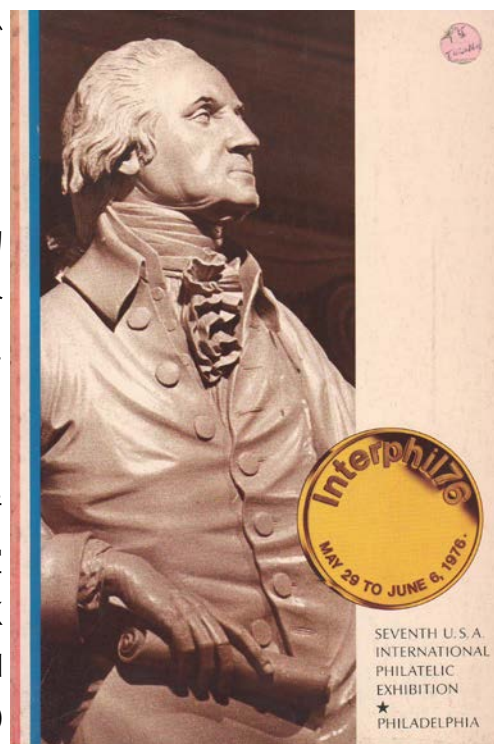


図 16 Interphil '76 オフィシャルカタログ

図 16 は Interphil '76 オフィシャルカタログで、当時のフォード大統領からのメッセージが寄せられています。また、カタログには Interphil '76 で展示された英領ギアナの 1 セント切手やモーシャスのポストオフィス切手を貼ったカバー、宙返りジェニーの愛称のアメリカ航空切手のエラーのプレート番号付き田柄など沢山の珍品が写真で紹介されています。

AMERIPEX '86

第8回国際切手展 Ameripex'86 は、中西部のイリノイ州シカゴのオヘイアコンベンションセンターで、1986年5月22日から6月1日までの11日間開催されました。

展示スペースとして35万平方フィートが、ミーティング会場スペースとして25,000平方フィートが確保されました。入場料は一日券が2.50ドル、通期券が20ドルで販売され、会期中15万3,000人もの来場者がありました。

Ameripex'86を記念してフランクリンの1セント切手が図案された記念切手(図17)が発行されたほか、アメリカの故人となった36人の歴代大統領の肖像画とサイン(署名)がデザインされた切手で構成された4種類の記念小型シート(図18)が発行されました。また、33セントの記念航空はがき(図18-1)も発行されました。



図17 Ameripex'86の記念切手



図18-1 Ameripex'86の航空郵便用の記念はがき



図18 Ameripex'86の記念小型シート



図19 Ameripex'86 オフィシャルカタログ

Ameripex'86には41カ国から854のコレクションが寄せられ、17の異なる国々から42人の陪審員と8人見習い審査員で構成される国際審査チームによる審査が行われました。英領ギアナの1セント切手が含まれているBritish Guianaがグランプリを獲得し、グランプリナショナルには日本からエントリーされた石川良並氏のクラシックアメリカが選ばれています。5月31日(土)夜8時よりホリデイインホテルで会費75ドルを徴収してパルマレスパーティが開催されています。

図19は、Ameripex'86の400ページにもおよぶオフィシャルカタログで、当時のレーガン大統領がメッセージを寄せています。

Pacific '97

1997年5月29日から6月7日までの10日間サンフランシスコの巨大なコンベンションセンターである Moscone センターで第9回国際切手展 Pacific '97 が開催されました。会場の Moscone センターは、当時アメリカで4番目に大きなコンベンションセンターでした。Pacific '97 は、アメリカで切手発行150周年を記念したイベントで、初めて西海岸の都市での開催となりました。

展示会場40万平方フィートに48カ国からおよそ600人のコレクターの3,600フレームにも及ぶコレクションが展示されました。審査チームは、22カ国42人の審査員で構成されていました。この他に、9カ国10名の見習い審査員も参加していました。

グランプリにはタイの Jurajit Gongvatana のシャムが選ばれ、ナショナルグランプリには、G. Kramer 氏のアメリカの郵便史コレクション “Across the Continental” (大陸横断) がえらばれています。アメリカの国際切手展でトラディショナル以外のコレクションがグランプリを獲得したのは初めてのことだそうです。

切手発行150周年の第9回国際切手展 Pacific '97 の記念切手は、図20のように2種類の三角形の切手が発行されています。この他にアメリカのファーストイシューの5セント切手と10セント切手デザインした2種類の記念小型シート（図20-1）も発行されています。この小型シートの5セント切手図案は額面50セントで10セント切手図案は額面60セントで発行されています。ちなみに、切手発行100年の1947年に発行された小型シートの切手は、百年前の発行時の額面と同じでした。



図20 Pacific '97 の記念切手

Pacific '97 では、これまでのようなオフィシャルカタログは刊行されませんでした。その代り、切手新聞の Linn's 社が120ページのプログラム冊子を無料で配布していました。また、Pacific '97 の組織委員会と APC (American Philatelic Congress) で400ページにも及ぶ “PACIFIC 97 HANDBOOK/ THE CONGRESS BOOK 1997” (図21) を38ドルで販売しています。



図20-1 Pacific'97 の記念小型シート

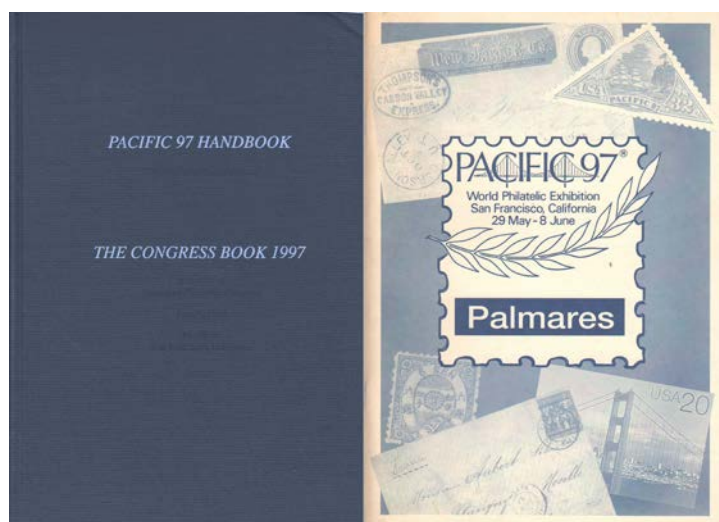


図21 Pacific '97 のハンドブックとパルマレス目録

Washington 2006

1913年に第1回国際切手展が開催されてからおよそ100年後の2006年5月に、アメリカで10回目の開催となる国際切手展 Washington 2006 がアメリカの首都ワシントン DC のコンベンションセンター (写真2) で5月27日から6月3日までの9日間開催されました。



写真2

ワシントン DC での開催は、1966年の第6回国際切手 SIPEX 1966 以来2度目です。60カ国640人のコレクターの3,800フレームを超えるコレクションが展示され、200以上の切手商ブースと60もの郵政ブースが出展し、会期中の来場者は22万7,000人を記録しました。

Washington 2006 は私にとっても初めのアメリカにおける国際切手展への出品であり、実質1日でしたが参観することができました。出品した私のコレクションは、アメリカ郵政の公用郵便の郵便史『Official Mail of The U. S. Post Office, 1778 – 1900』で、1996年のトルコ国際切手展に初めて出品し、大金銀賞を獲得していたので、8フレームでエントリーしましたが、金銀でした。

実は、1997年の Pacific '97 にもエントリーしていたのですが、エントリー時には大金銀賞の実績が未だ得られていなかったためか、アクセプトされませんでした。

Washington 2006 の開催を記念して1920年代に発行された通常切手で、議事堂などワシントン DC をモチーフにした1ドル、2ドル、5ドルの高額面切手を組んだ小型シート (図22) を発行しました。この記念小型シートには、1923年に作成されたそれぞれの切手のプレートが用いられています。

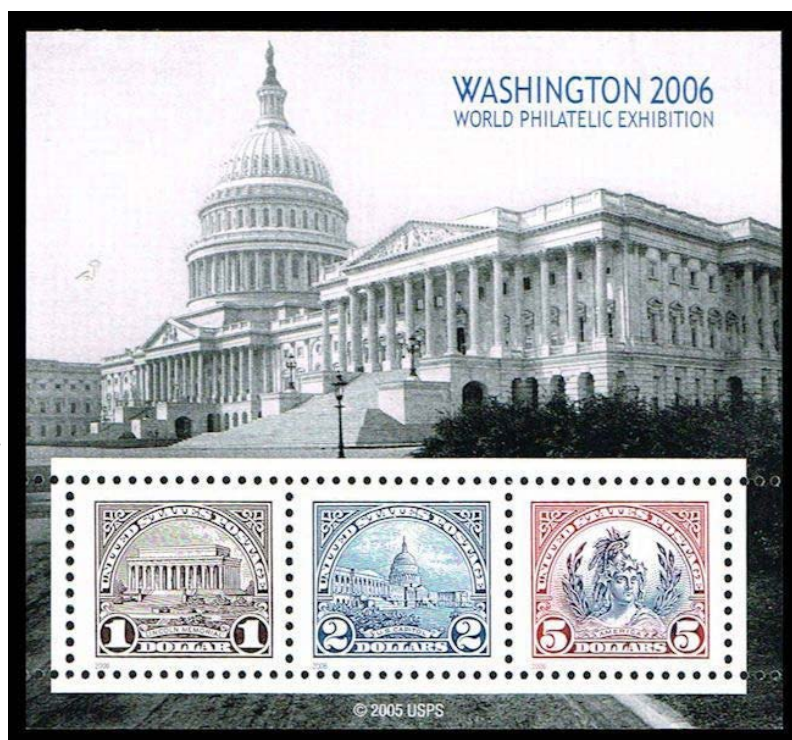


図22 Washington 2006 の小型シート

43人の審査員と7人の見習い審査員、2人のエキスパートチーム、シニアコンサルタントで構成された53人の審査チームで審査が行われました。Washington 2006 のグランプリにはアメリカの Edward J. Grabowski 氏のカリブ海の島の郵便史である “Guadeloupe Postal History” が受賞しています。また、ナショナルグランプリには、William H. Gross 氏の “United Classic: 1847 thru 1869” が受賞しています。その他77もの特別賞が与えられました。

写真 3 は、私が受賞した Washington 2006 の金銀メダルです。ちなみに、このコレクションは、展示会後しかるべき時期にアメリカのオークションハウスで一括して売却を行ない、その時の資金の一部が今回の“World Stamp Show NY2016”出品したコレクションに充てられています。



写真 3

図 23 は、Washington 2006 の 340 ページにも及ぶオフィシャルカタログで、当時のジョージ・ブッシュ大統領がメッセージを寄せています。また、アメリカの切手新聞の Linn's 社が Pacific'97 に引き続いて Washington 2006 でも 120 ページのプログラム冊子を作成し、来場者へ無料で配布していました。

Washington 2006 の会場では、10 年後の開催であるニューヨーク国際切手展のパフレットが配布されており、アメリカ郵趣界の用意周到さには驚かされました。今回も 2016 年のニューヨーク展の会場において 2026 年 5 月に開催が予定されているボストン展の広報が行われていました。アメリカの国際切手展は 10 年以上の歳月と多くの収集家やディーラーの協力を得、USPS を含む多くの機関や個人から多額の資金が投入・寄付されて開催されていることを実感した次第です。



図 23 Washington 2006 のオフィシャルカタログ

Washington 2006 は仕事の関係で、スケジュールが厳しく、実質一日の参観でしたが、これだけ用意周到に準備されたグレートな切手展を一日の参観で終わらせたのは“もったいない”と思った次第です。

図 23-1 は、“Washington2006” 記念のパソコン切手 39 セントのペアを貼った日本宛実通カバー。図 23-2 は、国連の“Washington2006” 記念のタブ付きフレーム切手を貼った日本宛実通カバー。何れも、会場で作成した記念カバーです。



図 23-1 “Washington2006” 記念パソコン切手を貼った日本宛実通カバー



図 23-2 国連の“Washington2006” 記念のフレーム切手貼った日本宛実通カバー

World Stamp Show NY2016

第11回目の国際切手展“World Stamp Show NY2016”が5月28日から6月4日までの8日間ニューヨークのコンベンションセンターの“Jacob(ヤコブ) Center”で開催されました。

図24は、“World Stamp Show NY2016”のロゴマークで、左のロゴマークは Washington 2006 時に使われていた旧ロゴマークで、右は本番で使われた新しいロゴマークです。図25は、“World Stamp Show NY2016”の記念切手です。



図24 World Stamp Show NY2016の新旧ロゴマーク

今回の国際展のアメリカ郵便史のセクションに出品したコレクションは、『Post Office Forms, Including

Envelopes Created for Conducting the Registered Mail Process 1842~』(米国書留業務郵便史 1842 ~ 1929)8 フレームです。アメリカで公式に書留郵便制度が始まる前の非公式な書留郵便を含むアメリカの 1842 年から 1929 年までのアメリカ郵政庁に於ける書留郵便業務の変遷を示しております。

World Stamp Show BOSTON 2026

10年後の2026年5月にアメリカで12回目の開催となる国際切手展“BOSTON 2026 World Stamp Show”(図26)の開催がBCEC(ボストンコンベンション & エキスポセンター)(写真3)で予定されます。



図26 “BOSTON 2026 World Stamp Show”のロゴマーク

“BOSTON 2026 World Stamp Show”は、アメリカ独立250年間の記念イベントの一環として開催が行われるようになっています。同国際切手展の運営組織である“World Stamp Show BOSTON 2026, Inc.”がマサチューセッツ州の法人として既に設立されていて、10年後の国際切手展に向けて活動が既に始まっています。



写真3

今回の“World Stamp Show NY2016”では、6月4日に“World Stamp Show BOSTON 2026”に関するイベントが開催されました。

10年前の Washington 2006 の時に既に World Stamp Show NY2016 の広報活動が始まっていたように、BOSTON 2026 World Stamp Show の広報が既に始まっています。

PHILITEX 1992

最後に 1992 年にニューヨークで開催された世界最初の国際郵趣文献展 PHILITEX 1992 を紹介します。会期は 1992 年 10 月 28 日から 11 月 2 日までの 6 日間、今回の “World Stamp Show NY2016” と同じニューヨークのヤコブコンベンションセンターで FIP のアメリカ大陸機関である FIAF やアメリカの The Philatelic Foundation、The Collectors Club (New York)、ASDA(アメリカ切手商協会) などによって開催されました。会期中多くの研究セミナーや郵趣文献専門オークションなど多彩なイベントが行われています。



図 27 PHILITEX 1992 オフィシャルカタログ

図 27 は、PHILITEX 1992 の 108 ページのオフィシャルカタログで、およそ 600 点の出品された全ての郵趣文献がジャンル別に紹介されています。

非競争部門には 21 点の文献が出品されている他、590 点の文献などが、競争部門に出品されていました。ジャンル別の出品点数は次の通りです。

- Class A の文献部門 278 点
- Class B のカタログ 29 点
- Class C のオークションカタログ 19 点
- Class D の定期刊行物 173 点
- Class E の郵趣コラム 36 点
- Class F のビデオカセット、スライド 5 点
- Class G の実験カテゴリー(コンピューターソフトなど) 14 点

なお、Class A の文献部門 278 点の内訳は次の通りです。

- Class A -1 (Reference Books、参考書) 118 点
- Class A -2 (Monographs、研究論文) 78 点
- Class A -3 (Special Research Articles、特別調査記事) 40 点
- Class A -4 (Bibliographies and Similar Special Works、書誌学書など) 27 点
- Class A -5 (Exhibition Catalogs、切手展カタログ) 10 点
- Class A -6 (Transcripts of Philatelic Lectures、) 1 点
- Class A -7 (Similar Special Works、その他特別研究) 4 点、

また、オフィシャルカタログにはニューヨークで開催された第 1 回 (1913 年) から第 5 回 (1956 年) までの国際切手展に関する記事が掲載されています。

<参考文献・その他>

- | | | |
|--|-----------------------------|----------------------------|
| ・『World Stamp Show NY2016 の 100 年のルーツ』、The American Stamp Dealer & Collector | ・ Interphil '76 オフィシャルカタログ | ・ NY2016 の HP |
| ・『Yesterday in Mekeel's』、Mekeel's Stamp Magazine | ・ AMERIPEX '86 オフィシャルカタログ | ・ BOSTON2026 の HP |
| ・『STAMP EXHIBITION』(SIPEX1966) | ・ Pacific '97 オフィシャルカタログ | ・ APS の HP |
| | ・ Washington2006 オフィシャルカタログ | ・ Mekeel's Stamp の HP |
| | ・ PHILITEX 1992 オフィシャルカタログ | ・『国際展物語 1965 - 2004』 正田幸弘著 |
| | ・ NY2016 オフィシャルカタログ | ・『文献散歩道』 正田幸弘著 |

NY2016 参観記

和田文明

NY2016 には、会期中盤から後半にかけた 5 月 31 日から 6 月 4 日まで、4 泊 5 日のスケジュールで参観をして来ました。私にとって、2006 年 5 月に開催された Washington2006 以来 2 回目のアメリカで開催される国際切手の参観です。

今回も、ニューヨークとカナダのトロントとバンクーバーでの仕事の取材を兼ねていましたので、大規模切手展でしたが、十分な時間を割くことができなかったのは少し心残りです。およそ 2 年前の 2014 年 8 月にニューヨークに立ち寄った際にも、会場となる Jacob Javits コンベンションセンターを下見していましたので、会場やパルマレスナイトパーティが開かれるマリオットホテルへアクセスのよいグランドセントラルステーション近くのホテルを予約することができました。



筆者（パルマレスパーティにて）

実は、5 月 30 日にアメリカの公用切手、公用郵便の収集家によるプライベートなパーティ（夕食会）がニューヨーク市内のレストランで開催が計画され、お招きを頂いていたのですが、スケジュールが合わず、残念でした。そのお詫びにと、6 月 1 日に筆者が宿泊したホテルに近いグランドセントラルステーションの地下の牡蠣料理中心のシーフードレストランで、私のウェルカムパーティを 5 名のアメリカのコレクターが集まって頂いて開いてくれました。

NY2016 は 10 年前の 2006 年 5 月末に開催されたワシントン展を参観した際には、既に NY2016 の組織委員会が結成され、最初のロゴが入った 2 つ折りのパンフレットを貰いました。『10 年後の NY2016 を是非参観したものだ』と思っていましたが、今回その参観を実現することができました。

ワシントン展の時はサラリーマンでしたので、2 泊 4 日のキャビンアテンダントのフライトスケジュールと同じで、極めて短い滞在時間の中、国際切手展の参観の他、スミソニアン郵便博物館やワシントン市内の議事堂や大統領公邸であるホワイトハウスを駆け足で見学して来ました。

10 年前のワシントン展と今回の NY2016 展を比較すると、一つ残念なのは受賞メダルがあまりに今回のほうが貧相であることでした。ワシントン展の受賞メダルは写真 1 のように大ぶりの円形メダルが立派なメダルケースに入れて授与されましたが、今回のメダルは、プレート（写真 2）で紙の箱に入れたもので、参加記念メダル



写真 1 Washington 2006 の受賞メダル 表と裏

ではと勘違いするほどの出来でした。

また、1966 年以降のアメリカで開催された国際切手展のオフィシャルカタログを揃えています。政府部門のアメリカ郵政 (USPD) やアメリカ郵政サービス (USPS) がバックアップしている公式イベントである国際切手展には、それぞれ開催時の大統領の祝辞がオフィシャルカタログの最初の部分に掲載されていました。しかし、今回の NY2016 にはバラク・オバマ大統領の祝辞が載っていません。



写真2 NY2016 の受賞メダル

代わりに、会場入り口に 5 月 20 日付のバラク・オバマ大統領からの祝辞 (写真 3) が案内されていました。祝辞を依頼するのが遅れたのか、5 月 20 日ではオフィシャルカタログへの掲載が間に合なかったものと思われます。

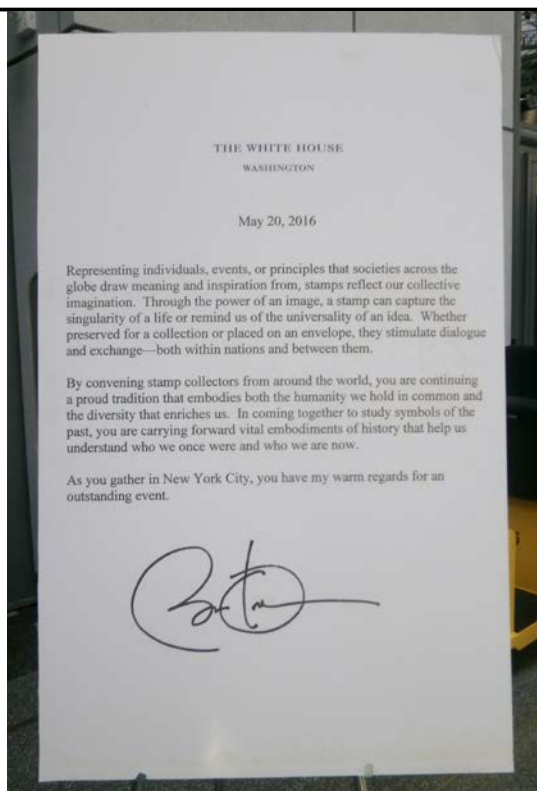


写真3 会場入り口に掲げられたバラク・オバマ大統領からの祝辞

10 年の長い期間をかけて準備を重ねてこれ、立派でかつ今世紀最大規模の国際切手の開催にこぎつけられたことに敬意を表しますが、出品物の封筒の作成予定が欠落していたのか、お隣のカナダを含め海外のコミショナーへの送付ができなかったのもミスの一つであろうかと思っています。アメリカ国内の出品者にはアメリカのコミショナーを通じて、出品物の封筒が送られ、間に合ったようです。

JAPEX や全日本切手展などでは寄付をしたことがないのですが、前回のワシントン展と同様に、今回の NY2016 でも少額ですが、サポーターとして寄付をさせて頂きました。オフィシャルカタログ (写真 4) の寄付者の芳名録 (Donors and Supporters) の末端 (24 ページ) に私の名前も載っています。ちなみに、2,500 ドル以上を寄付すると、パルマレスナイトパーティに 2 名参加できるなど沢山の特典が提供されています。

私の NY2016 の出品コレクション『Post Office Forms, Including Envelopes created for conducting the Registered Mail Process 1842-1929』(米国書留業務郵便史 1842 ~ 1929) は、表 1 のように 2011 年のインド展と 2015 年のシンガポール展で金賞を受賞しています。しかしながら、NY2016 展では、本コレクションのご当地であるアメリカの審査員の厳しい評価で、87 点の大金銀賞にとどまりま

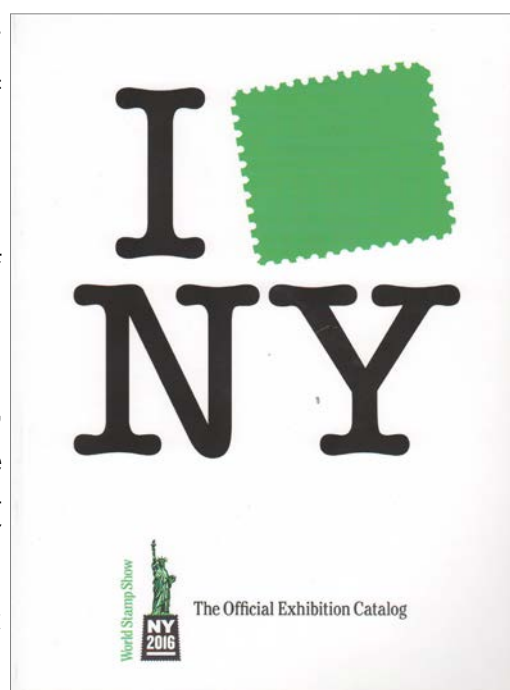


写真4 オフィシャルカタログ

した。

表 1 主な受賞歴

開催年月	FIP 国際切手展	メダル	ポイント
2011 年 2 月	India FIP International Exhibition	Gold	93
2015 年 8 月	Singapore FIP World Stamp Exhibition	Gold	90
2016 年 5 月	New York FIP World Stamp Exhibition	Large Vermeil	87

USPS ファーストデイセレモニー

アメリカで新規に切手を発行する場合、広く世間に広めるため USPS(アメリカ郵政サービス)主催で、新切手に関するファーストデイセレモニーが開催されます。開催地は発行される郵便切手やステシヨナリーにちなんだ都市や切手展などのイベントが開催される都市が選ばれます。

今回の NY2016 では、最終日を除いて NY2016 の記念切手の他、毎日異なる新しい切手が発行され、それぞれファーストデイセレモニー(写真 5)が NY2016 会場内で USPS(アメリカ郵政サービス)の主催により開催されました。

私は 6 月 2 日の国立公園 100 年記念切手(16 種)(写真 6)のファーストデイセレモニーに参加しました。

NY2016 と 16 か所との国立公園との多元中継が行われました。セレモニーには、関係者の他、多くの場合一般の参加も認められ、今回も多くの NY2016 の参観者などが出席しています。

ファーストデイセレモニーは、通常、国旗(星条旗)入場、国歌斉唱、新切手のお披露目(除幕式)、アメリカ郵政や関係者のスピーチと続きます。以前参加したことがあるファーストデイセレモニーでは記念品などが配布されていましたが、今回は何も頂き物はありませんでした。



写真 5 国立公園 100 年記念切手のファーストデイセレモニー

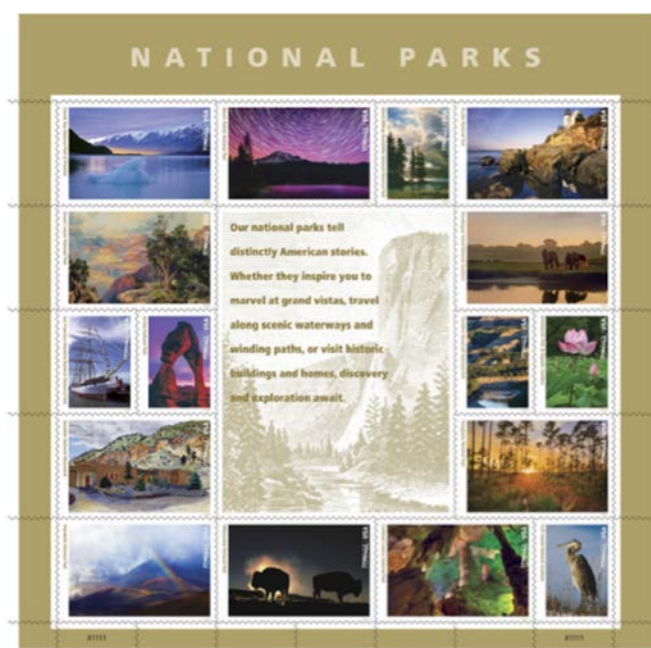


写真 6 国立公園 100 年記念切手

会期中沢山の各種セミナーが開催されていましたが、その中から 2006 年から開催されている郵便史シンポジウムと 10 年後の 2026 年に開催される Boston 2026 の説明会の 2 つのセミナーに参加しました。

郵便史シンポジウム

第 9 回郵便史シンポジウム (写真 7) は、NY2016 のセミナー会場で 6 月 2 日の午前 9 時からの基調講演とセッション 1 とセッション 2、併せて 6 つの研究発表が午後 3 時まで、昼食休憩をはさんで開催されました。今回のテーマと研究発表の内容は、『How Postal Treaties Influenced Post Office Reforms』(郵便条約がどのように郵便の改革に影響を与えたか)で、アカデミックすぎて、私にとっては難しい過ぎる内容でした。



写真 7 第 9 回郵便史シンポジウムの会場風景

この郵便史シンポジウムは、フィラテリスト、学術研究者、郵便歴史家などによる郵便史に関するシンポジウム (Postal History Symposia) で、郵趣文献の団体であるアメリカ郵趣リサーチ・ライブラリー (American Philatelic Research Library)、1886 年に創立され 33,000 人の会員を擁するアメリカ郵趣協会 (American Philatelic Society)、ワシントン DC にあるスミソニアン国立郵便博物館 (Smithsonian National Postal Museum) の三者が共同で、10 年前の国際切手展 “Washington 2006” が開催された 2006 年から開催されています。毎回異なる郵便史のテーマがシンポジウム開催の前年の秋にそれぞれの団体の HP などで公示され、テーマに基づいた研究論文の募集がシンポジウム開催の数か月前までに行われます。応募された論文の中から選考が行われ、シンポジウムで研究発表の講演が行われています。

これまでの郵便史シンポジウムのテーマは、表 2 の通りです。なお、シンポジウムの開催場所は、当初ワシントン DC の国立郵便博物館とペンシルバニア州のアメリカ郵趣協会 (APS) の本部会館である “アメリカ郵趣センター” で交互に開催されて来ましたが、2011 年以降は “アメリカ郵趣センター” で開催されてきました。今回の第 9 回郵便史シンポジウムは、NY2016 のセミナー会場で開催されました。

表 2 郵便史シンポジウムのテーマ

開催年月	開催場所	郵便史シンポジウムのテーマ
2006 年 11 月	スミソニアン博物館	What is Postal History(郵便史とは何か)
2007 年 10 月	APS 本部	Further, Farther, Faster: Transportation Technology and the Mail(より遠く、より速く：輸送技術と郵便)
2008 年 9 月	スミソニアン博物館	When the Mail Goes to War(戦争と郵便)
2009 年 10 月	APS 本部	Post Office Reforms(郵便局の変革)
2010 年 9 月	スミソニアン博物館	Stamps and the Mail: Imagery, Icons & Identity(切手と郵便：画像、アイコン、アイデンティティ)
2011 年 9 月	APS 本部	How Commerce and Industry Shaped the Mails(商業や産業はアメリカの郵便をどのように形成してきたか)
2012 年 11 月	APS 本部	Blue & Gray: Mail and the Civil War(北軍と南軍：郵便と南北戦争)
2014 年 9 月	APS 本部	Development of Transoceanic Air Mail Service(大洋横断の航空郵便発達史)
2016 年 6 月 2 日	NY2016	How Postal Treaties Influenced Post Office Reforms(郵便条約がどのように郵便の改革に影響を与えたか)

Boston 2026

10年後の2026年5月にアメリカで12回目の開催となる国際切手展“BOSTON 2026 World Stamp Show”(図1)の説明会が、NY2016の最終日である6月4日の午前11時からセミナー会場で開催されました。

“BOSTON 2026 World Stamp Show”は、アメリカ独立250年年の記念イベントの一環として開催が行われるようになっていきます。10年前のWashington 2006の時に既にWorld Stamp Show NY2016の広報活動が始まっていたように、BOSTON 2026 World Stamp Showの活動がNY2016から既に始まっています。



図1 “BOSTON 2026 World Stamp Show”のロゴマーク

NY2016 アプリ

NY2016では無償のモバイルアプリNY2016(図2)のダウンロードが可能で、ブースやセミナーの開催スケジュール、コレクションの出品目録、会場マップなどが案内され、スマートフォンやタブレット端末機により、何時でも何処でも見ることができます。APS(アメリカ郵趣協会)の全国ベースの切手でも同様のサービスが行われています。



図2 NY2016 アプリ

NY2016 でお会いできなかったコレクター

次の3人のコレクターには、NY2016の会場でお会いすることができませんでしたが、彼らのコレクションを拝見することができました。

『US RRR & AR to 1945』(写真8)のDavid Handelman氏は、オタワ大学の数学の教授で、私のコレクションと同様のアメリカの国内外(RRRとAR)の配達証明郵便のコレクションを出品され、85点で大金銀賞を獲得されています。彼は私のアメリカの国内外の配達証明郵便のコレクションの先輩であり、先生です。



写真8 David Handelman の『US RRR & AR to 1945』

オタワはニューヨークからそれほど遠くなくNY2016でお会いできるものと楽しみにしていました。

したが、所要により参加できなくなり、会期後カナダのトロントのホテルでお会いすることができました。私からNY2016の記念品や写真データ、日本からの土産の薩摩切子のグラスセット差し上げ、彼からはアメリカのRRRとARの重品を格安で分けていただき、その後トロントのコンチネンタルホテル近くのアイリッシュレストランで夕食を共に頂きました。

ニュージーランドの RRR と AR(配達証明) のコレクターであり、国際切手展の審査員である Jeff Long 氏は、ニュージーランドのセミクラシックの『New Zealand's First Pictorials overprinted for use in the The Pacific Islands』(写真 9) のワンフレームコレクションを出品され、見事 90 点で金賞を獲得されていました。



写真 9 Long 氏の『New Zealand's First Pictorials overprinted for use in the The Pacific Islands』

彼の展示作品を写真に収め、電子メールに貼付してお送りした次第です。審査員として参加されるであろう台北 2016 での再会できることを期待しています。

今回の NY2016 でもお目にかかれると期待していました。アメリカ公用切手と速達切手の大収集家である Robert L. Markovits は 25 年来の知人で、最近では Face Book でのやり取りなどをさせていただいておりましたが、昨年 12 月に他界されました。

実は彼の速達切手と速達郵便の郵便史のコレクションが会期中の 6 月 1 日に、NY2016 の会場内で、ネームオークションとして Schuyler Rumsey Philatelic Auctions の競にかけられました。90 ページに及ぶオールカラーのオークションカタログ (写真 10) を頂いてきました。2006 年のワシントン展以来彼にお会いしたような気がしました。

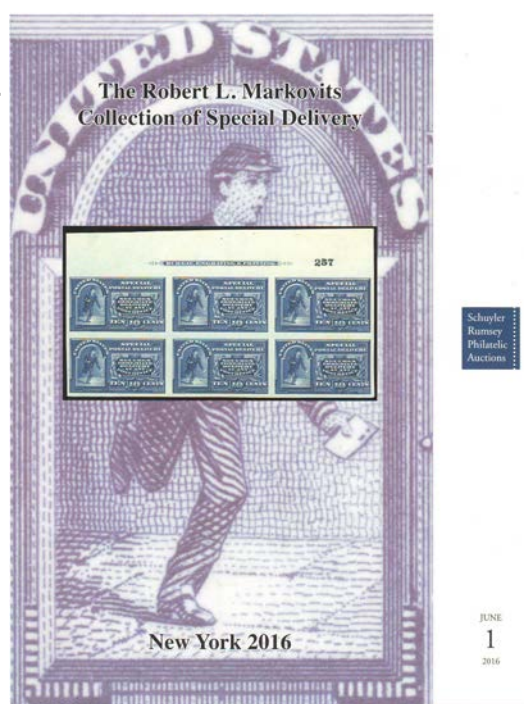


写真 10 Schuyler Rumsey Philatelic Auctions の Robert L. Markovits コレクションカタログ

ニューヨークまでの軌跡

鍋木 顕

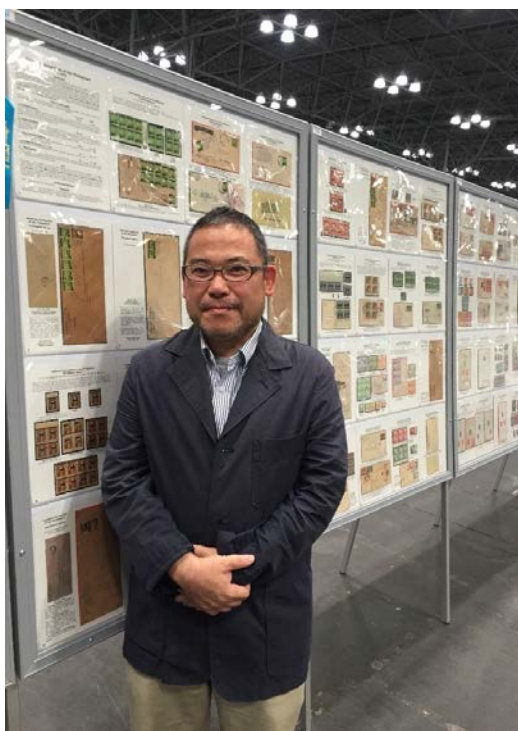
はじめに

昔、テレビでウルトラクイズという番組がありましたが、ご記憶の方も多いでしょう。「ニューヨークへ行きたいか〜!」というフレーズでした。

日本から始まって各地で予選、アメリカ本土を横断して最終決戦はニューヨーク。この刷り込みもあって、ニューヨークは自分の中では世界の頂点というイメージがあります。

自分にとって、今年は切手収集の世界に足を踏み込んで実は10年の節目であります。節目の年に、初めての国際展、しかもニューヨーク展に出品が許されたことは、きっとラッキーなのでしょう。

休暇を取り、家族から白い目で睨まれながらも、今回、生まれて初めてのニューヨークに単身乗り込みました。でも結果はV (81点)。次回から8フレーム出品を許されるLVを密かに期待していたのですが、世の中そんなに甘くはない。LVには遠く及ばず、出直しを求められたのでした。



吉田敬コミッショナーのおかげで、6月1日の会場閉場間際にJuryの一人、私の作品を審査されたタイの重鎮Prakob Chirakiti氏にプライベートでフィードバックを受けることができました。

いろいろ有意義なコメントをいただきましたが、一言で言うと審査員が理解できる作品になっていないという事。プレゼンテーションが3点/5点は当然の結果。いくら知識があっても、研究していても審査員に伝わらなければ何の意味もないことを思い知らされました。同じマテリアルを並べても、見せ方次第では全く評価が変わってくるとも言われました。

ただ、10年前にはフィラテリーのフィの字も知らなかった自分が良くここまでこの世界にのめり込んだものだと感慨深いものがあります。この10年間を振り返ってみたいと思います。

2006 年 マニラ

全く南方占領地切手の存在を知らず、骨董品屋で売られていた初日カバーを発見。日本語で「大日本憲兵隊検閲済??」「フィリピンユービン」と書かれた切手??これは何だ、と思ったのが収集のきっかけ。



図1 初めて手に入れた 1943 年 5 月 7 日バターンコレヒドール陥落 1 周年記念切手マニラ局初日カバー。100 円くらいだったと思います。カバーにある ATENEO DE MANILA はフィリピンの 3 大総合大学の一つ。University of Philippines (UP) は東大、De La Salle University (ラサール大学) は慶応、そしてアテネオ大学は早稲田によく例えられます。

同じく 2006 年 マニラ

骨董屋でうろうろしていたら、フィリピン人の某ブローカーに声をかけられ、結構な金額でカバーのロットをつかまされたが、ほとんどが駄物や偽カバーでした。

このとき買っていなかったら、又は、駄物をつかまされたことに怒っていたら、そこで終わっていたと思います。良かったのか、悪かったのか??

でも、憎めないこの男、その後もちょくちょくやってきて、意外といいものも掴ませてくれました。また、フィリピンが誇る国際展チャンピオン Mario Que 氏やフィリピン郵趣会 (IPPS) のフィリピン代表 Pio Rodriguez 氏、ディーラーの Antonio So 氏らフィリピンのお歴々を紹介してくれた。今となってはこの男に感謝です。

同じ頃、占領フィリピン郵便史の権威 Garret 氏の大著を手に入れ、このおかげで何を収集すべきかが分かったことで、収集に弾みがついたのです。丁度アメリカの専門オークション Philstamps がその Garret 氏の大コレクションを分割しオークションにかけていたことをネットで知り、その Part 2 から参加したのですが、モノの価値と要領がよく分からずあまり落とせなかったのですが、それでも何点か落札できました。マニラ空港脇の国際郵便取扱所の乱雑な中に落札品を受け取りに行ったことも良い思い出です。

2008 年 マニラ→大阪

マニラ日本人会の「まぶはい」という雑誌にマニラで切手収集を始めた顛末についてエッセーを書いたところ、某社マニラ支店の永井支店長から突然の連絡を受けました。

この方こそ、あの VICTORIA コレクションの所有者である、とつくに会の永井正保さんでした。永井さんから日本の郵趣業界についていろいろな話を聞くことができ、更に、JPS 南方切手例会の土屋理義さんを紹介してもらいました。

丁度永井さんも私も同じころに帰任の辞令が出て日本に帰任することになり、私は関西支社（大阪）に戻ることにりましたが、早速土屋さんに連絡を取り、JPS 南方切手例会に入会しました。

2012 年秋 ミニベックス

2012 年 4 月東京に転勤。でも妻と娘はついてこなくて単身赴任。

そんな頃、南方切手例会でミニベックスをやるということで、世話人の故小林利行さんからフィリピンを出す人がいない、出してくれ、と頼まれたのがきっかけでした。単身暮らしで丁度時間もあったので、見様見真似で自分の持っている占領フィリピンのコレクションをリーフに整理してみました。

切手、FDC、実通カバー、日本切手持ち込み、ステーションナリーとにかく全てを 8 フレームに突っ込んでみました。全く競争展仕様になっておらず、今から思えば恥ずかしさの極み。その頃は競争展なんて別世界と思っていたので、ミニベックス会場で吉田敬さんと蘭印の権威増山三郎さんに向かって「競争展には絶対に出すつもり無い」と宣言したことを覚えています。

2013 年秋 JAPEX 挑戦・外国切手出品者の会入会

ミニベックスに出したことで、冷静に考えると、そのまま競争展に出品できるのではないかと思い、JAPEX に挑戦する事にしました。吉田敬さんに JAPEX に出しますよ、とメールで連絡したところ、その返事は「タイトルリーフを送れ」でした。

そのつたないリーフが瞬く間に外国切手出品者の会のメンバー各位に転送され、批評というか、むしろ酷評の嵐。ただただ自分は啞然とするばかり。でも本当に有難いコメントでした。（2 日間で 20 通、次ページに抜粋掲載。外国切手出品者の会への問い合わせは、yoshida@kitte.com まで。）

こんな世界もあるのか、と感激、吉田敬さんの推薦を得て、外国切手出品者の会の末席に名前を連ねることになりました。初出品の JAPEX で、おかげさまで金賞 + SP を頂くことができました。

2013-10-07 16:21:00 stampedia の吉田です。 南方切手例会のメンバーの鎬木さんという方が、シンガポール展目指して今回の JAPEx に初出品されます。南方切手は外国切手ではありませんが、手彫り切手から続く日本切手のコレクション形成よりは外国切手のコレクション形成を真似た方が良いと思うので、手始めに、当あげたいので、是非、私も後ほど書きますが、も関わらず、タイトルでも、作品は伝統郵便します。 吉田敬	2013-10-07 17:38:00 伊藤昭彦です。作品を見ていないので、タイトルリーフを修正するのは難しいのですが、いくつか気になった点について述べさせていただきます。 1. 最初の9行は日本軍のフィリピン占領からアメリカの奪回までの歴史について述べています。肝心のフィリピン占領切手についての記述がありません。 2. 作品を見ていないので断言できません。フィリピン占領は対象外です。また、海外を目指すこの作品は最悪の場合、製造面から作 3. FDCはタイトルリーフに書か	2013-10-07 21:09:00 重山です。大変興味のある投稿です。既に伊藤さんがコメントしておられますし、重複部分もある事を承知で書かせて頂きます。 また、我当の切手を集めた事が無いので的外れな部分があるかもしれない事をご承知おき下さい。 私も、最初の9行は不要と思います。例えば、伝統郵便なので例えば、このコレクションは大きく分けて〇〇と〇〇と〇〇に分けられ、その中で〇〇と〇〇というシリーズ（印刷方式や印刷所で分けるのが常套手段でしょうか）に分ける事が出来る、という表現になるでしょうか
2013-10-08 17:35:00 吉田さんの計らいで JAPEx のタイトルリーフの批評をいただきました。鎬木 顕（かぶらき あきら）と申します。この ML に参加させていただくことになりました。よろしくお願いします。（中略） 皆様、今回のタイトルリーフについての貴重なご意見ありがとうございます。賞のランクづけがなされる競技である以上、ルールがあるのは当然で、よく独りよがりです。吉田さんのおかげでこの ML を知り感謝している反面、活発な意見の応酬に正直びっくりしています。 残念ですが JAPEx には時間的に余裕がなくこのまま出さざるを得ません。（※タイトルリーフだけいじってみます。）	「一戦え玉」思い 商業中心	「一戦え玉」思い 商業中心

タイトルリーフ添削を希望された、鎬木さんの質問に対する、外国切手出品者の会のメンバーによる、レスの数々より

2014 年夏 全日展出版

JAPEx 金賞で国際展への出品の意思が固まり、目標を 2015 年のシンガポール展に置きました。その為にはリーフを英文にする必要があります、どうせ英文リーフにするなら、全日展にも出品する事としました。結果は金賞 85 点。

少々下駄をはかせてもらった感もありましたが、「タイトルリーフはよく書けています」という評に、外国切手出品者の会の皆様への感謝の念を改めて深く感じた次第です。

2015 年～2016 年 東京→ニューヨーク そして・・・

シンガポール展に申し込むもアクセプトされず。ダメもとでニューヨーク展に応募したところ、という訳か出品が認められたのです。結果は冒頭に書いた通り。ニューヨークではいい夢を見ました。良い勉強をさせていただきました。

いつの日かのリベンジを期して、どこかのアジア展から出直してまいります。

おわりに

今回、ニューヨーク展の会場ブースで購入したカバーをお目にかけます。いつかは占領フィリピンの郵便史にも挑戦してみようと思って今回購入しました。



図2 1941年12月8日英国 Surrey 差出 Manila 宛航空便。北大西洋→太平洋横断の航空便の予定でしたが、米国で差出人戻しとなり、1942年5月14日ロンドンの着印が裏面に有ります。右の「EXAMINER 538」検閲テープは英国で左の PASSED BY CENSOR 丸印と茶紙のテープ、RETURNED TO SENDER/SERVICE SUSPENDED のゴム印は米国で押されたものと思われます。

図1の最初に購入したカバーと比較していただき、私の10年間の軌跡を感じて頂ければと思います。

私は、切手収集復活組でなく、中高年からの新規参入組です。郵趣は確かにジュニアの新規参入が無く、衰退の一途と言われています。しかし、シニア層の新規参入により盛り返す可能性は十分にあると思い、何らかの郵趣振興のヒントになるのでは、との思いから、敢えて自分のこの10年を今回振り返ってみた次第です。

おまけ

今回のニューヨーク、5月28日から6月2日まで滞在しましたが、ほぼ晴天に恵まれ、満喫できました。

ニューヨーク展会場ではIPPS(国際フィリピン郵趣会)とUSPPS(米領郵趣会)の共同会合に出席し、IPPS世話人のDon Peterson氏にご挨拶できました。プエルトリコとAMGのプレゼンは非常に興味深い内容でした。

一方、ISJP(国際日本郵趣会)の会合にも参加しましたが、詳細は差し控えますが、同席した吉田敬コミッショナー、池田健三郎サブコミッショナーはじめ錚々たる日本代表団数名全員が仰け反った驚愕の内容でした。会報製作のご苦労はお察ししますが・・・といっても、あのプレゼンはいかがなものか。

一人寂しい夕食を怖れていましたが、日本人参観者の皆さんと、連日、楽しい夕食をご一緒できました。ちなみに居酒屋・肉・中華・オイスター・中華のパターンで世界の首都ニューヨークの美食を堪能。

観光はせっくなので自由の女神に行ってきました。船に乗って行く自由の女神と移民博物館がセットになっていましたが、移民博物館の展示内容が興味深く、4時間以上もじっくりと参観してしまいました。

小学生の娘へのお土産として、「自由の女神」もとい「自由の女くま」(白と茶色2匹)を買ったのですが、ただでさえ、今回のニューヨーク行を白い目で見ている妻と娘には逆効果。しばらくは口をきいてもらえそうにありません。埋め合わせにどれだけかかることやら・・・、考えただけで気持ちが悪くなってきました。(了)



ニューヨーク展で大金賞を受賞して

長谷川 純

NY2016 年で、私の出品した手彫り印紙 1873-1874 で、予測していなかった大金賞を受賞しました。これを機に私の長い収集年月を振り返ってみる事にします。

小学五年生の 1955 年から切手収集を始め、始めは手当たり次第に外国切手を集め始め、一通り日本切手も収集していましたが、20 年後の 1975 年頃から手彫り印紙を専門に収集し始めたような気がします。

たまたま、通っていた学校が飯田橋にあったので、毎日のように下校後、逋信博物館に寄ってから帰宅しました。切手関係の本、文献が大量にあって、戦前の切手趣味や、改名した切手文化などの雑誌を片端から読んだりして、又、戦前のカタログをみて、色々と学びました。そして、博物館には署名な収集家が絶えず集まっており、彼らから色々な事を教えて頂き、沢山の人が切手を分けてもらいました。その頃は切手を熱心に収集していた小学生は余りいなかった事もありますが、今から思えば色々な事を個人教授された事になります。



NY2016 審査委員長の P. マッキン氏より大金賞のメダルを授与される筆者

私は性格的に何かを始めて、自分が好きな事はとことんやるという超凝り性で、しかも余り他人がやらない事をやるのが好きだという変わり者ですから、今までに多くの分野で物を集めたり、分類したりしました。其のうちの一つが収入印紙で、始めは印紙全体を収集範囲として集めていましたが、後に手彫りに専念する様になりました。

1975 年頃からは世界中に存在していたコレクションや業者の在庫を手当たり次第に入手したので、人からは単なる変わり者だけでなく、色々な事を言われてきました。やっと手彫り印紙が認められてきたのは 1997 年にサンフランシスコで行われたパシフィック 97 国際切手展で金井宏之さんから手彫り印紙は龍切手に比べると大きくて、見栄えがすると言われた時からで、私が初めて国際展に出品したのもこの時からです。



展示された長谷川コレクション（遠景）

The Documentary Hand Etched Revenue Issues of Japan

This exhibit presents an original research study of the 33 different types of Hand-Etched Documentary Revenue issues of Japan.

The Hand-Etched Revenues were initially issued on 1st June 1873, two years after the first postage stamps (The "Dragon" issues).

The purpose of the Revenues was to acknowledge payment of the newly established fees for a wide range of commercial transactions. The MATSUDA Firm produced Hand-Etched plates of 10 x 5 subjects per sheet for all values of these early series.

The narrow margin plates were used first, followed by the wide margin electrotyped plates which were reproduced to print huge quantities until the new design of typographed Revenue stamps were issued on 1st July 1884.

Multiple plates for many, if not all, the values clearly existed, although no official records now survive on the number of plates for each value. Examples are shown of the differences between the plates, and this is part of a continuing research study.

The paper used in the production of these issues was of two major types - Native and Foreign. For the purposes of this exhibit they are simply identified as such, though variations in their quality and specific composition allow further separation into sub-types that are more relevant to specialized studies.

For the first time I have been able to divide the Foreign paper perforated Revenues (which were previously classified as a single emission) into the Fourth and Fifth issues.

This exhibit presents representative examples of the issues: mint and used, errors, reconstructions, use on documents (many of which are 'the earliest date of use' proving pieces) together with Official Bulletins and Specimens.

The material is arranged to follow a system of classification formed by my personal inspection of the majority of surviving examples in Japan, the United States and Europe.

While all mint copies are very difficult to find (as these issues were never collected or exported unlike the early postage stamps), attention is called particularly to the following items in the frames:

- Page 2. The only known unused complete sheet of 50 of 1 Sen.*
- Page 5. The biggest error of the missing character of 1 Sen, used and on document.*
- Page 7. Two different positions of 1 Sen with retouched and pre-retouched stages.*
- Page 11. The only known largest unused block of 35 of 5 Sen.*
- Page 22. The only known largest unused block of 25 of 25 Sen.*
- Page 35. Two different Pin-hole positions of the Specimen Sheets.*
- Page 42. The only known Original Proof Draft of the Special Bulletin.*
- Page 60. The 3 copies of 20 Yen roulette on a document.*
- Page 104. The one of two known unused 20 Yen perforate.*
- Page 121. The only known mint of 25 Sen on foreign paper.*

他人の真似をするより、しないで独自の方法を編み出す方が、満足感や達成感が得られるので、始めはカタログの分類から入っても、自分なりの分類に取り組むことが好きでした。ですから、先輩の古屋厚一氏が1996年からフィラテリストに連載された手彫り印紙の研究を土台に版研究を始めた記事を参考にしながらも私独自の版研究をして、リコンストラクションも沢山しました。特に和紙赤10銭は12版の内10版を復元しました。現在も8版と11版を進行中です。

1 Sen Black

First Issue

1st June 1873

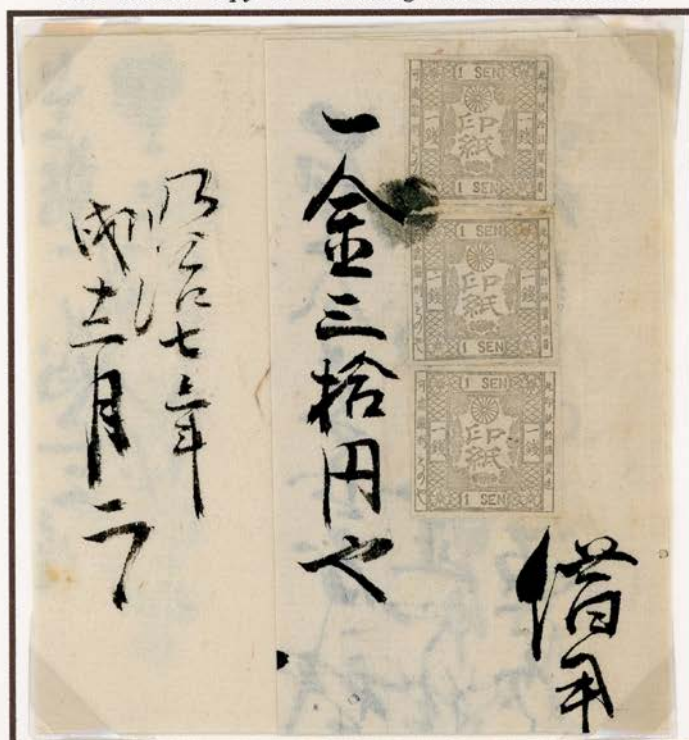
Native Paper Rouletted

Plate IV

Error of Etching



The bottom copy is a missing character ERROR.



Three copies of 1 Sen Black with an ERROR on bottom copy tied to a 30 Yen loan document, dated on December 2nd, 1874 (Meiji 7).

The general revenue tax rate was 1 Sen per 10 Yen or 0.1% started on June 1, 1873 (Meiji 6) and valid until June 30, 1884 (Meiji 17).

1997年のパシフィック展でバーメール（金銀賞）を受賞して、その年のインデックス97で大金銀賞を受賞し、8フレームに増やして、チャイナ1999で金賞を受賞、同じく2001年にフィラニッポンで金賞を受賞しました。それから暫く冬眠しておりましたが、2012年から3年連続して全日展で金賞を受賞して、国際展のマレーシア2014で大金銀賞を受賞し、8フレームに拡大して、このたびニューヨークで大金賞を受賞しました。今回は金賞を飛び越えて、2段級特進の大金賞でしたので、本当に想定外で驚きました。

5 Sen Bistre

First Issue

1st June 1873

Native Paper Rouletted

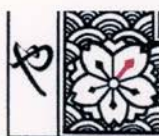
Plate I

ERROR of Etching

Pin-hole



Position 1

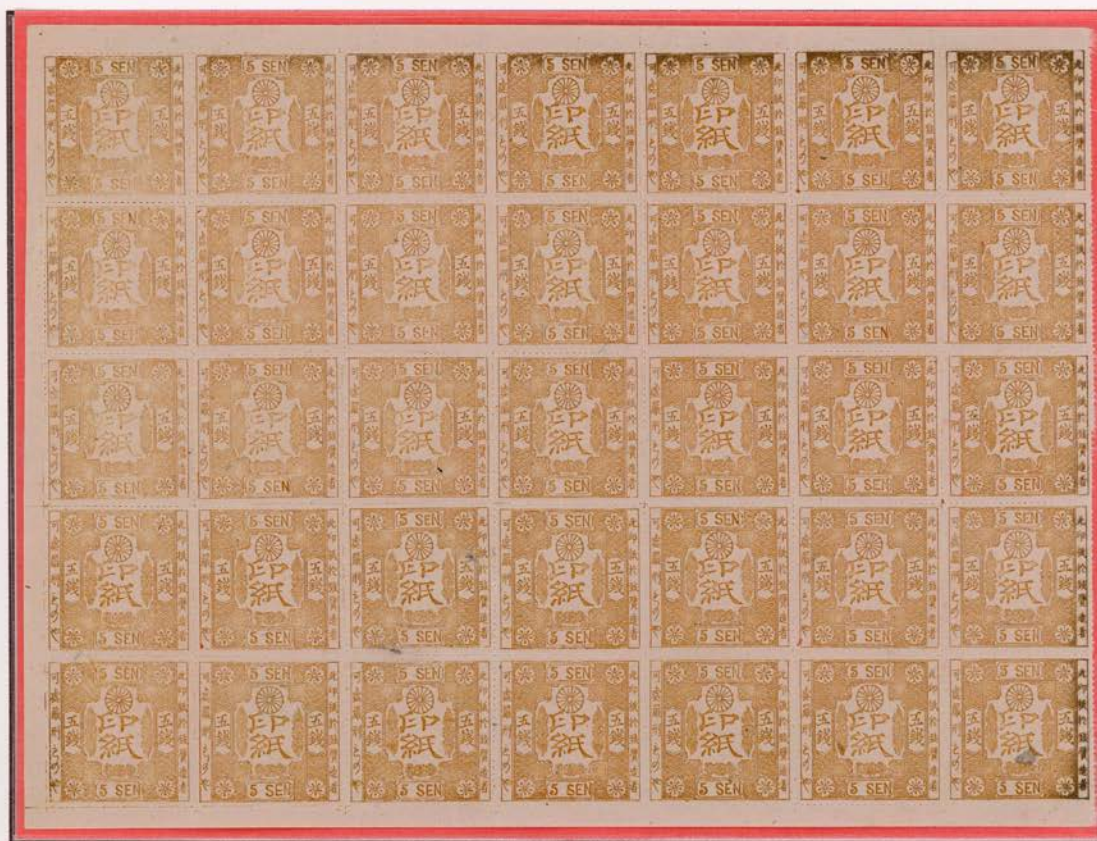


Position 5



Positions 15 & 25

1	2	3	4	5	6	7
11	12	13	14	15	16	17
21	22	23	24	25	26	27
31	32	33	34	35	36	37
41	42	43	44	45	46	47



The largest Unused block of 35 (Positions 1 to 7 // 41 to 47).

なお、久しぶりの国際切手展でしたので、感じた事を思いつくまま書いてみます。私が国際切手展を見学したのは2014年にソウルで行われたのが最後でしたが、アメリカでは10数年ぶりで、規模は大きかったですが、見学者も業者の数も昔に比べると比較にならぬ位減っていました。それだけ、収集人口が減少した事が、感じられました。

しかし、熱心に継続している人や、オークションなどの活躍は昔と余り変わらずと思いました。それを見る限り、切手収集は途絶えることはないと確信しています。今後は、骨董品の一部、又は絵画のような扱いとなって、取引形態も多少は変化して、コレクションとしての売買が主体になるのではないかと考えています。世界の誰がどこで収集しても、コレクションはその価値を認められて大切に保存されていくだろうと感じています。そして、益々、プライベートの取引が増えるでしょう。

今回の展示で最も驚いたことは、展示品が収められていたフレームが以前とは違って安価な製品で、しかも止めてあるねじが最下段に取り付けてなかった事でした。(下図) 日本のコミッショナーの吉田敬さんや池田健三郎さんが菊地恵実さんと斎藤環さんら4人で日本の作品全部を手作業で数時間かけて作業された事を知った時でした。結果的に幸いにも事故が起きませんでした。未然に事故を防ごうと作業された日本の方々の責任感とやはり日本人の誇りをそこに感じました。なお、コミッショナーの方々や、お手伝いをしてくださった方々には個人的にも心から感謝しております。



コミッショナーのお二人はもちろん、協力して、プラスチックフレームのネジ止めとしてくださった、菊池さん、斎藤さん、ありがとうございました。しかし、それでも大半のフレームはネジが最後まで入り切りませんでした。(右の写真)

ご出品者の方々から直接、出品作品を説明していただくこともできました。田村邦彦さん、斎藤環さん、石澤司さんらには忙しい中、時間を費やして頂きありがとうございました。

今回は殆ど、全ての日本人の作品や、世界的に有名で、めったに見られない作品を何回も見られたことも収穫でした。そして、特にレイアウトや2枚続きの大判ページの利用法など学ぶところが大きかったです。

今後、国際展で出品を考えておられる方はぜひ、国際展を見学して、できれば作品の作者から直接、解説してもらおうと大変に参考になると思います。日本で今後はそうした勉強会も年に数回、行われることが決まりましたので、是非、機会あればご参加ください。

アルバムリーフの作成は元来、各自の自由ですが、一応、各リーフを丁寧に作ることが大切です。私が井上和幸さんにアドバイスを数回受けて、昔のやり方では通用しないと感じ、リーフを全てやり直しました。その適切なアドバイスが、今回の大金賞受賞の大きな原因の一因に成ったことは間違いありません。そのポイントを書いておきます。



ダブルリーフを縦につなげたリーフを含むワンフレーム作品は、本展覧会における最高点の98点をマークした。(The First Day:6th of May, 1840, Alan Holyoake, UK)

昔は「リーフに余り多く貼り込まず、書き込みは出来るだけ簡単に少なくする。分かる人には分かるので、未使用、ブロックの構成枚数、など見て分かるものなどは書き込まない」でした。

それが今では料金から、使用方法を詳しく説明して、貼る枚数もリーフに15枚くらい、一見多すぎるくらいを貼り込み、必要な物はポジションをできるだけ書き込むなど、以前とは正反対の傾向が強いです。

昔の作品集を見るとその違いが一目でわかります。

私も証書の使用方法や、料金は全然気にしていませんでしたので、いざ文献(租税門)を広げてみて、余りにも印紙税が複雑なのを初めて知って驚きました。しかも途中で印税が値下げしていたり、第1種や2種といった項目別に変化したり、表記してある金額のきざみによって税額が変化するなど、複雑な事に驚き、そのうえ時系列になっておらず、1枚の証書料金を探すのに3日掛かった事もありました。そして、この作業をしたおかげで、今まで料金が合わないと思って作品には使用していなかったものが、適正料金の使用例だと分かって使用できるようになりました。

リーフの中で、切手や印紙の周囲に枠を書くのも必要と感じています。その枠を太くしたり、座布団を引いたりすることで注意を集められますが、多くしすぎるとマイナスです。本当にこれはと言うものにのみ対応すべきです。なお、私は元糊のあるもので、ヒンジ無はマウントを用いますが、その他は全てヒンジを用いております。

Specimen Sheet

First Issue

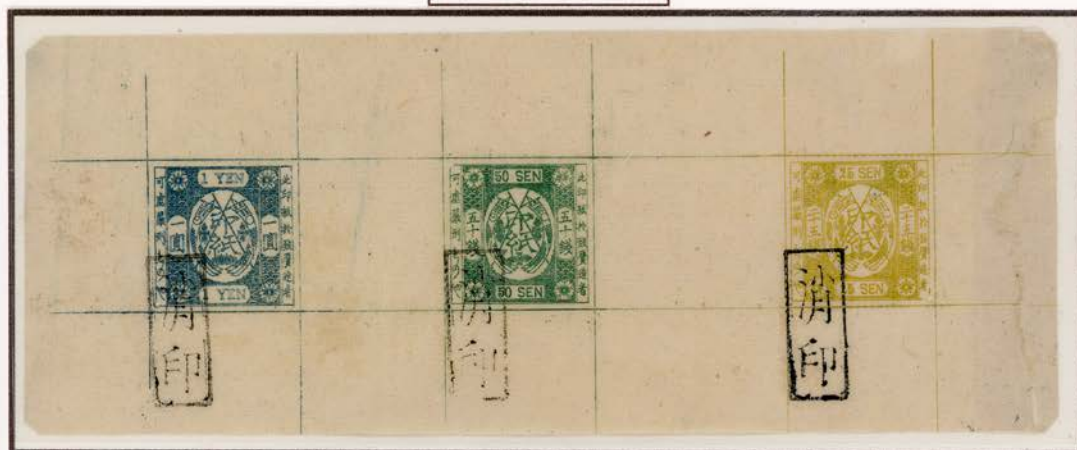
31st August 1873

Size Reduced to 24 x 24mm

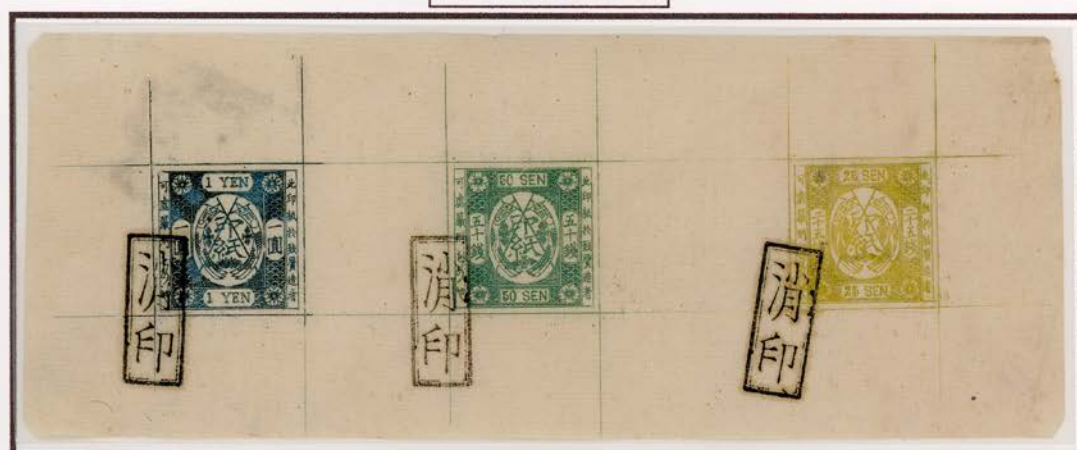
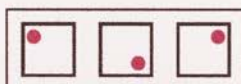
Native Paper Rouletted

Three months after the sale, higher values were reduced into lower values size.

Type A pin-hole



Type B pin-hole



*This specimen sheet was printed all in one plate specially etched for this purpose only.
The 50 Sen green in the middle of this specimen was not issued.*

*A few surviving single copies of this 50 Sen green were all separated from similar sheet.
Only seven of the sheets now exist and three of which are damaged.*

なお、重要なマテリアルのある場所はタイトルページに書くべきです。このページはたいいていの人が初めに読み、珍しいものがどこにあるかを知り、それを見るので、きちんとリストしておくことが大切です。そして、各フレームの大体最上段が見やすいので、重要なリーフや、区切りをする場合には最上段の左に置くことがのぞましい。又、各フレームの中での見た目のバランスも重要で、塊やカバーなどが偏ると見苦しくなります。特に同じようなリーフが並んでいると、知識のない人から見ると、重複しているように感じられます。

Fourth & Fifth Issue

*Foreign Paper
Perforated*

1st September 1874

According to the National Printing Bureau's record, on February 13, 1874 (Meiji 7), Government decided to replace native paper with foreign paper for postage stamps and revenues. However, shortage of the supply of foreign paper, it was not done until September, 1874.

Fourth issue (narrow margin)

1 Sen



5 Sen



50 Sen



↓
Narrow
2 mm margin
↑

Fifth issue (wide margin) - Multiplicative

1 Sen



10 Sen



50 Sen



↓
Wide
3 mm margin
↑

	Narrow 2 mm margin	Wide 3 mm margin
1 Sen	Plate I to VIII	Plate I & II
5 Sen	Plate I to V	Plate I only
10 Sen	None	Plate I & II
25 Sen	None	Plate I only
50 Sen	Plate I to II	Plate I & II

そして、バランスを考えて、時には重要なリーフであっても思い切って外す工夫も必要です。私の場合、128ページを選び出すのにかなりのリーフをあえて外しました。余分なリーフがない場合でも、配置がえをするだけで見た目は変わってきます。自分だけで見ていると気づかない事も他人が見ると分かる場合もあるので、第三者の意見を聞くことも重要です。

20 Yen
Bright Red Violet & Dark Red Violet

Fourth Issue *1st September 1874*
Foreign Paper *Perforated 13 x 13*

Unused



One of two known

Red dot specimen



Only one known

Remainder cancel



Only two known

Oval specimen



Only one known

Rejoint used pair



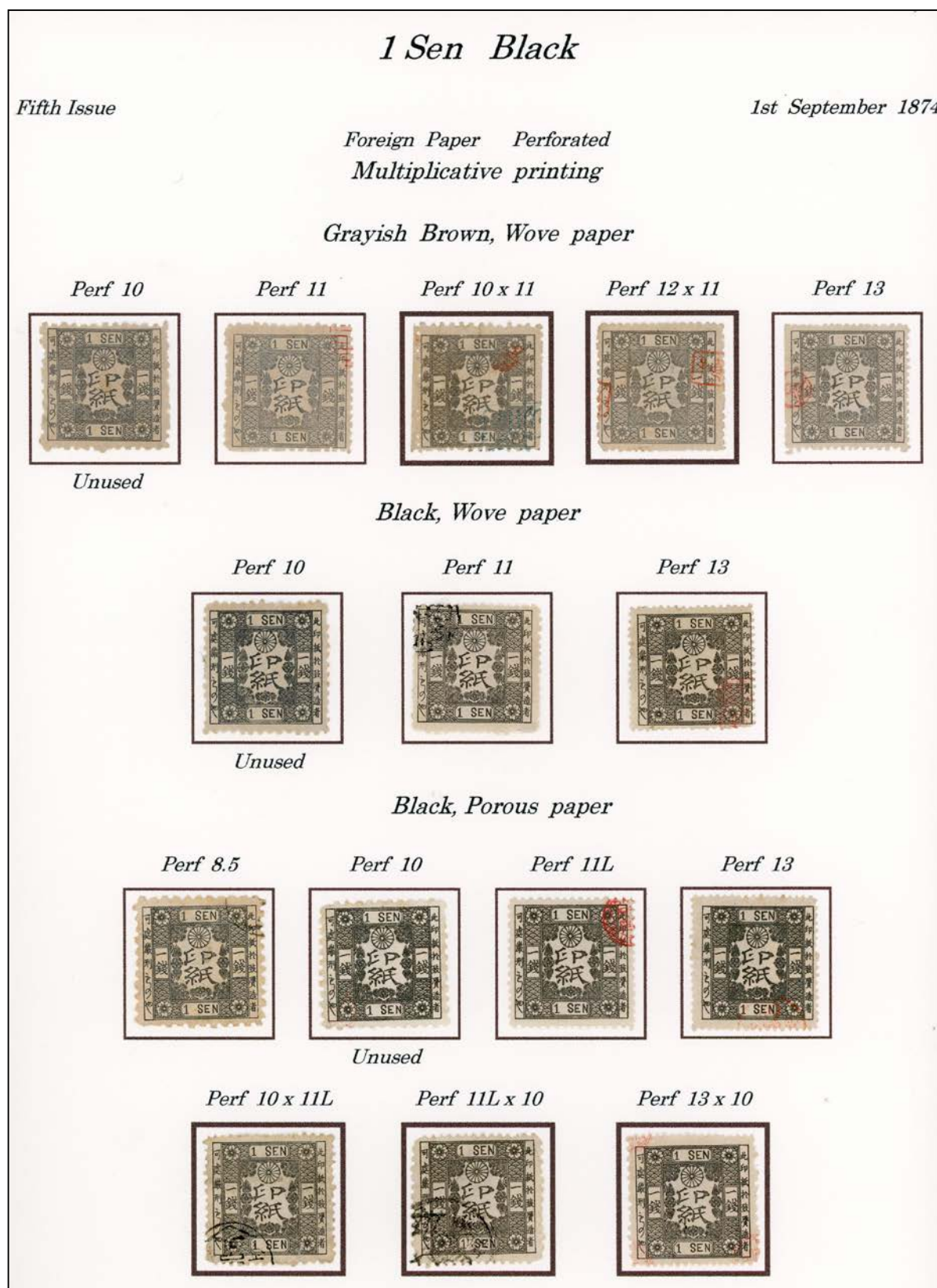
Thin paper



Only two known

Perforated 20 Yen revenue stamps are recorded only 22 copies.

作品はその人の独自の作り方で良いのですが、経験の豊富な人に聞いて、見てもらうのは大変重要です。ともかく、出品することで、作品の目標もたてられますし、他人の作品を多く見ることで、気持ちに変化が起こります。このようにして、多くの経験を積むと、他人の作品に対しても、自分の意見が持てるようになります。



今回の私の作品で注目されたのは洋紙印紙を通常版と増殖版に分けた事です。詳しくは今後、発表する予定ですが、簡単に何故、私がこの分類をしたかを申し上げます。

手彫り印紙は明治6年6月1日に6額面が手彫り凹版で発行され、次の凸版印刷の印紙が明治17年7月1日に発行されるまで11年間印刷されました。始めは和紙にルーレット目打ちで、それから普通の目打ちにかわり、洋紙が使われています。

凸版印紙の20円以下9種の原板落成す、と記録されているのは明治15年8月です。ただし20円はプルーフのみで実際に発行されたのは8種です。当時の印刷が始められたのは原板が完成してから5か月後の記録があるので、明治16年の初めころから印刷されたと推察しました。他の印紙と共に印刷された可能性も多いが、証拠となる記録がない為、16年及び、17年の発行まで凹版印紙を製造していたと考えています。

明治11年7月から明治15年6月までの手彫り印紙の製造枚数は約1億2685万枚です。私の所有する証書付の記録では電耐版の1銭の最古使用例は明治12年の5月でしたが、先月、記録更新の1月が発見されたので、手彫り印紙の電耐版は明治12年1月となります。近い将来、これが更新され、明治11年の12月か11月になると考えています。明治11年の9月29日に機械部製の大型凹版印紙機械を設備と記録されているので、これが当てはまるのではないかと考えています。なお、明治8年の10月には初めて銅板に鋼鍍を施すと記録されていますが、これは銅板にメッキした事です。その頃はまだ、印紙では電耐版を使用していないので、通常版を強化する為に用いられたと考えています。

明治12年から15年にかけて印刷された手彫り印紙は全て増殖版だと想定しています。何故、私がここで、増殖版と電耐版と別々に記しているかは後に説明する予定です。増殖版のたった9種の原板で総数1億2,685万枚を印刷したと考え、其の70%（実際はもっとかもしれない）は最低額の1銭の電耐版2面で印刷されたことになります。単純に言って、8,880万枚となりますから、各版はそれぞれ4,440万枚となります。これは88.8万シートに相当します。銅板の硬度、及び技術進歩がすすんでも、5万シートで実用版は摩滅すると仮定したら、各版の実用版が17枚ぐらい必要だった事になります。実際にはもっと少ないだろうと思っていますが。

印刷局の記録には各額面ごとの記録はありません。依ってあくまでも推察するしかないのですが、私が根拠とするものは現在までに収集した現在数と、見分してきた経験です。すなわち、どこからか、洋紙の1銭の手彫り印紙を100枚入手すれば95枚はこの電耐版の2版のどれかに当てはまります。洋紙1銭の通常版（電耐版以外の物）は現在、20版ぐらいと推定していますが、現存の5%ぐらいです。私が所有する約1万枚の1銭のうち通常版が1,000枚ぐらいとなるのは意識して通常版を集めた結果で、実際には95%ぐらいが電耐版です。そして、プレーティングをしてみた結果、この2版。すなわち100位置に全て当てはまりました。

しかもこの2版の存在確率はほぼ50対50です。これは10銭にも当てはまる事実で、2面がけて印刷したのではないかと思う根拠のひとつです。

ちなみに私はリコンストラクションを、10, 11, 11L, 13と目打ち違いで、しかも紙違いでも無地、ポーラスの刷色違いをやったくらいですので、市場にはまだ数十万枚は存在すると思います。リコンストラクションの練習には最適の材料だと思っています。



10 Sen Blue

Fifth Issue

1st September 1874

Foreign Paper Perforated

Multiplicative printing

Plate II

*A full Used sheet of
fifty, no margin.
Porous paper, perf 10.*

手彫り印紙のストックがあるとすれば、1 銭のルーレットと 1 銭の洋紙の電耐版が大半となります。1 銭のルーレットにはエラーが数多くあり、まだまだ発見される余地が大きいです。しかし、1 銭洋紙の電耐版では第 2 版のポジション 8 の位置に左たすき落ちがあるのみで、ほぼ均一性を保っています。この印紙が一番多く印刷され、全国で大量に使われていますので、色々と面白い収集対象となっています。例えば紙違い、目打ち違いを詳しく分類すると専門コレクションができます。

なお、明治 15 年 6 月 21 日に壁紙用細紋銅板を第二科より長さ 2 尺 7 寸、幅 2 尺の半面クラッチュにてハギ合わせを為し始めて電耐科へ送付す、と記録されています。又、手彫り凹版であった証券印紙も明治 18 年 (1885) にエルヘート凸版に改列、とありますが明治 16 年の間違いではないかと思っています。そうでないと、明治 18 年まで手彫り印紙が印刷されていたと読めるからです。

すでに 17 年の 7 月には凸版印紙が発行されていますが、其の後も手彫り印紙が凹版で印刷されているのは理解しがたいからです。なお、エルヘート凸版の機械は明治 7 年 5 月 15 日には到着しています。現在調査中ですが、なぜ、この電耐版の 1 銭は殆どがぼやっとした感じを受ける彫線の滲んだものの様なものが多いのかを考えると、これが 50 面の銅原版を増殖したからではないかと思っています。非常に彫線の鮮明な印刷の印紙は数 100 枚に 1 枚もあるかわからないです。

原板の増殖の結果、彫線がぼやけたのではないかと思います。今後の課題としては、線トンボや、耳紙のマークなどを徹底して調査する必要があります。単片の印紙でも広巾なので、ウェルセンターが多く、ウェルセンターを探せば自然に電耐版と判明します。

最後になりますが、過去 3 年間、全日展で 5 フレームを毎年、内容を変えて展示しました。昨年、古屋厚一氏の収集品の中で、必要な物を大半購入しましたので、今年全日展では初公開となる物が多く含まれる 8 フレームを展示する事が決まりました。私は 3 日間、会場にいますので、手彫り印紙に関して興味のある方やご質問のある方はご遠慮なくお尋ねください。

即日発送の郵趣文具、Amazon で販売開始

ヒンジ、フィラートコーナー、クリアハウイドマウントを取り扱い中（検索してみてください）



amazon.co.jp
スタンペディア

Amazonポイント: 232
マイストア ギフト券 タイムセール Amazonで売る ヘルプ In English

吉田歌さん アカウントサービス 今すぐ確認 プライム 30日間 無料体験を試す

カート ほしい物リスト

ホビー Amazonランキング フィギュア・ドール プラモデル ラジコン 鉄道模型 エアガン・モデルガン トレーディングカード アニメグッズ おもちゃ パーゲン

切手収集・整理用マウント（透明・ストリップタイプ）（55）
ハウイド
カスタマーレビューを書きませんか？

価格: ¥1,300 プライム

残り4点 ご注文はお早めに 在庫状況について

住所からお届け予定日を確認 既定の住所を使用 詳細

3/16 水曜日にお届けするには、今から1分以内に「お急ぎ便」または「当日お急ぎ便」を選択して注文を確認してください（有料オプション。Amazonプライム会員は無料）

この商品は、スタンペディアが販売し、Amazon.co.jpが発送します。返品については出品者のリンクからご確認ください。

サイズ: 55

26 ¥1,100 プライム	30 ¥1,100 プライム	33 ¥1,100 プライム	36 ¥1,300 プライム
44 ¥1,300 プライム	51 ¥1,300 プライム	55 ¥1,300 プライム	

・横210ミリのマウント。
・透明です。

画像にマウスを合わせると拡大されます

シェアする

数量: 1

カートに入れる

1-Click 注文を有効にしてください

ほしい物リストに追加する

「地方に住んでるとねー、手持ちの郵趣文具が切れると、すごく不安になるよ。

切手商も減ってるしね、街中に買いに行くにしても、それなりに時間がかかる。ましてや在庫があるかどうかははっきりしない。。

かといって東京に注文を出したとしても、発送してもらい届くにはそれなりの時間がかかるでしょ。一週間で届いたらラッキーだけど、切手展の直前だったらそれでも間に合わないよ。何とかならん？」

このようなフィラテリストの切実なニーズに対する従来の回答は「そのような事態にならないよう常日頃から、郵趣文具の在庫を十分に確保しなければ、フィラテリストとして一人前とは言えない」と言う信憑性の薄い精神論だけでした。そんな精神論に頼ってでは郵趣振興はできません！！（怒）

そこでスタンペディアでは12月から付属品を仕入れて、Amazonに倉庫スペースの一部を借り販売するサービスを開始しました。販売サイトにAmazonを選んだのは次の理由からです。

- ・国内配送料が無料だから
- ・注文を受け即座に発送する代行サービスがあるから

Amazonに倉庫スペースを借りて発送代行してもらおうと、クラクラするような手数料を取られます。本事業で収益はあげていませんが、赤字にならないためこの分を販売価格に転嫁しており、正直いって定価より高めで販売しています。しかし配送料無料にご注目ください。実質的には他のECサイトで定価でお求めいただいたり、お店に買いに行くのと比べてお得ではないでしょうか！

販売：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

WSS NY2016 に出品して

池田健三郎

去る5月28日から6月4日まで米ニューヨークにて開催された、WSS NY2016 郵便史部門に出品した、わたくしのコレクション「Prompt Delivery in Japan from Pre-adhesive Period to 1933」は、これまで最高のスコア 92 ポイントを獲得しゴールドメダルを得ました。これは2006年の米国ワシントン DC における世界展出品以来、10年越しのことになります。本稿ではNY2016出品作品と共に、これまでのわたくしの急速郵便史の出展の経緯を振り返ってみたいと思います。

思い起こしてみればこれまでの国際展における急速郵便史コレクションのコンペの道のりも存外、長いものになり、早いもので10年の時を経たことになります。

私の急速郵便史は2003年に国内展でゴールドを得たところを起点に、国際展にチャレンジすることとなりましたが、小手試しにと出してみた台北アジア展2005（5フレーム）ではまさかのLSとなり恥辱にまみれたデビューとなってしまいました。

翌年には何とか気を取り直して雪辱を果たすべく世界展 WASHINGTON 2006 に出品し（5フレーム）、ここでようやく85ポイントLVを獲得。ここからが事実上の国際コンペのはじまりとなりました。

ワシントンでLVをとったことにより、作品は既定上8フレームに拡張する必要に迫られますが、ここで内容が希薄化するとVに陥落となり、再度国際試合に出ることが難しくなるため、8フレームでの最初の出品は心して掛からねばなりません。

というわけで、その次の出品はわが国（横浜）で開催された PHILANIPPON 2011 となり、ここで無事に88ポイントを獲得し、初の8フレームでLVを維持することができました。

Prompt Delivery in Japan from Pre-adhesive Period to 1933

Special Delivery, Express Delivery, and Domestic Airmail

The quality of the modern Japanese postal service can be measured by researching the confidence in its safety and speed. This collection will mainly place the focus on the latter and exemplify the qualitative transition of the service by Japanese postal authority in terms of the highest quality postal service available at that time: the main stream Japanese delivery system, with such processes as "special delivery", "express in limited regions" and "domestic airmail", had been innovated and gradually merged into "express" delivery as a nationwide service. There are various items of prompt delivery on this exhibit, between 1860 and 1933, showing in accordance with the following plan.

Plan of the Exhibit:

Part I: Forerunner / Before the Foundation of the Modern Postal System 1st frame

I-1 Prompt Delivery by Private Courier ---- p.2-14

I-2 Prompt Delivery by Official Courier of the Local Tosa Government ---- p.15-16

Part II: Early Special Delivery Mail 1872-1911 2nd-5th frames

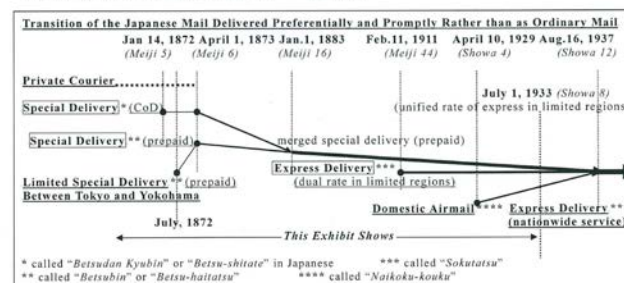
II-1 Special Delivery in "Pre-Express" Period under Distance-Based Postage --- p.17-18

II-2 Special Delivery in "Pre-Express" Period under Uniform Postage ---- p.19-80

Part III: After the Introduction of Express Delivery in Limited Regions 1911-33 6th-8th frames

III-1 Foundation Period of Express Delivery ---- p.81-96

III-2 Early Period of Express Delivery ---- p.97-128



Highlights of the Collection:

- Early prompt delivery covers by private courier and by the local Tosa provincial government (p.2-16)
- The oldest Japanese cover with the record of both registered special delivery and registered mail (p.17)
- Three examples known cover of limited special delivery "Betsubin" from Tokyo to Yokohama (p.18)
- Three examples known usage of official urgent services stamp for the Ministry of War (p.65)
- Earliest examples of express delivery in very limited areas (p.81-87)

タイトルページ（作品の全リーフは付録にて原寸カラーでご覧いただけます）



Award Ceremony で、シューマン・ゼネラルコミッショナーより金メダルを授与される筆者

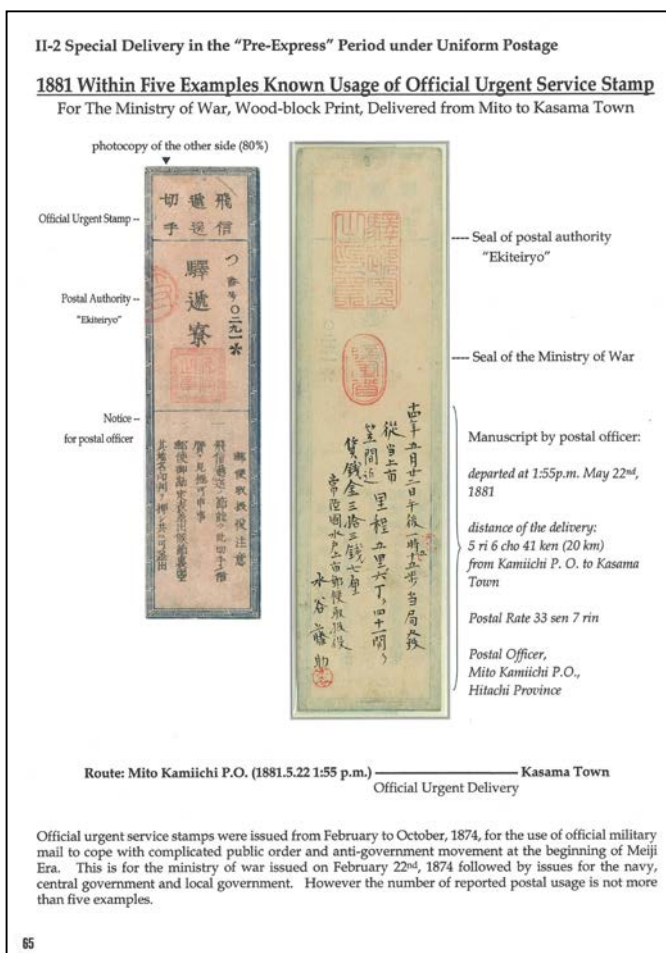
ここで再び大きな転機が訪れます。「飛脚時代から 1971 年郵便法大改正までのコレクションではいささか対象期間が長すぎる」というご指摘を頂いたこともあり、ここで将来的なステップアップを視野に入れ、対象範囲を「前半」と「後半」に二分割することとしたのです。そこで、「前半」のコレクションは飛脚から速達全国化以前の 1937 年 8 月 15 日までとし、速達全国化以降である 1937 年 8 月 16 日以降を「後半」のコレクションとする分離作業を行いました。

というわけで、2012 年は二分割したコレクションの「後半」を何とか世界デビューさせなければなりませんので、こちらに特化して出品しました。

幸い 2012 年は FIAP アジア展がジャカルタと UAE において 2 回あり、両方ともエントリーが認められましたので、連続出品したところ、INDONESIA 2012 (於 ジャカルタ) では 80 ポイントで V、続くシャルジャー 2012 (於 UAE シャルジャー) では 81 ポイントで V を獲得することが出来ました。続く 2013 年は、「前半」のコレクションを 2 年ぶりに世界展に出品することとなり、THAILAND 2013 (於 バンコク) に出しましたが、横浜展とスコアは変わらず 88 ポイント LV となりました。他方、「後半」のコレクションは、初めての 8 フレームかつ初の世界展 Brasiliana 2013 (於 リオデジャネイロ) に出したところ、何と 85 ポイントで LV という好成績をおさめ、「前半」にあと 3 ポイントというところまで接近しました。

翌 2014 年は、記念すべき年になりました。2006 年ワシントン以来、ずっと LV で停滞していた「前半」が世界展 PHILAKOREA 2014 (於 ソウル) において 3 ポイントあがって 91 ポイントを獲得し、念願のゴールドを得たのです。この時は特別賞も授与され嬉しさも格別でした。続くアジア展 MALAYSIA 2014 (於 クアラルンプール) には「後半」を出し、こちらもリオデジャネイロから 2 ポイントも上がって 87 ポイント LV まで到達しました。

2015 年は、エントリーがすべて通ったことから、2 作品を 3 展覧会に出すことになりました。まず「前半」を世界展 SINGAPORE2015 に出しました。前年のソウルにはなかった「飛信通送切手の実通使用例」を新規に投入するなど、それなりに頑張ってマテリアルの増強を図ったのですが、ここではメダルはゴールドを維持したものの、スコアは 1 ポイント下がって 90 点となってしまいました。他方、「後半」コレクションは台北と香港にそれぞれ出品し、スコアは台北が 87、香港では 1 ポイント上昇して 88 となりました。



P.65 (作品の全リーフは付録にて原寸カラーでご覧いただけます)

そしていよいよ本年ニューヨーク展です。LG は望めないものの、せめてスコアは1 ポイントでも伸ばしたいものだと考えつつ、FIP 国際審査員の重鎮である佐藤浩一さんからソウル展や香港展の際に現場でご指導いただいた内容を踏まえ、これを出来る限り作品に反映させて臨みました。

具体的には、クラシックの比重を増やす目的から、最初の1 フレームをすべてフォアランナーすなわち「飛脚の急速便および土佐の村送り（急送り・昼夜送り）」とし、続く第2-3 フレームを原則として手彫切手のカバーで構成しました。1881 年使用の飛信遞送切手が登場するのは4 フレーム目の第1 ページ、速達制度開始（明治44 年）のリーフは第6 フレームの第1 ページまで後ずれさせました。



ガラッと構成を変更した第一フレームの概観（作品の全リーフは付録にて原寸カラーでご覧いただけます）

これに伴い、1933（昭和8）年7月の速達料金改定（市内6銭・二区間12銭料金から一律8銭基本料金に変更）以降の部分（昭和12年8月15日まで）をまるまる1フレーム分、カットせざるを得なくなり、サブタイトルを4年前倒しする修正を行い、「飛脚時代から1933年まで」と改めました。

こうしたことが功を奏して、今回はこれまで最高のスコアを得ることが出来たものと思います。これまで有益なご助言をいただいた佐藤浩一さんはじめ多くの蒐友の皆さんに改めて御礼申し上げます。次はいよいよ95ポイントLGめざして、さらにコレクションのブラッシュ・アップを図りたいと決意を新たにしています。

ところで、どの国際切手展においてもたいてい、アワードバンケット後の朝（翌朝または翌々朝）には担当審査員によるクリティークが行われます。

NY2016もその例外ではなく、朝から出品者が自分の作品の前で審査員を待ち構えるというシーンはいずこも同じです。

今回の展覧会では、非常に珍しいことに、パルマレス（受賞祝賀会）時点で公表される各作品のスコアを総点だけでなく、枝点についても公表しました。これは画期的なことではないかと思われます。本来、各々の採点項目ごとの枝点は、クリティークに参加しなければ教えてもらえず、実際にこれに

Part III: After the Introduction of Express Delivery to Limited Regions
This part consists of the following chapters:

Chapter and Contents	Rate of Express Charge
III-1 Foundation Period of Express Delivery (from 1911.2.11): In addition to special delivery, "express delivery", a new domestic postal service, was introduced to limited areas.	6 sen: to and from a single delivery area
III-2 Early Period (from 1919.8.16): Express system was gradually spread and fixed in these areas: (a)Tokyo, (b)the Keihin Area, (c)Osaka, (d)the Keihan Area, and (e)the Hanshin Area.	12 sen: between multiple delivery areas

III-1 Foundation Period of Express Delivery
On February 11th, 1911, express delivery (defined as "a service for delivering as much as possible in an expected delivery process, from the sender to the recipient"), was enacted in the domestic postal system. The service, however, was so limited that it was available only within Tokyo city or between Tokyo and Yokohama at first, followed by an introduction to Osaka and the Keihanshin area in April, 1912.

1911: Express in Its First Year, Only a Half-dozen Items Known
Postcard and Postal Card within a Single Delivery Area in Tokyo

Tokyo Harajuku (1911.9.17, 9-10 a.m.) Hongo (10-11 a.m.) Shitaya (1911.12.31, 8-9 p.m.) Koishikawa (9-10 p.m.)

These cards, delivered within no more than 2 hours, show the high quality of the postal service at that time as compared with today. Only a half-dozen of items are known from the first year.
Rate: 7.5 sen = postcard 1.5 sen + express 6 sen/within a single delivery area

速達使用例がようやく登場する、P.81

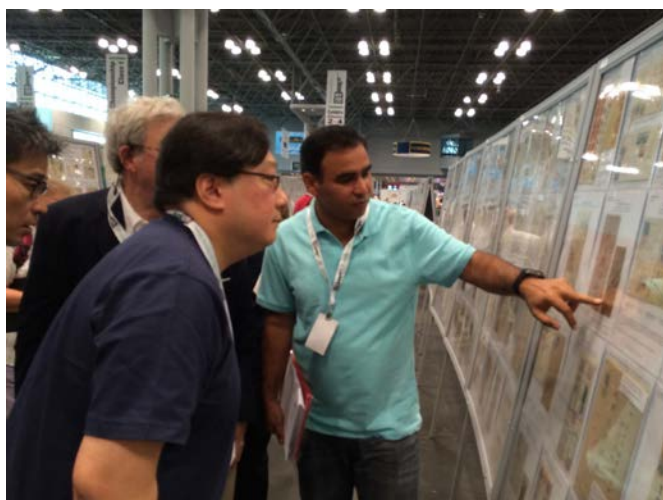
III-2 Early Period
(a) Tokyo

1933 Domestic Airmail with Express Delivery
The Oldest Record Cover Airlifted from Hakata and Delivered by Express in Tokyo

Hakata (1933.2.16, 8-12 p.m.)
— Kyobashi (2.18, 12-4 p.m.)

Domestic airmail service in Japan was introduced on April 1st, 1929. Airmail could be attached to express when its recipient was in a region available for express service, however only five examples of domestic airmail with express delivery are known. This is one of five examples of domestic airmail with express delivery, and has the oldest date of use.
Rate: 26 sen = letter 3 sen + domestic airmail 15 sen + express 8 sen

最終リーフ（作品の全リーフは付録にて原寸カラーでご覧いただけます）

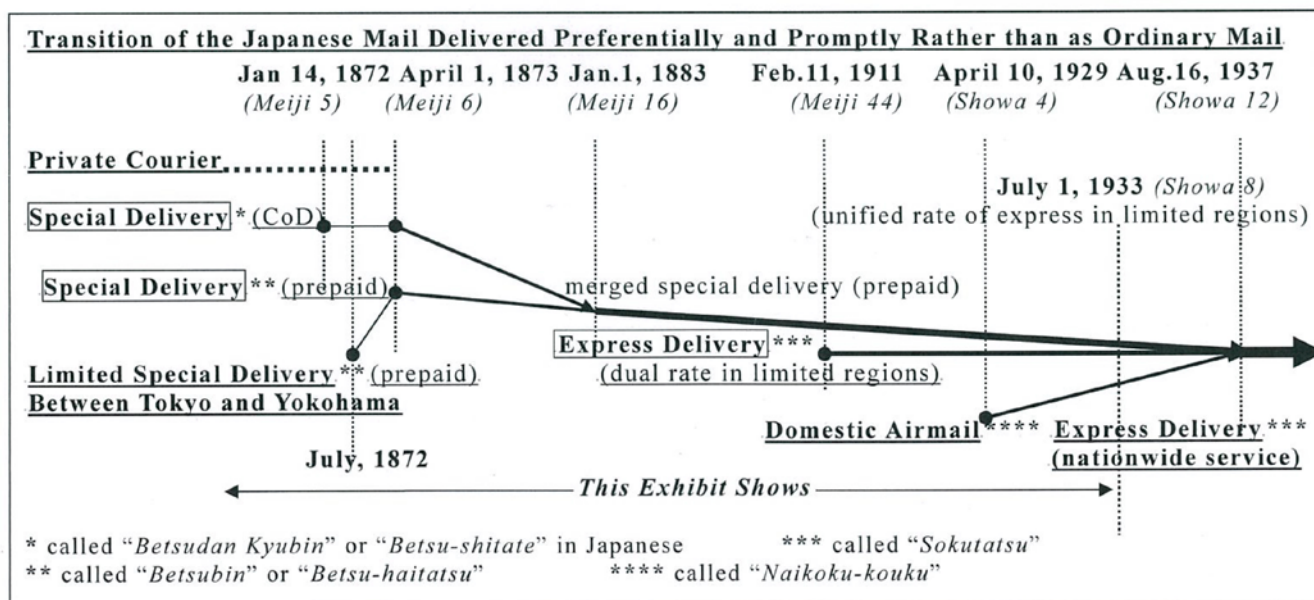


クリティークに参加し、ジュリーから審査結果を聞くとともに、今後のコレクション作りの指針を得る為の議論をする筆者

参加できない出品者は、（これはあくまで状況が許せばですが）コミッショナーや参観する友人等に依頼して、代わりにクリティークを受けてもらい、その枝点や改善点をフィードバックしてもらうよりほかに方策がありませんでした。ですが、これならば海の向こう側にいても、インターネットを通じてすぐに結果を知ることが出来るので、この手法は今後もぜひ継続していただきたいものです。因みに、今回の私の作品のスコアは 92 点でゴールドでしたが、その枝点は次の通りです。

- | | |
|---|-----------------|
| ・ 主題の選定と構成展開 (treatment and importance) | 27/30 (得点率 90%) |
| ・ 知識と研究 (knowledge and study) | 33/35 (同 94.3%) |
| ・ 状態と稀少性 (condition and rarity) | 27/30(同 90%) |
| ・ プレゼンテーション (presentation) | 5/5(同 100%) |

実は今回のクリティークによって、主題の選定と構成展開 (treatment and importance)27 点のうち、枝点の枝点である treatment が 19 点であったこと、importance が 8 点であったことがわかり、さらに状態と稀少性 (condition and rarity) 27 点のうち、枝点の枝点である condition が 9 点、rarity が 18 点であったことも判明しました。



審査員に高評価を得た、タイトルページに掲載した、時系列を示す図表

審査員からのコメントとしては、「タイトルリーフが非常に分かりやすくできている点は評価できる。これにより日本初期の急速郵便制度の流れがよくわかった」との評を得たほか、今後、本作品のスコアをあと3点引き上げて大金賞(95点)までもっていくためには、「初期の手彫カバーを各リーフ1通ずつとするのではなく、2通入れるリーフも設けて変化を持たせるのが良い」との助言を得ました。

この点は自分でも作品の弱点として認識していたところですが、あらためて審査員からはっきり指摘していただくことで、今後の方向性が一層クリアになったのは大変ありがたいことでした。それと同時に国内展におけるクリティークも、かくあるべしと感じたところです。

Part II: Early Special Delivery Mail

II-1 Special Delivery in the "Pre-Express" Period under Distance-Based Postage

On April 20, 1871, the Japanese government founded the modern postal system which contained distance-based postage, followed by the introduction of the first special delivery service (called "Betsudan Kyubin") on January 14th, 1872. In accordance with the regulations, the post office delivered mail individually and immediately when it arrived at the post office in charge of final delivery. The recipient paid the special delivery charge by cash on delivery.

1872 The Oldest Japanese Record of Registered Special Delivery and The Second Oldest Registered Mail

"Betsudan Kyubin" from Kii Taiji Post Office, via Ise Shiroko, to Wakamatsu Village

▲ photocopy of backside (70%)

Ex. Varro Eugene Tyler

Registered Delivery Registered Special Delivery (COD)

Route: Kii Taiji (1872.5.19) Ise Shiroko Ise Wakamatsu

P.O. opened on March 15th, 1872 P.O. opened on May 8th, 1872

Kii Taiji post office endorsed the date, "Betsudan Kyubin (Special Delivery [COD])", and "Registered" in red. The recipient paid the actual cost for a special delivery carrier between Shiroko P.O. and Wakamatsu by cash on delivery, because there had been no post office in Wakamatsu until Dec. 1903. Five examples of "Betsudan Kyubin" for this period are reported, however there is only one example of registered usage.

Rate: letter 300 mon (3rd distance category/ 196.4 to 392.7km) + local extension delivery 100 mon + registration 400 mon+ special delivery charge (actual cost of carrier/COD)

Stamp: first Japanese issue: etched dragon issue 100 mon (Plate1, pos.26), 200 mon (Plate1, pos.26), and 500 mon (Plate1, pos.31) cancelled by fancy cancellation of the Taiji post office.

P.17 (作品の全リーフは付録にて原寸カラーでご覧いただけます)

New York 2016 を無事に終えて

WSS NY 2016 コミッショナー対談

2016年6月3日は、翌日の作品返却を前に一日、アポイントのない束の間の安息日でした。
そこで最後のディナーくらいは豪勢に行こう！との池田コミッショナーの発案で、セントラルパークにほど近い、
ニューヨークでも最先端かつ一番人気のフレンチの一つである Daniel にて、晚餐会を開きつつ対談を行いました。

菊地恵実（司会、以下 菊）「連日のコミッショナー業務でお疲れのところ、本日はお集まり頂きありがとうございました。まずは New York 2016 のコミッショナー業務、ほぼ無事に終わられてお疲れ様でした。現在の率直な感想としては大変でしたか？もう二度とコミッショナーはやりたくないなどということはあるですか？」

池田健三郎（以下、池）「事前準備を念入りに行ったおかげではあるのですが、さほど大変なことはなかったですね。それと大変かどうかは、一緒にやる相手次第です。吉田さんとのコミッショナー業務は非常に円滑だったと思います。」

吉田敬（以下、吉）「ありがとう。僕もそう思います。コミッショナー業務は、当たり前な事を当たり前に行う能力のあるフィラテリストであれば、どなたにでもできる業務だと思います。ただし、当たり前なことを当たり前に行う能力というのは、実は結構高い要求ではあるのですが。」

池「今回実感したことですが、現地の組織委員会というのは必ずしも合理的に動かないので、それにイラつくことなく、辛抱強く寛大な心で接することができるのは必要ですね。」

菊「現地の人々が合理的に動かないというのは具体的には、どういうことですか？」

池「①予め多くの国のコミッショナーに伝えたスケジュール通りに物事を進めない（勝手な遅延があったり、時間変更を正確に伝えられなかったり等）②口頭での伝達が多すぎて言った言わないのトラブルが多数発生する。③リスク感覚がまちまちなこと（フレーム下部をネジ止めすると宣言しながらしなかった。）」



対談する両コミッショナー（左：池田健三郎、右：吉田敬）と司会の菊地恵実 2016.6.3 ニューヨーク・ダニエル（仏料理）にて

吉 「確かに今回とかく頭を悩ませたのはフレーム問題でしたね。

プラスチックという新しい素材を使用すること自体は否定しません。しかし下から手を入れてマテリアルが容易に取れてしまうような状態でしか使えない製品をよく国際展に向けて出してきたな、と思います。十分なテストさえすれば問題があるのはわかっていたでしょうに。。。

我が国からの展示物に限りませんが、展示作品がセキュリティの低い状態に長期間さらされた国際展だったことへの不平が、世界的に、今後長らく語られると思います。」

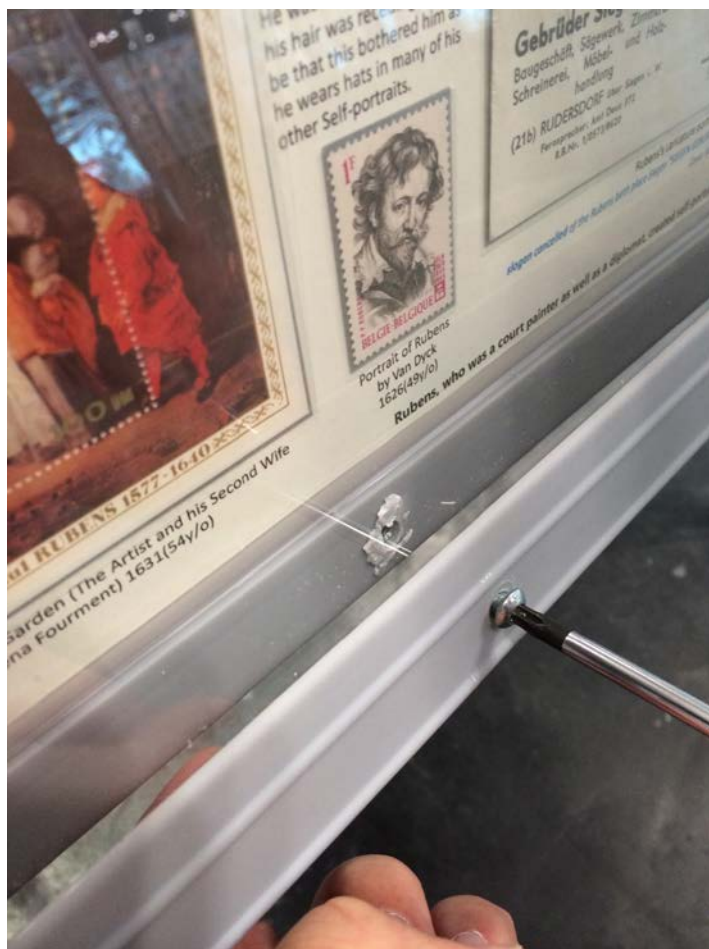
菊 「なるほど。では逆にコミッショナーを引き受けて良かった点、つまりメリットは何ですか？」

池 「何と言っても、他国のコミッショナーと交流が深まったことでしょうね。今回は残念ながら朝食がついていなかったのですが、朝食の場での国際交流はほとんどありませんでしたが、それでもコミッショナー会議や各種パーティー、それから移動のエレベーターで何度も顔を合わせる内に、自然と会話が始まりました。」

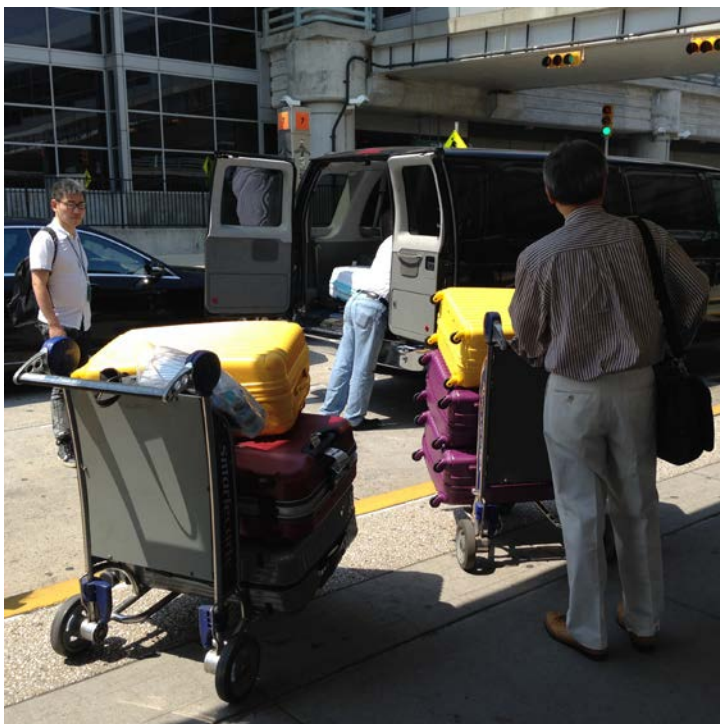
吉 「私は欧米で開催される国際切手展は、コミッショナー就任を依頼されようがされまいが、全日程参加する予定でしたから、ホテル代が浮いたというのは、一つのメリットかもしれません。」

池 「うーん。それはどうでしょうか。確かに徹底的に安く国際展に参加したいのであれば、それはメリットかもしれませんが、それにしてはあまりにその他の負担が大きいかもしれません。現地に入る日と出る日が、普通の参観者に比べれば長くなりますし、預け荷物の量を確保するために飛行機のランクもあげなければなりません。現地での自由時間も限られますし、何と言っても人様の作品を預かっていることから、常に緊張感があるのは大きなハンデだと思いませんか？」

吉 「考え直してみると確かに池田さんのおっしゃる通りですね。ニューヨーク展は会期が7日間と長かったので助かりましたが、それでも7日間の会期のうち、計算してみると最低でも2日半はコミッショナー業務に割いた事になります。競争展示は伝統郵趣しか見られませんでしたし、ブース巡りなんて、とてもできなかったですね。積極的なフィラテリストであればあるほど、より多く作品をみたり、ブースを回ったりしたいでしょうから、この2日半はもったいなく感じるでしょうね。」



プラスチック素材であるため、下部のネジが止まっていないと、下から手を入れてマテリアルを抜き取ることでできてしまう今回のフレーム。



現地空港施設の外の荷物積み込みは、盗難危険度の最も高いタイミングの一つで緊張感も高まる

池「結論としては、ごく一部の補償はあったものの、収支をまともに考えたらとても見合わない『有償ボランティア』、それがコミッショナーと言えます。今後もセカンドコミッショナー就任依頼があれば検討しますが、受諾の判断ポイントは正コミッショナーが誰か次第でしょうか。ましてや自分から手を挙げようとはなかなか。。。。」

吉「その意見には納得です。最小限の負担で国際展に参加したい人には良い条件かもしれませんが、我々のように日本で忙しい人にとって十分な補償は期待できません。ご指導を仰いでいる、佐藤浩一さんや設楽光弘さんからのご依頼でなければ、初めてということもあり受諾しなかったろうな、と思います。また彼らの意図を汲んで、私ならではの外交を活発に行ってきたつもりです。」

池「コミッショナーをつとめる人物が外交活動をすることは大事ですね。そして、そのような国際交流を義務や負担と考えずに楽しめるかどうか、も重要な点です。」

吉「そうですね。僕はトータルで見て、今回コミッショナーを引き受けて、非常に円滑な業務遂行ができたと思っていますし、同時に活動を通じて得られた満足感が、これまでのどの競争展よりも、大きなものとなりました。」



モンテカルロ切手クラブに招待されたティファニーディナーにて

池「毎日、号外出してたくらいなものね。」

菊「さて、では逆に、コミッショナーに任命される人に必要な資質とは何でしょうか？」

吉「今回取り組んでみてわかりましたが、コミッショナーは決して特定の限られた人でなければできない業務ではありません。私どもは今回の経験を元にマニュアルを作成し、①国際展に出品者や参観者として参加し、ビンルームでのやりとりに帯同したことがある人 ②日本で開催された国際展の展示運営業務に関わったことのある人 のいずれかであれば、キャッチアップしやすい環境を作りたいと思います。」

池「私どもがコミッショナーに任命されるまでの現状を見ると、やむを得ない面もあるのですが負担が一部の方に偏在していると感じます。開催国によってはコミッショナーをやりたい方も稀にはいるようですが、より多くの人に負担が分散した方がリスクマネジメントの観点からも望ましいのではないかと私は考えており、今回吉田さんが作るマニュアルには、私のノウハウも惜しみなく注ぎ込みたいと思います。」

吉「信頼性のある人に限る必要はありますが、コミッショナー候補の母集団を現在の2-3倍にすることが必要で、その目標達成にはマニュアルが必須です。暗黙知を既知化する技術は、誰でもが持っているわけではありません。よって結果として一部の人しかできなかったんですけどね。」

池「我々ももうすぐ50歳ですから、もっと若い人に継承する準備をする必要があるんですよ。運搬などの肉体労働も結構ありますね。」

吉「会社を経営していても、円滑な事業継承は最重要課題の一つです。中小企業のように経営者自身が事業オペレーションに入ってしまったら、なかなかそういったことに気づきませんが、我々の作るマニュアルは、日本に限らず世界各国のコミッショナーにとって重要だと思いますので、どんどん改善していきたいですね。」

菊「先ほど、コミッショナーに対して、能力以外で求められるところの話がすーっと抜けていた気がします。もう少し具体的にお話いただけないでしょうか。」

吉「コミュニケーション能力は何よりも大事だと思います。そもそも出品者とコミッショナーの関係は対等です。どちらが偉いというものではありません。未だに威張り腐るコミッショナーがいますが、現代のコミッショナーとしては極めて不適格です。またその任命を行う全日本郵趣連合は誰を任命するかに対して責任があると思います。

一過性に止まることなく国際競争展に良いコレクションを出してもらうことが世界における日本のフィラテリーのプレゼンスを維持するために重要だと私は考えていますので、出品者に対して不条理な態度をとる人間をコミッショナーに選任することはあってはならないことでしょう。」

池「ハイレベルでなくても良いのですが英語でのコミュニケーションができることは必須でしょうね。あとマナーとプロトコルへの理解は非常に重要です。アジアで開催されるものも含めて、競争切手展はやはりヨーロッパ発のものですから、単なる展示会ではなく社交の場であることを念頭に置かないと、本人の自覚できていないところで国益を損なうことになりかねません。『あのコミッショナーはなんなんだ！』というのが『日本はなんだ！』となるリスクは多分にありますから。郷に入れば郷に従わないとダメだと感じますね。」

吉「今回、日本人でパルマレスに参加された男性は全員ブラックタイをつけていましたね。池田さんから強く徹底してもらったので良かったですね。」



全員ドレスコードを守ってパルマレスに臨む日本人チームの男性参加者たち

池「今回のパルマレスは案内文の書き振りから見て、ドレスコードを守らないと入場拒否される可能性もあると思いましたからね。参加される方の為でもあります。」

菊「私は逆にドレスコードすごく悩みました。女性フィラテリストはどうしたらいいんでしょうか？」

池「菊地さんのパルマレスでのドレスは素敵でしたし、気にする必要はありませんよ。」

吉「光り物つけてると、女性はよりいいかもしれませんね。」

菊「いやいや。そんなお金があったら、一次昭和の見本が欲しいですよ。」

池「あ。それをパウチしてイヤリングにしたら、どうでしょうか？（笑）」

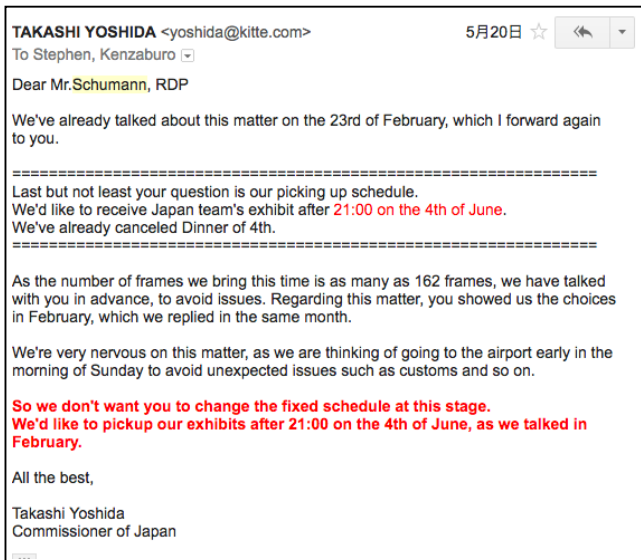
吉「必要能力の話に戻りますが、現代のコミッショナーにとって電子メールが使えることは必須だと思います。万一電子メールを使えない人がコミッショナーに選任された場合は、必ず電子メールで英語のやりとりを会期中も含めて行うことができるアシスタントをつけて、連絡はその人物が一手に引き受けることが不可欠だと思います。」

池「実行委員会とのやりとりに関して、細かいことをうやむやにしないことも大事だと思います。また、今回吉田さんが何回かゼネラルコミッショナーとやりあっていましたが、相手に対して必要なら抗議する＝Noを言えなければなりません。」

吉「抗議するためにも、普段からの関係づくりが重要です。僕は原則として米国実行委員会からの問い合わせ・要請に対しては、とにかく早く返信する印象を与えるようにしました。また何ヶ月も前から、期間中に生じるであろう問題点について、具体的に問い合わせすることで、『しつこいがきちんとしている』印象を与えることができたと思います。」

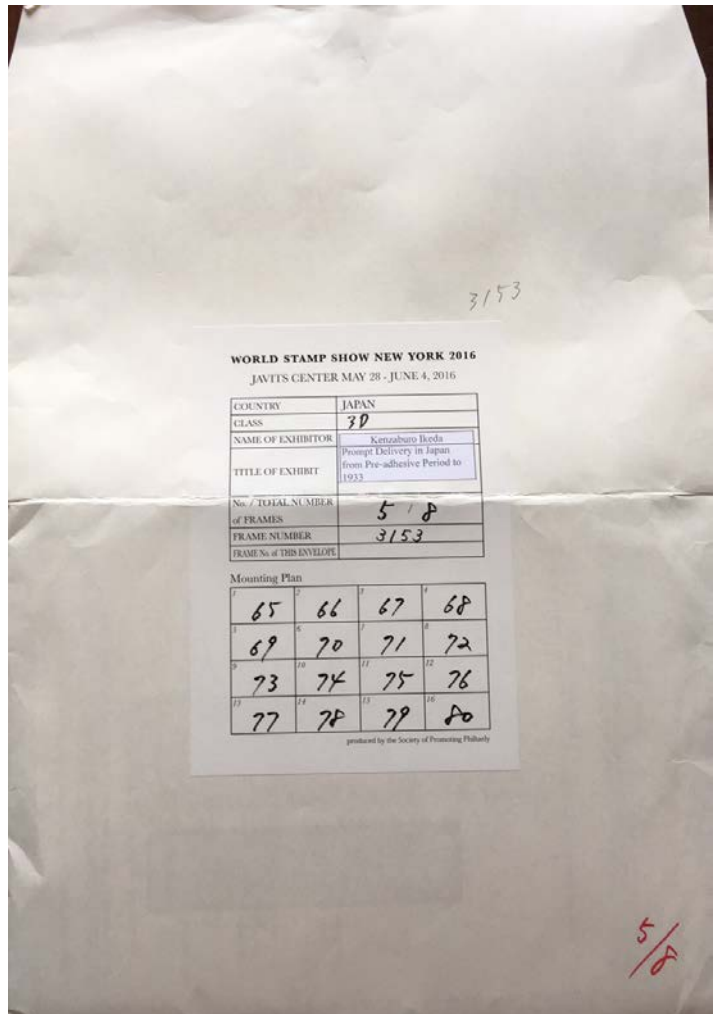
菊「なるほど。普段の関係があるから、いざという時に怒ることができるということですね。」

吉「その通りです。要はゼネラルコミッショナーとメールを通して、友人になってしまえば良いのです。実は今回ゼネラルコミッショナーだった、シューマン氏は昨年6月に英ロンドン王立郵趣協会のRDPに署名されました。RDPに署名することは、フィラテリストとして最高の名誉です。当該情報を佐藤浩一さんからいち早くお知らせいただいたことで、即座にお祝いメールを送ることができ、関係性を早くから作るきっかけにすることができました。」



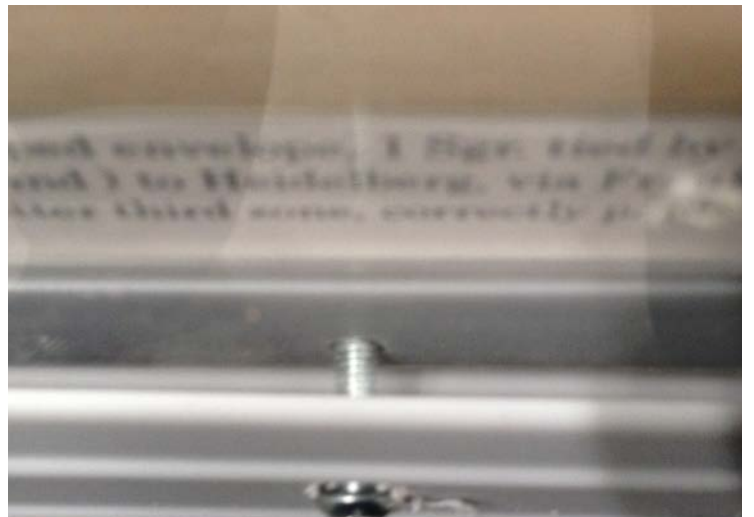
吉田コミッショナーが伝家の宝刀「赤い字のメール」を打った瞬間

- 池「我々は出品者との連絡もこまめに行い、公平にお取り扱いするよう心がけたつもりです。コミッショナーは決して偉い人ではありません。一方で出品者の下僕でもありません。」
- 吉「池田さんのおっしゃる通りだと思います。ただ出品者の中には初めて出品される方や、ルールを誤解されておられる方もいらっしゃいます。後になってあれが違う、これが違うとコミッショナーから指摘されるのは出品者にとっても不愉快でしょうから、出品者ならびに出品希望者に対しては、なるべく事前に条件や情報、そして本展覧会の規則を原文で提示しました。その上で一斉電子メール、ブログ、各郵便雑誌などを併用し、幅広く情報を開示して参りました。」
- 池「その甲斐あって、今回出品者とのトラブルは皆無でした。重量加算、ダブルリーフ加算などの負担増については、コミッショナーの置かれた運搬の窮状を明らかにしたため、受け入れていただくことができました。」
- 吉「また帰路の持ち帰りを奨励するため、運搬料の半額返却を導入しました。そして最終的には、必ずしも必須でない会計報告を行い、コミッショナーに入るお金がどのように使われるかを明示し、透明性を高めました。(P.160-161 をご参照ください。)」
- 池「舛添東京都知事の百万倍は皆様にご納得いただける会計報告だと自負しております！」
- 菊「メリット、資質と話が続きましたので、次は困った人、トラブルなどについてお聞かせください。」
- 吉「今回のご出品者の中で、コミッショナーに対して過大な要求をされる方や、送金や返事の極端に遅い方は一人もいらっしゃいませんでした。むしろ皆様からは、迅速なお手続きをいただいております、感謝しております。」
- 池「困ったのは、むしろ現地実行委員会とのやり取りですね。それも4月以降の。。。」
- 吉「確かに。3月までのゼネラルコミッショナーとのやり取りからは何も問題を感じませんでした。それが月が変わって4月になった頃から、電子メールの連絡が急に増えて、一日に2通も3通も送信されることが珍しくなくなりました。」
- 池「部下が送信した電子メールの内容を2時間後にゼネラルコミッショナーが否定する、みたいな事件もありましたね。相当混乱していたのですが、通関絡みの内容だったので、こちらとしてはシャレになりません。」
- 吉「混乱の極みは、出品封筒は各国で作ってください、という連絡でした。隣国のカナダですら、出品封筒が送られてこなかったらしいですよ。」
- 池「結局、吉田さんが楽天市場で買って、出品封筒を自作してましたよね。」
- 吉「いやー、おかげで楽天スーパーポイントが70ポイント貯まりましたよ。(笑)」
- 池「私も長年、世界展やアジア展に出品してきましたが、あれほど前々から準備を進めていながら、出品用封筒が実行委員会から送られてこないなんて初めて聞きましたよ。」
- 吉「あの頃から、ちょっと心配になってきましたよね。十年前から準備しているのにこれって。。。みたいな。」



日本人出品者用の、手作り出品用封筒

- 池「そうですね。それで会期が始まり、作品を見て回ったら、フレーム下部がねじ止めされていないんだものね。セキュリティの問題にとにかく頭を悩まされました。」
- 吉「このような場合に、なんでも実行委員会のいうことに YES というのではなく、出品者の利益を第一に考えて、実行委員会に異議を唱えるのもコミッショナーの役割として重要だと私は思います。」
- 池「その通りです。現地での実行委員会の決定は FIP やその下部組織である全日本郵趣連合よりもさらに優先順位が高くなります。しかし、唯一それよりも優先順位が高いのが出品作品の保全です。展示されている間の作品のセキュリティは、必ず確保するようにしたいものです。」
- 吉「しかし、構造に問題があるとはいえ、下部をネジ止めができないフレームを使用するなんて、日本で開催される切手展だったら、絶対にありえない判断だと思います。
会期中に新たに友人となったポルトガルからきた双子のフィラテリストのおじいさんたちは、2010年にリスボンで開催された国際切手展の関係者だったのですが、『こんなフレームはポルトガルなら絶対通らない。大国のやることはよくわからんねー。』と言っていましたよ。」
- 池「対談の最初の質問に対する回答で、コミッショナー業務は大変じゃない、みたいなことを言いましたが、訂正します。この『ネジ止め』をしたという一点で、僕は今回のコミッショナー業務は他の国際展とは違ってすごく大変だったと感じています。(笑)」
- 吉「斎藤環さん（出品者）、菊池恵実さん（参観者）が手伝ってくれたから2時間で済んだものの、述べ作業時間は8時間にも及びました。足腰への疲労が蓄積して、作業後、数時間ほど、椅子から立ち上がれなかったものね。」
- 菊「フレームの話になると、時間がいくらあっても足りませんね。怒り冷めやらぬわけもわからぬではありませんが、ネジ止め問題は、ここら辺にしておきましょう。」



結果として、本切手展における、コミッショナー業務の最大の難所となった、フレーム下部ネジ止め対応。
左) お手伝いを二時間以上してくださった斎藤環さん（手前）と菊池恵実さん（奥）。斎藤さんは翌日筋肉痛になりました。
右上) ネジ止め作業の様子を上から撮影。左は池田コミッショナー。
右下) 構造上、大半の下部のネジは途中までしか入りませんでした。下部のネジ止めが完全に施されなかった一つの理由のようです。

菊「さて、何はともあれこれまでのコミッショナー業務は無事に遂行されているようにお見受けしますが、何かそのために努力されたことはありますか？」

池「今回大きな問題が全く生じなかったのは偶然ではありません。

私たちは、起こりうる最悪のケースを想定し、何ヶ月も前から準備をしてきました。そして、それにより、日本からの出品物や出品者は大いにリスクを減らすことができたと思います。」

吉「実はコミッショナーを引き受けるにあたり、任意団体・日本郵趣連合さんに、マニュアルや決め事のご提示をお願いしたのですが、それがなかったので、当初は戸惑い、非常に不安になりました。そこで、国際切手展の経験豊富な佐藤浩一さんにアドバイスをいただくと共に、コミッショナー経験の豊富な内藤陽介さんにもミーティングでお時間をとっていただき、そこから、コミッショナー業務がようやく始められたと思います。」

池「それに先立つ2014年夏に開催されたフィラコリアでは、池田、吉田とも、出品物の提出と返却について、コミッショナーのお手伝いに参加し、経験をしました。今回コミッショナーをやるにあたり、あの経験は非常にプラスになりました。

また隣国で開催されたこの切手展は、私たちを含めて多くの協力者や帯同者がいたため、運搬荷物が多くても、飛行機への搭載や荷物の監視が円滑にできたことがよくわかりました。」

吉「確かに協力者がいないと、コミッショナーはなかなか辛いです。しかも東京から2時間強で到着するソウルと異なりニューヨークへは帯同者が少ないことが予想され、その事前確保は困難なことが予想されました。真っ先に池田さんにファーストクラスでの帯同をお願いしたのを覚えています。」



異域同舟(?)の両コミッショナー。ちなみに手前の池田氏は赤ワインを。奥の吉田氏は水をチョイスしています。

池「たしかに、当初は気楽な参観のための一人旅のつもりで、ビジネスクラスを手配していましたが。それが突如ファーストに変更ということで、マイルがもったいないと家人には責められましたが『国益のため』で突っぱねました。(笑)」

菊「私は実はほとんど英語ができないんです。お二人は英語は問題ないのですか？」

池「事前のメールのやりとりは英語ができないとどうしようもありません。ですが英語ができるアシスタントがいればこれは乗り切れます。現地では、さすがに初日から流暢にしゃべることは難しいかもしれませんが、だんだん英語に慣れていくので、数日経つと、自然と英語が出てくるようになりますよ。」

吉「僕は大学受験が終わったその日から英語の授業に出たことがないので、完全なブローケン・イングリッシュですが、世界の人口のマジョリティーはブローケン・イングリッシュを話すので、全く気にせず話していますね。」

池「吉田さん、授業には出てください！」

吉「まあ30年前の話ですよ(笑)。ただ真剣な話をすると、実行委員会への異議申し立てなどにおいては、こちらもしっかりとしゃべれないといけませんから、英語力というよりも、日本語でも良いので、論理的に言いたいことを伝えることができればならないですね。ですから、コミッショナーの能力としては英語力以上に、ロジカルに議論ができる能力が求められますね。」

菊「そういえばお二人はよくブログでバトってますよね。」

池「いや。あれはバトっているのではなく、ディベートをしているんです。」

吉「誰でも開設できるブログというメディアで議論を戦わせているわけですから、これまでに業界であった郵趣協会の水原さんの連合攻撃や京都寸葉、乃木バカ日誌のような、一方的な情報発信や論理破綻の多い文章とは一緒にされたくないですね。」

池「その通りです。そもそも異なる人格を持つ2名が意見が全く同一なんてありえないのです。」

吉「まあ正直、池田さんのブログを読んでイラッと来ないことがないといえば嘘になりますが、それはお互い様でしょう。

何よりも冷静に、論理的に物事を考える訓練をする相手としては最適ですし、それが競争展に参加する選手としての自分や、コミッショナーという外交を担当する自分にとって必要な能力を磨く場になっていると思います。」

菊「なるほど。そういえば池田さんがセカンド・コミッショナーになったのは、お二人のバトルがちょうどピークに達した頃だったと思うのですが、あれは吉田さんのご希望ですか？」

池「いやいや。ですから、あれはバトルではありません。」

吉「その通りです。ちなみにコミッショナーの選任を行うのは、国際郵趣連盟（FIP）の各国における加盟組織であり、日本においては任意団体・日本郵趣連合（その後、一般社団法人 全日本郵趣連合となる）です。

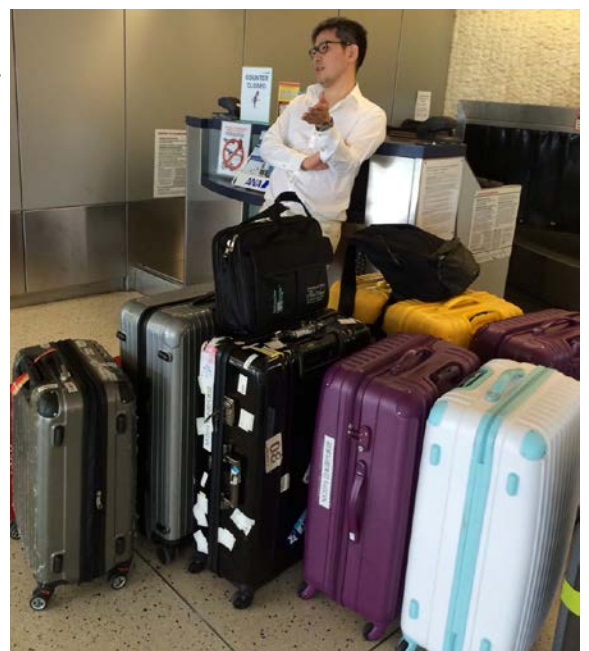
池田さんには申し訳ないけれど、実は私は、池田さん以外の方が任命されるといいなぁと思っていました。というのも池田さんの全日程帯同はすでに決定していたことであるため、さらに1名スタッフが増員されることで、3名体制になれば、預け荷物の数も増えて、より磐石になると思ったからです。」

池「お手伝いをするに吝かではないけれど、自分からセカンド・コミッショナーになりたいと思う人は少ないでしょうね。自分のペースや状況にあわせてファースト・コミッショナーのお手伝いをできる範囲でやること自体は構いませんが、せっかくの会期中の時間を、コミッショナー会議や、作品の点検に費やす義務を負うなんて、できれば避けたいというのが本音ですよ。」

吉「それ以外にも、カタログ郵送の手配や不在者のメダル・賞状の確認というのもありますよ。道義上ではありますが作品保全の責任を持たなければならないというのも常に緊張感を強いられるデメリットですね。」

池「ホテル代は出るにしても公式ホテルはどうしてもシャビーなところが多いですし、今回は朝食すら出なかったですからね。ともかく、セカンド・コミッショナーをお引き受けしたことで、気ままに一人旅を楽しみ、良いホテルに滞在し、思う存分作品を観て好きな時に休み、思いっきりブースやオークションで買い物をし、夜は每晚グルメ三昧で、合間にミュージカルやコンサートに観光を楽しむ…という『野望』は潰えたのでした。(笑)」

吉「昨年末のことですが、日本郵趣連合さんの会議でのご検討にあたり、ご同行が可能な方がいらっしゃればぜひお願いしたいとご連絡差し上げましたが、米国が遠いためか、会期が長いためか、残念ながらご返答はいただけませんでした。それで結局は日本郵趣連合から池田さんに就任依頼がいったのだと思います。しかし、それでもさらにこの時点で困ったのは、二人合わせて機内預けできる手荷物が依然としてスーツケース6個だけだったという点です。」



荷物から離れることは片時もありません。

池 「スーツケース6個だと、アクセプトされたすべての展示（162 フレーム分）を持ち込むと重量と容量の観点でこれ以上の荷物を預けることができなくなります。我々も、スーツやタキシードはもちろん、下着などの着替えも持ち込まないとシャレになりません。ここから同行者を自前でさらに見つける努力が始まりました。」

菊 「NY2016 日本国代表団ですね。」

池 「その通りです。外務省の友人の助言もあって、今回は伊勢志摩サミット参加中のオバマ大統領の移動とスケジュールが被る可能性もあり米国入国時にまごつくことは許されませんでしたので、外務省の日本国代表団に対する便宜供与のおかげで米国入国が事実上フリーパス状態だったのは強力な助けでした。それとともに近年最大のフレーム数の運搬をした私たちが今回重視したのは、行き及び帰りの同行者の確保です。ボランティア精神のある出品者や帯同者の参加が大事だと思います。そのためにも日本の郵趣界がより個人レベルで社交的になることが大切かと思います。」

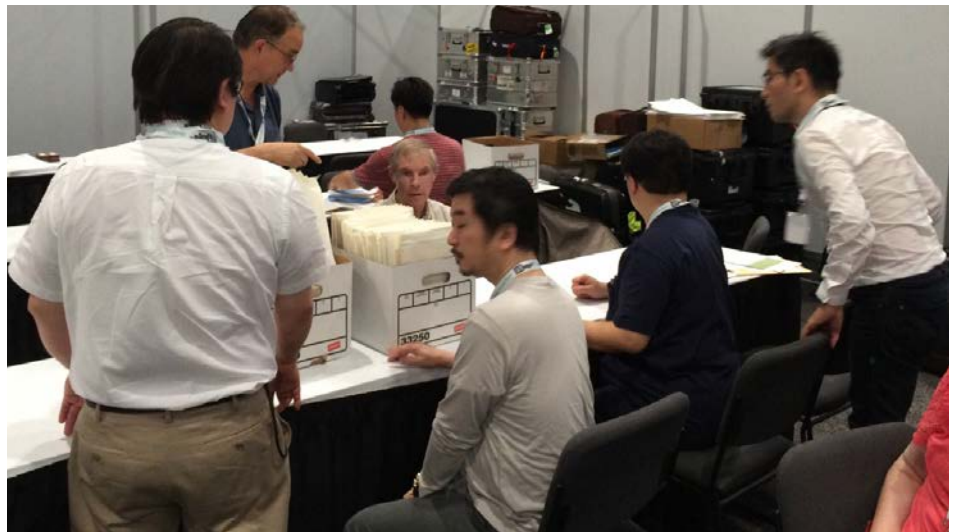
吉 「今回、代表団メンバーとして預け入れ手荷物の枠をご供与くださった皆様にはこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。安藤さん、松田さん、そして菊地さん、本当にありがとうございました。みなさんのご協力なかりせば、運搬委託された出品者に対して少なくない金額の追加費用請求をしなければならないところでした。」

菊 「ちなみに明日の夜には作品が返却されます。この後気になることは何ですか？」

吉 「何と言っても作品を一刻も早く無事に出品者の手元に安全に返すということです。」

池 「そうですね。ここまで完璧にやってきても、それがダメだと終わりですからね。」

吉 「返却は 22 時からなのですが、深夜にかけての作業を現地のボランティアがきちんとやってくれるのか？その為の人数は確保されているのか？ゼネラルコミッショナーや作品部の部長とは関係を作ってきましたので信用はしていますが完全に信頼はしていません。」



22 時からの作品返却には、出品者の内藤陽介さん、井上和幸さんも手伝いに駆けつけてくれたため、作業は約二時間半で完了しました。



夜 22 時とはいえ、空調の切られた会場は、それまでとは打って変わって、湿度の高い不快指数の高い状態に。代謝がいいにもかかわらず長袖を着てきてしまった、吉田コミッショナーは、不覚にも汗だくになり、後悔していました。

池「深夜の New York におけるホテルまでの移動も 100% 安全とは言い切れません。明日は菊地さんにも働いてもらいますからね。そのために今晚、ニューヨークで一番のフレンチを奢っているのですから！（笑）」

菊「え。ぎょっ、御意。」

（編集部注：本レストランにおける飲食費の支払いは、両コミッショナーの割り勘となったが、それに加えて、出品者の永井正保さんから、特別お小遣いとしていただいていた3枚の100ドル紙幣も、ありがたく支払いに使わせていただきました。永井さんありがとうございました。）



吉「ホテルに戻った後は、午後空港に行くまで僕は部屋の外へ一歩も出ないつもりです。時々会期の終了後に、コレクションをホテルに預けて旅行されるコミッショナーもいらっしゃいますが、僕にはとてもそんな勇氣はありません。そういえば、タイからの参加者たちが会期後にナイアガラ観光に行ってから帰国するといっていました、作品は大丈夫なのかと案じてしまいます。」

池「いやー。吉田さんが、それくらい小心者である方が出品者としては嬉しいと思いますよ。この不確実な世界情勢において、総額数十億円の価値のある物品の保全を確保するためには、それ以外のことは断念しなければならないと思います。コミッショナーはあくまで『有償ボランティア』なのですから。」

菊「先ほどの池田さんの発言を改めて噛み締めて、私も一気に緊張してきました。この後のデザートが喉を通るかなあ。（編集部注、一皿ペロリと食べていたそうです。）」

吉「今日に限りませんが、切手展では毎日フィラテリストと会食することができて楽しいですね。」

池「佐藤浩一さんも常々おっしゃっていますが、フィラテリーはヨーロッパ発の社交的な趣味なのです。欧米にやってくるとそれを改めて実感させられます。」

吉「旧知の友人との再会はもちろん、新しい人と知り合えて刺激に富んだ日々を送ることができましたよ。一方で日本を遠く離れた異国で、日本人同士が卓を囲むのもいいものです。帰国すれば全国に散らばるため、なかなか気軽に会うことはできませんから、良い機会だったと思います。」

池「楽しかったですねえ。参観予定のある方は事前にコミッショナーに話をしておく、そのような会食に呼ばれやすくなるので、良いかもしれませんね。」

菊「そうですね。本日はお疲れのところ、いろいろとお話を聞かせていただきましてありがとうございました。」



左より斎藤環、菊池達哉（参加者）、池田健三郎、鎗木顕、石澤司、田村邦彦、吉田敬の各氏
6月1日夜、チャイナタウンの中華料理店「福臨門」にて（撮影：菊地恵実）

WSS NY2016 コミッショナー活動に係る収支のご報告

正コミッショナー 吉田敬

セカンドコミッショナー 池田健三郎

私どもは、2016年5月28日-6月4日まで米国ニューヨーク市において開催された、世界切手展 Word Stamp Show 2016 に日本国ナショナル・コミッショナーに任命され、会期を通じ現地において活動いたしました。

本日ここに、当該活動に係る収支報告が【別表】の通りまとまりましたので、ご報告いたします。

コミッショナー活動に係る経費負担は、基本的に（１）作品運搬をコミッショナーに依頼する出品者の負担、（２）WSS NY2016 実行委員会および FIP 加盟団体（全日本郵趣連合）からの交付金、（３）コミッショナーの自己負担、の３種類からなっており、その大宗を（１）および（３）が占めることから、基本的にはコミッショナーと運搬依頼者との間における委任契約に基づきます。

このため本来、コミッショナー活動に係る収支報告は制度上、義務化されているものではありませんが、今回、コミッショナー両名が話し合い、国際展コミッショナー活動の遂行に際してどの程度の経費を要するものなのかを自主的にオープンにすることが、わが国郵趣界の健全な発展に資する見地からも望ましいとの見解で一致し、当該情報を速やかに開示することにより、将来的にコミッショナーを引き受けていただく方の心理的負担を軽減することを目指しています。

したがって、今後必ずしも各地で開催される国際切手展におけるコミッショナー活動の収支が一律に公表されるとは限りませんので、この点はご注意ください。

なお、今回の国際展は非常に規模の大きなものであり、日本からの出品数も多数に上ったことから、ナショナル・コミッショナー両名は事前段階を含め多くの皆様による多様なご助言やご協力を得て漸くそのミッションを完遂することができたものと認識しております。

ここに改めて謝意を表し、以上をもって収支のご報告といたします。

2016年6月13日

WSS NY2016 日本国ナショナル・コミッショナー

吉田 敬 池田健三郎

【別表】

1. 収入の部

日付	費目	金額(円)	備考
1.22	出品料(預かり金)	1,943,097	同額をNY2016実行委員会に支払い(1.22)
1.22	運搬料及び追加料金	543,000	1フレーム4,000円(基本料金)+追加料金
5.28	コミッショナー現地手当	127,600	580米ドル×2名、NY2016 実行委員会より
6.8	作品運搬用スーツケース 売却代金	6,000	ヤフオクなどにて売却
6.6	FIP加盟団体交付金	44,784	(一社)全日本郵趣連合より、特別賞費用含む
以下余白			
	合計	2,664,481	

2. 支出の部

日付	費目	金額(円)	備考
1.22	出品料(預かり金)	1,943,097	NY2016実行委員会に支払い
1.22	上記 送金手数料	4,500	銀行あて支払い
4.25	出品用封筒購入費	7,418	
5.7	同ラベルシール	2,972	
5.7	同プリント	820	
5.7	同上 作成事務費	8,000	アルバイト代(8時間)*梱包・発送も
5.14	特別賞(輪島塗絵皿)	15,000	授与は連合名義、支払先:日南彩漆堂
5.21	作品運搬用スーツケース	42,780	6個
5.25	郵便局梱包材	4,790	返却用
5.25	現地配布用切手	10,000	日本の記念特殊切手額面100円×100組
5.25	同上収納用黒台紙100枚	6,200	コミッショナー配布用、ジャパンスタンプより購入
5.27	都内→空港交通費	29,970	ワゴンタクシー往路(作品搭載)世田谷・麹町・成田空港
5.27	航空運賃	3,972,880	ANA、2名
5.27	同上燃油サーチャージ等	62,720	同上(現金払い)
5.27	手拭い(贈答用)	7,000	現地ピンルームスタッフ贈答品、成田空港免税店
5.27-6.5	現地交通費	40,038	ホテル-会場間移動費(タクシー等)
6.5	オフィシャルホテル→JFK	8,250	75ドル、作品運搬用ハイヤー代(作品搭載)
6.6	空港→都内交通費	30,190	ワゴンタクシー復路(作品搭載)
6.10	名刺印刷用紙代+印刷費	1,700	2名分
6.15	カタログ送料の返金	40,000	カタログ郵送費を実行委員会が負担したため
6.16	カタログ発送代	5,400	@200*27名
以下余白			
	合計	6,243,725	

※上記収支報告に関する注記

- (1) 出品料の米ドルの邦貨換算は1ドル=118.88円(送金時レート)で行っております。
- (2) 出品料を除く米ドルの邦貨換算は1ドル=110円で行っております。
- (3) 国際切手展におけるコミッショナーの渡航費(航空運賃)は自己負担とされています。今回の成田-ニューヨーク間往復には両名ともファーストクラスを使用しましたが、これは預け荷物が出品物だけでスーツケース6個に及び他クラスに搭乗した場合に多額の追加料金の発生が確実なことから、これが出品者負担となることを回避するためのものです。なお、同航空運賃(燃油サーチャージ等除く)は各自保有マイルを以って支弁しました。
- (4) 現地滞在中ホテル代は米国主催団体の負担となっており、コミッショナーの私費負担はございません(部屋付け飲食費・電話代等は別途私費負担)が、通常の国際展では朝食付きの部屋が供されるといころ、今回は実行委員会の予算削減の一環で、朝食抜き部屋が供されました。
- (5) コミッショナー現地手当(いわゆる日当)は、現地主催団体より1人あたり580ドル支給され、このほか各々にメトロ7日間有効乗車券1枚が付与されました。
- (6) 現地での食事代、レセプション会費等は含みません。
- (7) アワードバンケット(会費250米ドル)はコミッショナーの出席が事実上義務化されており会費負担はございませんでした。

以 上

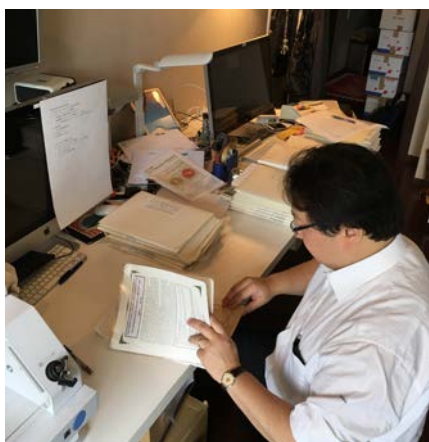
現地号外とフォトアルバム

今回のニューヨーク展で、ザ・フィラテリストマガジン編集部は、プリンターを米国に持ち込み、現地号外を若干部数、無料で配布していました。重要な内容はほとんど含まれない、お遊びの新聞ではありますが、日本から遠く離れた異国で、出品者同士の会話の緒になればいいや程度の気持ちで毎日発行していました。全6号分を再掲します。クスッと笑える内容を意図的に盛り込んでいますので、寛大な心でお読みいただければ幸いです。

なお、あわせて、コミッショナー等が撮影した写真を掲載します。ここ十年で最大の切手展との呼び声高いNY2016の雰囲気を感じていただくとともに、今後開催される国際展に、是非出品者として、参加者として、より多くの皆様が参加されることを期待しております。



出国3日前に届いた、運搬委託された出品物



送られてきた作品の検品をする池田氏



日本国代表団メンバー@成田空港ラウンジ



機内食は豪華です



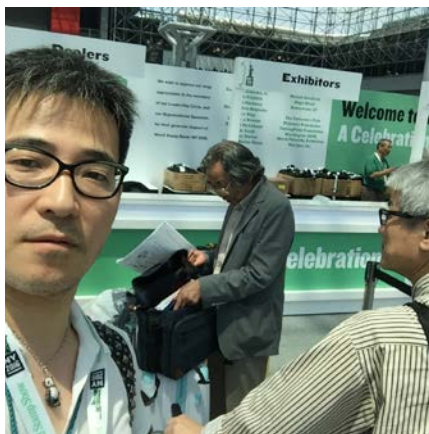
JFK 空港で、トランクを積むドライバー



スーツケースが多すぎてとても一人では運べません



InventorySheet を見ながらの作品納入



日本国代表団メンバーには、アシスタントコミッショナーバッジが支給されました



疲れていても、会場を見ると気分があがります

The Philatelist Magazine

NY2016 現地号外第1号

日本代表団、現地入り。作品部に無事展示作品を納品する。

2016年5月28日から、米国ニューヨーク市で開催される、国際切手展 World Stamp Show New York 2016 の開幕前日の5月27日、同展覧会の日本国代表団（コミッショナー：吉田敬、セカンドコミッショナー：池田健三郎）4名が、現地入りし、文献部門を除くすべての部門への出品23作品を現地、作品部に納品した。同展覧会は、6月4日まで、Javits Center にて開催され、出品者15名が参観予定のほか、熱心な日本人フィラテリスト若干名が来場の予定。



日本代表団に四つのトラブル

コミッショナー業務の遂行を無事完了した、日本代表団だが、業務と無関係のところでも4つの大きなトラブルが起っていたことが当誌の取材で判明した。

1. 主席随員 菊地恵実氏、古いパスポートを持参して成田空港に現れる。

チェックイン時に気づいた菊地氏は、往復5時間をかけて自宅のある相模原市まで往復。しかし幸いなことに空席のある午後便に変更ができる航空券を取得していたため、7時間遅れで現地入りした。

2. セカンドコミッショナー 池田健三郎氏 ホテルを二重登録する。

コミッショナー任命前に予約していたホテルのキャンセルを忘れたため、初日のホテルチャージを引き落とされる羽目に。

3. コミッショナー 吉田敬氏 アメックスカードを紛失。

世界一の繁華街でカードを紛失したことに1時間後に気づくが、悪用される前に気づき無効化を完了。

4. 第三席随員 松田伸裕氏 ワイングラスを割る。

鮭のうまいイタリアン Basta Pasta にて。



上：作品の入ったスーツケースを監視する、安藤源成さん（左）、松田伸裕さん（右） 下：作品部へ作業を渡す吉田コミッショナー（写真：池田健三郎）

書 名：ザ・フィラテリストマガジン
号 数：NY2016 現地号外 第1号
発行日：2016年5月28日
発行者：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社
発行人：吉田敬
編集部：北川朋美、山田はるか、菊地恵実
* 当誌は「スタンペディア日本版」の機関誌です。

Name of the magazine:	The Philatelist Magazine
Number:	NY2016 Extra Edition 1st
Date of issue:	May 28th 2016
Publisher:	Stampedia, inc.
Editor:	T. Kitagawa, H. Yamada, E. Kikuchi

The Philatelist Magazine

NY2016 現地号外第2号

日本人の作品を無事展示して、国際展開幕。

2016年5月28日午前9時、国際切手展 World Stamp Show New York 2016 が、米国ニューヨーク市で無事開催された。開幕式には、米国海兵隊が駆けつけ、国旗掲揚、国歌斉唱を行い、我が国のそれとはまた一味違う雰囲気の世界展を味わうことができた。

開幕式の後から競争展エリアへ入ることが、コミッショナーも含めて初めて許され、コミッショナーは業務の一つとして32の展示作品、すべてのチェックを開始した。その結果、5作品の展示に問題を発見。手ぬぐい作戦 (operation-tenugui, 次項参照) で既に懇意になっていた作品部部長に依頼し、速攻で修正作業を行わせ、午後一時にはすべての日本人の作品が正しく展示された。

コミッショナー、外交活動を活発化

今回コミッショナー業務の円滑な遂行を行うため、吉田敬、池田健三郎、両コミッショナーは佐藤浩一氏の指導のもと、入念な事前準備を実施していたことが判明した。以下に幾つかの作戦 (operation) を紹介する。

- 1.operation-tenugui 最上級のもてなしを行う時に使用。ゼネラルコミッショナー夫妻、作品部部長及び担当者に配布し、円滑な展示業務の遂行に活用。ものは、成田空港のお土産ショップ akihabara に、並ぶのが大嫌いな池田コミッショナーが「ファーストレーンはないのですか？」とわけのわからないつぶやきをしながら10分近く並び購入したもの。
- 2.operation-gakuware 上級のもてなしを行うにあたり使用。切手市場で購入した額割れ切手100円分をジャパNSTAMPで購入した黒台紙にセット。30組をばらまき、好評。
- 3.operation-kutisaki それ以下の相手にはおべっかのみ (priceless)



上：テープカット (50cm 近くの長さのハサミを入れるのは、ワージ実行委員長。下：「欧米はホームだから」と豪語する吉田コミッショナー。審査結果的にはおそらくアウェイのはずなのだが。。。New York collector's club 主催の晩餐会に手 (写真：菊地恵実)

書 名：ザ・フィラテリストマガジン
号 数：NY2016 現地号外 第2号
発行日：2016年5月29日
発行者：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社
発行人：吉田敬
編集部：北川朋美、山田はるか、菊地恵実
* 当誌は「スタンペディア日本版」の機関誌です。

Name of the magazine:	The Philatelist Magazine
Number:	NY2016 Extra Edition 2nd
Date of issue:	May 29th 2016
Publisher:	Stampedia, inc.
Editor:	T. Kitagawa, H. Yamada, E. Kikuchi



開会式は、星条旗+米国国家斉唱



コミッショナー会議にて



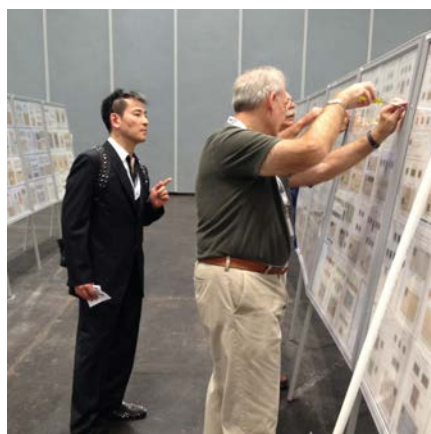
開場後最初に、日本人の作品の展示が正しく
されているかチェックします。



リーフ番号の入れ間違えも散見されるため全
部チェックします



安藤さん、作品の前で。あーん？



作品部に指示して、展示のやり直しをさせます



お爺さん達が疲れてくるので、途中から作業
をかわります。



文献部門は、広い部屋に展示されています



英 LONDON 王立郵趣会のパーティー



おしゃれなティファニーディナーのメニュー



チャンピオンクラスに展示された、大沼さんご夫妻



NY コレクターズクラブのパーティー

The Philatelist Magazine

NY2016 現地号外第3号

コミッショナー会議でフレームのネジ止めに指摘

国際切手展 World Stamp Show New York 2016 二日目朝に開催された、第2回コミッショナー会議は、穏やかな雰囲気の中で進行していたが、英国コミッショナー・アイチソン氏の「フレーム下部のネジ止めがされていない (un-screwed)」との指摘が入ると、雰囲気は一変。米国のゼネラル・コミッショナーが「全く同意する。すべてのフレームの下部のネジ止めを見直す」旨の発言をするに至った。今回のフレームは表面がプラスチック製で、ネジ止めをしないと下部から指を入れることが必ずしも不可能ではないため、同作業が急遽追加された。日本コミッショナー2名は、これに気づいたヨーロッパのベテランの見識に大きく関心させられることとなった。

国際切手展は、人的交流こそが醍醐味

フィラテリーは Social な趣味であることを再認識させられるのが、切手展、中でも国際切手展のその場である。日頃メールでやりとりしている外国人との交流はもちろんのこと、国内でなかなか集まることの限られる老若男女のフィラテリストが海外で一堂に会すのもまた楽しいものだ。二日目に開催された交流を幾つかご紹介。

- 1.ISJP (米国の日本郵趣協会, 1946 年創立) 例会: コミッショナーの声がけにより日本人参加者7名が参加。現地の日本切手収集家と交流。
- 2.Tiffany Dinner (米国の収集家ティファニー氏にちなむ賞の授与式): コミッショナー2名が招待される。会場で会った、主催のマセリス氏 (モンテカルロ切手クラブ) からもう一名連れてきてくれとの依頼があった時にたまたま隣にいた木戸君が急遽吉田のスーツを着て参加。痩せている者の特権か。
- 3.昼飯: フードコートで安藤源成氏にフルーツを振舞われる



上: 下部のネジ止めがされていない展示フレームの図。

下: フードコートでフルーツを嗜む老若男女の図 (写真: 本誌)

書 名: ザ・フィラテリストマガジン
 号 数: NY2016 現地号外 第3号
 発行日: 2016年5月30日
 発行者: 無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社
 発行人: 吉田敬
 編集部: 北川朋美、山田はるか、菊地恵実
 * 当誌は「スタンペディア日本版」の機関誌です。

Name of the magazine:	The Philatelist Magazine
Number:	NY2016 Extra Edition 3rd
Date of issue:	May 30th 2016
Publisher:	Stampedia, inc.
Editor:	T. Kitagawa, H. Yamada, E. Kikuchi



エキスパートチームに外されたリーフ



副賞の数々。重いのが当たりませんように。。。。



コミッショナーは現地手当てを貰えます (580USD)



中華に舌鼓を打つ



斎藤環さんと池田氏@ NY 地下鉄



中華を食べまくる一行



切手の製造面の違いを重ねて展示した例



operation-tenugui であげた手ぬぐいが何故か、副賞になっている。。。。



フレームの下部8枚を使った展示



展示を横から見るとこんな感じ



なんとなく微笑ましい一枚



コイル切手の展示を極めた事例

The Philatelist Magazine

NY2016 現地号外第 4 号

バーゼルでない方の鳩

国際切手展 World Stamp Show New York 2016 は三日目を無事終えました。毎日ニュースを発行すると徐々にろくなニュースがなくなるもので、本日は、会場の様子をお伝えいたします。

本紙写真班が 2016 年 5 月 30 日午後 3 時ごろ、会場入り口近くに設置された、国際オークションハウス SPINK のブースに、バーゼルの鳩の在庫を調べに近づくと、足元になんと鳩が！

そう。この国際展会場にはなんと鳩が舞っているのです。風流だなあと思う一方で、作品やブースの切手の上に落し物がないのか、不安に思う人はいないのかと不思議に思いました。

日本人は細かすぎるのでしょうかね。

木戸氏、国際オークション・デビュー

社会人 2 年目のフィラテリスト木戸裕介氏は、2016 年 5 月 30 日に、ニューヨークで開催された、クリストフ・ガートナー珍品オークションに参加し、3 勝 1 敗で国際オークションデビューを飾った。

以下は本紙の取材

TPM 「何を落とされたのですか？」

木戸 「今回の入札は実は代行なので、詳細は話せないのですが、ドイツと日本にビッドしました。」

TPM 「参加してみてご感想は？」

木戸 「緊張しました。金額が大きいのと英語だったこと、それからテレホンとかネットとか、外人とか、競争相手が普段と違ったので、エキサイティングでした。」

TPM 「隣のドイツ人が睨んでましたよ。」

木戸 「怖かったですー。でもガートナーと目があったら、ニコニコしてくれて、嬉しかったです！」



下：ドイツ人の鋭い眼光に睨まれる中、耐えて札を上げ続ける木戸氏（写真：写真班）

書 名：ザ・フィラテリストマガジン
号 数：NY2016 現地号外 第 4 号
発行日：2016 年 5 月 31 日
発行者：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社
発行人：吉田敬
編集部：北川朋美、山田はるか、菊地恵実
* 当誌は「スタンペディア日本版」の機関誌です。

Name of the magazine:	The Philatelist Magazine
Number:	NY2016 Extra Edition 4th
Date of issue:	May 31st 2016
Publisher:	Stampedia, inc.
Editor:	T. Kitagawa, H. Yamada, E. Kikuchi



吉田コミッショナーの部屋で夜遅くまで宴会



食後、Times Square まで歩く日本人出品者一行



掘り出し物沢山でホクホクしている大井さん



掘り出し 1 事故便カバー



掘り出し 2 琉球数字切手のアーカイブ



掘り出し 3 朝鮮ローラー印



掘り出し物にホクホクする木戸氏



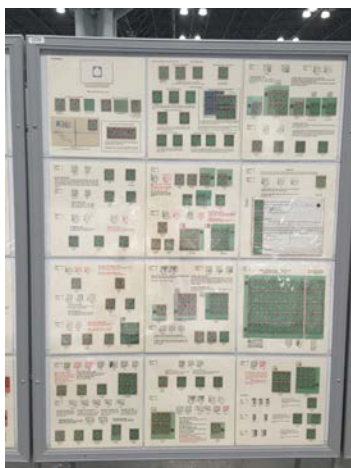
米国最初の航空切手に描かれたカーティス機が会場外に展示されていました



会場外では、チラシが配布されるコーナーが。



フレームの中央4リーフを使い、大型シートを展示した例



「横幅 4/3 リーフ」を使用した、伝統郵趣作品



パネルにひび割れの入ったフレーム

The Philatelist Magazine

NY2016 現地号外第5号

安心してください。止まっていますよ。

本紙号外第3号でお伝えした「展示フレームの下部がネジ止めされていない」件の続報。

現地実行委員会は、5月30日時点で「全フレーム下部のネジ止めを実施する」と発言（シューマン・ゼネラルコミッショナー）していたが、5月31日になり方針を一転。「作業ボランティアが確保できないため、フレーム下部のネジ止めを実施しない」と回答した。

この回答に、日本代表団は強く反発。FIP ティ会長及びシューマン・ゼネラルコミッショナーに「下部のネジ止め作業を自分たちで行うので、日本の作品の下部フレームをネジ止めさせる」よう直談判し、展示作品162フレームの下部をネジ止めする作業を行った。

ニューヨーク展のフレームはプラスチック製で、電動ドライバーが使用しづらいため、作業は人海作戦となり、日本代表団の3名（池田、菊地、吉田）に加えて、出品者の斎藤環さんが2時間に渡り、同作業を行った。（のべ8時間）同様の対応を行った国は世界でも限られており、本紙編集部が確認できた大国は、ドイツ、オランダ、日本のみ。いずれも勤勉で知られる国であり、コミッショナー同士で「ひどい目に合うよね」と慰めあった。



上：慣れない労働におかしくなり「フレームのネジ止めにも全裸に見えるポーズがあるんです」とつぶやく、池田健三郎コミッショナーこと「とにかく丸い池田」（手前）

下：フレームの材質上、ネジが奥まで入るケースは必ずしも多くなく（図）、全くネジが入らないネジ穴もあったが、とりあえず全リーフの保全についてできる限りのことは実施されたと思料。

文献部門、審査結果発表

文献部門の審査結果が予定より一日早く発表された。

120th Anniversary of Japanese Commemorative Stamps	LS	(公財) 日本郵趣協会
International Exhibition History 1865-2004	S	正田幸弘
General Collection of Japanese Definitives	S	無料世界切手カタログ・スタンペディア (株)
Handbook of the Roman Letter Machine Datestamps of Japan	S	無料世界切手カタログ・スタンペディア (株)
Postal History of the Japanese Military Mail 1894-1921	V	玉木淳一
Hiroyuki Kanai: "Classic Japan 1871-1876"	G+SP	(一財) 切手文化博物館
Stampedia Philatelic Journal	LV+SP	無料世界切手カタログ・スタンペディア (株)
Stamp Club	S	無料世界切手カタログ・スタンペディア (株)
Visual Japanese Stamp Catalog Vol. 1, Vol 2, Vol 3, Vol 4	V	(公財) 日本郵趣協会

文献部門を除く部門の審査結果は、本日夕方までに発表の予定。ブログやWEBで速報予定。

書名：ザ・フィラテリストマガジン

号数：NY2016 現地号外 第5号

発行日：2016年6月1日

発行者：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

発行人：吉田敬

編集部：北川朋美、山田はるか、菊地恵実

* 当誌は「スタンペディア日本版」の機関誌です。

Name of the magazine: The Philatelist Magazine

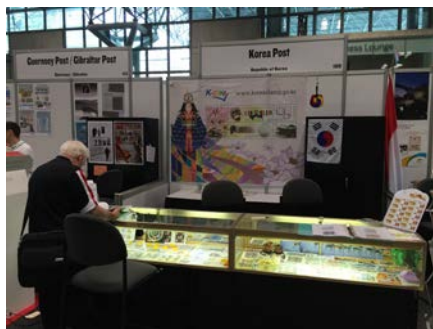
Number: NY2016 Extra Edition 5th

Date of issue: June 1st 2016

Publisher: Stampedia, inc.

Editor: T. Kitagawa, H. Yamada,

E. Kikuchi



韓国郵政ブース。東アジアの大国は日本以外はほとんどの国が参加していました。



米国郵便 USPS のブース



米国の記念印はこんな感じ。アスクルで簡単に作れそう。。。。



ジュニア向け教室の様子



池田コミッショナー@会場入口



入り口で開場を待つ人々



これは中央の8フレームをつないで、縦方向につながったシートを展示した



極められた、コイル切手コレクションの展示方法



バージー・キングさんの胸元には、ダブルジュネーブのピンバッチが！



モダンな収集対象では、エラーやプリンターズ・ミス、James Bendon の本もあって、もはやお墨付きか。ズヴェイストを入れるのがもはや常識となっている。



ネジ止めで疲れ切ったコミッショナー2名と、ブース巡りで疲れ切った木戸君

The Philatelist Magazine

NY2016 現地号外第6号

安藤源成氏、ナイアガラより帰還

当誌編集部は、日本代表団の次席随員・安藤源成氏が、6月1日（水）にナイアガラの滝を訪問し、無事帰還した事実を確認した。

当誌編集部の「華厳の滝と比べていかがでしたか？」の質問に対して「比べものにならんぞ。あー？」とのこと。毎日外交活動をしているコミッショナーも含めて、日本人参加者は久々に集結し、チャイナタウン福臨門に繰り出し、安藤氏の無事帰還を祝った。

競争出品の審査結果発表される

6月1日正午に、米国ゼネラルコミッショナーから、各国コミッショナーに審査結果が手渡された。日本コミッショナーは、来場中の出品者に手分けして審査結果を通知するとともに、ホームページ並びに電子メールで、すべての出品者に、得点や枝点を迅速に連絡した。

メダルは以下の通り。詳細はNY2016公式HPにて。

文献以外 LG1 G10 LV5 V3 特別賞該当なし

文献部門 G1 LV1 V3 LS1 S4 特別賞該当2

* チャンピオンクラス、ワンフレイムクラス除く

本日授賞式並びにパルマレス

会期6日目の本日は、昨日審査結果が発表されたこともあり、競争展の表彰が主要行事となる。

日中は、11時より Award Ceremony が開催される。

コミッショナー会議では以下の通り口頭で伝えられたが
11:00-12:00 LS, S, B 12:00-13:00 LV, V 14:00-17:00 LG, G
公式HPやパンフレットでは異なる時間帯が示されているので、授賞式への参加を確実にしたい方はそれぞれの時間帯の1時間以上前に会場入りし、係員に確認されることをお勧めする。夜のパルマレスは予定通り開催されるが、ドレスコードは厳守のこと。



上：アイスクリームの天ぷらを米国の中華料理店で注文する安藤源成氏

下：日本人参加者の中で最高得点を獲得し、念願の大金賞に到達した、長谷川純氏（左）手前は印紙部門のフィードバック担当の池田健三郎コミッショナー（撮影：菊地恵実）

書名：ザ・フィラテリストマガジン

号数：NY2016 現地号外 第6号

発行日：2016年6月2日

発行者：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

発行人：吉田敬

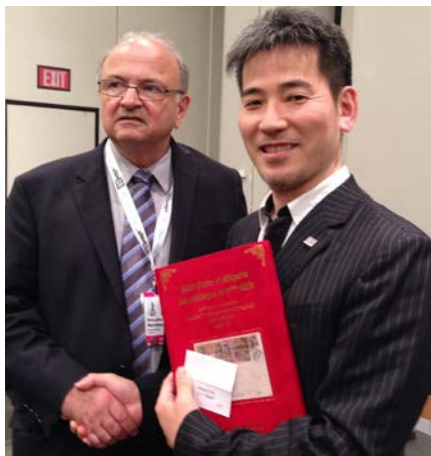
編集部：北川朋美、山田はるか、菊地恵実

* 当誌は「スタンペディア日本版」の機関誌です。

Name of the magazine:	The Philatelist Magazine
Number:	NY2016 Extra Edition 6th
Date of issue:	June 2nd 2016
Publisher:	Stampedia, inc.
Editor:	T. Kitagawa, H. Yamada, E. Kikuchi



スタンベディア社の文庫のメダルを受け取る菊地さん（世界展デビュー）



副賞の付いた、Stampedia Philatelic Journal



パルマレス



帰路の日本国代表団メンバー



タイの審査員 Prakob 氏と井上和幸さん



金賞を獲得した、石澤氏



満月印を羅列した作品を発見し喜ぶ池田氏



1981年の米国の通常切手 1 額面に対して大金賞が出されました。



内藤さん@作品の前で



スーツケースを見張る池田氏



日本語も見える、入り口の歓迎挨拶



つわものどもが夢の跡。帰国後も、作品返却が完了するまで気が抜けません

お次は全日展だ！

号外発行のお知らせ

昨年、一昨年に続き、フィラテリストマガジンは全日本切手展の出品者のみなさんを勝手に応援しちゃいます。号外（参観ガイド）は7月15日頃発行予定。

stampedia
The Philatelist Magazine
号外 全日本切手展に行こう！＜直前特集＞



英領ギアナ 1856 Provisionals Four Cent, Magenta
集郵一点の未使用切手、スリットカタログの掲載種は公開 ＜スリット切手展にて展示＞

The Philatelist Magazine 運べる三つの購読法

1) PDF版	2,000円/年間	⇒ 試験発行期間中は 0円
2) 紙版 (白黒)	2,000円/年間 + 印刷実費	⇒ 第5号迄の予約価格は 1,000円/号 (平別)
3) 紙版 (カラー)	2,000円/年間 + 印刷実費	⇒ 第5号迄の予約価格は 3,000円/号 (平別)

※試験発行は第5号 (2014年12月15日発行) 迄の予定です。なお、紙版には送料を含みません。

stampedia
The Philatelist Magazine
号外 全日本切手展 2015 参観ガイド



第65回
全日本切手展2015
前島密生誕180年記念

7月17日(金)～19日(日)
午前10時～午後5時
(19日は午後4時)

すみだ産業会館8階
(山手線すみだ駅南口徒歩2分)

入場料：大人500円
小・中・高生200円

小型印の押印サービス
第1会場：すみだ産業会館
第2会場：前島密生誕180年記念切手展
第3会場：郵政博物館
全日展1号

【全日展】全日本切手展2015実行委員会、公益財団法人通信文化協会、日本郵政公社
【参観】一般財団法人切手文化博物館、日本郵政切手博物館、【協力】公益財団法人日本郵政協会

The Philatelist Magazine
当誌は、無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社が運営する「スタンペディア日本版」の会員向け機関誌です。機関誌は年4回PDFで発行され、年会費(2,000円)を納めた会員には発行の都度登録Eメールに通知があり「マイ・スタンペディア」よりダウンロードできます。また印刷して読みたいという要望に応えコピーホチキスで綴じた紙版をお送りするサービスも提供中です。

全日本切手展 2016 出品者のみなさまへ

「全日展参観ガイド」のメインコンテンツは、出品者による「私の作品の注目ポイント」です。紙幅に制限のある出品目録では語り尽くせない、展示作品を見るにあたり必要な事前知識の紹介や、作品の解説、そして展示マテリアルの紹介など、みなさんの本音をどうぞお寄せください。

お送り頂きたいもの

- (1) 文章(テキスト)：作品参観に役立つならば内容は自由です。ページ数は、少ない方で1ページ、多い方で10ページ程度の割り当てが可能です。ページ数に制限のないPDF雑誌ですが冗長にならぬ様、編集についてはお任せ下さい。手書きの原稿も歓迎いたします。
- (2) リーフもしくは郵趣マテリアルの画像：カラーコピーの郵送、もしくは200DPIによるスキャン画像を添付ファイルとしてメールでお送りください。

原稿メ切と送付先

郵便の場合：2016/7/7 到着分まで。102-0083 海事ビル内郵便局留置 吉田敬

メールの場合：2016/7/10 到着分まで。tpm@stampedia.net

※ご郵送頂いた原稿、コピーについては原則として返却しません。

販売：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

あとがき

ここ数ヶ月ほどトッププライオリティを与えてきた米国の国際切手展のコミッショナー業務が終わりました。ニューヨークから帰ってくると東京はすでに梅雨入りしていて、ムッとする湿度を不快に思う一方、懐かしく感じながら、数日をぼんやり過ごしました。

このまま NY ロスになるかと思いましたが、フィラテリストマガジンの発行まで日数がなかったこともあり、あっという間に目覚めました。これも、ご寄稿者の皆様、そして編集スタッフの頑張りにより、通常内容はもちろんのこと、NY 特集も満載の紙面を提供できることにワクワクしたからに他なりません。発行者として改めて皆様に感謝の気持ちを申し上げます。

実は本号の発行が終わると、発行人はしばらく時間にポッカリ余裕ができます。というのも下半期六ヶ月を使って立ち上げる予定だった共同プロジェクトが先方の都合もあり頓挫してしまったためです。当該期間は同プロジェクトに心血を注ごうと考えていたため、最近皆勤賞だった、国際展やアジア展へのエントリーを三つともやめており、まとまった時間ができました。

これ幸いで、何か新しい仕掛けを考えようかな、それとも書籍を執筆しようかな、次のコレクション範囲を探して勉強してみようかな、と今色々構想を練っています。

書 名：ザ・フィラテリストマガジン

号 数：第 11 号（2016 年夏号）

発行日：2016 年 6 月 15 日

発行者：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

発行人：吉田敬

編集部：北川朋美、山田はるか、菊地恵実

* 当誌は「スタンペディア日本版」の機関誌です。

Name of the magazine: The Philatelist Magazine

Number: 11th (2016 Summer issue)

Date of issue: June 15th 2016

Publisher: Stampedia, inc.

Editor: T. Kitagawa, H. Yamada,
E. Kikuchi

<広告>

2016年7月「伝統郵趣コレクション編」より発行開始（発行が遅くなりました。）

初心者コレクターによる

競争切手展に出品するリーフの作り方

伝統郵趣コレクション編

吉田 敬 著

「一人でも多くの方に競争展に参加する楽しみを知っていただきたい！」

本シリーズはその想いを具現化するために企画された単行本です。

ここ10年ほどの間に収集再開した国際展エグジビターの、
展示発展の様子を全リーフ掲載した上で、初心者が抱き
がちな疑問を20のQ&Aにまとめて掲載いたしました。



サンプルをご覧になった、JAPEX2015 初出品者の皆様の声

「あと数ヶ月早く発行されていたら、楽だったのに。。。」（菊地恵実氏）

「リーフや文具の選定など、ポスタルヒストリアンにも役立ちますね。」（岩崎朋之氏）

発行&企画：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社